

# オランダ独立史

フリードリヒ・フォン・シラー著

友清理士訳

「」……原注を表わす。

（ ）……訳者による補足を表わす。

小見出しおよび「部」のタイトルは訳者による。

# オランダ独立史 目次

目次…………… 3

原著者まえがき…………… 8

序…………… 11

自由の精神

反乱を利した要因

反乱鎮圧の可能性

ローマ時代の自由の精神

## 第一部 カール五世の治世までのネーデルラント

十六世紀までのネーデルラント前史…………… 27

古代ローマ時代

フランク王国時代

ブルゴーニュ時代

ネーデルラントの特質

ブルゴーニュ家からハブスブルク家へ

商業活動の発展

ヘント、ブルッへの反抗

アントワープの繁栄

カール五世治下のネーデルラント…………… 42

帝王カール五世

プロテスタント運動

カール五世の宗教勅令

異端審問

カール五世による恩恵

フェリペ二世への継承

ネーデルラントの支配者フェリペ二世…………… 54

スペイン領ネーデルラントの状況

フェリペ二世の個性と治世

宗教裁判所…………… 62

二種類の宗教裁判所

宗教改革以後の宗教裁判所

ネーデルラントの基本体制に対するその他の侵害  
…………… 69

スペイン人兵駐留問題

外国人登用問題

オラニエ公ウイレムとエフモント伯…………… 73

全州総督（執政）の座

オラニエ公

エフモント伯

第三の候補

パルマ公妃マルガレーテのネーデルラント執政就任……83

パルマ公妃マルガレーテ  
国王帰国後の統治体制  
フェリペ二世とオラニエ公ウイレムの確執  
フェリペ二世の出發 (1559)

## 第二部 フェリペ二世の即位と圧政の強化

グランヴェル枢機卿……94

グランヴェルの生い立ち  
フェリペ二世退去当時のネーデルラントの情勢 (1559)

司教区再編 (1560-61)  
スペイン兵の退去 (1561)  
グランヴェルへの反発  
プロテスタントの台頭 (1561-62)  
フランス支援問題  
臨時会議と使節派遣  
貴族たちの足並み  
三貴族の申し立て (1562-63)  
グランヴェル放逐 (1563-64)

国務評議会……129

執政の立場 (1564)  
国王派の貴族たち (1564)  
腐敗

国務評議会の優位  
トリエント公会議の議定書 (1564)

エフモント伯のスペイン行……142

任務  
派遣 (1565)  
帰還 (1565)

宗教勅令の厳格化——全国的な反抗……148

国王の真意 (1565)  
国務評議会の反応 (1565)  
勅令への反応 (1565)  
三貴族の動向 (1565)

## 第三部 ネーデルラントの反乱

貴族連盟……160

下級貴族 (1565)  
貴族連盟・貴族盟約 (1565)  
宮廷の対応 (1565-66)

乞食党……177

貴族連盟の請願 (1566)  
乞食党 (1566)  
穩健路線 (1566)



- 使節派遣 (1566)
- オラニエ公一派の動向 (1566)
- 乞食党の躍進 (1566)
- プロテスタントの公然化…… 191
- プロテスタントの三宗派
- 穩健路線の拡大解釈
- 公然説法の始まり (1566)
- アントワープでのオラニエ公の仲裁 (1566)
- サントリュイアン集会 (1566)
- スペイン派遣使節 (1566)
- スペイン本国の対応 (1566)
- 聖像破壊運動…… 207
- 起源
- 発端 (1566)
- アントワープ (1566)
- ヘント (1566)
- トゥルネー (1566)
- 全国化 (1566)
- 執政と連盟の締約 (1566.8)
- 事後処理 (1566)
- スペイン本国の反応
- 国王のネーデルラント訪問構想
- プロテスタントの動向 (1566)
- 連盟の退潮 (1566)
- デンドルモンデ会談 (1566.10)
- 内戦…… 234

- 
- 執政の態度 (1566)
  - ヴァランシエンヌ包囲開始 (1566)
  - 執政と連盟の対立の先鋭化 (1566)
  - スヘルトーヘンボス (1566)
  - アントワープ城外の戦い (1567.3)
  - アントワープの騒動 (1567.3)
  - ヴァランシエンヌ (1567)
  - 国王軍の勝利 (1567)
  - オラニエ公の辞任…… 253
  - 新たな宣誓要求 (1567.2)
  - オラニエ公の立場 (1567)
  - ウイレブルック会談 (1567.4)
  - 辞任 (1567.4)
  - 乞食党連盟の崩壊…… 264
  - 体制派となったエフモント伯 (1567)
  - アントワープの屈服 (1567)
  - 北部の平定 (1567)
  - 乞食党連盟の末路 (1567)
  - 執政の得たもの (1567)
  - アルバ公の軍備とネーデルラント遠征…… 275
  - 国王行幸の計画 (1567)
  - アルバ公の行軍 (1567)
  - ネーデルラント到着 (1567)
  - アルバ公の着任 (1567.8)
  - 逮捕 (1567.9)

アルバ公の施政とバルマ公妃の退場…… 291

血の評議会 (1567)

執政の辞任 (1567.9)

## 追補

エフモント伯、ホールネ伯の裁判と処刑…… 304

告発 (1567-68)

判決 (1568)

処刑 (1568)

訳者によるインターミッション…… 312

オラニエ公対アルバ公とオラニエ公の最初の攻勢 (1568-71)

オラニエ公の第二の攻勢 (1572-73)

オラニエ公対レケセンス (1574-76)

オラニエ公対ドン・ファンとヘントの和平と恒久令 (1576-77)

オラニエ公対バルマ公子とユトレヒト同盟とアラス同盟 (1578-80)

アンジュー公との同盟 (1580-81)

オラニエ公の弁明書と統治権否認令 (1580-81)

改暦 (1582)

オラニエ公の最期 (1582-84)

バルマ公子によるアントワープの包囲 (一五八四年

一五八五年) …… 329

行動開始

スヘルデ河口兩岸の砦 (1584)

デンデルモンデ (1584)

ヘント (1584)

アントワープの孤立 (1584)

スヘルデ川の防柵 (1584)

バルマ運河 (1584)

アントワープの姿勢 (1584-85)

ゼーラントとの連絡 (1584-85)

スヘルデ川の橋 (1585.3)

ブリュッセル陥落とドウール島奪還 (1585)

爆弾船攻撃 (1585.4)

洪水戦術 (1585)

コーウエンスティン堤防 (1585)

アントワープ陥落 (1585.8)

訳者によるエピローグ…… 372

北部ネーデルラントからオランダへ (1585)

イングランドとの同盟 (1585-88)

スペイン無敵艦隊 (1588)

スペインのフランス介入 (1589-92)

共和国への道 (1588-1609)



## 原著者まえがき

もう何年も前のこと、フェリペ二世治下のネーデルラントの革命史をワトソンの名著で読んだとき、私は政治的事件というものがめつたに呼び起こすことのない興奮にとらわれた。考えてみると、その興奮は本そのものが引き起こしたというよりは受容した素材に私自身の想像力が形を与えたものであり、それが私を魅了しているのだと思えてきた。そこでそのイメージを固定し、増幅し、より強化したいと考えた。その感動を他者に伝え、広めたいと思ったのだ。この歴史を書く第一の動機はこの点にあった。それを書くことは私の天職にほかならない。

この計画の実行は当初考えた以上の大仕事であった。史料を読み込むほどにそれまで気づかなかった不備が見えてきた。長い空白は埋め、表面上の食い違いは解決し、孤立した事実は大きな流れとの関連で位置づけなければならない。新たな事実によつて叙述を豊かにしようと思ったわけではないが、従来の叙述を読み解く鍵を求めて一次史料にあたつた結果、当初ほんの概要だけのつもりだったものが大部の歴史叙述にまで拡大したのである。

パルマ公妃がネーデルラントを去るところまでを扱った第一編は、その後任者の統治下になつて初めて勃発する革命そのものの歴史からすればほんの序章にすぎない。この導入部を詳しく丁寧に扱つたのは、この反乱に関する従来の著作の多くにおいてこの期間の扱いが不十分だと思われたからである。それに、この部分のちに生起するすべての事件の根源でもある。したがつて、もし第一編について、重要な事件が何も起こらず、些細な、あるいは些細に見えることがらを細かく述べ立てているのだとか、無駄な繰り返しが多いとか、総じて話の展開が遅いなどと思う読者がいたとしたら、まさにこうした小さな発端が徐々に革命へと発展していったのだということを想起していただきたい。のちに起こる大事件はみな、数知れ

ぬ些細なできごとの帰結なのである。

我々が扱おうとしているような国民は、おしなべて当初は確信もなくおずおずと歩を進め、そのあとで初めて活発に動き出す。この反乱史において、私も同じやり方をすることにした。読者を序章に長く引き止めておけばおくほど、この歴史の登場人物やその活躍する舞台背景になじんでもらうことができる。それにより、事態が急展開を見せ、ゆっくり細部の説明をしている余裕がなくなるのちの時期を扱う際、よりすみやかに、かつ確実に読者を導くことができるのである。

この歴史を書くにあたっての問題は、史料の少なさというよりはむしろその豊富さにある。明確な全体像を得るためにはそのすべてを読む必要があり、それは部分的に目を通すだけではいくらか多くの文献にあたってでもできないことなのである。同じできごとについてでも互いに異なり、それぞれ部分的で、しばしば相矛盾する記述があるので、その中から真実をつかみとることは容易ではない。真実はそのどれにも一部は隠されているが、完全な形で見出されることはない。

この第一編においては、ド・トウー、ストラダ、レイト、グロティウス、メーテレン、ブルグンディウス、ムルシウス、ペンティヴオーリオ、そして若干の現代の著者のほかに、枢密顧問官ホッペルスの回想録、その友ヴィグリウスの伝記と書簡、ホールネ伯、エフモント伯の裁判記録、オラニエ公の弁明書、その他若干が私の導き手となった。

ここで、本書が多くを負っているものとして、多大な精力と批判的な考察をそそぎ込んで編纂され、並々ならぬ公平さ、正確さで書かれている詳細な著作を挙げておかねばならない。今世紀にオランダで出版されたネーデルラント連邦共和国の通史である。この書がなければ利用できなかった多くの原資料のほか、ポール、ホーフト、ブランド、ルクレルクの名著から貴重な情報を抜き出してくれているが、これらは私が入手できなかった、もしくはオランダ語力がないため利用できなかったものである。著述家としては凡庸なりシヤール・ディノも、とうに失われてしまった同時代のパンフレットからの多くの引用によつて役

に立った。この時代の歴史に多くの光明を投じるはずのグランヴェル枢機卿の書簡は、参照しなかったができなかった。我が秀逸なる同胞、ゲッティンゲンのシュピットラー教授によつてつい先ごろ出版されたスペインの宗教裁判に関する著作は洞察に満ち、重要な内容を含んでいるが、手元に届いたのが遅く、このたびの目的に供することはできなかった。

この豊かな歴史を原資料や同時代の文書によつて存分に研究できる立場になかったことが、その重要性がわかつているだけに残念でならない。できることなら先達の解釈を経た上で伝えられるものからは独立して歴史を再現し、達人の文章が多かれ少なかれ読者に与えずにはいない影響から脱したいところであった。だがそれを実行しようとすれば、数年がかりの著作ではなく生涯をかけた事業とならざるを得ない。それでも本書によつて読者大衆の一部にでも、歴史的眞実をとらえて歴史叙述をすることが読者に忍従を強いることなく可能であることを示し、あるいは歴史は小説に墮することなくその血縁である文学の手法を取り入れることができるということを示すことができさえすれば、この試みにおける私の目的は十二分に達成されたことになる。

ワイマールにて、ミカエル祭の市の日、一七八八年

## 序

## 自由の精神

十六世紀を世界史の中で最も光輝ある時代の一つに数えさせている政治的事件のうちでも、オランダにおける自由の樹立は最もめざましいものの一つであろう。榮譽を求めて、また危険な権力欲からなされた事跡が人の称賛を呼ぶとすれば、抑圧された人々が最も崇高な権利を求める闘争はいかばかりだろうか。ばらばらだった勢力が大義のために合力し、恐るべき専制の企みに対する圧倒的に不利な戦いにおいて悲壮な決意の力が勝利を収めたのである。

有無を言わさぬ専制権力にも対抗する手だてが存在し、人類の自由に対する考え抜かれた計略をもくじくことができるというのは大きなことであり、そう思うと勇気づけられる。決然として抵抗すれば専制の魔の手にもうち勝つことができ、英雄的な不屈の闘志によって専制君主もついにはその恐るべき手が尽きるのである。オランダがスペインの王冠と永遠にたもとを分かったあの記念すべき反乱の歴史をたどったときほど、この真実が心にしみたことはなかった。そうしたことから、民衆の力のこの輝かしい偉業を世界の人々に知らしめる試みは無駄ではないと考えた。それにより読者の胸の内に自分たちの力に対する壮快な自覚を目覚めさせ、正しい目的のためには人がどこまで大胆になれるものか、団結によっていかなることが達成できるかについて、うち消しがたい新たな例を示さんがためである。

私がこの叙述をしようと思ひ立ったのは、このできごとの並はずれた、英雄的な側面のためではない。世界史の記録をひもとけばおそらく同じような試みは数多くある。それも着想においてより大胆、遂行においてより盛大というものである。もつとはなばなしの激動のうちに滅んだ国もあれば、もつと立派な飛躍によって隆盛した国もある。また、傑出した偉人や目を見張る行動を求めているのでもない。そんなものは過去の歴史にいくらでも例はある。だがそうした時代は過去のものだ。そのような人物はもはやいな

い。これらの時代が頼り、不可欠なものとした活力は、洗練という名の柔弱な安逸のうちに忘れられてしまった。我々は畏敬の念をもってそうした過去の壮大な絵巻物を賛嘆するが、それはさながら弱い老人が若い世代のスポーツを見るかのごときものである。

だが、これから扱う歴史はそうではない。ここに登場する民は、ヨーロッパ世界において最も平和を好む国民である。ごく些細な行動にも崇高な性格を与える英雄的精神という点では近隣の民のほうがむしろ勝っている。状況の切迫によつて己の力に目覚め、かつてなく、この先もないであろう偉大さを一時的に押しつけられたのである。まさにこの、英雄的な偉大さを欠いていることこそがこの歴史的事件をとりわけ教訓に富むものとしている。偶然よりも天才が重要であることを示そうとする著者もいるが、私はここで、必要が天才を生み、偶然が英雄を生む場面を描き出すことになるだろう。

人事において神慮の介入が読みとれる場合があるとするならば、この歴史はまさにそうであろう。その経緯は理性や経験にことごとく反しているように思われる。フェリペ二世は最も強大な君主であった。その恐るべき覇権はヨーロッパの独立をもおびやかし、その財宝はキリスト教世界の他の君主の富すべてを合わせたものをも凌駕していた。その艦隊は世界の海で覇を唱え、その危険な野望は強大な軍隊によつて支えられている。ローマ人の血を引くその兵は、長年の血なまぐさい戦争できたえられ、無敵のスペイン人としての誇りに意気高揚し、過去の勝利の記憶に熱狂しており、栄光や戦利品を追いか求め、指揮官の大胆な天分のもと従順な手足となつて動く。この恐るべき権力者は、執拗なまでにその目的に執着し、その長い治世を通じてたゆまぬ努力をそそぎ込み、ありとあらゆる恐怖の手段をその唯一の目的に向けた。しかし、それはその治世の晩年には達成できないまま放棄せざるを得なくなる――あの強力なフェリペ二世ともあるものがちっぽけな弱々しい国民と戦い、これをうち破ることができなかったのである。

その敵とはどういうものだったのだろうか。ヨーロッパの忘れられかけた一角に住む平和的な漁民と牧人の民。その土地は人々が苦勞して海から勝ち取ってきたものだ。この民にとって海はなりわいであると



ともに、富であり、災いでもあった。自由な困窮はその最高の恵みであり、栄光であり、徳であった。ここでは穏和で礼儀正しい商業的な国民がその産業の繁栄がもたらす豊富な果実を享受し、そのよりどころとなった法を用心深く護持している。幸福なる充足のうちに人々は狭い範囲の必要を脱け出し、より高度で尊い満足を求めることを学ぶ。

折しも宗教改革によりヨーロッパに登場した新しい真理がこの地域に恵み深い光明を投げかけ、抑圧されたみじめな奴隷が受けつけないこの光を、自由な市民たちは喜んで受け入れた。繁栄と自由に付随するのが常である独立の精神によって、この民は古来の見解の権威を改めて吟味し、卑しむべき鎖を断ち切る気になった。

だが、その上には専制主義の厳格な鞭が振り上げられており、絶対権力がその幸福の基礎を奪い去る恐れがあった。法の守護者が暴君となった。

生活様式のみならず政治手法においても素朴な民は、古来の協定に訴え、東西インドの支配者に自然権を思い起こさせるという挙に出た。事態の構図は呼び名に如実に現われている。ブリュッセルでは単に法に則った行動と呼ばれたものが、マドリッドでは反乱だと言われた。ブラバントの窮状は理解ある仲介者を必要としていたが、フェリペ二世が送ったのは死刑執行人だった。戦争へののろしが上げられたのである。

前例のない暴政が財産ならびに生命をおびやかした。死を選ぶほかにいまだに絶望した市民は、より気高い選択をして戦場に出た。豊かでぜいたくな国民は平和を愛するが、困窮すればたちまち闘志を燃やす。人生を価値あるものとしていたすべてを奪われてしまえば、もはや恐れるものはない。反乱の奔流は瞬時にして最も遠隔の州にまで伝染する。貿易と商業は停滞し、港からは船が消え、職人は職場を、農民は耕作されない畑を放棄する。何千もが遠くの土地に逃げのび、一千の犠牲者が血なまぐさい戦場で倒れ、さらなる数千がそこに突き進む。

人々をかくも喜々として死に向かわしめた教義は、實際神聖なものに違いない。あと必要なのは、最後の仕上げとなるもの——この大いなる政治危機をとらえ、偶然の産物を成熟した知性の創造物とするべき聡明かつ大胆な精神の持ち主である。沈黙公と呼ばれるオラニエ公ウイレムは古代ローマの共和主義者ブルトウスの再来のように自由の大義に身を捧げた。利己心を超越したウイレムは、いまわしい任務を強いる官職を辞任し、寛厚にもあらゆる貴族的な威儀を捨て去ることによって自ら困窮のうちに身を置き、世界における一介の市民となった。

正義は戦闘の時の運にかかっていた。しかし、編成されたばかりの傭兵と穏和な農民からなる軍勢では、百戦錬磨の軍隊の猛攻の前には敵ではなかった。勇者ウイレムは二度までも打ちしおれた兵を率いて暴君に立ち向かい、二度とも兵に見捨てられたが、己の気概を捨てることはなかった。

フェリペ二世は、現地指揮官から懇願されるたびに増援を送り込んだ。国に拒まれた避難民は海を住みかとし、復讐と必要という両方の要求を満たすべく敵の船に襲いかかった。こうして海賊から海の英雄が生まれ、海賊船から海軍が編成された。低湿地からの共和国の誕生である。七つの州は同時にくびきを捨て去り、新たな若い国家を作り上げた。その守りは水であり、団結であり、絶望であった。全国的な厳粛な布告によって暴君の支配は否定され、スペインの名はそのすべての法から抹消された。

そのような行動にはもはや恩赦はあり得ない。共和国が強力になったのは、後戻りができないからにほかならない。

しかし、その内部では派閥抗争が足を引っ張っていた。外部では恐るべき要素——海——が、抑圧者と結んで早々に揺籃期にある共和国の墓場を用意してその存立を脅かしていた。

共和国は敵の圧倒的な兵力の前に太刀打ちできないのを感じ、ヨーロッパの有力王室の前に嘆願者として身を投じ、もはや自力では守ることできない領土の支配を引き継ぐよう懇願した。当初この国はあまりに蔑まれており、領土欲旺盛な外国の君主たちもその打診を突っぱねたほどだったが、困難の末、つい

に度重なる危険な王位の提供を受け入れてくれる外国人が現われた。

新たな希望が共和国の沈みつつある勇気を奮い立たせた。しかし、新たに国父となったこの人物により運命が共和国に与えたのは、裏切り者だった。敵の大軍が門前にまで迫った危機的な状況において、アンジュ公フランソワは保護するはずの自由に対する侵略を開始したのである。

その上、嵐の渦中にあつて凶弾がこの共和国の舵取り役を奪い去った。オラニエ公ウイレムとともに、揺籃期の共和国の命運もこれまでで、その守護天使もみな逃げ去ったかと思われた。だが、船は嵐のなか快走を続け、風をはらんだ帆は舵取りなしでどうにか船を安全なところまで運びおおせることができたのだった。

フェリペ二世は国王としての体面、そしておそらくは自尊心をも犠牲にして譲歩をしたが、その果実を得ることはできなかった。自由は専制に対してねばり強く、見通しのない闘争を続けた。血で血を洗う戦いが行なわれ、輝かしい英雄の一団が次から次へと栄光の場に現われた。フランドルとブラバントは次の世紀の名将たちの修養の場となった。長びく戦争の猛威は国土を荒廃させ、勝者も敗者も等しく血にまみれていた。一方で低湿地に勃興した共和国は勤勉な避難民を引き寄せ、専制諸国の破滅の上に見事なまでの偉大な地位を築き上げた。

戦争は四十年間続き、フェリペ二世はいまわのきわにもその円満な終結を目にすることができなかった。この戦争はヨーロッパの一つの楽園を破壊し、その残骸から新たな楽園を形づくり、それが若い才能ある武將を飲み込んだ。

全世界が富んだが、ペルーの黄金王国の保有者は破滅した。この君主は、自国の民を抑圧することなく九〇〇トンもの黄金を費消することができたにもかかわらず、専制的な手段によりずっと多くを収奪した。しかもその上に、疲弊した民に一億四〇〇〇万ダカットもの負債を押しつけた。自由に対するなだめがたい憎悪がいつさいの財貨を飲み込み、この不毛な使命に国王の人生の労力を費やした。しかし、宗教改革

は剣による荒廃のうちにあって栄え、同胞たちの屍の上に新たな共和国の旗が勝利のうちに掲げられたのであった。

### 反乱を利用した要因

この意外な展開は奇跡に近いものと思われるが、その背後ではフェリペ二世の力をうち破り、新生国家の成長を利用することになった多くの条件が重なっていた。

フェリペ二世の全力がオランダに向けられていたとしたら、ネーデルラントの宗教にも自由にも望みはなかっただろう。フェリペ二世自身の野心が、戦力を分散させることによって弱者の助力となった。

ヨーロッパのあらゆる方面の反逆者と対峙するのは方針としては高くつく。フランスにおけるカトリック同盟の支援、グラナダのムーア人の反乱への対処、ポルトガルの征服、そして壮大なエスコリアル宮殿の建築は、無尽蔵に見えた財宝をとうとう使い尽くし、戦場での精力と活力をそぐことになった。ただ利を求めてその旗のもとに集まったドイツやイタリアの兵は、支払いが滞ると反抗し、戦闘の決定的な瞬間に信義も何もなく指揮官を見捨てた。抑圧の恐るべき尖兵が今やその危険な力を雇い主に向け、復讐に燃えるあまりその矛先を国王派に留まっている諸州に向けた。

イングランド遠征の失敗がその破滅を完成させた。フェリペ二世は追いつめられた賭博師のように、自らの王国の全力をそれに賭けていた。そして、無敵艦隊とともに東西インドからの富が沈み、スペイン騎士道の華が終焉を迎えたのである。

スペインの力が衰えるのに比例して、共和国が清冽な活力をもって立ち上がった。

この高価な抗争において火薬庫とも武器庫ともなったブラバント、フランドル、エノーの諸州において、新教徒の狂信、宗教裁判の横暴、兵によるすさまじい無法、途切れなく長引く戦争の悲惨といったものがもたらした荒廃のため、国王軍の補給、募兵は自然、年を追うごとに困難になっていった。ネーデルラン

トのカトリック地域はすでに百万の市民を失っており、蹂躪された土地はもはや農民たちを維持できなかった。スペイン本国さえも人間的に余裕はなかった。突然の豊かさにみまわれたスペインでは同時に怠惰が蔓延し、その人口の多くを失っており、新大陸とネーデルラントの両方から要求される耐えざる徴兵を長く続けていくことは不可能だった。こうして徴兵された者で再び祖国を目にする者はごく少数だった。その少数も国を出たときは若者だったが、帰国したときには体の弱い老人になっていた。金が豊富になることで兵士の費用がその分高くなり、柔和の魅力が増すことでその対極にある武勇の値が押し上げられた。これが反乱軍にとっては事情が全く違ってくる。国王派遣の総督の暴政が南ネーデルラントから、ユグノー戦争がフランスから、そして良心の自由の制約がヨーロッパの他の地域から追いやった何千もの人々がみなこの地にやってきた。反乱側にとってはヨーロッパ全土がその募兵場だった。迫害する側とされる側のいずれの熱意もが反乱を利する方向にはたらいたのである。新たに取り入れられた教義への熱意、復讐、飢え、希望のない悲惨がヨーロッパ各地の冒険者たちをその旗印のもとに引き寄せた。新教に帰依したすべての者、専制により辛酸をなめた、あるいは今後迫害を受ける恐れのあるすべての者は、新たな共和国の命運に自分の将来を重ね合わせた。暴君から受けた被害はオランダでの市民権となった。人々は、自由という希望の旗印を掲げている土地を、亡命者の宗教に対して尊重と安全が保障されており、抑圧者に一矢報いる機会さえある土地を目指した。

今日のオランダに人権回復を求める人々が流れ込んでいることを考えるならば、ヨーロッパの他の地域が沈鬱な精神的圧迫にあえぎ、あらゆる信条にとってアムステルダムがほとんど唯一の自由港であった時代にはいかばかりであっただろうか。何百もの家族が、海と団結とが一致して守っている土地にその財産を避難させた。共和国軍は鋏をもつ手を奪うことなくその員数を維持していた。武力抗争のうちに貿易と産業が繁栄し、平和を愛する民は、外国の血があがなうことになる自由の果実を先んじて享受していた。オランダ共和国はその存立を賭けて戦っているまさにその時期に、その領域を海の向こうにまで広げ、静

かに東インド帝国の建設にいそしんでいたのだった。

さらに、スペインがこの高価な戦争を維持するのに使ったのは死んで実を結ぶことのない金であり、それは手放した者の手に環流することではなく、その一方でヨーロッパじゅうで必要品すべての価格を押し上げた。共和国の財源は勤勉と商業だった。時とともに一方の金は減じ、他方の金は倍増した。長くうち続く戦争によってスペイン政府の財源が疲弊するのとまさに比例して、共和国は豊かな収穫を得はじめていた。共和国の畑に蒔かれた種はわずかが優良で、遅くはあっても百倍もの実を結んだ。しかし、フェリペ二世が実を集めた木は切り倒された木であり、二度と緑に覆われることがないものだった。

運命の皮肉により、フェリペ二世が諸州の抑圧のためにそそぎ込んだ財貨はみな、当の諸州を富ませるのに貢献していた。スペインの金支出が続くことでヨーロッパじゅうに富と奢侈が行き渡った。しかし、増加を続けるヨーロッパの需要に応えたのは、ヨーロッパ世界の通商を支配していたネーデルラント人であり、その取引によりすべての商品の相場も決まるのだった。戦争中であつても、フェリペ二世は国民にオランダ共和国との交易を禁止することができなかった。いや、それを望むことすらできない立場だった。フェリペ二世自身が反乱者に防衛費をまかなうすべを与えていた。反乱者を破滅させるはずの戦争が、その交易増進に貢献していたのである。フェリペ二世が艦隊や軍隊に費やした巨額の金はその大部分が共和国の金庫に流れ込み、それはフランドルやブラバントの商業拠点ともつながっていた。フェリペ二世が反乱者に対して行なったことは、みな間接的に反乱を利用する方向にはたらいっていたのである。

じわじわとしか進まない戦争は反乱者を利するのと同様、国王には有害だった。フェリペ二世の軍隊はその多くがカール五世のもので名声をほしいままにした無敵の軍勢の生き残りだった。長年続いた軍務のあと、兵たちには安息の権利があつた。戦争で豊かになった多くの者は故郷への思いを募らせ、苦難続きの生活を終わらせたがつていた。すでに名誉も義務も果たしたと思うようになり、いよいよ幾多の戦闘の果実の刈り入れが始まるとなると、かつての熱意、英雄的な精神、規律はゆるんできた。その上、衝動の

赴くままにあらゆる敵を殲滅するのに慣れてきた兵は、当然ながら人間よりも環境との戦いであるこの戦争に倦んできた。この戦争では、望む栄光を手に入れるよりも忍従を強いられ、危険を冒すよりも苦境や飢えと戦うことが求められるのだ。地勢的に最も臆病な者に利を与える国土にあつては、個人の武勇も長年の従軍経験も役には立たなかった。最後に、敵地での一回の敗北は、自国にいる敵を数度破つて得られる利益以上の害をなした。

反乱軍については事情がこの正反対になる。決定的な合戦が行なわれることなく、かように長引く戦争においては、弱者の側もついには強者から身を守るすべてを自然に修得する。ちよつとした敗北があつてもそれは危険に慣れるだけのことで、ちよつとした勝利があれば自信を深めるのである。

開戦当初においては、共和国の軍勢は戦場に現われるのも消極的だったが、紛争が長引くことで共和国軍は場数を踏んできたえられた。国王軍が勝利の希望を失うのと反対に、規律を改善し経験を積んだ共和国軍の士気は上がった。そして半世紀後、師との戦いを戦い抜いた弟子はついに、師と対等な者として独立することになるのである。

一貫性、一体性といった点でも、戦争を通じて反乱軍は国王軍より秀でていた。反乱がその最初の指導者を失うまでに、ネーデルラント政府は五人もの手を経ている。パルマ公妃の不決断はやがてマドリードの政府にも伝染し、本国政府は短い期間の間にほとんどあらゆる政策方針を相次いで試みた。アルバ公の妥協を許さぬ厳格さ、その後継者レケセンスの穏健さ、ドン・ファン・デ・アウストリアの狡猾さ、そしてパルマ公の積極的かつ強権的な思考は、戦争遂行においてそれぞれ対立する方策を打ち出した。その一方、反乱側の計画立案は一人の頭脳に託されたままで、明確に構想し、精力的に遂行することができた。国王にとっての最大の不幸は、適切な行動原則がことごとく適切な時機を逸したことである。争乱の端緒においては利は明らかに国王の側にあり、迅速な決断と断固とした姿勢によつて反乱をその萌芽のうちに鎮圧することができたはずだったが、施政の手綱は女性の手のうちでふらふらと定まらないままに放置

された。不満が公然と噴き出したのち、反乱側と国王側の勢力がいつになく拮抗していた時期には、柔軟な手綱さばきのみが内戦の危機を回避することができたのだが、このとき施政はこの不可欠な資質を著しく欠いた人物にゆだねられた。沈黙公ウイレムのような眼力をもった観察者は、敵が失策を呈するたびにそれを活用することを怠らず、静かに表立つことなく大いなる事業を完遂に向けてゆつくりと押し進めていったのである。

### 反乱鎮圧の可能性

それにしても、なぜフェリペ二世は自らネーデルラントに現われなかったのだろうか。なぜ、見込みのないものも含めてあらゆる手段を講じておきながら、成功を保証する唯一の方策だけは試みなかったのだろうか。

貴族たちの増長と不遜を押さえ込むには、主君の存在ほど自然な対策はない。国王自身を前にしては、次位の威光はみな必然的に陰に沈み、他のあらゆる威厳は光を失う。情報が不確かな経路を通じてのんびり、それも曖昧な形で遠隔の宮廷に伝わる状況を放置しておいたために、対策は間延びし、一時の激情が熟慮の上の行動へと成熟する時間を与えてしまった。国王自身が現場にいれば自らの目でたちどころにして真実を偽りから見分けることができたはずだ。慈悲とは言わないまでも、冷徹な政策だけでもその地域で百万の市民を救うことができたであろう。勅令を発した国王が身近にいれば、その重みも増していたはずだ。より緊密に目的を追求していれば、反乱者の策動はそれだけ力を失い、士気が下がっていたはずだ。その場にいない敵に対しては平気で害をなせたとしても、本人の眼前でやるとなると抵抗感は途方もなく大きくなるものだ。

反乱に関わった者からして、当初は反乱という名にたじろいでいたところがあり、長いこと、権力をほしいままにする国王の代理人から君主の利害を守るという見えすいた口実を隠れみのかとしていた。フェリ



ペニ世がブリュッセルに現われるだけで、このごまかしは無力になったことだろう。その場合、謀反人たちは名目を守って国王にひれ伏すか、仮面をかなぐり捨てて正体を現わし、己の罪をさらけ出すかのいずれかを強いられていたはずなのである。

国王がネーデルラントに行幸すれば、ネーデルラントの住民に対して行なわれた悪のうち、国王の知らないところで国王の意に反して行なわれたものは取り除くことができた。それだけでもいかなる救済となつたことであろうか。

また、戦争のための緊急の用と称して不法に集められていながら強欲な代官たちの懷に消えていた巨額の金の支出を監督できるだけだったとしても、その効果にははかりしれないものがある。

代官たちが恐怖という好ましからざる手段を使つて篡奪せざるを得なかったものも、国民は君主に対してであれば抵抗なく差し出しただろう。大臣たちを憎悪の対象とした同じことが、君主に対しては畏怖を生じさせただろう。世襲に基づく権力の濫用は、委任による濫用ほどひどくは感じられないものなのである。国王が単なる儉約魔だったとしても、その存在は何千もの節約を生み出したことだろう。それさえなかったとしても、国王本人に対する畏敬の念だけで、その配下への憎悪と輕蔑から失われた領土も維持できたはずだ。

☆

ネーデルラントの人々に対する抑圧が自らの権利を重んずる万民の同情を喚起したように、ネーデルラントの民の不服従と背信は、あらゆる君主に対し、己の大権を護るためにも隣国の正義に加わるようにとの呼びかけとなつたかもしれない。しかし、スペインに対する猜疑心が政治的な共感にうち勝ち、ヨーロッパの主要国はなかば公然と自由の側を支持したのであった。

スペイン王室とは縁戚関係にあったにもかかわらず、神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世はひそかに反乱を支援しているというスペイン側からの非難に根拠を与えていた。皇帝が仲介を申し出たことは暗にネ

ーデルラントの不满に一定の正当性を認めることになった。このことは人々に断固として要求を曲げない勇気を与えたはずだ。皇帝が心底スペイン王室に忠実であつたならば、オラニエ公ウイレムとてあれほどの兵や資金をドイツから引き出すことはできなかったであろう。

フランスは、公然と和平に反することこそしなかったが、王族のアンジュー公をネーデルラントの反逆者の頭目に据えた。それに反乱の活動はフランスの金とフランスの兵によつて支えられていた〔フランスの貢献が支えと言うほどのものでなかったことは後述の通りであるが〕。

イングランドのエリザベス女王も正統な君主に対する反逆者を保護したが、それは当然の報復であり、返報でしかなかった。イングランドからの控えめで貧弱な援助は共和国の全面崩壊だけは防いだという域を出なかったが、疲弊した勇気を支えうるのが希望だけであつた時期にはそれでもはかりしれない価値があつた。

英仏いずれともフェリペ二世は平和状態にあつたが、その両国ともが裏切つたのだ。

弱肉強食の国際社会にあつては、誠実はしばしば徳とはならなくなる。対等な者どうしを結ぶ人情のきずなは、あまねく恐れられている者に対して守られることは少ない。政治の場から真実を放逐したのはフェリペ二世にほかならなかつた。国王の間の道義を解消し、政府の神格化を企んだのもフェリペ二世だつた。圧倒的な国力の利を一度たりとも味わうことなく、それが諸国に目覚めさせた猜疑心と戦わなければならなかつたのがフェリペ二世の生涯だった。ヨーロッパは、一度として完全に手にしたことのない権力を理由として、フェリペ二世に贖罪をさせたのだった。

☆

一見すると驚くほど大きな彼我の力の差はあるものの、スペインに不利でネーデルラントに有利となる付随的な条件をすべて考慮するならば、睜目すべき点が残るが、神わざというほどのものはなくなる。そうしてはじめて、これら共和主義者たちが己の自由を達成したこと、の眞の価値を、公正な基準によつて測

ることができるようになるのである。

ただし、対立する両陣営についてのこのような精緻な計算が計画実行の前からなされていたとか、この未知の大海に乗り出すにあたって最終的に上陸すべき岸がわかつていたなどと考えるはならない。作品は、完成時にとるべき形でその発案者の頭に現われたわけではない。ルターが免罪符の販売に異を唱えた際、キリスト教界が恒久的に二分されるなど思ってもみなかったのと同様である。ブリュッセルで国王からの善意として人道的な扱いを乞うた請願者のつましやかな行進と、諸国の王と対等な立場で交渉し、一世紀もたないうちにかつての暴君の王位の行方を左右するまでになった自由な国家の恐るべき威容とでは天地ほどの隔たりがある！運命の見えざる手が放たれた矢をより高く飛ばせ、最初に弓から与えられたのとは全く異なる方向を与えたのである。

幸いなるブラバントの胎内から生を受けた自由は、そのごく初期の揺籃期にその母の懷から離され、へんびなホラント州の恵みとなった。しかし、当初の意図と異なるからといって物事を軽く見てはならない。人間は時代がもたらした原石を加工し、研磨し、成形するにすぎない。時と場所を選ぶのは人間でも、世界の歴史を動かすのは偶然である。ある事件に積極的に参加した熱意が、期せずして貢献することになった大業の名にいささかでも値するものでありさえすれば——その完遂を助けた力が気高いものであり、その奇跡のような偉業が生起する背景となった一連の行動の一つ一つが美しくありさえすればいい。それならばその事件は我々にとって偉大で、価値あり、実りあるものなのである。あとは、偶然がいかにも大胆な結末に導くかを賛嘆するも、より高みなる意図に敬服するも自由である。

## ローマ時代の自由の精神

世界の歴史は自然の法則と同じように一貫しており、人間の魂のように単純である。条件が同じであれば同じような現象が生起する。今ネーデルラント人がスペインの暴君に抵抗しようとしている同じ土地で、

その父祖であるバタウィー族とベルガエ族が十五世紀前にローマの支配者たちに抵抗して戦った。ネーデルラント人と同様、不本意ながら横柄な主君に従っていたが、強欲な太守の悪政を経験して、同様な決意をもってくびきを断ち切り、同じように圧倒的に強大な敵との戦いに運命を投じたのだ。

十六世紀のスペイン人と一世紀のローマ人には、偉大な祖国をもち、征服を誇りとするという共通した特徴がある。両者の軍隊は同じように武勇と規律で際立ち、その戦列は同じ恐怖心呼び起こす。いずれの場合にも、優勢な軍勢と戦う戦略があり、団結によって強められた決意があり、それが分断によって弱められた強大な敵を疲弊させていくのだった。いずれの場合にも、個人的な憎悪心が国民の武器となっている。

ローマ時代に生まれたある一人は仲間に分れた者がもつ力の危険な秘密を教え、物言わぬ悲痛を流血の形で発露させることになった。クラウディウス・キウイリスは神聖な森で同胞に向かってこう叫んだのだ。「認めよ、バタウィー人よ。我々はもはや以前のようにローマ人から同盟者としての扱いを受けていない。まるで奴隷ではないか。我々は官吏や属州総督に預けられ、彼らは好きなだけ略奪し、殺したかと思うと次の者に交代する。今度はその者が同じ無法を名目だけ変えて繰り返す。

ローマが最後には使節を送ってくれるとしても、きらびやかで物いりの随員、そしてなお耐え難い高慢によって我らを苦しめる。

子を親から引き離し、兄弟たちを別れさせる徴兵もまた行なわれようとしている。

バタウィー人よ、時は来た。ローマは今、かつてないほど低迷している。ローマの軍団の名を聞いて震え上がることはない。ローマの陣営には老いた兵があるのみで、あとは戦利品の山だ。我らの歩兵、騎兵は強力だ。ゲルマニアは我らと血縁で結ばれており、ガリアもくびきを振り払う用意がある。

ローマにはシリアが服属すればいい。アジアに東方もだ。そういう地域なら国王の前にひれ伏すのに慣れている。だが我らのうちには、ローマに朝貢する前に生まれた者もまだ生きている。神は常に勇者とと

もにあるのだ」

厳肅な神事によってこの結社は神聖なものとなった。オランダの乞食党の同盟と同様である。

そしてやはり同じように、バタウィー人の結社は巧みに服従のペールをまとい、大人物の名の威光を借りた。キウイリスのライン軍団は、「時の皇帝ウイテリウスに反旗を翻して」シリアにいるウエスパシアヌスに忠誠を誓った。乞食党がフェリペ二世に対してしたのと同じである。

同じ戦場は同じ防衛策、万事窮したときの同じ逃げ場を用意した。いずれも命運がおぼつかないなか、有利な地勢を利用した。同じ苦境にあつてキウイリスがその島を保持し、十五世紀後にオラニエ公ウイレムがレイデンの町を守ったのは、どちらも人工的に洪水を起こすことによってだったのである。

バタウィー人の武勇は世界の覇者の無力さを明らかにし、その子孫の気高い勇氣は大スペインの退潮を全ヨーロッパに向かって知らしめた。両時代の將軍たちの同じ機略は、同じように頑固に戦争を長引かせ、ほとんど同じようにあいまいな決着に導いた。

しかし、一つだけ両者の間に違いがある。ローマ人とバタウィー人の戦いは人道的だった。それは宗教のための戦いではなかったからである。

## 第一部

カール五世の治世までの  
ネーデルラント

## 十六世紀までのネーデルラント前史

### 古代ローマ時代

この大いなる革命の考察にはいるまえに、少しさかのぼって古い記録にあたり、この時代に著しい変革を遂げることになるこの地方の体制の起源をたどっておく必要がある。

この民が最初に歴史に登場するのは、その没落の時だった。征服者がまずこの民を政治的な存在としたのだ。東はドイツ、南はフランス、北と北西は北海を境とし、ネーデルラントと一括して呼ばれる地域は、ローマ人がガリアに侵攻した時点では三つの主要部族に分かれていた。いずれもゲルマン人を祖とし、ゲルマン式の制度をもち、ゲルマンの気風を備えた民だった。ライン川がその境界となる。左岸に住むのはベルガエ人、右岸がフリシイ人、そしてライン川の二つの枝が当時なしていた島に住むのが батаウィー人である。これら三部族はいずれも遅かれ早かれローマに服従を強いられることになるが、征服者自身がその武勇の輝かしい証言を残している。

カエサル曰く、ベルガエ人はガリアのうちでチュートン人やキンブリー人の侵略をはね返した唯一の民である。

タキトウスは言う、 батаウィー人の勇氣はライン川の諸部族のなかで抜きん出ている。この勇猛果敢な部族国家は兵士を提供する形でローマに服従し、征服者の矢と刀として戦いのためだけに保存された。ローマ人自身、 батаウィー人がローマ軍一の騎兵だと認めている。今日におけるスイス人のごとく、 батаウィー人は長い間ローマ皇帝の親衛隊をなしていた。 батаウィー人が完全装備の甲冑を付けてドナウ川を泳ぎ渡るのを見たダキア人は、その獐犢な勇氣に恐れをなした。 батаウィー人はアグリコラのブリタニア遠征にも従い、ブリテン島の征服に貢献した。

フリシイ人は屈服したのも最後なら自由を回復したのも最初だった。居住地を取り巻く低湿地のために征服者がやってくるのも遅く、征服の代償も高くついたのである。この地域に兵を進めたローマのドルーサスは、ライン川からフレーヴォ湖（今日のザイデル海）まで運河を開削し、その運河を通ってローマの船団は北海にまで至り、そこからエムス川、ヴェーザー川河口域にはいることでゲルマニア内部にやすやすと侵入することができた。

四世紀にわたり、ローマ軍には батаウィー人の部隊が見られた。だが、ホノリウス帝以後、その名は歴史から消える。その島がフランク人に席巻されたらしい。そのフランク人も隣のベルギーに埋没した。

フリシイ人は無力な遠方の支配者のくびきを脱し、再び、自由であるのみならず征服側の民として現われる。フリシイ人は自分たちの慣習とローマ法のなごりによって自らを統治し、その領域をライン左岸にまで拡大した。ネーデルラント諸州のうちでも、フリースラントは特に異部族や外国の慣習の侵入を受けることが少なく、何世紀にもわたってその原初の制度や部族の気風や風習のなごりをとどめ、それは今日でさえ消え去ってはいない。

民族大移動の時代にはこうした諸部族のほとんどはその原型を破壊された。代わって混血民族が現われ、その基本体制も変化した。全般的な荒廃のうちにローマ人の都市や宿营地は姿を消し、それとともに制度の実施に現地人を用いるというその統治の知恵も忘れられた。堤が放置された結果、いま一度河川はあふれ、海がはいりこんだ。人間の力がなした奇跡である運河は干上がり、川はその流れを変え、陸地と海とがその境をからめあう。土地の性質はその住民とともに変わる。こうして二つの時代の間のつながりも消し去られたようだ。

## フランク王国時代

新たな民族とともに、新たな歴史が始まる。



ローマ支配下のガリアのがれきのうちから勃興したフランク人の王朝は、六世紀、七世紀の間にネーデルラントの全域を手にし、キリスト教を導入した。ねばり強い戦いのち、宮宰カール・マルテルは最後の未征服地方であったフリースラントをフランクの王冠のもとに屈従させ、その勝利によって福音導入へも道を開いた。カール大帝はこれらの国土を統合し、ドイツ、フランス、ロンバルディアにまたがる地域に築き上げた大帝国の一部門とした。その後裔のもつてこの広大な版図が再び分割される際、ネーデルラントは時にドイツ領に、時にフランス領に、はたまたその間に位置するロタリンギア領となった。そしてついにフリースラントおよび下ロタリンギアという名で知られるようになる。

フランク人とともに、北方の産物である封建制度がこれらの土地にもたらされたが、ここでも他の地においてと同じようにそれは矮小化した。有力な封臣たちは徐々に王権から独立するようになり、王の遣わした総督は統治を任された国を我がものとした。だが、王権に刃向かう封臣も、その従者の助けなしには篡奪した地位を保てなかった。その助けを確保するために次々に譲歩を強いられる。同時に聖職者による権力私物化や寄進を通じて教会の力も強まり、大修道院や司教領は独立した存在になっていった。こうして十世紀、十一世紀、十二世紀、十三世紀の間はネーデルラントはいくつかの小さな主権領に分かれており、その領主はある者はドイツ皇帝に、またある者はフランス国王に臣従するのだった。

## ブルゴーニュ時代

購入、婚姻、相続、そしてまた征服によつて、こうした領土はしばしば一人の主権者のもとに統合される。十五世紀にブルゴーニュ家がネーデルラント主要部を領有していたのがその例である。ブルゴーニュ公のフィリップ善良公はその根拠はさまざまながらも十一もの領土を自らの権威のもとに統合した。その子シャルル突進公は武力により獲得した二つを加えた。こうして知らず知らずのうちにヨーロッパに新たな国家が誕生していた。国家という名前こそないがまさにヨーロッパ世界で最も繁栄している王国だった。

この広大な領土のために、ブルゴーニュ公はフランスにとつて脅威となった。同時にそれは、意気盛んなシャルル突進公をザイデル海とライン河口域からアルザスへとつながる領域全体を併呑する征服計画へと駆り立てた。ブルゴーニュ公の無尽蔵とも言える實力を考えればこの大胆な計画もあながち無謀とばかりも言えない。強力な軍隊がその実行の機会をうかがっていた。

スイスはすでに自由が侵されるのを恐れていた。だがスイス軍との三度にわたる戦闘において、運命のいたずらは公を見捨てた。こののぼせ上がった英雄は生死が入り交じる混戦のうちに命を落としたのである。

「戦闘の数日後に公の遺体を見た小姓が勝利者を現場に案内し、不名誉な忘却からなきがらを救い出した。凍った沼地から引き出された遺体は、服も剥がれ、傷で覆われて見分けがつかないほどで、多大な困難の末やっと、よく知られた数本の歯の欠失と際立つて長い手の爪によって確認された。そうした証拠にもかかわらず公の死を信じず、その再来を待ち望む疑い深い人々がいたことは、ルイ十一世がブルゴーニュ等族議会にフランス王室への忠誠に復することを求めた書状によって証明される。それには「もしシャルル公がいまだ存命であれば、私への宣誓からは解放される」とのくだりがあるのである。」

シャルル突進公の唯一の継承者である娘マリーは、最も豊かな公女であり、同時にこの時代の不幸なヘレネであった。ギリシア神話ではヘレネの愛をめぐってトロイが滅んだのである。このマリーは今やヨーロッパ世界全体の注目の的となった。

マリーを狙っていたうちにはフランス国王、神聖ローマ皇帝という二大君主も含まれていた。ルイ十一世は子の王太子に、皇帝フリードリヒ三世は子のマクシミリアンにと考えていた。マリーを勝ち得た者がヨーロッパ一の実力者となるのだ。ヨーロッパ世界においてここに初めて、勢力均衡が崩れるおそれが生じたのだった。

両者のうち強者であるルイ十一世は、武力に訴えてでも求婚を成功させるつもりだった。だが、公女の

相手を決める立場にあるネーデルラントの民はこの恐るべき隣人を通り越してマクシミアンを選んだ。領地がより遠隔で、勢力も限られていることから、自分たちの国の自由をおびやかす心配が少ないと思われたのである。これは思いがけない不幸な選択であった。天の采配のいたずらにより、これにより防ぐはずであった陰惨な運命はむしろ加速される結果となったのである。

マリーとマクシミアンの息子であるフィリップ美公は、スペインからの花嫁により、フェルナンドとイサベルが創立して間もないかの広大なスペイン王国を獲得した。その息子カールは生まれながらにしてスペイン、両シチリア、インディアス、そしてネーデルラントの領主だった。

## ネーデルラントの特質

ネーデルラントにおいては、民衆は他の封建諸国よりも早くに封建的な支配から脱却し、すみやかに独立した政治的存在となっていた。北海や航行可能な大河に接するという立地もあって早くから交易に目覚め、都市の人口が急増していた。商業精神は産業と工芸を力づけ、外国人を引きつけ、人々の間に繁栄と豊かさを広めることになった。

時代の好戦的な性向がいかに平和的で有用な職業を蔑もうとも、支配者たちもネーデルラントの民のそのような活動がもたらす本質的な利点に気づかないはずもなかった。増え続ける域内の人口と、通行税、関税、街道料、護送料、橋の通行料金、市場手数料、不動産復帰といったさまざまな名目で現地人、外国人から巻き上げる種々の税はあまりに大きな魅力であり、その源泉に無関心ではいられなかった。支配者たちは自らの欲望から交易を奨励した。よくあることだが、しつかりした政治体制が整うまでの間、蛮行が支えとなっていたのである。

時代を通じて支配者たちはロンバルディアの商人を呼び寄せて定住させ、諸都市にいくらかの貴重な特権と独立した司法権を与えた。これにより、都市はまれに見る格別な信用と影響力をもつようになった。

伯爵や公爵が互いの、あるいは外敵との間で行なつた相次ぐ戦争のため、こうした貴族たちは多かれ少なかれ諸都市の厚意に依存するようになった。都市はその富によつて存在感を獲得し、資金の提供と引き替えに重要な特権をもぎ取るのを忘れなかった。こうした平民の特権は、十字軍のための高価な装備が貴族たちの困窮を増し、東方の物産のヨーロッパへの新たな道が開け、広範な種類の奢侈品が諸侯の新たな欲望を創出するにつれて増していった。このため、早くも十一、十二世紀にはこの地域は君主の大権が諸身分、すなわち貴族、聖職者、自治都市の特権のために大きな制約を受ける混合政体となつていた。

この三身分が、その州で必要が生じることには等族議会の名のもとに集会をもつた。その同意なくしては新法は効力を生じず、戦争は遂行され得ず、税の徴収もできず、貨幣の改鑄もできず、外国人を官職につけることもできない。これらの特権についてはすべての州が共通に享受していた。このほかそれぞれの地域固有の特権もある。最高權威は世襲だったが、既存の法典を維持することを厳かに誓わなければ息子が父の權利を継承することはできなかった。

必要こそが最初の法を与えた。この法典によつて対処されるべき必要は元来は商業上のものだった。基本法典全体は通商の上に礎を置かれ、この国の諸法は商業推進に適応したものとなった。

最後に挙げた外国人を信託を受けた官職から排除する節は、その前の条項の自然な帰結である。君主と民との間の関係はきわめて複雑で入り組んでおり、その上多くの州ではその州に（しばしばただ一つの都市だけに）固有の必要によつてさらに修正されている。このような関係を維持するには、国の自由に対して限らない熱意をもつとともに、それに精通している人材が必要だった。いずれも外国人からは期待できないものである。しかも、この法はそれぞれの州ごとに施行されるため、ブラバントではフランドル州の者は官職につけず、ゼーラントではホラント州の者は官職につけない。しかも、この制度はこれらの州が一つの政府のもとに統合されたのちも効力を持ち続けたのだった。

諸州の中でもブラバントが最大限の自由を享受していた。この州の特権はきわめて貴重なものと見なさ

れており、近隣諸州の多くの母はお産が近づくこの地にやってきたものである。この恵まれた州のすべての特権を我が子に生得権として与えたいがためである。史家ストラダの言を借りれば、過酷な気候の土地の植物を穏和な気候の土地に移し替えることによって改良するのである。

### ブルゴーニュ家からハプスブルク家へ

ブルゴーニュ家がいくつかの州をその支配下に統合したのは、その時まで独立した裁判権をもっていた各州個別の機関はメヘレンの高等法院の配下におかれた（「一四七三」）。その高等法院はいくつかの裁判所を一体にしたもので、あらゆる民事、刑事の上訴において最終的な判断を下す。こうして各州個別の独立は終焉を迎え、最高権力がメヘレンの大評議院（機能が司法に限定されたことでメヘレンの高等法院と呼ばれた）に集約されたのだった。

議会は、シャルル突進公の没後、公女マリイの苦境につけこむことを忘れなかった。フランスの脅威にさらされている公女は、結果として議会の諸身分のなすがままとなった。ホラントとゼーラントは、最も重要な主権を与える大特権状に署名を強いた（「一四七七」）。ヘント（フランス語名ガン）の人々は、その不遜を押し進め、不幸にして彼らの不興を買ったマリイの寵臣たちを何の根拠もなく自分たちによる裁きの場に引きずり出して、公女の目の前で首をはねた。父の死から結婚まで、公女マリイの短い治世の間に、ネーデルラントの民は共和国でさえめつたに見られないほどの力を手にすることになった。

公女マリイの没（「一四八二」）後、その夫マクシミリアンは息子フィリップの後見人として不法に実権を握った。この越権行為を不満とする議会はマクシミリアンの権威を認めることを拒み、定められた期間中のみ、それも宣誓された条件を守るということでようやくマクシミリアンを総督として受け入れさせることができた。

ローマ王（次期神聖ローマ皇帝の称号）となつて（「一四八六」）からのマクシミリアンは、基本法を侵すこと

も構わず、各州に法外な税を課し、ブルゴーニュ人やドイツ人を官職につけ、諸州に外国の軍隊を導入した。しかし、この地の共和主義者の猜疑心は摂政の権力にもひけをとらないものだった。マクシミリアンが大勢の外国人の供回りを連れてブルツヘ「フランス語名ブリュージュ」にはいったとき、人々は武器を取って立ち上がり、皇帝の身柄を押さえ、城に監禁してしまった（一四八八）。帝国やローマ教皇庁のとりなしにもかかわらず、マクシミリアンは、争点となっている点すべてについて人民に保証を与えることでようやく解放された。

## 商業活動の発展

穏健な法のもとで生命や財産が保証されており平等な裁きが行なわれることは活動と産業を活気づけた。低地を容赦なく襲う海や川の奔流を防ぐべく土手を築き、運河を掘るという絶えざる苦闘のうちに、ネーデルラントの人々は早くから周囲の環境を観察することを身につけ、勤勉と忍耐によって強大な力に立ち向かうことを学び、そしてナイル川の教えを受けたエジプト人のように、その発明の才と鋭敏な感覚を自衛に用いることを習得した。肥沃な土地という自然条件は農業と牧畜を利し、同時に人口を増加させることにもなった。海に面し、ドイツやフランスの航行可能な大河が海に注ぐ沿岸をもつ有利な立地は、網の目のようにはりめぐらされた運河とともに船の運航に生命を与えた。州間の連絡が容易なことはやがこの地の民に商業精神を生み、はぐくむこととなった。

この地の船が最初に訪れるのはデンマークやイギリスといった隣国の沿岸である。それが持ち帰るイングランドの羊毛はブルツヘ、ヘント、アントワープで何千もの勤労者の雇用を生み出す。十二世紀のなかばには早くもフランドルの布はフランスでもドイツでも広く衣服に用いられていた。十一世紀にはフリースラントの船がデンマークのベルト海峡、さらにはレヴァント（東地中海）まで足跡を残している。この進取の気象に富む人々は羅針盤もない時代に北極星を頼りに航行し、ロシアの最北点にまで到達した。ド

イツ東部のヴェンド族系都市からはネーデルラントはレヴァント貿易の分け前に与っている。

この時代、東地中海との交易ルートはいまだ黒海からロシアを通ってバルト海に至るというものだった。十三世紀にこの貿易の衰退が始まり、十字軍が地中海経由でインドの物産を運ぶ新たな経路を開き、イタリアの諸都市がうまみのある通商部門を乗っ取り、そしてドイツでは偉大なハンザ同盟が結成されたとき、ネーデルラントは南北間の最も重要な商業中心地となった。まだ羅針盤の使用は一般的ではなく、商人はゆっくりと手間ひまかけて沿岸沿いを進んでいた。バルト海沿岸の港は冬の間大半が凍結して使用不可能になった。そのため年内に地中海からバルト海峡への長旅を完遂することのできなかった船は、喜んでその間にある港を利用した。

河川による水運で結ばれた広大な大陸を背後に控え、西と北は好適な港が大洋に向かって開けているこの国土は、最初からさまざまな国民が集まる場所として、商業の中心地として作られたかのようだ。ネーデルラントの主要都市は市場町として確立していた。ポルトガル人、スペイン人、イタリア人、フランス人、イギリス人、ドイツ人、デンマーク人、スウェーデン人といった人々が世界中の国々の産物を持って群がった。競争が価格を下げ、製品にいつでもさばき口があることから産業が刺激された。必然的になれるお金のやりとりから手形による商売が発達し、それは新しい、豊かな富の源泉となった。この地方の諸侯は、少なくとも何が真に自分たちの利益になるかはわかっており、重要な免除特権を与えて商人を奨励し、外国と有利な取り決めを結ぶことによってその活動を保護した。

十五世紀にいくつかの諸侯がブルゴーニュ公の一つの統治のもとに統合されると、諸侯は害の大きかった互いの私闘をやめ、その個別の利害が共通の政府によって密接に結びつくようになった。この地の強力な諸侯が近隣諸国に押しつけた長い平和に包まれるうちに通商が栄え、富があふれた。ブルゴーニュの旗はどの海域でも恐れられた。その君主の威光が住民の行動の後ろだてとなり、私的な個人の営みが強力な国家の事業となった。そのような強力な庇護によってネーデルラントの人々はやがてハンザ同盟と決別し、

この強敵をあらゆる海域で駆逐するまでになった。スペインの港からも締め出されたハンザ同盟の商人たちは、ついにはしぶしぶながらもフランドルの市に出向き、スペイン製品をネーデルラントの市場で調達することになった。

フランドルのブルッヘは十四世紀、十五世紀においては全ヨーロッパの通商の中心地であり、諸国にとつての商品の一大集積地だった。一四六八年にはスライスの港に一度に一五〇もの船舶が入港するのが見られた。ハンザ同盟の豪華な商館のほか、会計事務所をもつ商社が十五あり、ヨーロッパのあらゆる国からの数多くの商館や商家が居を構えていた。北方の産物が南方向けに、南方とレヴァントの産物が北方向けにさばかれる市場が成立したのがこのネーデルラントだった。それらの産物はデンマーク・スウェーデン間のエーレスンド海峡を通過し、ハンザ同盟の船でライン川をさかのぼって高地ドイツに運ばれ、あるいは陸路をブラウンシュヴァイク・リュートネブルクに輸送される。

☆

人の営みの常なるごとく、ここでも繁栄は放埒なおごりを生んだ。フィリップ善良公の魅力的な手本はその到来を加速するばかりだった。歴代ブルゴーニュ公の宮廷はヨーロッパの放蕩と豪華さで知られ、それはイタリアさえもしのぐものだった。上流階級の高価な衣装はのちにスペイン人の定型となり、ゆくゆくは他のブルゴーニュの風俗とともにオーストリアの宮廷に伝えられ、それが下の階層にも広まって一介の市民さえもがベルベットとシルクに身を包むようになる。

「フィリップ善良公は浪費型の君主であり、富を蓄積するようなタイプではなかった。それでもシャルル突進公はその所持品のうちに、豊かな公領三つ分よりも大量に蓄えられている食器、宝石、じゅうたん、リネンといったものを、そして何よりも三十万ターラーもの現金を見出した。この君主、そしてブルゴーニュの人々の富は、「突進公がスイス軍に破れた」グランソン、モラ、ナンシーの戦場にさらされた。ここで一人のスイス兵がシャルル突進公の指から引き抜いたかの名高いダイヤモンドは長らくヨーロッパ最大とされ、現在でもフランスの王冠で二番目に大きな石と



して輝きを放っている。スイス人は見つけた銀を錫に換え、金は銅と交換し、金の布で作られた高価なテントを引き裂いた。戦利品となった金銀宝石の価値は三〇〇万に及ぶとされた。シャルルとその軍勢は戦地に赴くのに、戦闘の前にした戦士というよりは、勝利のあとで着飾った征服者さながらだったのである。」

十五世紀中ごろにネーデルラントじゅうを旅したコミューヌは述べている。

「その繁栄にはすでに慢心が伴っている。衣服の華美は男女を問わず度を越えたものだった。食卓の豪勢さは他の国民の間でかつて見られたことのない水準だった。沐浴場や似たような欲情をかき立てる場での男女のいかかわしい交わりは、恥というものを消し去った。それも上流階級にありがちな放蕩のことを言っているのではない。庶民の女さえもが際限のない奢侈にうつつを抜かしているのである」

だが人というものを知る者にとって、こうした華美のほうが、当時ヨーロッパのほぼ全土を覆っていたしみったれた禁欲や無知という野蛮な徳などよりいかに快いものか！ブルゴーニュ時代は中世の暗黒時代にあつて唯一心地よい光彩を放つ存在であり、さながら雨続きの二月の小春日和のようである。

## ヘント、ブルッヘの反抗

だが、この繁栄がフランドルの諸都市をついには破滅へと導くことになった。自由と成功に酔ったヘントとブルッヘは十一州を統べるフィリップ善良公に戦いを挑み、おごりによつて開始されたこの戦争は不幸な形で幕を閉じた。ハーヴェレ（フランス語名ガール）近くの戦闘（二四五三）ではヘントだけで何千もの損失を出し、四〇万金グルデンの貢ぎ物をして勝者の怒りをなだめなければならなかった。市の全役人と主立った市民二〇〇〇がシャツ姿で靴も帽子もなしで市門から一マイルも出て公爵を迎え、ひざまずいて許しを乞うた。この機にヘントはいくつかの貴重な特権を剥奪され、のちの交易のための取り返しのつかない損失となった。

一四八二年には不法に息子フィリップの後見人の地位についたオーストリア家のマクシミリアンに対

して戦端を開いたが、または失敗に終わった。

一四八八年にはブルツへは大公マクシミリアン本人を監禁し、その重臣の幾人かを死に追いやった。捕らわれたマクシミリアンに代わって父である皇帝フリードリヒ三世は軍勢を率いてブルツへ領にはいり、十年にわたってスライスの港を封鎖し、その通商を完全停止に追い込んだ。イタリア人は自国の絹製品をさばくためアントワープに持ち込むようになり、イングランドに定住したフランドルの布職人も同様にしてその地に商品を送った。こうしてブルツへは二つの重要な交易部門を失ったのである。その横柄なまでのプライドに長らく不快感をもっていたハンザ同盟も、今やブルツへを見限ってアントワープに商館を移した。

一五一六年には一握りのスペイン人を別として外国商人がことごとくブルツへを去っていた。だが、その衰退は繁栄と同じく、ゆっくりとした道をたどることになる。

## アントワープの繁栄

十六世紀、フランドル諸都市が豊かさのあまりに棄て去ってしまった交易を一手に引き受けたのはアントワープだった。カール五世の治世中、アントワープはキリスト教世界において最も活気に満ち、最も繁栄を謳歌している町だった。アントワープのすぐ近くで海に注ぐスヘルデ川のような川は、河口が広く、北海の潮汐とともに水位が上下し、最大級の船舶でもアントワープの市壁まで来航することができた。アントワープはこの沿岸一帯を訪れるあらゆる船舶の自然な寄港地となった。その自由な市は国という国から商人を引き寄せた。

この国の産業はこの世紀の初頭にその最高潮を迎えた。穀物や亜麻の栽培、家畜の飼育、狩猟や漁労が農民を、工芸、手工業、交易が町人を豊かにした。フランドルとブラバントの手工業製品はやがてアラビア、ペルシア、インドで見られることになる。その船は海を覆い、黒海ではジェノヴァと覇を争った。ネ

ーデルラントの船乗りは一年中帆を降ろすことがないのが特徴で、冬になっても船をドック入りさせることがなかった。

喜望峰經由の新たな航路が発見され（一四九八）、ポルトガルの東インド貿易がレヴアント貿易のうまみを奪うようになったときも、ネーデルラントはイタリア諸都市のような打撃は受けなかった。ポルトガル人はブラバントで市を開き、カルカッタのスパイスがアントワープの市場に並べられた。西インド諸島の商品が流れ込むのもここだった。怠惰なスペインの自尊心はこうしてネーデルラントの勤勉に報いていたのである。

ネーデルラントに集まる東インドの物産はフィレンツェ、ルッカ、ジェノヴァの有力な商家、さらにはアウクスブルクのフッガー家やヴェルザー家をも引きつけた。ハンザ都市はそこに北方の物品をもたらし、イングランドの会社は商館を設けた。工芸品も農産物も、この地においてその豊かさを余すところなく見せつけているようだった。造物主と人間による造形の見事なまでの展示場であった。

その名声はやがて世界中に行き渡った。この世紀の終わりごろにはトルコ商人の会社さえもがこの地に拠点をおき、ギリシア經由の東方の物産を供給する許可を求めてきた。物品の交易とともに、貨幣の両替も行なわれた。その手形が地上の最もへんぴなところでも流通した。アントワープは、わずか一か月で、最盛期のヴェネツィアのまる二年分よりも広汎で重要な取引をしていたと言われている。

一四九一年、リユーベックでしか開かれたことのないハンザ同盟の会合がこの市で開催された。一五三一年には交換所が設立された。当時ヨーロッパ全域で最も立派なもので、その誇らしげな裏書きは確実に履行された。

人口はすでに十万を数えていた。絶えず流入する人の波は想像を絶するものがあつた。港では一時に二〇〇から二五〇の船が積み込みをやっているのはざらだった。出入港する船の数が五〇〇を下ることはなかった。日々、二〇〇以上の馬車がその門を通過し、二〇〇〇以上の荷を積んだ荷馬車が毎週のようにド

イツ、フランス、ロレーヌからやってきた。これは一万を下ることがめつたにない農民の荷馬車を入れない数字である。

イングランドの会社だけで三万もの雇用があつた。市場の出店料、通行税、物品税は毎年政府に何百万もの歳入をもたらした。カール五世の数え切れない戦争のために払われた法外な税が四〇〇〇万クラウンに上つたという事実からも、この国の豊かさのほどが想像できる。

☆

ネーデルラントのこうした豊かさは地の利とともに、その自由に負うところが大きい。あいまいな法や強欲な君主の恣意的な支配のもとでは、自然の利が惜しみなく与えた恵みもたちまちにして無となつたことであろう。法が神聖なものとして侵されないことのみが、精勤すれば報われることを市民に保証し、そうして得られる安心感こそがあらゆる活動の根幹となるのである。

商業精神や多くの国民との交流によつて育まれたネーデルラントの人々の才能は、実用的な発明においても輝きを放っていた。

富と自由の懷に抱かれて、ありとあらゆる技術が培われ、完成の域に達した。コジモ・デイ・メデイチが黄金期の再来をもたらしたイタリアからは、絵画、建築、銅版画の技術がネーデルラントに移植され、この新たな天地で新鮮な活力を与えられて花開いた。イタリア派の申し子であるフランドル派はまもなく母であるイタリアとその華を競い、ともにヨーロッパ美術界全体に君臨するようになる。

ネーデルラントの繁栄の主たる基盤となり、現在でもそれを支えている工芸については細かく列挙するまでもないだろう。つづれ織り、油彩、ガラス彩色、さらには懷中時計や日時計までもが史家グイッチャル・デイーニも述べるようにもとはネーデルラントで発明されたものである。羅針盤を改良したのもこの民で、その方位は今なおネーデルラントの名で呼ばれる。

一四三〇年ごろの活版印刷の発明はハールレムのローレンス・コステルによるものとされるが、この名

誉の真偽はともかく、この技術をいち早く活用したのがネーデルラント人であることは確かである。そして運命のめぐりあわせにより、この技術は一世紀後に自由をもつてその母国に報いたのであった。

ネーデルラントの人々は豊かな発明の天分とともに、他者の発明を改良するという恵まれた才能も持ち合わせていた。機械技術や工芸で、ネーデルラント人が発明したのでない、あるいは少なくとも完成度を高めていないものはほとんどないと言っていいくらいである。

## カール五世治下のネーデルラント

### 帝王カール五世

この時点までは、これら諸州はヨーロッパで最もうらやむべき状態にあった。歴代ブルゴーニュ公の誰一人としてあえてネーデルラントの基本体制を覆そうとの考えは抱かなかった。シャルル突進公のような血気盛んな君主が外国の自由にくびきをかけようとしている時でさえも、それは聖域だった。諸侯ははじめから共和国の長となる以上の野心はもたずに育ち、どの地域であれそれ以上のものを経験する機会は無であった。さらに、これらの諸侯はネーデルラントが与えなければ何もできなかった。国が送り出す以外の軍勢はもてなかったし、議会が認める以外の歳入は得られなかった。

だが、今やそのすべてが変わった。ネーデルラントの新たな主君は、ネーデルラント以外に手足となるものを持ち、財源を有しており、ネーデルラントに対して外国の武力を向かわせることのできる立場にあるのだった。

カール五世はスペインの属領においては絶対君主であったが、ネーデルラントでは市民の第一人者でしかなかった。帝国の南部では個人の自由をないがしろにしたが、この地ではそれを尊重することを教えられた。かの地で無制限な権力の味をしめ、自らについて思い描く偉大さをふくらませていただけに、この土地で普通の人間のレベルに引き戻され、その絶対権力に制限が加えられることは、さぞもどかしいことだっただろう。心からの望みの妨げとなる力に戦いを挑まずにいることは、並はずれた徳の力を必要とするものなのである。

カール五世の圧倒的な権勢は、弱者につきものの不信感を目覚めさせた。ネーデルラントの人々がこの時ほど基本的な権利に敏感となり、国王大権を警戒し、行政に目を光らせたことはかつてなかった。カール五世の治世下において、共和精神はその最も過激な暴発を見るのであるが、その過激なまでの要求は、

王権による権利の侵食が進んでいる現状がなければとうてい正当化できないものだった。君主とは、市民の自由と言えど失った領土のように見なすもので、それを回復せずにはいられなかった。市民にとつては、君主の権力というものは自分たちの権利を押し流しかねない洪水を引き起こす奔流だった。ネーデルラントの人々は海に対しては堤防により、君主に対しては基本法の施行によつて身を守ろうとした。自然の歴史が自然の猛威と生命体とのせめぎあいにはかならないように、世界の歴史は自由と権勢欲との間の絶え間ない闘争である。

まもなくネーデルラントは強大な君主国の一属州になりさがったことを痛感した。これまでの主君はこの地方の繁栄を増進させる以上の大望は抱かず、その限りにおいてはネーデルラントの状態はひっそり暮らす家族の静謐な幸福のようなもので、支配者はその家長だというだけだった。それをカール五世が政治の世界に引き上げた。人々は今や、一人の人物が野心の道具として利用する巨大な組織の一員だった。自分たちの福利を追求していればいい時代は終わり、その存在の中心は支配者の胸先に移された。その政府全体が外に向かつての動き、ないしは政治行動でしかなく、そのため何よりも強大な帝国の手足を完全に支配下におき、有効かつ迅速に動かせるようにしておくことが必要だった。したがって、この地方内での政治機構の面倒な手続きにかかずらったり、共和主義的な住民が執拗に要求してくる固有の特権を几帳面に尊重するといった余地はなかった。意を決した君主の一断は虫けらのつくった構造物などふみにじったのだった。

メヘレンの高等法院は先代までは独立した司法裁判所だった。カール五世は高等法院の裁定をブリュッセルに設立した王立評議會で審査させることにしたが、その評議會は主君の意思の代弁者にすぎなかった。国政上の枢要な地位に外国人を導入し、重要な官職をも与えた。そうした人物は国王の寵のみが後ろだてであり、地方の権益の守護者たろうとしないのも当然だった。そもそもそんな権益など何も知らないも同然の輩なのである。

カール五世の相次ぐ戦役のため政府の出費は増加する一方で、絶えず調達額を増やす必要があった。諸州の最も神聖な特権さえも無視して、例のない税が課された。州議會は、君主が強硬手段に出ないでくれただけでも感謝して、要求を認めることによって体面を保つほかなかった。カール五世のネーデルラント統治の歴史は絶え間ない一連の賦課の目録のようなもので、それは要求され、拒絶され、そして結局は承認されるのだった。

カール五世は基本法に反して外国の軍勢をこの地に引き入れ、諸州での募兵を指示し、戦争に従事させた。そうした戦争はネーデルラントの利益を害さないとしても利になるものではなかったし、そもそも諸州が承認してもいないものだった。

カール五世は共和国の行ないを君主として罰した。ヘントに対する恐ろしい懲罰は、国の体制がすでに大幅な変更をこうむっていることを諸州に思い知らせたのだった。

国の福利は主君の政治的打算に必要な限りにおいて安堵された。聡明なカール五世の政策は自分がそのエネルギーを必要とする体の健全な構成部分を損なうようなことはしなかった。幸いなことに、利己的な野心と無私の人間愛という正反対の動機はしばしば同じ結果をもたらす。哲人皇帝マルクス・アウレリウスが合理的な追求目的として提起したとしても不思議でない国家の福利というものは、しばしばアウグストゥスによってもルイによっても遂行されるのである。

カール五世は通商こそが国の力であり、通商の基礎が自由であることは十分に理解していた。ネーデルラントの力を必要としたからその自由を温存したのである。息子フェリペ二世より公正とは言わないまでも、政治の機微には通じていたカール五世は、時と場所に応じて方針を変え、マドリードだったら強権的な手段に訴えてでも施行しただろうある布告をアントワープでは撤回した。



## プロテスタント運動

カール五世の治世がネーデルラントとの関連でとりわけ注目に値するのは、そのもとで起こった宗教上の大変革のためである。この宗教改革はのちに起こる反乱の主要な要因でもあり、少し詳しく触れておきたいと思う。専制権力が体制の内奥の聖域にまで立ち入ってその恐るべき力の片鱗を見せつけ、いわば制度化したのは宗教問題が初めてのことであり、一方でそれは共和主義精神を危険なほど前面に呼び起こしたのだった。共和主義が無秩序と混乱に陥っている間、君主の権力は専制の高みにまで達した。

市民の自由から宗教上の自由へと進むのはごく自然ななりゆきである。ネーデルラントでは個人も団体も恵まれた政治体制のおかげで人権についての知識をもち、自分たちを治める法を制定とは言わないまでも審査してきた。その心は活動によって啓蒙され、その心情は生活の謳歌によって拡張され、その生来の勇氣は国内の安定と繁栄によって高められた。そのような人々は、生気のない恣意的な教義によるまよわしの支配には容易に屈しようとはせず、真つ先にそのくびきを脱するものだ。

しかし、この地方で新教を普及させるのに大きく与った別の事情がある。

当時知識文化の最大の中心地であったイタリアは、焼きつける気候が情熱に血をたぎらせることもあつて以前には最も過激な政治抗争の場であつたが、このイタリアが全ヨーロッパ諸国のうちで宗教改革の影響を最も受けなかった。だが、ロマン系の人々は、暖かく晴れわたった空、豊かで緑あふれ、常に穏和な自然、そして多様な美術の魔力によって官能的な享樂に敏感になつてゐる。このような人々に対しては、宗教でも、華麗な虚飾によつて感覚に訴え、神秘的な謎によつて想像力を限りなく羽ばたかせ、この上なく絵画的な形で重要な教義を魂にしみこませようとするものが性に合っている。

他方、市民生活の日常によつて詩的でない現実を引き下ろされた人々は、絵画的なイメージではなく単純明快な考えで生活し、想像力を犠牲にして良識を培ってきた。こうした人々に対しては真理探究を恐れず、神秘主義よりは道徳に重点を置き、絵を見るだけでなく理解することを求める宗教のほうが魅力とな

る。

一言で言えば、ローマカトリック教は概して芸術家の国民にふさわしく、プロテスタントは商人の国民により合っている。

この点でルターがドイツで、カルヴアンがスイスで広めた新しい教義にとつてネーデルラントは好適な風土となった。その最初の種子はアムステルダムやアントワープに集まったプロテスタントの商人によつて播かれた。カル五世がこの地方に導き入れたドイツやスイスの兵士、そして母国で受けている迫害の刃先から逃れようと自由なフランドルに保護を求めてやってきたフランス、ドイツ、イングランドからの大勢の避難民がその普及を助けた。ルーヴアン大学がまだ無名で、ドゥエーの大学はまだ設立されていなかった当時、ネーデルラントの貴族の多くはジュネーヴで学んでいた。ジュネーヴで公に教えられていた新しい信条は教え子たちによつて諸国に伝えられた。

閉鎖的な社会であればこうした最初の萌芽はたちまち押しつぶされたかもしれない。だが、数多くの異なる国民が集まるホラントやブラバントの市場町では、初期の成長は当局の目にとまることもなく、世に知られることなく加速される。国民性、習俗、法令の面ですでに雑多な社会においては、異なる意見はたやすく成長し、地歩を得ることができ。

その上、勤勉が最も褒むべき徳であり、物乞いが最も忌むべき悪とされる国土においては、修道僧のよ

うな怠惰な人の集団は長らく根深い反感の対象だったに違いない。

折に触れて現われる辛辣な批判や皮肉に満ちたパンフレットは新しい印刷術によつて迅速な流通手段を獲得し、当時諸州を巡回していたレレイカーと呼ばれる巡業雄弁家の集団が劇仕立てや歌にして当時の悪弊をこきおろしており、こうしたこともローマ教会への尊敬を損ない、新たな教義の受容に向けて民心の準備をさせるのに少なからず与つていたのである。

新教による初期の信者獲得は驚くほど急速に進んだ。時をおかずに信奉者だと公言した人だけでも驚く

べき数に上る。ただし、そのうちでは現地人よりも外国人が多かった。宗教上のこの反抗陣営に対してカール五世は専制君主として当然の態度をとり、勢力を増しつつある刷新の奔流に対して最も有効な手段をもって抗した。

新教にとって不幸なことに、政治的な大義は迫害者の側にあった。何世紀もの間、人を真実から隔ててきたダムが突然取り払われたため、吹き出した奔流は予定された水路からあふれ出た。復活した自由と探求の精神は、宗教問題の範囲にとどまらず、国王の権利を議論しはじめた。最初に鉄の枷を解き放ったのは正当だったが、しまいには全く合法的で全く不可欠なきずなさえも引き裂こうとする欲望が首をもたげてきた。どこでも入手できるようになった聖書が誠実に真理を探究する者に光明と糧を与えた一方、急進的な宗派にかかつてはそこから猛毒を引き出す源泉となった。善なる大義は反乱という悪の道を選ぶことを強いられ、その結果は人が人である限り変わらないであろうものだった。

悪の大義は、不法な手段に訴えるという点以外では善と何らの共通点もないのであったが、このわずかなつながりに増長して同じ仲間のふりをし、混同された。ルターも聖人の崇拜に批判的な文章を書いたことがある——そこで教会や修道院に押し入って祭壇を略奪した大胆不敵な悪漢がみなルター派を名乗ったのである。抗争、略奪、狂信、放蕩がその旗印を掲げ、この上ない重罪人が裁きの場に引き出されるとルター派だと主張する。

宗教改革はカトリックの高位聖職者を過てる人間と同列にまで引き下ろした。飢えや欠乏に駆り立てられた狂信集団はあらゆる位階を打ち壊そうとした。国家に対してその最も都合な面しか見せない教義は、君主から見れば根絶するに十分すぎる理由があり、新教がその君主と和解できなかつたのは当然のことである。新教の側から押しつけてきた武力をカール五世が新教に対して用いたとしてもそれは驚くにはあたらない。

## カール五世の宗教勅令

カール五世はすでにネーデルラントで絶対権力を確立したと思っていたのかもしれない。ドイツでは讓歩した宗教的自由をこの地方にまで広げることを必要だとは考えなかった。ドイツ諸侯の強固な抵抗に遭ってドイツでは新教の自由な実践を認めたが、ネーデルラントでは新教抑圧のための過酷この上ない勅令を發布したのである。

これらの勅令によって、福音書や使徒行伝を読むこと、公的か私的かを問わず少しでも宗教の名に関わる集会をもつこと、そしてこの問題について論じることさえもが、たとえ自宅の食卓であっても嚴罰をもって禁じられた。どの州でも勅令の執行を監督するための司法裁判所が設けられた。過つた見解の持ち主はいかに高位の者であらうとその官職を奪われた。異端の教えを広めた、あるいは単に改革派の秘密集会に出席したことで有罪となった者は死罪とされ、男であれば打ち首、女であれば生き埋めにされた。常習的な異端者は火あぶりにされた。被告が信条を撤回してもこの恐ろしい判決を取り消すことはできなかった。過ちを改めた者が棄教によって得るものは、高々、より苦しまない死だけだった。

断罪された者については封土も没収されたが、それは、相続人にわずかばかりの罰金で封土の安堵を認めたこの国の特権に反することだった。そして、ホラント州民は自らの州外で裁かれたいとする明文によるホラント州の重要な特権を無視して、被告は本来の管区外に移送され、外国の裁判所において断罪された。こうして、宗教の導きを受けた専制主義は神聖を武器に、危険も反対もなく、世俗の部門にとって侵されざるべき自由に対する攻撃を行なったのだった。

## 異端審問

カール五世はドイツでの戦いが順調なのに勇を得て、どんな思い切ったことでもできると思うようになり、ネーデルラントへのスペイン宗教裁判所の導入を真剣に考えた。だが、その名の恐怖だけでアントワ

ープの通商は停滯した。主だった外国商人は町を出る準備をし、買い入れも販売も停止した。家屋の価格は暴落し、手工業も停滯した。市民の間から金が消えた。この繁栄する商業都市の破滅は不可避の情勢だったが、カール五世がパルマ公妃の申し立てに耳を傾け、破滅的な決意を放棄したおかげで破局は免れた。こうして裁判所は外国商人には干渉しないよう命じられ、異端審問官の肩書きはより穏やかな響きの聖裁判官と改められた。しかし、他の諸州ではその裁判所は常にそれにつきものであった無情な専制の暴威をふるった。カール五世の治世中、五万人もが宗教上の理由のみで執行人の手にかけられたと推算されている。

### カール五世による恩恵

この君主の横暴なやり方を目にするとき、次の治世になつて爆発した反乱がカール五世の治世の間どうして抑えられていたのか、理解しがたいものがある。だが、よく見ればこの一見した矛盾は解決できる。

ヨーロッパじゅうで恐れられたカール五世の覇権はネーデルラントの商業をかつてない水準にまで高めた。とりわけ、バルト海においてハンザ同盟都市の支配をうち破ったのはカール五世の力によるものだった。またカール五世という共通の統治者を戴くことで新大陸、スペイン、イタリア、ドイツといった地域がある意味で国内の他州と同じような感覚になり、ネーデルラントの通商に新たな道を開いたのである。カール五世はさらにブルゴーニュの世襲領に残っていた六州も統合し、そうして得た地理的広がりと政治的重要性によつてネーデルラントはヨーロッパの第一級の王国と肩を並べるまでになったのである。

「カール五世は一時、ネーデルラントを王国に昇格させることも考えた。だが、各州の間の根本的な相違は基本体制から習俗、度量衡にまで及び、カール五世としてもこの計画をあきらめざるを得なかった。より重要なことは、カール五世がブルゴーニュのドイツ帝国との関係を定めたブルゴーニュ協約（一五四八）によつてネーデルラントに求めた奉仕である。この協約によると、ネーデルラント十七州はドイツ帝国の共通の必要に対して選帝侯一人の二倍の貢

献をすることになっていた。トルコとの戦争の場合にはこれが三倍となる。その返報として、ネーデルラントは帝国から強力な保護を受け、さまざまな特権の侵害を受けないこととされた。カール五世の息子の代に諸州の政治体制を根本的に変えてしまった革命は、この協約を無にすることになった。この協約により得られた利は取るに足りないものであり、これ以上言及する必要はないだろう。」

こうしたすべてのことによって、カール五世はネーデルラント住民の自尊心をくすぐった。その上、ヘルダーラント、ユトレヒト、フリースラント、フロニンゲンの各州をネーデルラント諸州に組み込むことによって長年通商の障害となってきた私闘に終止符を打った。破られることのない国内の平和によって、ネーデルラントは今やその勤勉の果実を存分に味わうことができるようになった。

このように、カール五世はネーデルラントの人々にとって恩人だったのである。同時に、カール五世の輝かしい勝利の数々は人々の目をくらませた。民衆にも残照をもたらした君主の栄光は、人々の共和主義的警戒心をくもらせ、ドイツ、フランス、イタリア、アフリカの征服者を取り囲む神々しい後光は諸党派をたじろがせた。

つまるところ、一私人であれ諸侯であれ、成功し、同胞の賛嘆をほしいままにしている人がちよつとやそつとのことで冒険に出るはずはないのである！皇帝自らがたびたびこの地に足を運んだことも（本人の弁によると十回に及んだ）不満を抱く人々を押しとどめることになった。いつも厳格な裁きが時をおかず執行されることは王権に対する畏怖の念を持続させた。

☆

最後に、カール五世はネーデルラントの生まれであり、生まれ育った国を愛していた。その習俗も好み、人々の性質や社交の簡素さはスペイン流のいかめしさからの息抜きとなった。土地の言葉も話し、私生活ではその習慣も守っていた。現地人が君主に面会するのを妨げようとすると疑り深い外国人もなかった。君主に会おうと思えば同郷人を通じて手配できる。カール五世は現地に身近のことを任せていたのだ。

人々とはじつくりと丁寧に語り、その举措は魅力的で、その談話には説得力があった。

こうした単純なすべによつてカール五世は人々の愛情を勝ち得ていた。その軍勢が田畑を踏み荒らし、いるときでも、重税が人々の財産を侵食しているときでも、総督たちが抑圧し、執行人が処刑を行なっているときでも、カール五世は親しみやすいふるまいによつて人々の心をつかんでいたのである。

## フェリペ二世への継承

カール五世はこの国を挙げての愛情をさぞ息子に継がせたかったことだろう。まだ若い息子をスペインから呼び寄せ、ブリュッセルで将来の臣下に披露したのもそのためだった。カール五世が退位する厳肅な日には、息子に対してネーデルラントをその王冠の最も貴重な宝石だと言い渡し、その法や特権を尊重するよう真剣に忠告している。

フェリペ二世はあらゆる点で父とは正反対だった。カール五世と同じように野心的であつたが、人間や人権についての認識では父に及ばなかつた。自分なりに王の威光というものの考えをもつようになつては、それは単に人を専制的な意志に仕える道具と見なすもので、フェリペ二世はあらゆる自由の兆候に憤激するのだつた。スペインで生まれ、修道僧たちの鉄の規律の教育を受けた王は、自らの性格を特徴づける陰鬱な堅苦しさや寡黙を他の者にも求めた。ネーデルラントの特権がフェリペ二世の専断的な意志のじゃまになるのと同様、フランドルの臣下の陽気さは王の気性や性向にそぐわなかつた。スペイン語しか話さなかつたし、身辺にスペイン人以外がいるのは耐えられなかつた。そして頑固なまでにあらゆるスペインの慣習を墨守していた。

青年フェリペが通過したフランドルの町々は王子の来臨を寿ぐべく競つて豪華な祝祭を行なつたが「このようなある折りに、アントワープだけで二十六万金グルデンを費やした」、それは全くの無駄に終わった。フェリペが目を輝かせることはなく、贅を尽くした催しも、耳を聳する心からの歓呼の叫びも、この青年が

ら微笑一つ引き出すことはできなかった。

カール五世が息子をフランドルの人々に披露したもくろみは完全に外れた。フェリペがネーデルラントに一度も足を踏み入れることがなかったならば、人々ももう少し辛抱強く抑圧に耐えたかもしれない。だが、このときのフェリペの表情が人々に次の治世についての予感を抱かせた。フェリペはブリュッセル入場によって民心を完全に失った。人々に対する皇帝の愛情深い親しみやすさは、息子の傲慢ないかめしさをより暗く際立たせたただけだった。人々は青年の表情のうちに自分たちの自由に対する敵意を読みとった。このときすでに、フェリペは胸中でそのような意図を温めていた。フェリペが暴君となることをあらかじめ予感した人々は、これに抵抗すべくあらかじめ身構えた。

ネーデルラントの君主の座はカール五世が譲位した最初のものだった。ブリュッセルの厳肅な集会を前にして、皇帝は全国議會をその宣誓から解放し、その忠誠を息子である国王フェリペに移行させた。そして息子に向ける次の言葉で締めくくった。

「もし私の死によってこれら諸国が自然にそなたのものとなったとしても、これほどに価値ある遺領を残す以上は感謝してもらってよいであろう。だが今、私は自ら進んでそなたに譲る。そなたがより早くこの宝を享受できるように、私は死に急ぐことにする。それにあたり、そなたにはただ一つ、我が威光の自発的な譲渡によってそなたに課されるよりいっそうの務めを人々に対して果たしてほしい。

君主というものは死によってすでに失いかけている王冠を子に遺贈するのを格別の喜びとするようだ。だがその幸せを私は存命中に味わいたいと思う。私はそなたの治世を見届けたい。これまでほとんどそうした者がなかったように、私の先例に続く者もないだろう。だがそなたのこれからの人生が私の期待に應えるものであれば、そなたがこれまでに示してきた英知を導きとすることを忘れなければ、そなたがその王冠の主柱たる純粋な信仰をゆるぐことなく保ち続けるならば、この私の行為は称賛を受けるであろう。一つだけつけ加えておこう。天がそなたに息子を恵みたまわんことを。そしてそなたが必要からでなく、



自らの意思によつて権力を委譲できる日がくることを」

皇帝の演説が終わると、フェリペはその前にひざまずいてその手にキスし、父の祝福を受けた。フェリペの目が涙に潤んだのはこれが最後のこととなった。居合わせた誰もが涙ぐんでいた。決して忘れられることのない情景だった。

この感動的だが空虚な芝居には別の一幕が続いた。フェリペが集まつた等族から恭順を受け入れるのである。フェリペは次のような形で示された宣誓をした。

「神の恩寵によりスペイン国王、両シチリア国王等たる私フェリペはここに誓う。私はこれらの国土、伯領、公領等において善良で公正な領主となろう。我が父祖によつてすべての貴族、都市、庶民、臣民に与えられた特権と自由ならびに彼らが現在共通もしくは個々に享受している慣習、慣例、権利を十分かつ真に保持し、保持されるようはからうであろう。その上、私は法と権利によつて善良で公正なる君主および領主に付随するすべてのことを果たすであろう。神、そしてすべての聖人の加護があらんことを」

この宣誓文のうちにすでに、皇帝の専制政治が呼び起こした警戒心、そしてその息子に対する不信感を見て取ることができる。これはカール五世自身や歴代ブルゴーニュ公に対して示されたものよりもはるかに用心深く、明確な言葉遣いだった。たとえば慣習、慣例を維持することを誓わされているが、これは従来求められたことのないものだった。

等族がフェリペに対して行なつた宣誓では、国の特権と相容れないことへの服従は約束されていないかつた。国王の官僚が服従と支持をあてにできるのは託された務めを法に則つて果たしている限りにおいてとされた。最後に、この等族による忠誠の誓いにおいて、フェリペは単に実子、世襲君主としか呼ばれず、皇帝が望んだように主権者とか領主とは呼ばれなかった。この事実は新王の正義や寛大に対する不信感を如実に示すものであつた。

## ネーデルラントの支配者フェリペ二世

### スペイン領ネーデルラントの状況

フェリペ二世がネーデルラントの領主の地位を受け継いだのはその繁栄の最も輝かしい時期においてであった。その君主の中で、すべてを自分の支配下においたのはフェリペ二世が初めてだった。この時点でネーデルラントは十七州からなる。ブラバント、リンブルフ、ルクセンブルク、ヘルレの公爵領、アルトワ、エノー、フランドル、ナミユール、ズトフェン、ホラント、ゼーラントの七伯爵領、アントワープ、辺境伯領、そしてフリースラント、メヘレン〔フランス語名マリーヌ〕、ユトレヒト、オーヴァーエイセル、フロニンゲンの五つの領主領であり、これが総体として君主制諸国とも張り合う力をもつ強大で強力な国家を形作っていた。その通商がこの時点以上に栄えることはなかった。その富の源泉は地上のものだったが、それはアメリカのあらゆる鉱山よりも価値あり、豊かで尽きせぬものだった。

これら十七州はすべて合わせてもわずかにイタリアの五分の一にしかならず、その広がりも三〇〇フランドルマイルを越えるものではないが、領主へのその年間の歳入は、教会財産を収奪する前にイギリスが国王にもたらしていたものに比べてもひけをとらないものだった。勤勉と快楽で活気にあふれる三五〇の都市（その多くは堡壘や城壁がなくても地の利によって守られている）、六三〇〇の大きめの市場町、そして数え切れない小村、農場、城塞がこの領域に一続きのとぎれない繁栄の光景を与えている。

ネーデルラントは今その光輝の頂点に達していた。勤勉と豊かさがその市民の天分を高め、思想を啓蒙し、趣向を洗練した。国の繁栄とともに知性が花開いた。過酷な風土によって冷まされた穏和な気質が激情の爆発を抑えていた。沈着、穏健、忍従は北方の氣候のたまものだった。正直、公正、誠実は職業上必要な徳だった。そして愛すべき自由の果実、真実、善意、愛国心が若干の人間らしい欠点を加えてその国民性において融合していた。

賢明な君主のもとにあつては、これほど治めやすい民はないだろう。ペテン師や暴君のもとにあつては、これほど治めにくい民もないだろう。この国ほど民の声が善政の過たざる指標となつているところはない。眞の政治家としての資質に対してこれほど高貴な試験はなく、病んで不自然な政策にとつてこれほど恐ろしいものもない。

このように構成された国家は、危急の難に迫られ、賢明で手腕ある指導者により動員されればとてつもないエネルギーを発揮して行動し、どのような辛苦にも耐える力をもっている。

この諸州でカール五世が後継者に遺した權威はほとんど限定君主制と言つていいものだった。共和主義精神に対して国王大權が優位にあるのは明らかだった。その複雑な機構は絶対主義統治下の国と同じように確實に、そして迅速に動かすことができる。かつてあれほど權勢を誇つた数多くの貴族たちも進んで君主の戦争に同行し、文官職にある者も王座にある者の機嫌をうかがつた。

国王の巧みな施政により自負心にとつての新たな価値が創出され、それは国王だけが与えることができるのだつた。荒削りの素朴さをよしとする共和主義的美徳に代わつて、しまいには新たな情熱、満足についての新しい考えが登場した。自負心は虚栄心に、眞の自由は名誉ある称号に、困苦のうちの独立は豪華な隷従にとつて代わられた。絶対君主の代官として祖国を抑圧し、収奪することは、議會で君主とともに至上權の百分の一の分け前に与るよりも、大貴族の欲望や野心にとつては大きな誘惑だった。

それに貴族の大半は貧困と負債にあえいでいた。カール五世は諸侯を名誉ある使命とのもつともらしい名目のもと外国宮廷への使節として派遣し、その負担によつて最も危険な封臣の手足をもちだ。オラニエ公ウイレムは皇帝が弟に譲る帝冠を持つてドイツに派遣され、エフモント伯はフェリペとメアリー女王の婚約締結のためにイングランドに送られた。両者ともの中にはフランスとの和平交渉、主君とイサベル女王との新たな婚姻交渉のためアルバ公に従つてフランスに赴いた。こうした旅の出費は三十万グルデンに上つたが、国王からはびた一文も出なかつた。オラニエ公がサヴォイ公に代わつてネーデルラントにおけ

る総司令官に任命された際にも、職務上の必要経費いっさいはオラニエ公の負担となった。外国の大使や諸侯がブリュッセルを訪れたときには、国王の名譽を保つのは貴族たちの務めとされたが、国王自身はいつも食事は一人でし、人を招くことはなかった。

スペイン政府はさらに、ネーデルラントの有力者の富を徐々にむしばんでいくより巧妙なしかけを導入した。毎年、カステイリア貴族の一名がブリュッセルに赴き、豪華な威厳を見せつける。ブリュッセルではこのような贅で外国人に差をつけられるのは拭いがたい不名誉だと見なされ、みな競ってそれを越えようとし、高価な模倣によって富を使い果たすのである。スペイン人はころあいを見て帰国し、四年間の質素な生活によって一年間の奢侈の痛手を修復する。羽振りのいい外国人が現われるたびに富を誇って競わずにはいられないのはネーデルラント貴族の弱点だった。その弱みを政府はぬけめなく利用したのである。だが結局のところ、この技巧は計算通りの結果を生みはせず、負債の重荷は貴族たちに改革を志向させることになった。すべてを失った者にとって、全体的な破局のほうがいくらかでも可能性があり、望ましかったのである。

ローマカトリック教会は以前より王権の主要な支えであり、それは自然なことだった。その黄金期はいつも知性の閉塞期だった。カトリック教会は、王権と同じように、人の無知と弱さを利用してきたのだ。市民生活の抑圧のため、宗教は心のよりどころとしてますます大切なものとなった。専制権力への服従によつて、人々の心には手近な信仰への盲信の下地が整えられた。このような専制の貢献に対して宗教界は高利をつけて返済をした。議会において司教や高位聖職者は王権の熱心な支持者となり、市民の福利を犠牲にすることさえいとわず教会の利益や君主の政治的・目的を推進したのである。

多数の勇猛な守備兵もまた市民を恐れさせた。同時に、各都市は宗教上のごたごたや党派によつて分断されており、市民は最も強力な武器、すなわち団結の力を行使できなかった。

こうしてみると、フェリペ二世の権力の優位を確かなものにしようと思えばいかにささいな努力ですん

だとか、それを失った愚がいかに致命的なものであったかがわかる。

☆

しかも、当時全ヨーロッパに覇を唱えたスペイン王室の権勢はネーデルラント地方でのフェリペ二世の権威以上のものだった。スペインとあえて覇を競おうとする国など皆無だった。

最も危険な隣人であるフランスは戦争の重圧、そしてそれ以上に幼年王の治世中に台頭した党派の抗争により弱体化しており、半世紀にわたってその国を大規模な犯罪と恐ろしい惨状の舞台とする不幸な状態へと急速に進んでいた。

イングランドのエリザベス女王は、いまだ落ち着かない王座を渦巻く党派抗争から、そして新しい教会をカトリック教徒の奸計からかろうじて守っているという状況だった。この国が一介の辺境国の座を脱却するきっかけを創出する呼びかけはまだなされておらず、最終的な勝利の鍵となる、フェリペ二世の過る政策から得られる強みにもまだ気づいていなかった。

ドイツの帝室はスペイン王室とは血縁と政治的利害の二重のきずなで結ばれていたし、スレイマン大帝の猛進撃のため皇帝の関心はヨーロッパの西部よりは東部に向いていた。

恩義と恐怖のためイタリア諸侯がフェリペに従うことは確かで、教皇選挙会議を仕切っているのもフェリペの手の者たちだった。

北方の諸王国はいまだ未開の暗黒時代にあつて知られておらず、あるいはようやく体制や国力を整えはじめたところで、いまだヨーロッパ政治の表舞台では認知されていなかった。

有能な將軍たちに勝利に慣れた大軍勢、強大な艦隊とこのころから定期的に確実に届くようになった西インド諸島の黄金——才ある君主の確かな手にゆだねられたとき、これらはいかに恐るべき道具となることであろうか！フェリペ二世の治世が始まったのは、そうした好条件のものであった。

## フェリペ二世の個性と治世

フェリペ二世の行動を見る前に、早足でその魂の内奥を見ておく必要がある。そこにフェリペ二世の政治生活に対する鍵を見出すこともできるであろう。

フェリペ二世の性格を構成するもののうち、喜びとか仁徳といったものは完全に欠如していた。その気性や陰気な幼年期のため前者は得られず、後者については社会的な結びつきのうちでも最も甘美で最も強力なものを放棄した人々によつて教えられようはずもなかった。二つのこと、自己と自己の上なるものがフェリペ二世の狭隘な精神を占めていた。利己心と宗教とがその生涯の全内容であり、表題であった。フェリペ二世は王であるとともにキリスト教徒であったが、両者を統合しようとしたためいづれも失敗だった。

フェリペ二世は人のためのを思う人ではなかった。へりくだることはなく、高みに登るばかりだったからである。

その信仰は陰鬱で厳格だった。フェリペ二世にとつての神とは畏怖すべき存在であり、何かを期待するのではなく、恐れるべき対象だった。普通の人には神は慰めであり、救い主であるが、フェリペ二世の心の中では神は恐怖の具現、自分の人間としての全能性に対するつらい屈辱的な制約として現われた。この存在に対する畏敬の念がいや増し深まるほど、他の対象に対する配慮の余地は少なくなった。神の前では身を屈しておののいたが、それはフェリペ二世が身を屈しなければならぬのが神の前だけからだった。カール五世が宗教に熱を入れたのは、それが己の目的の助けとなるからだった。ところがフェリペ二世はそれを心底信じてやっているのだった。カール五世は教義のために何千何万もの人々を戦禍に巻き込んだが、自分自身は教皇をも虜囚としたように、それほどの人命を犠牲にしてまで尽くした当の教義をあざ笑っていた。一方、フェリペ二世が教皇に対してこの上なく公正な戦争を決意したときには、いや気と良心の呵責にさいなまれており、改悛した犯罪人が奪ったものを返すように、勝利の果実いっさいを放棄し

た。皇帝は打算から過酷な手段をとったが、息子の場合には本性からだった。前者は強く開けた精神の持ち主だったが、それだけに人としてはたちが悪かったと言えるかもしれない。後者は狭量で性格的な弱さがあつたが、より実直だつた。

☆

しかし、両者が実際よりたちのよい人間だつたとしても、全体としては同じような原則に基づいて行動したのではないかと思われる。我々が個人の性格に帰することは、実にしばしば人間というものの弱さ、避けられない不完全さに起因しているのである。

これほど広大でこれほど強力な帝国は人間の自尊心にとつてはあまりに大きな誘惑であり、人間の力にとつてあまりに重い責任である。万民の幸福と個人の最大限の自由を組み合わせることは、すべてを見晴るかす限らない精神でなければできないものではない。だが全能の立場に置かれたとき、人にどのような方策があるうか。人は己に課された制限を分類することで助けとしてきた。博物学者のように全体を観察する弱々しい力を助け、すべての個人が従わなければならない目印と確かな規範を確立する。このすべてが宗教によつて成し遂げられるのだ。宗教は人が誰しも抱く希望や恐れを見出す。それらの感情を支配し、人々の愛情を単一の対象に向けさせることによつて、事実上、何百万もの独立した存在を一樣な抽象体に変容させる。もはや人の意思の限りない多様性が支配者を悩ませることもない。今やただ一つの普遍的な善があり、ただ一つの普遍的な悪があり、それを思いのままに持ち出し、あるいは引つ込めればいいのである。

それは自分がいない場所ですえ思いのままに機能させられる。こうして自由に限界が課される。あがめべき神聖な一線の前に自由は立ち止まらなければならず、そこに至るまでにどんな相反する意志の動きも折れなければならない。

専制主義と聖職者の共通の狙いは一樣性である。一樣性は人の貧困と不完全に対する必要な救済手段で

ある。フェリペ二世が父以上の専制君主となったのはその精神がより狭量だったためである。換言すれば、身をかためて個別の特殊な例外に対応することができず、それだけになお徹底して一般原則を貫く必要があったのである。

こうしたことから何が導き出されるだろうか。フェリペ二世にとって、宗教においても政治体制においても、一様性より高い望みを抱く余地はなかった。それなくしてフェリペ二世は君臨し得なかったからである。

☆

それでも、もう少し早く王位についていたらより穏和で節度ある統治をしていたかもしれない。この君主について通常なされる評価では、フェリペの心と精神の発達においてこの事情が十分考慮されていないように思われるが、それはもつと重きをおかれてしかるべきものである。

フェリペがスペインの王位についたとき、すでに三十歳近かった。その早熟な理解力は人よりも早く完成の域に達していた。そのような心にとって——その成熟を自覚し、早すぎる時期から高い期待を抱き続けた精神にとって、自分がおかれている子供のように枷をはめられ服従を強いられる立場は耐えがたいものだった。自分よりすぐれた父の資質、その専制君主の絶対権力は、この息子の自己満足した自尊心を圧迫していたに違いない。父が息子に認めていた帝国統治への参与は、フェリペの心をつまらないことへの情熱を捨てその厳肅な性格を確定するには十分だったが、そのわずかな程度ではかえって無際限な権力への渴望をかき立てた。

フェリペ二世が実際に制約を受けない権限を手にしたとき、それはすでに新奇なものとしての魅力を失っていた。人生の早期に突然最高権力を手にすることになった若い君主の快い陶酔感、人の心に根ざすやさしい感情を呼び起こし、これまで人類の福利となるいくつかの制度をもたらしてきたあの感情のほとばしりは、フェリペ二世の場合、とうに過ぎ去っていたか、あるいは全く存在しなかった。運命によりこの



厳しい試練がめぐってきたとき、フェリペ二世の性格はすでに引き締められており、その確固とした方針は善をなそうとする衝動を押しとどめた。

十五年の間、この立場の変化に対して心の準備をしてきたフェリペ二世は、若者らしく新たな地位の外面上の象徴をもてあそんだり、無為な虚栄心にふけて統治の幕開けを無駄にするようなことはしなかった。最初から落ち着き払った厳粛な態度で権力の完全な掌握にとりかかった。それを徹底的に行使することによって、長らくおあずけにされてきたぶんを取り返そうとでもするかのように。

## 宗教裁判所

### 二種類の宗教裁判所

カトー・カンブレジ条約（一五五九）でその広大な版図に対する外憂を除くやいなや、フェリペ二世は宗教の純化という大業に全力を傾注するようになった。こうしてネーデルラントの臣民の恐れは現実のものとなったのである。父の代に発布された異端を禁じる布告は完全な効力をもって更新され、その執行を司る裁判所が設立された。それは名前こそ違ったが、宗教裁判所と変わるところのないものだった。しかし、フェリペ二世にとって、この地方にスペインの宗教裁判所を完全な形で導入しない限り、計画は半分しか達成されていないも同然だった。皇帝が一度挫折した計画である。

異端審問を司るスペイン宗教裁判所というのは新しい独特な裁判所で、歴史を通じて原型となるものもなく、いかなる教会上、世俗上の裁判所にも比べられないものだった。

異端審問そのものは聖界のことに理性が口を出すようになって以来、すなわち懷疑主義や教会改革の端緒以来存在していた。しかし、十三世紀の中ごろ、背教が教会をおびやかす例がいくつかあったのを受けて、イノケンティウス三世は初めて異端審問のための特別の裁判所を設立し、教会上の監督、指導を異例な形で刑事部門から分離させた。人間らしい感受性や自然な温情のために法令の厳格さが弱められることのないよう、教皇はこの裁判所を、社会生活を送っておりこの目的のために人情がありすぎる司教や世俗の官吏の手から取り上げ、修道士にゆだねることにした。修道士というのは神聖な自然の感情を捨て去った人間の名前をもつ変種であり、ローマ教皇庁の手先となって盲従するものである。

異端審問はドイツ、イタリア、スペイン、ポルトガル、フランスに導入された。テンブル騎士団に恐ろしい判決を言い渡した法廷の裁判官はフランシスコ会の修道士であった。いくつかの国では異端審問を閉め出し、あるいは世俗の権威のもとに成功した。ネーデルラントはカール五世の治世まで異端

審問が導入されず、司教が宗教上の監督を行ない、特別の場合には外国の宗教裁判所で異端審問が行なわれた。フランスの属州ならパリ、ドイツならケルンという具合である。

しかし、今問題にしているスペイン宗教裁判所はこれとは起源も形態も異なり、ヨーロッパの西端に由来するものである。

十五世紀に最後のムーア人の王国グラナダが滅亡し、サラセン人の異教がいにキリスト教の前に膝を屈した。しかし、キリストの福音はまだ新奇なものであり、この新来のキリスト教王国においては完全に地歩を得てはいなかった。異なる法や習俗がごたまぜとなった中で宗教は混交した。剣による迫害のため多くの家族がアフリカに追いやられたことは事実である。しかし、気候や故郷への愛着から離れがたかつたずっと多くの者が、改宗のそぶりをするのでそのような恐るべき運命からの赦免を買い、キリスト教の祭壇で礼拝しつつ、マホメットやモーゼの崇拜を続けた。メッカに対して礼拝が行なわれている限り、グラナダが屈服したとは言えなかった。新しいキリスト教徒が家に帰ってユダヤ教徒やイスラム教徒となつてゐる限り、ローマ教皇庁に忠実でないのと同様、国王にも忠実だとは言えなかった。

もはや異端者に外面的に新しい信仰を押しつけたり、儀式という弱いきずなで勝者たる教会に結びつけたりするだけでは不十分だった。今目標とされるのは、古き宗教を根絶やしにすることだった。また、幾世紀ものゆつくりとした作用により人々の習俗、言葉、法令に埋め込まれ、父なる大地や空の持続的な影響によつて今なお完全な効力をもつて広く残っている根深い性向を屈服させることだった。

教会が対抗宗派に対して完全な勝利を収め、新たに獲得した信者が再び脱落する可能性を確実に断とうとするならば、古き宗教がよつて立つ基礎を突き崩すことが不可欠だった。それが密接に結びついている道徳性の全体をこなごなに打ち壊すことが必要だった。それが魂の内奥に張った秘密の根の影響力を弱めることが、家庭生活でも社会生活でもそのあらゆる痕跡を抹消することが、それを想起させるあらゆるものを抹殺することが、そしてできうるならばその影響を受ける下地を破壊することが必須だった。

いつの世でも宗教が第一にして最も直接的に結びつくのは、祖国と家族、良心と名誉といった自然的、社会的な神聖な感情である。宗教はこうしたものから力を得、そしてこれらに力を与える。このつながりを今解こうとしているのだ。古き宗教は力によつて自然の神聖な感情から切り離されねばならない。たとえそれがそうした感情の神聖さそのものを損なうことになるうとも。

こうしてかの宗教裁判所が登場した。これは同じ名前だがより人道的な裁判所と区別するため、普通スペイン宗教裁判所と呼んでいる。その創立を進言したのはメンドーサ枢機卿だった。「教皇シクストゥス四世の勅許（二四七八）を得てスペイン各地に宗教裁判所が設立された。」ドミニコ会の修道士トルケマダがその血なまぐさい裁判所の最初の長官（総審問官）となり（二四八三）、裁判所規程を制定し、この遺産によつてドミニコ会は永遠に呪われることになった。

理性の冒流、知性の圧殺がその誓願であつた。その道具は恐怖と恥辱である。邪悪な情熱がことごとく用いられた。その畏は生活のあらゆる楽しみにしかけられた。孤独でさえも安全ではいられない。あらゆる場所に目が光っているという恐れが魂の自由にその最も深い内奥において枷をはめることになった。人間のあらゆる本能を信仰のもとに平伏させ、普通なら人が最も神聖なものと考えるきずなもその前に屈した。

異端者はその一族に関するあらゆる権利を失った。母なる教会へのほんのささいな違背でも一族郎党が告発された。教皇の無謬性をわずかでも疑おうものなら父親殺しの罪をきせられ、獣姦の烙印を押された。その判決は恐れられていた悪疫による腐敗、すなわち健康この上ない体をたちまちにして腐敗させる過程に似ている。生あるものでなくとも異教に関わるものはことごとく断罪された。運命といえどもその犠牲者をかくまうことはできなかった。死体や肖像に対してでも判決は容赦なく執行され、墓場でさえもその魔の手を逃れることはできなかった。

こうした判決の不遜さを超えるものはそれを執行する者の非人間性だけだった。おぞましいものをおど

けたものと組み合わせ、珍妙な行列で目を楽しませることによって、同情とは別の気持ちを呼び起こし、共感を弱めるのだった。嘲りと蔑みのうちに同情心を埋没させたのだ。

違反者は厳粛な行列で処刑場まで導かれた。血の紅に染めた旗が先に立ち、町じゅうの鐘が鳴り響いて行列を送った。先頭はミサの服を着て賛美歌を歌う司祭で、その次に黒い悪魔の模様で覆われた黄土色の上着を着た断罪された罪人が続いた。頭にかぶる紙の帽子の上部は人型になっており、そのまわりにはゆらめく炎がたわむれ、恐ろしい悪魔が飛び交っていた。はりつけにされたキリストの像が先導していたが、永遠に断罪された罪人からはそむけられていた。罪人にはもはや救済は得られないのである。その死すべき肉体は現世の炎に、その不死の魂は地獄の炎に焼かれるのである。口には猿ぐつわをかまされているから、悲嘆の声を上げたり、感涙を誘う話で同情の念を起こさせたりして苦痛を和らげることも、神聖な裁判所の秘密をさらけ出すこともできなかった。罪人のあとには祝祭の衣をまとった聖職者、そして行政官、貴族と続いた。裁判官を務めた神父たちが行列の末尾だった。遺体を墓地に運ぶ厳かな葬列とも見えるが、運ばれているのは生きている体で、そのうめきが沿道の人々に身の毛もよだつ見せ物となっているのである。

処刑は一般に華やかな祝祭の折りに行なわれる。教会の牢獄にはこのために不幸な受刑者がたくわえられており、犠牲者の多さで祭典を盛り上げるのに使われるのである。そうした場にはたいいてい国王自身も臨席した。国王は無帽のまま、宗教裁判所長官よりも低い椅子に座った。このような場では長官に上位を譲るのである。国王陛下でさえも身をかめる裁判所の前では、誰もが恐れを感じずにはいられないのだった。

### 宗教改革以後の宗教裁判所

ルターとカルヴァンによる教会の大変革によって、この裁判所の目的もその端緒となったものから変容

することになった。当初、ちつぽけなグラナダ王国からわずかばかりのサラセン人とユダヤ人の名残を消し去るために考案されたものが、今やキリスト教世界全体にとって必要とされた。ポルトガル、イタリア、ドイツ、フランスのすべての宗教裁判所はスペイン宗教裁判所の形を採用した。ヨーロッパ人の海外渡航に伴って東西インドにも伝わり、ゴアにも恐るべき裁判所が設立された。

その非人間的な活動は事実を述べるだけでも身の毛もよだつものである。宗教裁判所が足を踏み入れたところには荒廃が残された。だが、世界のどの部分でもスペインほどの猛威をふるった場所はなかった。そのいけにえとなった死者は忘れられる。世代は入れ替わり、宗教裁判の嵐に荒廃し、見捨てられた土地にも再び繁栄が訪れる。しかし、スペイン人の性質からその痕跡が消え去るまでには何世紀もかかることだろう。

卓越した進取の気象に富む国民が、その完成への道なかばにして宗教裁判により歩みを止められた。宗教裁判は才能ある人材をその生まれた土地から追放した。この大陸に住む誰にも劣らず楽しみに適した人々の心には、墓場のような静けさが残された。

☆

ブラバントでの最初の異端審問官は一五二二年にカール五世によって任命された。補佐として司祭が何人か選任されたが、異端審問官自身は世俗の人物だった。ハドリアヌス六世の没後、その後継者となったクレメンス七世はネーデルラント全域のために三名の異端審問官を任命した。パウルス三世はそれを再び二名に減らし、その数は争乱の開始まで続いた。

一五三〇年に等族議会の助力と承認を得て、異教に対する勅令が發布された。これが今後のできごとすべての基底をなすもので、この中では宗教裁判への言及もなされていた。一五五〇年、新宗派が急増した結果、カール五世はこれらの勅令を復活させて施行する必要に駆られた。アントワープ市が宗教裁判所の設立に反対し、その管轄からの除外を勝ち得たのはこのときのことだった。

しかし、ネーデルラントでの宗教裁判の気風はこの地の国民性に合致してスペインよりも人道的で、これまでのところ外国人、ましてやドミニコ会士によって運営されたことはなかった。誰にでも周知の勅令がその決定のよりどころとなった。このため、宗教裁判所もネーデルラントではそれほど忌むべきものとは感じられなかった。その判決がいかに厳しいものであろうと、専制権力の手先とは見なされなかったのである。スペインの宗教裁判のように秘密のルールに包まれてもいなかった。

しかし、フェリペ二世はスペイン式の宗教裁判をネーデルラントに導入することを望んでいた。この地の人民の気概をうち砕き、専制政治の地ならしをするにはそのほうがふさわしいと思われたのである。そのため、王は手始めに父の発した宗教上の布告の厳格さを増し、徐々に異端審問官の権限を拡大し、その審理をより恣意的に、世俗の管轄からより独立したものとしていった。この裁判所はやがて名前とドミニコ会士がない点を除いてはスペイン宗教裁判とあらゆる点で似かよったものとなった。

ほんの疑惑だけで市民が安息から、家庭の団らんから奪い去られ、ごく薄弱な証拠だけで拷問の理由となった。ひとたびその深淵に落ちた者は、二度と世間に戻ることはなかった。被告にとって、法の保護はいつさいなくなった。母のようにいたわる正義はもはや無縁のものとなった。世間の垣根を越えたところで悪意と狂気とが被告を裁き、そのよりどころとなる法は人間のためとは思えなかった。罪人が誰が告発したのかを知ることとはなかった。それどころかどんな罪で告発されたかを知らされることさえほとんどなかった。非道で悪魔的な手管によって、己の過ちを推し量るばかりとなった不運な犠牲者は、拷問の苦痛によるうわごとのうちに、あるいはそれ以上生き地獄を味わうのを避けるために自白をするが、それは実際に犯したのではないかもしれないし、少なくとも裁判官が証拠を握っているものではないのだった。罪人の財産は没収され、密告者は感謝状や報償金によって報いられた。神聖なる権力の前ではいかなる特権もいかなる世俗の管轄も無力だった。その権力につかまれた者は、世俗の部門からは永遠に失われたことになる。世俗部門がその司法権限に関与できるのは、従順にその判決を執行するときだけだった。

このような仕組みは、必然的に非情で恐ろしい結果を生むことになる。無辜の人の俗世の幸せのいつさ  
いが、人生そのものが、恥ずべき輩の手にゆだねられていたのだ。ひそかに敵意を抱く者、人をねたむ者  
すべての前に今や、知られずに確実な復讐を遂げる危険な誘惑があった。財産の安全、交際の誠といった  
ものはやなかった。あらゆる利害のきずなが解消され、血縁や愛情のきずなさえも癒やしようもない  
傷を受けた。不信は伝染し、社会生活を毒した。密告者の存在のため、何かを見たといつては飛び上がり、  
何かを言おうとしては口ごもった。誰も誠実な人間がいるなどと思わず、また自分もそうとは思われな  
った。名声、郷里の結びつき、同胞愛、宣誓といった人が神聖と思うものすべての価値が失墜した。

十万の勤勉な人が互いの信頼という一つのきずなでまとめられた偉大で繁栄する商業都市は、今このよ  
うな運命のもとにおかれているのだった。誰もがその隣人にとって必要とされるはずが、誰もが不信を抱  
き、抱かれる。利益の精神によって集まりつつ、不安によって互いを退ける。連帯があらゆる生活とあら  
ゆる生存の基盤である社会において、その柱がことごとくなぎ払われたのであった。



## ネーデルラントの基本体制に対するその他の侵害

### スペイン人兵駐留問題

服従することに慣れたスペイン人の気性でさえ耐えがたかったほど不法な裁判所であつてみれば、これが自由な国民をして反乱へと追いやったことは驚くには値しない。

宗教裁判所によって呼び起こされた恐怖は、平和が回復されたのちも消えずに残り、基本法に反してスペイン軍が国境沿いの都市に守備隊としておかれたことによつて増幅された。カール五世の場合、外国の軍勢の導入は、その必要性が明らかであり、その善意に対する不信感がそれほどでもなかったために問題とはされなかった。しかし、今の場合、駐留を続ける軍隊に人々が見たものは、警戒すべき抑圧の準備と忌むべきカトリック体制の尖兵だけだった。そもそも、国土防衛に申し分ない相当規模の地元民からなる騎兵があるので、こうした外国人は余計なだけだった。それに給金の支払いの遅れたスペイン兵が住民から金を巻き上げるその放恣と略奪熱が人々の怒りに輪をかけ、下々の者を絶望へと追いやった。後日、不満の聲の高まりに應えて政府がスペイン兵を国境都市から遠ざけ、帰国のための船が用意されているゼーラント州の島々に移動させたときにはスペイン兵はその地でも狼藉を繰り返し、スペイン兵の無法のあまり、住民は堤防での仕事を放棄し、狼藉者集団がそれ以上好き勝手な蛮行を続けるのを忍ぶくらいなら国士が海に飲み込まれたほうがましだと言ひ出す始末だった。

フェリペ二世の本心としては、これらスペイン兵をネーデルラントにとどめたいところだった。その存在により勅令に重みを与え、ネーデルラントの基本体制に導入しようとしている改革の力とするためである。フェリペ二世にとつて、軍勢は国民の服従の保証であり、国を捕囚としておくための鎖だった。

ねばり強くこれらの兵の引き上げを求める議会の懇請をかわすため、フェリペ二世はあらゆる手だてを試み、あらゆる欺瞞と説得のすべを尽くした。あるときはフランスからの突如とした侵攻を偽つたが、実

のところ、内部分裂の嵐でフランスは国内の敵に対して身を支えるのもやつの状況だった。またあるときにはネーデルラントの国境地帯を息子ドン・カルロスが訪れると言ったが、実際にはカステリアの外に出すつもりなど毛頭なかったのだった。

兵の維持は国民の負担にはならない。国王自身が全費用をまかなうことになっている。国王がスペイン兵の給与の支払いを遅らせていたのは、兵の出発を遅らせることにまつような理由があるように見せるために意図的にしていたことだった。さもなければ、地元人部隊は完全に支払いを受けていたのだから、それより本国人を厚遇しないはずはなかった。

人々の恐れを静め、高まる不満を抑えるため、フェリペ二世はスペイン兵部隊の最高指揮権を民衆に人氣のある二名の者に提供した。オラニエ公とエフモント伯である。だが二人とも、国法に反する行為に荷担する決心はできないと気高く宣言してこの申し入れを断わった。

☆

国王がスペイン兵をネーデルラントに残したい意向を示せば示すほど、議会は頑固にその撤兵を要求した。ヘントでの次の全国議会では、フェリペ二世はその廷臣たちのただなかで、共和主義の現実を聞かされることになった。ヘントの法律顧問が言った。

「我々の防衛になぜ外国人の手が必要なのでしょう。我々自身では身を守ることもできないほど愚かで、臆病だと思われるのでありましようか。今なお戦争の重荷の重圧を受け続けるのであれば、何のために講和を結んだのでありましようか。

戦時にあつては必要から耐えることもできました。だが平時ではその重圧に忍耐も限界です。それに、陛下自身が滞在していても統率できないこれら放埒の徒を我々が御することができでありましようか。こちらではカンブレーやアントワープが救済を求め、あちらではティヨンヴィルやマリエンブルクが荒らされる。我々の都市を砂漠と化すために平和をお与えになったのではありますまい。しかし、これら破壊

者から解放していただければそうなるのは目に見えています。

おそらく陛下は隣国からの奇襲攻撃への備えを気づかわれているのでしょうか。用心は賢明なことですが、敵が行動を起こすなら、その軍備の報がずつと先に届くことでしょう。どうしてわざわざ外国人を――明日には去る国に愛着などもたない者たちを雇うために重い負担までするのでしょうか。

今以上に困難な時代に陛下の父君が共和国をゆだねたその同じ勇敢なネーデルラント人を、陛下は今でも指揮下に有しているではありませんか。何世紀もの間陛下の父祖に対して変わることなく抱き続けてきたその忠誠心を、なぜ今お疑いになるのでしょうか。ネーデルラント人が戦線を支えている間に、陛下の同盟国がその旗のもとに合流すれば、あるいは陛下ご自身が近隣諸州から援軍をお送りになれば、十分間に合うのではないのでしょうか」

このようなトーンはフェリペ二世にとって全く新しいもので、またその真実も否定しようもなかったのだ、フェリペ二世はただちに返答することができなかった。ややあつて国王はようやく声を大にして言った。

「私自身も外国人だ。さぞやこの私も追い出したいことだろう！」

それと同時に玉座を下り、議場をあとにした。発言者はその大胆さについては免じられた。

二日後、フェリペ二世は議会にメッセージュを送ってきた。スペイン兵が住民の重荷になっていることをもっと早く知っていれば帰国する国王とともにスペインに向かって出発できるようただちに用意を整えていたというのだ。未払いのまま出発することはできないので今となつては手遅れだが、この重荷は四か月以上は続かないと神聖な誓いを立てた。ただし、この誓いにもかかわらず、スペイン兵はこの地に四か月ではなく十八か月もとどまることになる。それも、国家の急によりその兵が世界の他の部分で必要とならなければもっと先送りにされていたことだろう。

## 外国人登用問題

外国人を法に反して国の要職につけたことも政府に対する不満のさらなるきっかけとなった。スペイン人にとって、諸州の特権のうち外国人排除ほど目障りなものではなく、その廃止に何よりも熱を傾けたのである。

イタリア、東西インド、そして広大な帝国のあらゆる属州は、スペイン人たちの欲望と野心の対象だったが、そのなかでも最も豊かな属州では、厳然たる基本法によってスペイン人は排除されていた。そこでスペイン人は、手足となる外国人を登用できない限り、ネーデルラントにおける王権は確固としたものとはならないと君主を説き伏せたのだった。

すでにブルゴニユ生まれのアラス司教が不法にフランドル人に押しつけられていた。そして今、カステイリア人のフェリア伯が国務評議会における議席と発言権を与えられようとしている。だが、この試みは、国王にへつらう家臣たちが国王に信じさせた以上に大胆な抵抗に遭うことになる。

このたびフェリペ二世の全能性をくじくことになるのは、オラニエ公ウイレムのぬかりない対応と議会の強固な抵抗だった。

## オラニエ公ウイレムとエフモント伯

### 全州総督（執政）の座

こうしてフェリペ二世はネーデルラントにおける統治方針を予告した。それが人々の不満を呼ぶなか、国王自身はこの地を去ろうとしていた。フェリペ二世はネーデルラントでは外国人ではない。自分の性向に反するものがあまりに多く、その専制的な精神の前に自由の法が断固として立ちはだかるこの地を去ることを、長いこと待ちきれない思いでいた。

カトー・カンブレジ条約によるフランスとの講和によって、ようやくこれ以上の潜在が不要となっていた。スレイマンのトルコ軍が迫る南方で国王の存在が必要でもあった。スペイン国民も長く不在の国王の帰還を望むようになっていた。

フェリペ二世の出発を遅らせていたのは、主として、ネーデルラントを治める一人の全州総督執政の選任問題だった。ハンガリー女王にしてカール五世の妹のマリアの辞任（「五五」以来、サヴォイ公エマヌエーレ・フィリベルトがこの地位を占めていたが、国王自身の滞在中はその職務は実権はなく、名誉職のようなものだった。国王がネーデルラントから去るとなれば、総督職は王国内でも最も重要なもの、臣下の野心にとって最も輝かしい目標となる。カトー・カンブレジの和で所領を回復されたサヴォイ公が去って、今その総督職は再び空位になっていた。

全州総督にゆだねられる無制限ともいえる権限、広汎で微妙な政治手腕を要する職責に求められる器量と経験、この地方の自由に対して政府が温めており、総督が執行することになる企図——どれをとっても選択を難しくする要因だった。

外国人を官職から除外する法律も全州総督だけは例外としていた。同時に全州の地元民ではありえないわけだから、そのいずれにも属さないことも許された。ブラバント人の猜疑心にとって、州境からほんの

半マイル先のフランドル人に権限をゆだねるくらいなら、異なる天地に住むシチリア人として同じことだった。だが、今の場合、王室の利害からしてもネーデルラント人の任命が好都合と思われた。全く何でもないことにまで監視の目を光らせる地元の不信感を克服しようと外国人総督が苦闘している間に、同郷人から全幅の信頼を得ていたとえばブラバント人の反逆者はその企みの半分も成し遂げてしまうだろう。政府がある州でその意図を実現するのに成功すれば、他の州の反対は不遜な行為となり、最も過酷な手段をもって懲罰することが正当化できる。諸州が形成するに至った連合体全体の中で、個々の州の体制はいわば消滅していた。一州の服従は全体の法となり、ある州が守れないものは他の州にとっても失われたものとなるのである。

フランドルの貴族で全州総督の座を望みうる者としては、国民の期待と願望はエフモント伯とオラニエ公に二分されていた。高貴な生まれと個人的な資質、そして等しく民衆に人気があることからしても、両者いずれもこの名誉を受ける資格があった。生まれの高さから兩人とも国王には近く、君主の選択が実力本位で行なわれるならば、この二人のいずれかになることは確実だった。我々の歴史を叙述するにあたり、この兩人の名に触れる機会も多くなるので、ここで二人の人となりについて読者に紹介しておくのも早すぎることはないだろう。

## オラニエ公

オラニエ公ウイレム一世はドイツ諸侯の一であるナッサウ家の出である。ナッサウ家はすでに八世紀の間栄えており、長らくオーストリアと覇を争っており、ドイツ皇帝も一名輩出している。ネーデルラントにかなりの所領をもっている関係でこの共和国の市民であり、スペイン王室の封臣でもあるわけだが、オラニエ公はそのほかにフランス南部に独立した公領であるオランジュを有していた。

ウイレムは一五三三年にナッサウ伯領のディレンブルクでシュトルベルク伯家の妃を母として生まれ

た。同名の父ナツサウ伯はプロテスタントに帰依し、息子にも新教の教育を受けさせた。しかし、早くにこの少年が気に入ったカール五世は、まだ年端もいかぬうちから宮廷に出仕させ、カトリックの教えのもとに育てた。皇帝はこの子供にすでに将来の大事を見きわめ、九年間身近において、手間を惜しまず統治のすべを教え、年に不相応なまでの信頼を寄せるという名誉をたまわった。皇帝が外国大使を引見する際にはウイレムだけがそばに残ることを許された（少年ながらすでに沈黙公の名に値する資質を示しはじめていたことの証左である）。あるときには、皇帝は、この少年がしばしば自分でも思いつかないような提案をすると並みいる人の前で認めることさえやぶさかではなかった。このような環境できたえられた人物となれば、その精神に対する期待もふくらもうというものだ。

カール五世が退位したとき、ウイレムは二十三歳だったが、すでに皇帝のこの上ない尊重の印を公の形で二つも受けている。皇帝は宮廷に居並ぶ貴顕をさしおいてウイレムに弟フェルディナントに譲る帝冠を届ける名誉ある務めを託した。ネーデルラントにおける皇帝軍を指揮していたサヴォイ公が自家の事情で帰国しなければならなかったとき、皇帝はウイレムを総司令官に任命したが、それは幕僚たちの一致した反対を押してのことだった。幕僚たちはフランスの手練れの將軍たちを前にしてこのような軍事の初心者立ち向かわせるのは危険この上ないと反対したのである。ウイレム本人は現場にもいず、推す人もないながら、主君は栄冠を戴く英雄たちをさしおいてウイレムを選んだ。結果はこの選択を悔いいるいかなる理由も残さなかった。

オラニエ公が父帝から受けた際立った寵は、それだけで息子の信から遠ざける理由となった。どうもフエリペ二世は、カール五世がことあるごとにフランドル貴族を立てたことでスペイン貴族が抱いていた不満を晴らすことを己の使命としていたらしいふしがある。だが、フエリペ二世がオラニエ公を敬遠したのには、秘められた別の、より強い動機があった。オラニエ公ウイレムは、カエサルという「夜は眠らず、考えすぎる」たちのやせて青白い男で、その前では最も恐れを知らない精神でさえもたじろがずにはいら

れないのだった。

顔色一つ変えない落ち着き払ったその態度の背後には、熱烈で活動的な精神があった。その動きはそれを覆うペールを微動だにさせることなく、奸計によっても親愛によっても見通すことができなかった。多面的かつ創意に富み、疲れを知らぬ精神は、どんな場面でもただちに適応しうる柔軟性を兼ね備え、何事にも己を失わない用心を怠らず、運命のあらゆる変転に耐えるほど強固なものだった。

ウイレムほど人の心を読み、その心をつかむすべに長けた者はなかった。とはいえ宮廷人のようにその口から追従をもらすのではない。ウイレムの誇りは心にもないことを言うことを許さなかった。ウイレムの場合、人に対する友好と尊敬のしるしを出し惜しみするでもなく、安売りするでもなく、人をつなぎ止めるその巧みなさじ加減によって確実に人脈を築いていた。

ゆつくりと実をつけただけにその瞑想の果実は申し分なかった。遅くなつて熟しただけにその決意は毅然としてゆるぐことなく進んだ。ひとたび最善だと判断して採用した計画は、いかなる障害もあきらめさせることができなかった。いかなる事態でもくじくことができなかった。そうしたことはみな実際に起こる前に織り込み済みだったのである。ウイレムの心は恐怖や驚喜といったものを超えた高みにあったが、心配の影響下にはあった。だがその心配は危難が起こる前のことだった。平時におののいたぶん、争乱にあつては落ち着いていた。

ウイレムは黄金は惜しみなく使つたが、時間は惜しんだ。休息といえば食事の時くらいなものだったが、その時間は自分の心、家族、友人だけのためにとつておいた、国務から解き放たれるささやかなひとときだった。ここではくつろいだ気分と節度にぶどう酒が加わって、その顔は晴れやかになった。この楽しみの席に難しい心配事はお呼びではなかった。

オラニエ公の所帯は豪勢だった。きらびやかな数多くの使用人、公をとりまく貴人の数々のため、オラニエ公の住居はさながら君主の宮廷のようだった。煽動政治家の常套手段であるふんだんなもてなしがそ



の宮殿の女神だった。外国の諸侯や大使はここに来ればふさわしい饗応を受けることができたが、それはさしもの豊かなネーデルラントといえども、ほかでは不可能なことだった。これだけ羽振りがいいと公の意図が非難されたり勘ぐられたりするものだが、政府に対するつましやかな従順のためそれもなかった。この気前よさのため、公の人氣は高かった。民衆は、自分たちの国の豊かさを見た外国人が賛嘆するのを見るほどうれしいことはないのである。公が権勢の絶頂にあるだけに、その腰の低さはそれだけ気高いものとなった。

おそらくは、ウイレム沈黙公ほど陰謀の首謀者としてふさわしい性格の者はなかっただろう。過去、現在、未来を見通す確かで鋭い眼力、あらゆる好機を逃さない器量、人心に対する絶大な影響力、離れて見て初めてその形や調和が見えてくるほどのとてもない計画、そして未来の長い鎖のうちにつむがれていく大胆な計算——こうしたすべてが一つの自由にして啓発された徳のもとに統御されている。そしてそれは深淵の縁であつても確かな足取りで歩むのである。

☆

このような人物は同時代の誰にもその心の底を見抜かれることなく終わったかもしれないが、人心を熟知した人物、その世紀で最も疑り深い人物相手ではそうはいかなかった。フェリペ二世はこの一見従順に見える裏にある自分自身と最もよく似た人格を、たちまちにして深く見抜いていた。国王がオラニエ公の内心を見透かしたのでなければ、国王自身が最も高く尊重し、最も高く評価する性質をほとんど兼ね備えているこの人物に対する不信任は説明しようがない。

だが、ウイレムにはもう一つ、フェリペ二世とのより重要な接点があつた。同じ師から政治の手ほどきを受け、学識ではフェリペ二世より勝っていたことが恐れられたのである。マキアヴェリィの『君主論』を糧としたというのではない。その書を実践に還元した君主カール五世の生の指導を受けることによって、オラニエ公は王朝の興亡をも支配する危険な技法に通じることになったのだ。フェリペ二世が対処し

なければならぬ。オラニエ公という敵手は、国王の政策に対して理論武装しており、大義によって悪の力でさえも思いのままに利用できる。この最後の事情こそが、フェリペ二世がなぜ同時代の他の何人にも増してこの人物を不倶戴天の敵として憎み、不自然なほどに恐れていたかが説明できる。

すでにオラニエ公に向けられていた疑いは、その宗教上の性向についての疑惑によって増幅された。オラニエ公の保護者であった皇帝の存命中はウイレムもローマ教皇を信奉していた。だが、子供のころにその心に植え付けられた新教に対する嗜好は完全に消え去ってはいないのではないかと危惧された。

人生のある時期にオラニエ公がどの教会を支持しようとも、他の会派もオラニエ公が一つの教会に完全に固執することはないと考えて慰めを見出すことができた。少年のころルター派を捨ててカトリックになったのと同じように、ウイレムは後年、何のともなくカルヴァン派に走っている。スペインの専制に對してオラニエ公が守ったのはプロテスタントの信条ではなく、その人権だった。オラニエ公をプロテスタントの同胞としたのはその信仰ではなく、その苦難だった。

# ☆

漠然としたオラニエ公への疑惑を裏づけるようなできごとがあった。偶然からオラニエ公の真意が露見したのである。

ウイレム自身も締結に貢献したカトー・カンブレジの講和のち、ウイレムは人質としてフランスに留まっていた。ウイレムがスペイン国王の信を得た側近だと思つたアンリ二世が不用意にもらした言葉から、ウイレムは、フランスとスペインの宮廷が両国のプロテスタントに対して温めている秘密の計画を知ってしまった。「この際、アンリ二世の前で驚いたようなことを何も言わずに平然としていたことから「沈黙公」の異名を取るようになった。」

ウイレムは急いでその情報をことが大いに関係するブリュッセルの友人に伝えようとしたが、不運にもこの件に関するやりとりの手紙がスペイン国王の手に落ちてしまった。フェリペはウイレムの真情を暴露

するこの決定的証拠に驚きはせず、計画の破綻を憤っただけだった。

そして最も偉大な皇帝がその治世最後の退位式典の場にこの青年の肩に身を預けて登場したときのことを許していないスペイン貴族たちは、この好機を逃しはしなかった。国家機密の漏洩は国王の寵からの追放を決定づけるに十分なものであった。

## エフモント伯

家柄の面からはオラニエ公に優るとも劣らぬエフモント伯ラモラールはハーヴェレ公であり、尚武の伝統でオーストリアの軍勢を疲弊させた歴代ヘルレ公爵の末裔でもあった。その家系はこの地方の歴史では傑出していた。その父祖の一はマクシミリアン帝のもとでホラント州の総督も務めている。バイエルン公家のザビーナ（プファルツ選帝侯の娘）を妻としたこともやんごとない生まれにまた一つ光輝を加えることになった。

一五四六年、カール五世はユトレヒトでエフモント伯に金羊毛騎士団章を授与した。皇帝の度重なる戦争が伯の軍事的な天分を開花させ、サンカンタンの戦い（一五五七）、グラヴリーヌの戦い（一五五八）は伯を時代の英雄とした。商業国民にとって何よりもありがたい平和の恵みがあるたびに、その到来を加速させた勝利のことが思い起こされた。

フランドル人の誇りは、我が子を溺愛する母親のように、ヨーロッパじゅうを賛嘆させた栄光ある祖国の子に驚喜した。伯の九人の子がネーデルラントの人々に見守られて育ったことも、伯と祖国の間のきずなを強め、父に対して人々が抱く感謝のこもった愛情は、伯の最愛の子らの姿によって新たにされた。公の場へのエフモント伯の登場は常に凱旋行進となった。その姿を見つめる目の一つ一つがその経歴を思い起こし、その事跡は戦友の賞賛のうちに生き続けた。騎士の祭典では母親たちはエフモント伯を指さして子に教えるのだった。

愛想のよき、高貴で礼儀正しい立ち居ふるまい、立派な騎士道精神がその美点を飾っていた。その表情には伯の自由な心が現われていた。腹藏なさによつて秘密を管理するそのやり方は、慈悲によつて所領を管理するのに劣らず有効だった。伯の頭に浮かんだことは、たちまちにして周知のこととなるのだった。

エフモント伯の宗教観は穏健で人道的だったが、理性ではなく心から導きを得たものであり、開明的というものではなかった。エフモント伯は信念というよりは良心の人だった。その規範は頭脳によつて与えられたものではなく、単に覚え込んだだけだった。そのため、ある行動の名だけで、その行動を難ずることがあった。その判断基準にあつては、人は悪か善のいずれかであり、悪い点があるとかよい点があるというものではない。この倫理体系においては邪と徳の交換はありえない。その結果、一つの美点だけで人を判断することがあった。

☆

エフモント伯は英雄を形づくるあらゆる資質を兼ね備えていた。オラニエ公よりも軍人としては優秀だったが、政治家としては遠く及ばなかった。オラニエ公が世界をありのままに見据えたのに対し、エフモント伯は何にでも想像の粉飾を与えてしまう魔法の鏡に映して見ていた。思いがけず幸運に恵まれ、自らの行動にその当然の理由を見出すことのできない者は、原因と結果との間の必然的なつながりを忘れがちで、物事の自然な帰結に、より高い奇跡の力を読み込んでしまう。そして、カエサルが運に任せたとように、ついには向こう見ずなまでに奇跡の力をたのむようになるのである。エフモント伯もそのような人物の一人だった。人々の感謝が大げさにもはやす自らの功績に酔つて、その心地よい感覚の中を甘美な夢の世界にあるかのように浮ついた足取りで歩んでいるのである。

エフモント伯は何物も恐れなかった。民衆こそつての愛情という形で運命が与えた気まぐれな好意を信頼していたからである。伯は正義を信じていた。自分が幸運だったからである。スペイン人の背信によりこの上なく恐ろしい経験を味わつてからでさえ、伯の心から樂觀を消し去ることはできなかった。処刑台

の上でさえ、その最後の思いは希望だった。家族への気づかいから、その愛国の闘志は公僕としての小さな義務に縛られがちだった。領地や生命の安全を気づかされたため、共和国のために大きな賭けに出ることはできなかった。

オラニエ公ウイレムは専制権力がその自尊心を傷つけたために国王とたもとを分かった。エフモント伯は虚栄心のため君寵を重んじた。オラニエ公が世界市民だったのに対し、エフモント伯はフランドル人以上のものにはならなかったのである。

フェリペ二世は今なおサンカンタンの英雄には恩義があり、そのような功績に報いるにふさわしい恩賞はネーデルラント全州総督の地位だけのように思われた。生まれも声望も、民の声も本人の実力も、オラニエ公だけでなくエフモント伯をも高らかに推していた。オラニエ公でないとすれば、エフモント伯以外の選択肢はないはずだった。

### 第三の候補

実力的にこれほど拮抗している候補者を前にその一人を任命することを真剣に考えるとすれば、フェリペ二世にとってかなりの難問となったことだろう。しかし、この職への適性を示す傑出した資質自体が兩名を除外する理由となった。国民が熱烈に兩名の選出を望んでいたことこそが、二人の拝命の可能性を無にすることを決定づけたのである。

フェリペ二世の目的のためには、ネーデルラントの民衆の好意と熱意を思いのままにできる総督では都合が悪かった。エフモント伯がヘルレ公爵家の末裔であることは継承権に関してスペイン王室と競合するということだった。代々の抑圧に対する復讐の刃を抑圧者の息子に向けかねない人物の手に大権をゆだねるのは賢明ではなかった。民衆のお気に入りを入りをないがしろにする形になっても、民や本人に不満の口実を与えないようににはできる。一方だけ厚遇することができないため、兩人に忍んでもらったとすればいいの

である。

執政位を獲得する希望がついてても、オラニエ公はネーデルラントにおける自らの影響力を固めていく希望を捨てはしなかった。この職務の他の候補者としては、ロレーヌ公太妃で国王の「義理の」叔母であるクリステイーナがいた。カトー・カンブレジの和の調停役として重要な役割を果たした人物である。オラニエ公はその娘との結婚を狙っており、その交渉を進めるためにも母親の執政選任のために積極的だった。だが、自分の介入がロレーヌ公太妃の不利になるとは思い至らなかった。クリステイーナは却下された。表向きの理由は公太妃の所領がフランスの属領であり、スペイン宮廷の疑心を招きかねないということだったが、より実状に近いのは、ネーデルラントの民、そしてオラニエ公ウイレムにとって望ましかったということだった。

## パルマ公妃マルガレーテのネーデルラント執政就任

### パルマ公妃マルガレーテ

ネーデルラント諸州の命運が今後誰の手に託されるかについて一般の期待がいまだ張りつめるなか、この地にやってきたのがパルマ公妃マルガレーテだった。施政を預かるべく、国王にイタリアから召し出されたのである。

マルガレーテはカール五世がフランドルの貴族の女性ファン・ヘーストとの間になした庶子で「フェリペ二世には異母姉になる」、一五二二年の生まれだった。

母親の一族の名誉に配慮して当初は人知れず教育を施されたが、母親は名誉より虚栄心が優る人物で、その出生の秘密を守ることにはあまり頓着しなかった。そして王族なみの教育によつて皇帝の落胤であることが知られるようになった。まだ子供のころ、大叔母であるサヴォイ公妃の執政マルガレーテに託され、その監督のもとでブリュッセルで育てられた。八歳の時にこの保護者を失い、その教育は執政職を引き継いだハンガリー女王マリアの務めとなった。

父は娘がまだ四歳のころすでにフェラーラ公子に婚約させていた。しかし、この契約はのちに解消され、新たにフィレンツェ公となったアレックスサンドロ・ディ・メディチと婚約し、その結婚は皇帝がアフリカ戦役から凱旋したのちナポリで実現した。この不幸な婚姻の一年目にして、マルガレーテを愛することができなかった夫は非業の死を迎えた。そして三たび、マルガレーテは父親の政策に従つて嫁ぎ先を決められた。十三歳の公子オッタヴィオ・フアルネーゼは教皇パウルス三世の孫であったが、マルガレーテの婚資としてパルマ公国とピアチェンツァ公国を獲得することになった。

こうして奇妙な運命のめぐりあわせから、幼時に男に売られたマルガレーテは長じて少年と婚姻を結ぶことになったのである。女らしさとはかけ離れた気性もこの最後の結婚の不自然さに輪をかけた。マルガ

レーテは嗜好も性癖も男性的で、その行動は生涯を通じて生まれの性に背くものだった。薫陶を受けたハンガリー女王と曾祖母ブルゴーニュ公妃マリー（その死はお気に入り狩りのさなかのことだった）のひそみに倣って狩りには目がなく、それを通じて男性と伍しての狩猟の過酷な運動にも耐え抜く体力を獲得していた。その歩きぶりは優雅さのかけらもなく、男性的な女というよりは女装した男だと思いたくなるほどだった。このように自然をあざ笑うかのように生まれついた性の領分を越えた女に対し、自然は最後にはその復讐を遂げた。痛風という男に固有の病をみまったのである。

こうした一風変わった性質の最たるものが、告解師であり教師であつたイグナティウス・ロヨラによってその頭にそそぎ込まれた修道士まがいの迷信だった。虚栄心を克服するための慈善や悔改ということだったが、そのうち最も著しかったのが、毎年復活祭前の受難週間の習わしである。マルガレーテは自らの手で貧民の足を洗ってやり（対象者は事前に身を清めておくことは厳禁された）、召使いのように食卓で給仕し、豪華な贈り物を持たせて帰したのだった。

マルガレーテの人格のうち、この最後の一点だけで国王が競合者を押しつけて公妃を選んだことを説明するには十分である。それでも、この選択は同時に政治的な事情から理にかなったものといえた。

マルガレーテはネーデルラントで生まれ、教育を受けた。幼いころを人々の間で過ごし、この土地の習俗の多くを身につけていた。その養育を監督した二人の執政（サヴォイ公妃マルガレーテとハンガリー女王マリア）によつて、ネーデルラントの独特な民をうまく統治する金言が教え込まれており、その二人を模範として仰ぐことができた。才覚にも不足はなく、国事にふさわしい格別の感覚も持ち合わせていた。二人の指導者から学び、のちにイタリアの現場で完成の域に達したものである。

ネーデルラントは長年の間女性による統治には慣れていた。フェリペ二世としても、今乗り出そうとしている専制の切っ先は女性の手にゆだねればより抵抗なく行使できると期待したのだろう。当時まだ存命中でこの娘のことを気にかけていた父カール五世への配慮もこの選択に与っていたとも言われている。ま



た、公妃を取り立てることにより、ちょうどそのころ願いを拒まなければならなかったパルマ公に恩を売って埋め合わせをしておきたいという気持ちもあったかもしれない。パルマ公妃の所領はイタリアにおけるフェリペの属領に取り囲まれており、常にその軍勢にさらされていたと言えるので、至上権を公妃にゆだねる危険は比較的少なかった。その安全を確実にするため、公妃の息子アレックスandro・フアルネーゼは国王の宮廷に滞在し、公妃の忠誠の抵当とされることになった（国王と同じ船でスペインに渡る）。

これらの理由はどれ一つとっても国王の決断を公妃に傾けるのに重きをなした。しかし、それはアラス司教とアルバ公爵の支持を得たことで決定的となった。後者はどうやら他の候補者をみな憎むかねたむかしていたらしい。前者は、当時すでに、公妃の優柔不断な性向が大いに好都合であることに目をつけていたものと思われる。

## 国王帰国後の統治体制

フェリペ二世はきらびやかな供回りを連れて国境まで出向いて新任の執政を迎え、盛大な行列を仕立てて全国議会が招集されていたヘントまで案内した。ネーデルラントを去るフェリペ二世としては、当面戻ってくる意向はなかったので、厳粛な全国議会を開催し、これまでの法令に対しより高位の裁可と法としての効力を与えることにより、最後に国民に満足を与えておこうと思ったのである。フェリペ二世がネーデルラント人の前に姿を見せるのはこの時が最後になる。以後、ネーデルラントの運命は神秘的な距離を隔てたところから左右されることになる。

この荘厳な日の威光を増すため、フェリペ二世は金羊毛騎士団に新たに十一名の騎士を叙任した。その際、マルガレーテを隣に座らせ、人々にこの姉が今後の統治者であることを示したのだった。

この全国議会には、勅令、宗教裁判、スペイン兵の在留、税、官職や国政の要職への外国人の不法な登用といったあらゆる不平の聲が持ち寄られ、両陣営の間で熱い議論が戦わされた。あるものは巧みにかわ

され、あるものは見かけ上改善され、また強権的にはねつけられたものもあった。

国王はこの土地の言葉に通じていなかったのも、国民に対してはアラスコ教の口を通じて語りかけた。お手盛りの虚飾を込めてその治世の恩恵を残らず並べ立て、将来にわたって国王の恩寵を確証し、集まった諸身分に対して今一度、この上ない熱を込めてカトリック信仰の護持と異教の根絶とを勧告した。スペイン兵については、兵たちの未払い給金をまかなう資金を調達できるよう、先の戦争の膨大な負担から立ち直る時間を議会が与えてくれさえすれば、数か月のうちにネーデルラントを去らせると約束した。この地の法は侵されざるものであり続け、賦課は過度に重いものとはせず、宗教裁判所は正義と節度をもってその職務にあたるものとした。さらに、全州総督の選択にあたっては特に国民の願いを考慮し、この地に生まれ、この地の風俗習慣のうちに育てられ、母国に対する愛情によってこの地に結ばれている人物を選んだと述べた。その上で、この選択をよしとし、国王自身に対するように姉である公妃に従うことによつてその感謝を示すよう、人々に訴えた。そしてしめくくりとして、予期せぬ障害のためこの地に戻つてくることができない場合には、代わりに王子ドン・カルロスを送つてブリュッセルに滞在させると述べた。

この議会の参列者のうち勇氣ある若干名が良心の自由のために最後の努力を試みた。その議論は、個人に対しその体質に合った扱いをしなければならないのと同様、あらゆる民はその国民性に合った扱いをしなければならないというものだった。たとえば北部では耐えがたい圧迫と感ぜられる一定の制約のもとでも、南部は満足と感ぜられるかもしれないのである。そしてこう付け加えた。スペイン人なら辛抱強く屈従するかもしれないくびきであっても、フランドル人は決して同意せず、そのようなくびきを押しつけようとしてれば、それに服するよりはむしろどんな手段にでも訴えろ。この諫言は国王派からも賛同の声を引き出し、顧問官の一部は宗教上の勅令の厳格さを緩和する政策を強く訴えた。

だがフェリペ二世は意を曲げなかった。その答えは、異教の民を統べるくらいなら王位など捨てたほうがましだというものだった。

カール五世がすでに作り上げた制度に従い、全州総督には三つの評議会もしくは評議院が付属し、国務の遂行を補佐する。フェリペ二世がネーデルラントに滞在している間はこれらの機関の権限はなきに等しく、その第一のもの、国務評議会の活動はほとんど完全に停止していた。今国王がこの地の施政を手放すにあたり、これらの機関は以前の重要性を取り戻すことになった。

戦争や講和、外敵に対する安全保障を審議する国務評議会にはアラス司教、オラニエ公、エフモント伯、枢密評議会議長ヴィグリウス・ヴァン・ザイヘム・ヴァン・アイッタ、そして財務評議会議長ベルレモン伯が名を連ねていた。金羊毛騎士団のすべての騎士、すべての枢密顧問官、財務評議会議員、そしてメヘレンの大評議院（カール五世によってブリュッセルの枢密評議会の下に置かれていた）のすべての議員は、執政によって明示的に招聘された場合には国務評議会に議席と投票権を有した。国王の歳入や所領の管理は財務評議会にゆだねられ、枢密評議会は司法の執行、全国の文政を担当し、恩赦状や免許状の発行を行なった。

各州で空席になった総督位には新たに任命されたり、前職が確認されたりした。各州を与えられた総督は、フランドル、アルトワはエフモント伯、ホラント、ゼーラント、ユトレヒト、西フリースラントはオラニエ公、東フリースラント、オーヴァーアイセル、フロニンゲン、アーレンベルク伯、ルクセンブルクはマンスフェルト伯、ナミュールはベルレモン伯、エノー、カトー・カンブレジ、ヴァランシエンヌはベルヘン侯、トゥルネーとその付属領はモンテニー男爵となった。他の州を担当したのは比較的小者である。ヘルダーラントとズトフェンの総督位をメーヘン伯に譲らされたホルネ伯フィリップ・ド・モンモランシーは、ネーデルラント海軍の提督職は確認された。

それぞれの州総督は同時に金羊毛騎士団の騎士でもあり、国務評議会の議員でもあった。みな担当する州においてはそれを防衛する軍の指揮権および文政と司法の監督権を有していたが、フランドルの総督だけは司法への介入が許されていなかった。また、ブラバントだけは、慣例上その首都ブリュッセルに居る

構える執政の直接管轄下におかれた。

オラニエ公は外国人であるから、その総督位は厳密に言えばこの地の基本法に反することになる。しかし、諸州のうちに公自身が有していたり息子の後見人として管理していたりする所領があることや、長くネーデルラントに住んでいること、そして何よりも国民が公に対して抱く限らない信頼感のため、実際に市民権はないながらも資格は十分にあるのだった。

ネーデルラントの国民的兵力は定員いっぱいとして騎兵三〇〇〇であるが、実状は二〇〇〇あまりといったところだった。これが十四個中隊に分けられ、各州の総督のほか、アールスホット公爵、ホーフストラーテン伯、ボシュ伯、ルール伯、ブレードローデが最高指揮権を有していた。

十七州全体に分散しているこの騎兵が総動員されるのは緊急事態のときのみである。大きな作戦にはいかにも不十分だが、それでも国内の秩序維持には十分だった。その勇気はこれまでの戦争で立証済みであり、その武勇の名声はヨーロッパじゅうに轟いていた。この騎兵に加えて歩兵隊の徵募も提案されていたが、これまでのところ諸州は承認を拒んでいた。

外国人兵については、支払いを待っている若干のドイツ人連隊がまだ軍務についていた。幾多の不満の種になっていたかのスペイン兵四〇〇〇はスペインの將軍メンドーサとロメロの指揮下にあり、国境沿いの都市の守備任務にっていた。

### フエリペ二世とオラニエ公ウイレムの確執

これらの新たな任命によって国王が取り立てて恩顧を示したネーデルラント貴族のうちでも、エフモント伯とオラニエ公ウイレムの名が傑出していた。両名、特に後者に対する憎しみがいかに根深いものであるろうとも、フエリペ二世は公にはこうして二人に君寵のしるしを与えたのである。報復の機はいまだ熟さず、民衆のこの二人に対する愛着は熱烈だった。両名の所領は税を免じられ、最も実入りの多い総督職が

託され、そしてこの地に残されたスペイン兵の指揮を任せたことで、国王は兩名に心にもない信を示して持ち上げて見せたのだ。

だが、こうして公式にはオラニエ公に尊重の証を示しているまさにそのときに、個人的には最も応える仕打ちをしてのけた。強大なロレーヌ公家と結びつけばこの不審な封臣がこれまで以上に大胆な行動に出るのではないかと恐れから、オラニエ公とロレーヌ公家の公女との結婚交渉を妨害し、まさにその成就の前夜に公の希望をうち砕いたのである。この痛手について、オラニエ公は生涯恨みを忘れなかった。

オラニエ公に対する憎しみのあまり、国王はある時、天性である無表情の仮面を捨て、あのフェリペ二世とは思えないような行動に出た。ネーデルラントを去る国王がフリシンゲンで乗船するにあたり、岸でネーデルラントの有力者たちに取り囲まれていたときのことである。フェリペ二世は我を忘れてオラニエ公に詰め寄り、フランドルの争乱のもとになった張本人だと難詰したのである。オラニエ公は抑えた口調で、起こったことはみな諸州が自らの意思により、それも正当至極な動機に基づいてなされたものにほかならないと答えた。するとフェリペ二世はオラニエ公の手をつかんで荒々しく振りながら言った。「違う。

州などではない。貴様だ！貴様！」オラニエ公はあつけにとられて黙っていたが、国王の乗船まで待たずに道中無事の挨拶を告げると町に戻った。

ウイレムが長年胸に抱いてきた自由な民の抑圧者に対する敵意は、今や個人的な憎しみも加わってなだめがたいものとなった。この二重の動機が、スペインの王冠からその七つの最も輝かしい宝石を奪い去ることになる大業を押し進めるのである。

## フェリペ二世の出版 (1559)

フェリペ二世はネーデルラントを去るにあたって、常になく寛大な態度を示した。法に則った全国議会を開催し、国境都市からスペイン兵を退去させる約束を与え、民の要望に応えてこの地の要職に民のお気

に入りを登用した。そして最後に、この地の基本法に譲歩してスペイン人のフェリア伯を国務評議会に入れるのをあきらめるといふ犠牲を払った。こうしたすべてはフェリペ二世の思いやりであつたが、そのような寛厚は王が二度と犯すことのないものだった。

実のところ、フェリペ二世はこの時ほど諸州の支持を必要としていたことはなかった。諸州の協力を得て、これまでの戦争でネーデルラント政府に残っている負債の重みをできるところだけでも清算していきたいところだった。小さな犠牲によつて恩を売ること、大規模な収奪の許可を勝ち得ようとしていたのである。

フェリペ二世がネーデルラントからの出立を好意で飾つたのは、信頼できる手に託していくからにほかならなかつた。この不幸な民のために企図されている恐ろしい処刑の惨状が国王陛下の威光に汚点をつけることはあつてはならなかつた。国王の威光は神と同じく慈悲によつてのみその足跡を記すものだ。恐怖の悪名はその代理人がかぶればいいのだった。

しかしながら、国務評議会の設立はネーデルラント貴族に実権を与えるためというよりはその虚栄心をくすぐるためのものだった。史家ストラーダ（執政マルガレーテに関する情報をその原文書から収集している）はスペイン政府から執政に与えられた極秘指令の数か条を書き残してくれている。

中でも目を引くのは、評議会が派閥割れした場合、あるいはもつと悪いことに開催前に私的な談合で示し合わせがなされている兆候が見られた場合には、すべての評議会を停会にし、問題の案件についてはより少数数の委員会で専断的のことを運ぶべしというものである。諮問会と呼ばれたこの少数数委員会にはアラス司教、議長ヴィグリウス、ベルレモン伯が名を連ねた。執政はまた、即断を要する緊急事態の際にも同様にするものとされた。

このような取り決めも専制政府の所業でさえなかつたなら、理にかなつた方針として正当化され、共和主義的な自由のもとでさえ容認されたかもしれない。大集会では、多くの個人の利害や情熱がぶつかりあ

い、弁士が大勢の傍聴人の存在を意識しがちで、しばしば党派の間で節度を越えた非難合戦にもなる。そのような環境では冷静に審議を尽くして議決することができないことも、少数数の会であれば構成員を適切に選ぶことでことは簡単になる。それに、人数が多くなると、聡明な知性よりも愚昧の衆が多くなることは必至である。そうなれば、投票権は平等であるから多数決ではしばしば無知蒙昧が勝利を収めるのである。

執政が実行すべきとされた第二の方針は、ある法令に反対投票をした評議会議員にその執行に当たらせるべしというものである。反対議員が先頭に立ってそれを推進すれば、あたかもその最も熱心な推進者であつたかのように見える。そうすることによつて民衆からそのような法の発案者を覆い隠すばかりでなく、議員間の個人的な口論を抑制し、投票結果をより自由にするのできるのである。

こうした予防措置を講じながらも、國務評議会での大きな発言力と諸州の服従が疑惑貴族の手にある限り、ネーデルラントを去るフェリペ二世の心は穏やかではいらなかったに違いない。この方面からの危険を和らげ、同時に執政の忠誠を確かなものとするため、執政、そしてその管轄下のすべてをアラス司教グランヴェルの監督下においた。この人物なら国王としても、油断ならない陰謀団に対する重しとするに十分だった。執政は、国王陛下からの絶対的な託宣を仰ぐようにこの人物の指示を仰がねばならない。この人物を通じて、執政の統治には厳しい監督の目が光ることになる。人間不信のフェリペ二世も、同時代の生身の人間のうちグランヴェルだけは例外としていたらしい。この人物がブリュッセルにいる限り、フェリペ二世はセゴビアの王宮で枕を高くして眠れるのだった。

一五五九年九月、フェリペ二世はネーデルラントをあとにした。ビスケー湾のラレードにたどりついた直後に嵐にみまわれて船団は沈んだが、国王は上陸したあとで、スペインは王を失わずにすんだ。すなおには喜びがたい状況ながら、国王は救いの神に感謝しておぞましい誓いを立てた。

ネーデルラントの危険な舵取りは神父と女の手にゆだねられ、小心な専制君主はマドリードの礼拝室に

こもって人々の誓願、不平、悪罵から身を隠すこととなったのである。



## 第二部

### フエリペ二世の即位と圧政の強化

## グランヴェル枢機卿

### グランヴェルの生い立ち

グランヴェル枢機卿の名で同時代人の憎悪を一身に集め、その名を不滅のものとしたアラス司教アントワーヌ・ペルノー（のちメヘレンおよびネーデルラント全域を管轄とする大司教）は、一五一七年にブルゴーニュのブザンソンに生まれた。

父ニコラ・ペルノーは鍛冶屋の息子だったが、実力で当時ネーデルラントの執政だったサヴォイ公妃マルガレーテの個人秘書にまで上りつめた人物だった。この職にあつてカール五世にその実務能力を認められ、皇帝に仕えていくつかの重要な交渉にも関わった。二十年間、皇帝の執務室で働き、枢密顧問官、国璽尚書を歴任してこの君主のあらゆる国家機密に通じ、一財産を作り上げた。

その名誉、権勢、政治手腕は息子アントワーヌ・ペルノーに受け継がれた。この息子は、のちに輝かしい経歴を開くことになるその才能を早くから示していた。アントワーヌは生まれもって豊富にさずかった才能をいくつかの大学で伸ばし、天分と教育いずれの点でも父親に優る人物となった。

まもなく、他者の力で得た有利な地位を自分の力だけで維持する力量があることを示す機会に恵まれた。皇帝の全権としてトリエント公会議に派遣されたときは二十四歳だったが、その地ではのちに二代の国王に対する強大な権勢を許すことになる能弁の最初の片鱗を見せたのである。

カール五世はいくつかの困難な使節任務にアントワーヌを起用し、アントワーヌは主君の期待に違わぬはたらきをして見せた。皇帝は、退位して息子にその王権を譲る際、その行使を助ける宰相を添えることでこの貴重な贈り物を完璧なものとした。

新たな経歴についたグランヴェルは、たちまちその政治的才覚のさを發揮した。あのような父帝の尊重からこのような息子のお気に入りへと見事に転身して見せたのである。

そしてまもなくグランヴェルは君寵に値することを立証した。一五五八年にロレーヌ公太妃を仲介役としてペロンヌで行なわれていたフランス、スペイン使節間の秘密交渉の席で、ロレーヌ枢機卿と共同してプロテスタントに対する陰謀を計画したのである。のちにやはりグランヴェルが関わったカトー・カンブレジの和平交渉の場に持ち込まれて練り上げられたもののオラニエ公に暴露されたあの陰謀である。

深い洞察力と理解力を兼ね備えた知性、込み入った大事をいともたやすく成し遂げるたぐいまれな手腕、そして広汎な学識とが、この人物のうちではねばり強い根気およびたゆまぬ努力と見事な一体をなしていた。一方、その進取の才覚は慎重な規則性と結びついていた。昼夜を問わず、睡眠や食事の時間も惜しんで国務に精を出すグランヴェルの姿があった。最重要事項にも些細な事柄にも等しく注意を払い、それぞれしかるべき重さをもって扱った。七つの言語を操ると言われるグランヴェルが五人の秘書に同時に異なる言語で口述筆記をさせることもしばしばだった。その洞察力によってゆつくりと形づくられたアイディアはその口から出ることのできる優雅な説得力をもち、その確かな能弁によって語られた真実は抗いがたく聞く者をとりこにした。多くの人が縛られる煩惱もその心を惑わすことはできず、その清廉はゆるぎないものだった。

賛嘆すべき炯眼によって主君の心のうちを見通し、その顔つきから思考の隅々まで読みとることができ。あたかも陰がさすのを見て近づく者を見きわめるかのように。術策に富む手腕をひっさげて国王の怠惰な頭脳の助けとなり、主君のおおまかな考えがまだその口から出ないうちに完全な計画に仕上げ、思いついた名誉は気前よく相手のものとさせる。

グランヴェルは自らの才能をひけらかさず、その才分が他者に従属しているかのように見せかけるといふ困難だが重要なすべを理解していた。自らの影響力を隠しつつ、主導権を握ったのである。そうすることではかフェリペ二世を動かすことはできなかった。表立つことなく実権を握ることで満足し、小人物が第一の目標としがちな新たな権力の象徴を追い求めたりはしなかった。その代わり、ひとたび授与された

新たな榮譽はもとも分かちがたく有していたかのように収まった。

これほどの際立った資質をもつ人物が主君の寵を得たのは不思議ではない。しかし、それと同時に、カール五世が波瀾万丈の生涯のうちに獲得し、この人物に伝授した政界の秘密や経験といった貴重な宝も、その継承者に対してグランヴェルを不可欠なものとするのに与っていた。フェリペ二世は己に満足しており、自らの判断力をたのむのを常としていたが、その臆病でこそこその政策のためには、より優れた知性にもたれかかり、己の不決断を權威や他者の先例、助言にすがって補わなければならなかった。国王の利害に関係ある政治的な決断は、フェリペ二世本人がネーデルラントにいるときでさえ、グランヴェルの関与なしになされることはなかった。

国王はスペインに向けて船出するにあたり、新たな執政に、自分自身が父である皇帝から受けたのと同じ貴重な贈り物を残していった。

専制君主が自分で下賤の身から取り立て、言ってみれば自ら大人物を作り上げたような場合、その人物に限りない信をおくことはめずらしくないが、グランヴェルの例は並はずれている。フェリペ二世のような性格の人間の利己的な閉鎖性を持ち越え、その信頼、いやその親しみさえをも獲得してしまうとは、グランヴェルの資質がいかにばかりであったかがしのばれる。

国王がひとたび自らのものとして取り上げたアイデアについて、至極自然な自負心の発露から自分のものなどとして少しでも口にしかけようものなら、いつさいの影響力を失ったことだろう。肉欲、物欲、復讐心といった低レベルの欲望ならあきらめることもなんとなかったかもしれないが、グランヴェルが心から愉しみを覚える唯一のこと——自分の優越と権力を味わうという甘美な感覚——だけは、専制君主の疑り深い目に触れぬよう、細心の注意を払わねばならなかった。

すでに自分のものであるいつさいの恩典を自発的に手放したが、それは国王の恩顧によってもう一度それを受けるためだった。国王以外からは幸福は得られないのであり、国王以外の誰もグランヴェルから感

謝されるということはなかった。ローマから送られた枢機卿の紫衣も、スペインから国王の許可が届くまで着用しなかった。まずそれを国王の足下に置くことで、国王陛下の手によって初めてそれをいただくような体裁にしたのである。

グランヴェルほどの政治家でないアルバ公は、アントワープに戦勝記念碑を建て、自分が国王のしもべとして収めた勝利の下に自分の名を記させた。しかし、アルバ公は墓場まで君主の不興を受け続けることになった。向こう見ずにも不死の泉の水に手をつけることによって国王大権を侵害したのである。

三たびグランヴェルは主を変え、三たびとも最高の寵をほしきままにした。単独主義の君主の落ち着いた自尊心や専制君主の陰險な利己心を導いたように、女性の微妙な虚栄心の扱い方も心得ていた。執政との間の事務のやりとりは、同じ館にいる場合でもたいていは書き付けを介して行なわれた。アウグストゥスやティベリウスの時代から見られる慣習である。執政が難局に直面しているときにはこうした書き付けは一時間ごとに交換された。こうしたやり方をしたのは、貴族階級の嫉妬深い目を避け、少しなりとも執政に対する影響力を隠そうとしてのことと思われる。また、このやり方なら自分が執政にした進言が記録に残りやすいことも考えてのことだったろう。必要とあらばこうした文書が非難から身を守る証拠となるのである。しかし、貴族たちのぬかりない目のため、こうした用心も無駄に終わった。ほどなくして、この側近の助言なくしてはいかなる決定もなされないことは諸州で周知の事実となった。

グランヴェルは専制主義によって統治される王国においては完璧な政治家となるに必要な資質をすべて備えていた。しかし、国王の統治下にある共和国には全くもって不適当だった。玉座と聴罪席の間で教育されたグランヴェルは、人と人との関係については規則と服従のそれ以外何も知らなかった。内に感じている優越感のため、他者を見下す癖がついていた。その政策は、この地で成功するために必要な唯一の徳である柔軟性に欠けていた。天性から居丈高で不遜だった上に、生来の性分の激しさやその命令の横柄さは国王の権威によって武装されていた。己の野心は国王のためという隠れみのに隠しつつ、自分が国王

に必要とされるよう、国民と国王の対立を悪化させた。

己の生まれが低いだけに貴族階級の權威を重んじようとはせず、実力で成功をつかんだ者誰もがそうするように、出自よりも、自分がの上がるのに武器としたような才覚を高く買った。

プロテスタントにとって、グランヴェルは不倶戴天の敵となった。ネーデルラントを抑圧しているあらゆる重荷がグランヴェルのせいにされ、グランヴェルの手になると思うとその重圧がいや増して感じられるのだった。それどころか、諸州の切迫した進言がようやく和らげさせた君主の態度を再び硬化させたと非難された。ネーデルラントはグランヴェルのことを自由に対する最も恐るべき敵であり、その後降りかかったあらゆる悲惨の発端となった張本人だと罵るのであった。

### フェリペ二世退去当時のネーデルラントの情勢（1559）

フェリペ二世のネーデルラント出發は明らかに早すぎた。政府の新しい施策はまだ人々になじみのないもので、国王本人がいてしか容認も權威付けも得られないものだった。始動させた新しい機械は強權的な恐怖の手によって回し続け、その初動を監視し、制御してやる必要があった。それなのに、国王の存在という心理的な枷がとれた人々の憤激の矢面に宰相を立たせ、国王の威光とその強力なバックアップがあったとしてもおぼつかない計画の遂行を臣下の細腕にゆだねたのである。

確かにネーデルラントは繁栄していた。全土にわたる豊かさはつい最近になって与えられた平和の恵みを立証しているかに見えた。だが、外面的な平穩に欺かれてはならない。内ではあらゆる不和の種が渦巻いていたのである。

ある国の宗教の基礎がゆらぐときには、それだけで終わることはない。宗教について始まっていたいざこざも結局は世俗のこととなる。教会体制に対する攻撃が成功したことで、大胆な心意気が目覚めていた。権力一般を責め、教義のみならず法律をも、信条のみならず義務をも問い直そうとする氣運が生じていた。

永遠について議論し、判断する際に獲得した過激なまでの大胆さはその矛先を変えるかもしれない。宗教的な熱狂が教えた生命や財産の軽視は、臆病な市民を向こう見ずな反乱者に変容させかねなかった。四十年近く続いた女性による統治により、国民が自由を主張する余地ができていたのだった。

ネーデルラントが戦場となった絶え間ない戦争はある種の放埒をもたらし、強者の権利が法と秩序に取って代わっていた。諸州には冒険を求める外国人や逃亡者があふれていた。みなつなぎとめる祖国も、家族も、財産もなく、これらの人々が不幸な故郷から不服従と反乱の種をもたらした。繰り返される拷問や死の光景によって道徳心のか細い糸ははずたずたにされ、ネーデルラントの国民性にそぐわない冷酷さが生まれていた。

それでも、貴族階級の間に支持を見出すことがなければ、反乱もおずおずとおとなしくうずくまっていたるしかなかったはずだ。

カール五世はネーデルラントの有力者を懐柔することに成功した。その手だては、皇帝の栄光に参加させ、その国民的な自尊心をくすぐり、カステイリア貴族よりも重用する姿勢を明確に示し、その帝国のあらゆる部分で活躍の場を開いたことだった。先のフランスとの戦争にあっても、ネーデルラント人はフェリペ二世からもまさにこうした取り立てに値するはたらきをして見せた。カトー・カンブレジの和で国王の得た利はおおむねネーデルラント人の武勇のたまものだった。

それが今、当然のこととあてにしていた恩賞が受けられないことがひしひしとその心を突いた。それに、ドイツ帝国とスペイン王国が分離したあとの新政府は以前の覇気がなく、ネーデルラント人の活動範囲は大いに狭まった。自国以外ではほとんど得るものが残っていなかったと言っている。

そしてフェリペ二世は今度はカール五世がネーデルラント人を登用したところにスペイン人を任命した。先の政府が鼓舞し、活用した情熱は平和になってもまだ息づいていた。そして合法的な目的がなくなったその御しがたい思いは、不幸にして自国の問題にいくらでもはけ口を見出せた。こうして、長らく新

たな情熱に置き換えられていた要求や不平が忘却のうちから呼び戻された。

このたびの人事において、国王はあらゆる方面の不満を買った。素通りされた人はもちろん、官職を得た者にとっても期待ほどのものではなく、満足することはなかったのである。

オラニエ公ウイレムは四州の支配権を獲得した（全部合わせても一州分にしかない小さな付属領は数えていない）が、当人は有力州であるフランドルとブラバントを期待していた。オラニエ公もエフモント伯も、手に入れたもののことはすっかり忘れ、執政職を得られなかったことばかりを思い起こしていた。貴族階級の大半は自らの放恣によって負債にどっぷりつかっているか、政府の言うままにそこに引き込まれていた。うまみのある役職の希望がなくなると、それは即、貧困にさらされるということだった。それは何不自由ない町民たちの豪勢な暮らしぶりを見るにつけ、いつそうこたえるのだった。多くの者は犯罪にさえ手を貸しかねない窮状にまで追い込まれていた。してみれば、ふんだんな謝礼と引き換えに仲介と後援を求めるカルヴァン派民衆の申し入れを断われなかったのも無理からぬことだった。失うものもな多い多くの者は、ついには全体的な破滅にその最後の希望をかけるようになり、好機さえあればただちに共和国に不和の火を投げ入れる用意があった。

こうした人心の危険な状況は不幸にもフランスと隣り合わせていたことでいつそう危機的なものとなった。フェリペ二世がネーデルラント諸州で恐れていたことが、隣国ではすでに現実のものとなっていた。その王国の運命に、フェリペ二世はネーデルラントの先行きのモデルを見ることができた。

反乱の精神はそこに魅力的な先例を見出した。似たような状況がフランソワ一世、アンリ二世のもとでかの王国に刷新の種をまいた。似たような迫害の狂乱と似たような党派心がその成長を促した。今ユグノーとカトリックは等しく混沌とした戦いのうちに奮闘している。猛烈な党派争いが王国全土をゆるがし、このかつて強大だった国を猛然と破滅の縁へと追いやっている。

ネーデルラントでもフランスと同様に、個人的な利害、野心、党派心が信仰と愛国心の名を隠れみのに



し、少数の市民の激情をきっかけとして全土が蜂起するかもしれない。ネーデルラントとフランスの国境はフランドルのワロン地方で溶け合っている。反乱の波は燎原の火のごとくにここまで伝わってくるかもしれない。言葉も、習俗も、国民性もフランスとベルギーの間でゆらいでいる地方がその進行をはたして拒むだろうか。

今のところ、政府もこの地方のプロテスタント住民に対する審査は行なっていない。しかし、新たな宗派が連帯した巨大な共和国であることはわかっていた。それはキリスト教世界のあらゆる王国の地下に根を張りめぐらせ、辺境の一国でのちよつとした争乱もたちまちのうちに中央にまで伝わる。それは言ってみれば活火山の連鎖だった。地下道でつながっていて、恐るべき同調によっていつせいに噴火するのだ。ネーデルラントはあらゆる国との交易で国を支えてきただけに、あらゆる国に対して開かれている。この商業国家をフェリペ二世はスペインと同じようにたやすく閉鎖させることができるだろうか。これらの諸州を異教から守って純粋なままとしようとすれば、まずフランスにおける異教を根絶することから始めることが必要だった。

### 司教区再編 (1560-61)

グランヴェルの着任当時のネーデルラントはこのような状況にあった。

この地にあまねく教皇主義を復活させ、貴族階級と議会の連帯した勢力をうち破り、共和国の自由を崩壊させた上で国王の権威を高めること——それがスペインの政策の大目標であり、新任の宰相の使命だった。

だがその実現には障害が立ちはだかっていた。それにうち勝つには新たな手段を考案し、新たな機構を立ち上げる必要があった。確かに宗教裁判や宗教勅令があれば異教の伝染を防止するのに十分とも見える。だが、勅令には監督が必要だったし、宗教裁判には今や拡大された管轄に見合った十分な官吏が必要だった。

た。教会規約は昔の、諸州の人口が今より少なく、教会に異を唱える者もなく監督や統制も容易だった時代から変わっていないかった。数世紀が経過して諸州の内部のあり方がすっかり変容しても、教会体制のあり方は変わらないばかりか、諸州の格別の特権を通じて支配者の専横から守られていた。

全十七州は四人の司教によって分担されており、その司教座はアラス、トゥルネー、カンブレー、ユトレヒトだった。そしてその四人の司教はランスとケルンの大司教の下に属していた。ブルゴーニュ公のフィリップ美公は実際、人口増による必要に應えるため司教の数を増やすことを考えたのだが、残念なことに享樂生活にとりまぎれて計画をうちやうってしまった。シャルル突進公は野心と征服欲のため領国の内政問題には目を向けなかったし、マクシミリアンはそれでも議会との間に多くのいさかいの種を抱えており、この上に司教座の問題を加える気にはなれなかった。カール五世の治世は多難でこの大規模な改革を遂行することはできず、そして今、フェリペ二世がこうした先代たちすべてからの宿題に着手することになったのである。

今ならば、教会の切迫した状態がこの改革の理由となり、平和の安息がその遂行を助ける好機となる。膨大な数の人々がヨーロッパのあらゆる国からネーデルラントの諸都市に押し寄せるとともに、宗教上の多くの見解が現われていた。今のままの少数の監督者では、以前は十分だったとしても、もはや人々の宗教心を効果的に監督することは不可能だった。司教の数が少ないということは、必然的にその管轄区域がそれだけ広大になるということだ。これほど広汎な地域全体にわたって信仰の純潔を維持するには、四人の司教では不足なのだった。

ケルンとランスの大司教の管轄がネーデルラントに及んでいることは、政府にとつて長いこと目障りだった。権力のこのような重要な部門が外国の手に握られているうちは、この地域が本当に自国領だとは見なせなかった。この大権を外国人大司教から取り上げ、新しく任命する有効な代理人によって信仰の監督体制に新鮮な息吹を吹き込み、それと同時に議会において政府の代弁者の数を強化する——そのためには、

司教の増員ほど有効な手だてはなかった。

この遂行を決意して王位についたフェリペ二世であったが、すぐに教会体制の変更は諸州からの猛烈な反対にあわざるを得ないことを思い知った。各州の同意なくしては試みるだけ無駄になってしまう。フェリペ二世は、貴族階級が決してこの改革を認めないことはわかっていた。これは王党派の立場を大幅に強化し、全国議会での貴族階級の優位を奪うことになるのである。また、新設の司教の維持のための歳入は大修道院長や修道士から引き出さねばならないが、この階級も議會を構成する諸身分のかんりの部分を占めている。さらに、プロテスタント陣營の反対も心配しなければならず、議會では新教徒が国王に反してひそかに動くことは間違いなかった。

こうした事情から、この件はローマで秘中の秘として討議された。グランヴェルからの訓令を受けた使者として教皇パウルス四世のもとにやってきたルーヴァンの司祭フランソワ・ソノワは、ネーデルラント諸州がいかに広大か、いかに繁榮し、人口も多いか、いかに豊かな暮らしをしているかを報告した。そして続ける。限度を欠いた自由を享受するうちに眞の信仰がなおざりにされ、異教がはびこっている、その悪弊を除くにはローマ教皇庁としても非常手段に訴える必要があるのだと。ローマ教皇にその影響力を強める変更を説得するのは難しいことではなかった。

パウルス四世は七人の枢機卿からなる審議會を設立してこの重要問題を検討させた。しかし、死が教皇を連れ去り、この事業は後継者のピウス四世によって完成されることになる。

教皇の決意についての吉報は、ゼーラントでまさにスペインに向けて船出しようとしている国王のもとに届けられた。そしてグランヴェルはひそかにこの危険な改革の内命を受けた。

新たな教会体制は一五六〇年に公表された。既存の四司教座に加え、十七州の教に合わせて十四が新設された。そのうちの三司教座は大司教座とされた。アントワープ、スヘルトーヘンボス、ヘント、ブルッヘ、イーペル、ルールモントの六つはメヘレン大司教区のもとに、ハールレム、ミデルブルフ、レーワル

デン、デーヴェンテル、フロニンゲンの五つはユトレヒト大司教区のもとに、残りのフランスに最も近く、言語、国民性、習俗がその国と共通の四司教区アラス、トゥルネー、サントメール、ナミュールはカンブレ大司教区のもとにおかれた。

ブラバントの中心に位置し、全十七州の中心でもあるメヘレンは全体のうちの首座とされ、いくつかの豊かな大修道院とともにグランヴェルの報酬となった。新設の司教区の歳入は修道院、大修道院が何世紀もの間に敬虔な信者からの施し物によつて集めた宝物から供出された。大修道院長の一部は司教に昇格され、修道院と司教区の保有に加えて、それに付属する議会での投票権も保持した。

同時にすべての司教区には九つの受給聖職者のポストが付され、最も学識豊かな法律家や神学者が就任して宗教裁判を支え、司教の聖務を補佐することになった。このうち、学識、経験、汚れない経歴の点で最もふさわしい二名は実際に異端審問官に任命され、その審理において最初の声を発する。

全十七州の首座大司教であるメヘレン大司教には、大司教や司教を任命し、自らの裁量で罷免もできる全権が与えられ、ローマ教皇庁はその決定を承認するのみとなった。

☆

他の時代であつたなら、このような教会改革も好意的に迎えられたことだろう。なんといつても現実がそれを必要としており、宗教の助けになるものであり、そして修道士の意識改革には不可欠なことだった。だが今の時代の空気がそこに見出したのは危険な改変以外の何物でもなかった。この改革はいたるところで憤激を呼んだ。国の基本法の蹂躪であり、国民の権利の侵害だとの叫びが上がった。異端審問がもう戸口まで迫っており、まもなくこの地でもスペインのような血まみれの宗教裁判が開かれるだろうというのである。

人々はこれら専制権力と迫害の新たな尖兵を愕然と見つめるばかりだった。貴族階級にとってこれは、全国議会に十四票を加えることによつて王権を強化し、国王と国民の力の均衡という自分たちの自由の最



も確かな支えを奪うもの以外の何物でもなかった。旧来の司教には歳入減や司教区の削減が不満だった。大修道院長や修道士は権力と歳入を失ったばかりか、その代償として与えられたのは自分たちの風紀に対する厳しい譴責だった。貴族も平民も、聖職者も平信徒も共通の敵に対して団結した。みながちっぽけな個人的利害を求めた抗議の声のうちには、恐るべき愛国心の叫びが響いていた。

諸州のうちでも最も反対の声を大にしたのがブラバントだった。その教会規約の不可侵性は「歓喜の入市」文書（一三五六）という注目すべき憲章——君主がそれを侵せば国民はその君主への忠誠から解放されるという性質の制定法——のうちにブラバントが保持していた重要な特権の一つだった。ルーヴァン大学までもが国王の肩をもって教会にとつて危機の時代には平時に認められた特権は効力を失うと主張したが、反対の声を鎮めることはできなかった。新たな司教区の導入によって、これまでに築き上げてきた自由が根底からゆさぶられているのだった。

新しい司教の管轄下にはいる高位聖職者はこれまで州議会の一員として州のために尽くしてきたが、これからはそれとは異なる権威に服さなければならなかった。自由で愛国的な市民だったのがローマ教皇庁の手先となり、ブラバントの首座司教として司教たちを統率する立場にある大司教の従順な手足となる。投票の自由も無と化した。司教たちが国王に屈従する目付けとして目を光らせていたため、誰もが疑心暗鬼となった。

人々はささやきあった。

「今後は、あんな監視人がいるのでは、誰も議会で声を上げられなくなってしまうではないか。政府の乱暴な手から国民の権利を守りたくても、監視人の前で勇気を出せる人がいるだろうか。諸州の助けとなる者とする者を洗い出し、我々の自由の秘密、財産の秘密を暴露するに違いない。我々には名誉ある官職への道は閉ざされ、ほどなくして国王の廷臣が後がまに座るだろう。今後は外国人の子弟が議会を独占するようになるだろう。その票は後ろだてとなる有力者に雇われ、その私的な利害によって左右されるのだ」  
これに修道士が続ける。

「なんたる無法か。敬虔な信者の神聖な寄進を横取りし、尊重すべき死者の望みを踏みにじり、慈悲の心が不幸な者の救済のために我らの基金に託したものを取り上げて、それをともあろうに司教の贅沢に供するとは。貧者の収奪によって司教のおごりを増長させるようなものではないか」

このたびの供出により実際に損害を被る修道院長や修道士ばかりでなく、いつの日か、たとえ孫子の時代であろうとも修道院制度の恩恵にあずかる希望があると期待するすべての家族が、このかすかな可能性がなくなったことを実際に損失のように感じた。少数の聖職者に対する害は全国民の関心事となったのだ。

歴史家たちは、この全国的な騒動のさなかのオラニエ公ウイレムの舞台裏での動きを伝えている。オラニエ公はこれらの雑多で入り乱れた熱狂を一つの方向に導こうと苦闘していた。

オラニエ公の勧めに従って、ブラバントの人々は執政に対し、国民を代弁し、その守護者となる護民官の選任を要請した。ネーデルラントの住民でブラバント人だけが弁護人と支配者が同一人物であるという不幸を背負っているのである。

この要求が認められたとしたら、民衆の人はオラニエ公以外にありえなかった。だが、グランヴェルは持ち前の機転でこの罍をすりぬけた。国務評議会の会合でこう断言したのである。

「この職務を受ける者はスペイン国王と対等な立場でブラバントを分かち合うつもりに違いない」

☆

ローマとスペイン宮廷の間の連絡の行き違いから教皇勅書が届くのが大幅に遅れ、不満分子は共通の目標に向かって連合する余裕をもてた。

ブラバント州議會はローマで直接自分たちの声を広めるため、極秘のうちに教皇ピウス四世に特使を遣わした。使者はオラニエ公からの有力な紹介状を与えられ、教会の長に近づく道を開くためにかなりの金子も持たされた。

同時に、アントワープからはスペイン国王に公開書簡が送られた。それはこの繁栄する商業都市にこのたびの改革を免除してほしいとするこの上なく切迫した申し立てだった。それによると、君主の意図が最善を考えてのものであり、新たな司教の叙任が真の信仰の維持に有効であることはわかっているが、外人にはそれが理解できず、その外国人にこの都市の繁栄は依存している。当地では根も葉もない噂でも完全な事実と同じくらい危険であるというのだった。

最初のローマへの使節派遣は事前に露見し、執政によって差し止められた。二番目については、アントワープは、少なくとも当時取りざたされていた国王の訪問までは司教着任は見合わせるというところまでは勝ち得ることができた。

アントワープの先例と成功は、司教の着任が予定されている他のすべての都市にとって反対運動ののろしとなった。新司教座とされた各都市は、かの恐るべき宗教裁判の導入を進め、全国的な害悪に手を貸すくらいなら、司教座となることによって地域の商業に当然もたらされる利益のいっさいを投げうつことを選んだ。

このことは、この時点ですでにネーデルラント諸都市が宗教裁判反対で一致していたことを立証している。デーヴェンテル、ルールモント、レーワルデンは強固な反対姿勢を打ち出し、その主張を押し通した（一五六一）。その他の都市では、反対運動にもかかわらず司教着任は強行された。ユトレヒト、ハールレム、サントメール、ミデルブルフなどの都市が司教に門戸を開くと、残る都市も追従した。

ただし、メヘレンとスヘルトーヘンボスでは司教の受け入れは冷淡だった。グランヴェルがメヘレン大司教としてメヘレンに厳粛な入市を行なった際、貴族は一人たりとも出迎えなかった。グランヴェルのこの勝利は勝ち誇る相手がいなかったため、全く実のないものとなった。



## スペイン兵の退去（1561）

この間にスペイン兵がネーデルラントから退去するはずの期限は過ぎていたが、軍隊は動く気配もなかった。人々はその遅れの真意を察しておののき、それが宗教裁判と重大なつながりがあると疑った。

撤兵の遅れにより国民の間に警戒心、不信感が広がっていたため、宰相が他の改革を進めるのも困難になった。だがグランヴェルとしては、全国民に嫌われているこの地で、全国民が反対している任務を遂行するために不可欠な強力な力となるはずのこの兵力を捨てる気にはなれなかった。

それでも、高まる不満の声に執政としても選択の余地はなくなり、撤兵の必要性を国王に切に申し立てた。執政はマドリッドにこう書き送っている。

「諸州は一致して、この件について約束が守られない限り、今後政府から求められる特別課税は二度と承認しないと宣言しております。フランス新教徒の攻撃などより反乱の危険のほうがずっと切迫しています。ネーデルラントで反乱が起これば、今ある兵では鎮圧する力はなく、新規に募兵する十分な資金も国庫にはありません」

国王は返事を遅らせて時間かせぎだけでもしようとし、執政からの度重なる申し立ても無駄に終わるかと思われた。そこに、諸州にとって幸運な事態が出来た。スペイン国王がトルコとの戦いで失った兵力を補填するため、ネーデルラントに駐留していた兵力が地中海方面で必要になったのである。

一五六一年、兵はゼーラントから船出した。その出発は諸州の歓喜の叫びに送られた。

## グランヴェルへの反発

この間、グランヴェルは誰はばかることなく国務評議會を牛耳っていた。聖俗問わず、官職の任命はグランヴェルを通じて行なわれた。その意は、議員が一致して反対してもまかり通った。執政自身さえもグランヴェルの意のままだった。執政の任期が二年に限られるよう仕組んでおいたので、執政は常にグラン

ヴェルの掌中にあるのだった。重要事項が他の議員に諮られることはほとんどなく、あつたとしてもことはとうに決定されており、形式上必要な議員たちの裁可を得るためにすぎなかった。

国王からの書簡を読み上げるときにも、ヴィグリウスは宰相が下線を引いた箇所は飛ばすよう指示された。スペインとの間の連絡では、しばしば政府の弱さや執政の懸念が赤裸々に述べられていたので、忠誠が疑わしい議員たちに明かすのは不都合だったのである。

時に反対派が多数となつて強固にある条項を推し、それ以上くい止められなくなつた場合には、グランヴェルはそれをマドリードの政府に送つて判断を仰いだ。少なくともそれで時間を稼ぐことができるし、いずれにせよ本国政府が自分を支持することは確かだった。

ベルレモン伯、議長ヴィグリウスなど若干名を除いて、國務評議会の他の議員たちはお飾りでしかなく、歴代君主からその自尊心に十分見合つた尊重を受けてきて、国民的英雄として同胞市民たちからも崇敬のまなざしを向けられていた議員たちが平民出の宰相のこうした不遜な態度にこの上ない憤激を感じたのも無理はない。多くの者はグランヴェルから個人的な侮辱も受けていた。

オラニエ公ウィレムは、ロレーヌ公女との結婚をつぶしたのがグランヴェルであつたことも、ザクセン公女との婚姻をもグランヴェルが妨害しようとするきになつていたことも知っていた。

グランヴェルは、ホールネ伯からはヘルダーラントとズトフェンの総督位を取り上げ、エフモント伯が身内のために欲しがつていた大修道院を自分のために押さえてしまった。

己の優位を信じて疑わないグランヴェルは、その施政を通して一貫している侮蔑を貴族階級に対して隠そうともしなかった。本心を隠す必要を感じたのは、オラニエ公ウィレムに対してだけだった。

畏敬とか社交辞令といったものは超越していると思つていたグランヴェルだったが、この点においてその自信に満ちた自尊心が道を誤らせた。グランヴェルのやり方は慎みを欠いたばかりでなく、政治的にも

失策だった。当時の状況にあつて、貴族階級をないがしろにすることほどもずいやり方はなかった。その気になれば貴族たちの心情をくすぐつて、気づかれぬうちに巧みに計画に取り込み、貴族たちを通じて国民の自由を制限することだつてできる立場にあつたのである。なのに政府は折悪しく貴族たちにその義務を、尊厳を、力を思い出させてしまった。それどころか愛国者となり、政府が不用意にも退けた野心を真に偉大な側に投じることを強いたのである。

宗教法令の施行には総督の積極的な協力が欠かせないが、総督たちがこの助力に熱心でなかったことは不思議ではない。それどころか貴族たちは裏で宰相の困難を増すよう画策していたことが十分考えられる。グランヴェルの施策を覆し、失敗によつて国王の信頼を損なわせ、その政府の面目を失わせるためだった。かの恐るべき勅令にもかかわらずグランヴェルの施政期間中にネーデルラントで宗教改革が急速に進んだ事實は、それを押さえるべき貴族たちの熱意が欠けていたことを如実に物語っている。

貴族階級を味方につけていれば、玉座の防壁に力無くぶちあたるばかりの民衆の怒りなどはものの数ではなかったかもしれない。市民の苦しみは長いこと涙とため息ばかりにとどまつており、貴族たちの術策と先例によつて初めて表に出てくることになるのである。

### プロテスタントの台頭 (1561-62)

この間、宗教に関する異端審問は大勢の新役人を投入して従来以上に厳しく実行されるようになり、異教に対する勅令は恐ろしいほど忠実に実施された。

だが、この強圧的な方策が有効だったかもしれない決定的瞬間は過ぎていた。そのような単純なやり方が通用しないほど、国民の意識は高まっていたのである。

新しい信仰を根絶するには、今やその信者をすべて亡き者にするしかない。だが、今や処刑は、新教の卓越を示し、同情を呼ぶデモンストレーション——新教の勝利と輝ける徳を示す場——でしかなかった。

死に臨んでの犠牲者の英雄的なまでの気高さは、生命を賭してまで貫き通した信仰への改宗者を生んだ。一人の殉教者が十人の新たな転向者を獲得した。

町や村だけでなく、街道でも、船上でも、乗合馬車の中でも教皇や聖人の權威、煉獄、免罪符といったことについての議論が戦わされ、説教が行なわれ、人々が改宗していた。地方から、町から、一般庶民が大挙して押し寄せ、聖界裁判所の囚人をその追従者の手から救い出そうとした。行政権を用いてあえて裁判所を支持しようとする地方官吏は石を投げつけられた。宗教裁判所が迫害するプロテスタントの説教師には群衆が付き従い、教会への行き来は肩に担いで運び、自分たちの命を危険にさらしてでも迫害者から隠そうとした。

狂信的な反乱熱にとりつかれた最初の州は、予想されたようにフランドルのワロン地方だった。ローノワというフランス人カルヴァン信徒が奇跡を行なう人としてトゥルネーで評判を得た。数人の女性を雇って病気を装わせ、ローノワによつて癒やされたふりをさせたのである。町の近くの森で説教をしたローノワは多数の信奉者を集め、その心に反乱の種を植えた。

リールやヴァランシエンヌにも同じような説教者が現われた。ヴァランシエンヌでは当局が煽動者たちの身柄を捕らえることに成功したものの、処刑を遅らせている間に信者の数が急増し、力を得た集団は牢獄を破つて裁きの場から犠牲者を奪い去った。ついには市に軍隊が導入され、秩序が回復された。

しかし、このささいなできごとは一時的にしてもこれまでプロテスタント派の力を覆い隠してきたベールを取り去ることになった。宰相はこのできごとから膨大な数に上る信者数を推算することができた。トゥルネーだけで一時に五〇〇〇もの聴衆が説教に参加しているのが見られ、ヴァランシエンヌでもそれに近い数だった。北部諸州なら推して知るべしである。なんといっても、より大きな自由を享受しており、政府所在地からはより遠く、ドイツやデンマークに近いことから感化を受ける機会も多い北部である。一つのちよつとしたきっかけでも、隠れていたあれほどの群衆を引き出せた。心の内では新教を認めており、

ただその帰依を公にする好機を待っている人の数となると、はるかに多いことが予想される。

執政はこの新発見に愕然とした。勅令がかるうじて守られている現状、新税を課さざるを得なくなったほどの国庫の枯渇、そしてフランス国境でのユグノーの不穏な動きが執政の不安を増幅させた。

## フランス支援問題

同時に、マドリードからはフランドル騎兵二〇〇〇をフランスの王太后の軍に送るようにとの命令が届いた。内乱の渦中であつて、王太后はフェリペ二世に助力を求めていたのである。どの国のことだろうと、信仰の問題となるとフェリペ二世にとつては人ごとではなかった。自らの王家に降りかかる災害のように痛切に感じ、いつだろうと無理をしても支援の手を差し向けるのだ。フェリペ二世にこの決断をさせたのが利己的な動機だったとしても、少なくともそれは王者らしく、堂々たるものだった。その残酷な面は評価するわけにはいかないが、信念のために断固とした行動をすることでところには賞賛の念を禁じ得ない。

執政は国務評議會の場にこの兵の問題に関する国王の意向を提出したが、貴族たちの側からは強い反対の声が上がった。エフモント伯とオラニエ公は、むしろ新兵の徴募が望まれる現状にあつてネーデルラントから兵を引き抜くのは時期が悪いと断言した。フランス国内での兵の動きからいつネーデルラントに奇襲攻撃があるかもしれない、諸州の間での騷擾からも政府はかつてないほどの警戒を求められているのだ。二人の主張は煎じつめればこうだった。

「これまでドイツの新教徒は信仰を同じくする人々の闘争にも傍観していた。だが、これからもそうだとやるだろうか。ことに我々が彼ら新教徒の敵を支援すべく援軍を送るとなれば。このたびの行動は、ドイツ新教徒の我々に対する敵意を招き、その軍勢を北部ネーデルラントに呼び寄せることになるのではなからうか」

国務評議會のほぼ全員がこの意見に賛成だった。その申し立ては強力で、否定しようもなかった。

宰相も、執政自身もその正当性を感じずにはいらなかった。自分たちの利害を考えても、国王からの指令に従うことは危険に思われた。軍勢の大半を引き抜くことで宗教裁判からその唯一の支えを取り去ることが、反抗的な地にあつて自分たちを無防備にし、身勝手な貴族階級の気まぐれに身をゆだねることが、はたして賢明なことであろうか。

執政が、国王の命令と評議会の熱心な要望、そして自分自身の危惧の板ばさみになつて決断を下せずにいるのを見て、オラニエ公ウイレムが立ち上がつて全国議会の開催を提案した。しかし、王権の至上性にとつて、国民にその力と権利を思い起こさせるこの助言に従うことはまさに致命的な打撃となるだろう。現段階ではこれほど危険な方策はなかった。迫りつつある危険をぬかりなく見て取つた宰相は執政に警告の合図を送り、執政は評議を打ち切つて停会にした。グランヴェルはマドリッドに書き送っている。

「政府にとつて、全国議会の開催に同意を与えることほど有害なことはありません。そのような手段は、国民に王権を問ひ直し、制限する考えを吹き込むゆえに、いつの時代であつても危険です。しかし、現時点においてはその何倍も反対すべき理由があります。現在、反乱の気運がこの地ではすでに広く行き渡つており、収入を奪われたことが不満の大修道院長たちは司教の権威を損ねる機会を手ぐすね引いて待っています。貴族階級も都市代表もオラニエ公の手管に籠絡されており、不平分子にとつて、国民の支持が確かなものとしてあてにできるのです」

この報告は少なくとも常識的な判断を含んでおり、国王の決断を望み通りの方向に動かした。全国議会の招集はにべもなく却下された。

異教に対する刑罰法規は完全な効力をもつて更新され、執政は要求された増援の派遣を急ぐよう指示された。

だがこの最後の点は国務評議会が認めようとしめない。執政が得られたのは、兵の代わりに王太后には資金を送るというもので、今の危機にあつて王太后にはそのほうがむしろ望ましかったと言えた。

## 臨時會議と使節派遣

全国議會の招集の代わりに、国民に対して少なくとも共和主義的自由の見せかけだけでも与えておくため、執政は各州の總督と金羊毛騎士団の騎士とをブリュッセルに召集して臨時會議を開き、現在の危機と国家の必要について諮った。議長ヴィグリスが審議すべき議題を提出し、各自の検討のために三日の猶予が与えられた。

その期間中、オラニエ公はみなを自分の宮殿に集め、次の会合までに一致した決議を用意し、現在の危機的な状況にあつて取るべき方策を合意しておくべきだと説いた。

多数はその方針に賛成だった。唯一ベルレモンがグランヴェル枢機卿の追従者若干名とともに、勇を鼓して国王と宰相の立場を主張した。

「政府が扱うべきことに口を出すのは我々の務めではない。それに投票の事前調整は違法で処罰の対象になる。そのような罪に参加することはできない」

この宣言のおかげで集会は結論に達することなく散会となった。ベルレモン伯からこのことを聞かされた執政は、市に滞在中の騎士たちが何かと用があるようにし、これ以上秘密会合で意見調整などしている時間がとれないようにはからった。

結局、このたびの臨時會議では國務評議會の同意を得て、モンティニー卿フロランス・ド・モンモランシーがスペインに赴き、現在の状況について国王に報告することが決められた。しかし、執政はその前に別の使節をマドリードに送り、あらかじめ国王にオラニエ公と騎士たちが秘密会談で討議したことをすべて報告したのだった。

## 貴族たちの足並み

マドリードにやってきたフランドルの大使には、国王のネーデルラントに対する好意や父親のような感情といった空虚な美辞麗句が与えられたが、一方で執政には力の及ぶ限り貴族たちのひそかな団結を阻止し、可能なら主だった人物の間に不和の種を蒔くよう命令された。

長い間貴族の多くはねたみや個人的な利害、宗教上の相違のために対立してきた。みなが共通の軽視と侮蔑を受け、宰相に対して一致した憎悪を抱いていることが再び貴族たちを団結させていた。

エフモント伯とオラニエ公が執政職の候補者である限り、時にその競合する主張によって衝突することは避けられなかった。両者は栄光への道を上る途上にあり、それが執政職という王座の前でかちあった。両者が次に出会った共和国では、二人は同胞市民たちの人気という共通の目標に向けて張り合った。これら正反対の性格の二人はまもなく疎遠になったが、両者とも必要性を強く感じるに及んでたちまち和解した。今では互いに不可欠な存在となっている。国家の急が、心情的には起こり得なかったきずなによって二人を結びつけたのである。

執政の計画の基礎となったのは、まさにこの二人の気質の相違だった。もしも首尾よく二人を離反させることができれば、同時にネーデルラント貴族全体を二派に分断させることができる。そのほか、この二人だけに贈り物やちよつとした好意を与えることによって、二人に対して残りの貴族たちのねたみと不信感をかき立てた。そしてエフモント伯をオラニエ公より重用するそぶりを見せることによって、オラニエ公がエフモント伯の信義に疑いを抱くようになることを期待した。ちょうどこの時期、神聖ローマ皇帝の選挙に立ち合うために特派大使をフランクフルトに送る必要があった。執政はこの任にオラニエ公の公然の敵であるアールスホット公爵を選んだが、これはオラニエ公に敵対すればいかに栄えある報償が期待できるかを示すためもあった。

しかし、オラニエ派は弱体化するどころか、ホールネ伯という重要な参加者を得た。ホールネ伯はネー



デルラント海軍の提督として国王をビスケー湾まで護衛した任から戻り、今再び國務評議會に席を連ねたのである。ホールネ伯の飽くことのない共和主義精神はオラニエ公、エフモント伯の大胆な計画にたちまちにして賛同し、まもなくこれら三人の友による危険な三頭体制ができあがった。これはネーデルラントの王権をゆさぶったが、三名はそれぞれ全く異なる結末を迎えることになる。

### 三 貴族の申す事 (1562-63)

その間、モンテニニーが使節の任から帰還し（一五六二）、君主からのこの上なく好意的な保証を國務評議會にもたらししていた。だが、オラニエ公が秘密の諜報ルートを通じてマドリッドから得たより信頼できる情報は、この報告とは真つ向から対立する内容だった。オラニエ公はグランヴェルが国王に対して自分やその仲間にも不利になるよう策動してきたこと、マドリッドでネーデルラント貴族にどんなおぞましい名が与えられているかを知った。

宰相が國政の舵を握っている限り希望はなかった。そのグランヴェルの放逐は、無謀で大胆なことに思えるが、それこそまさにオラニエ公が専心していたことだった。

オラニエ公とホールネ伯、エフモント伯の三名は、共同書簡を国王に送り、貴族全体の名で正式に宰相を告発し、その罷免を強く迫る方針で合意した。エフモント伯からこの提案を伝えられたアールスホット公爵は同意を断わり、その際、尊大にエフモント、オラニエから指図を受けるつもりはない、グランヴェルに不満を抱く理由はなく、誰を大臣として用いるかについて国王に指図するのは不適きわまりないことだと言いつつ切った。オラニエ公もアーレンベルク伯から同じような返答を受け取っていた。

執政が貴族階級の間に播いた不和の種がすでに根を張っていたためか、それとも宰相の権力に対する恐れがその政策に対する反感を上回ったためかは定かではない。いずれにせよ、貴族階級全体はおずおずと不決断のままこの提案からしり込みした。しかし、この失敗でも三人はくじけなかった。手紙は書かれ、

三人によつて署名された（一五六三）。

この書簡では、グランヴェルがネーデルラントにおけるすべての混乱の元凶だとされた。最高権力がこの人物に託されている限り、国民と国王に効果的に奉仕することは不可能であると断言した。その一方で、国王陛下がこの男を国政の舵取りから除くことをよしとすればただちに何もかもが以前の静穩に復し、あらゆる反対運動が中止され、政府も民衆の愛情を取り戻すであろうとした。さらに付け加えて、そうなた暁には、自分たちとしてもこの地で国王の威光と信仰の純潔を維持するための努力や熱意に欠けることなく、その二つは自分たちにとつてもグランヴェル枢機卿同様神聖な目標であるとした。

この書簡は秘密裏に用意されたが、それでも公妃は前もつて情報をつかみ、別に急使を送つて出し抜いた。書簡が国王の考えに及ぼしたかもしれない影響力は前もつてうち消されていたのである。

数か月後にマドリッドから届いた返書は穩やかだが曖昧なものだった。その趣旨は次のようなものである。

「国王は本人に弁明の機会を与えることなく、単なる政敵の告訴だけで大臣を断罪するようなことはしない。一般の裁判手続きだけからしても、枢機卿の告発人は一般的な非難をやめて個別の証拠を提示すべきであり、それを書面にするのがいやなら一人がスペインまで来ればいい。スペインではしかるべき敬意をもつて扱われるであらう」

三人みなに宛てられたこの書簡のほかに、エフモント伯は国王の親署のはいった手紙を受け取った。ここでは共同書簡が一般論としてしか触れていなかった件について伯から詳細を聞きたいとの国王陛下下の希望が述べられていた。執政も、三人そろつた場でどのように答えるべきか、エフモント伯一人に対してどのように答えるべきかを特別に指示されていた。

国王は人の扱いを心得ていた。エフモント伯一人なら懷柔するのはたやすいと思ひ、伯をマドリッドに呼び寄せることで、より高い知性の支配的な影響力から引き離そうとしたのである。このように信頼の証

を示して自尊心をくすぐり、エフモント伯を他の二人の仲間より上に遇することによって、国王は各人と王座との関係に差をつけた。提供されるものがもはや同じでないとすれば、はたして同じ目的のために等しい熱意をもって団結していられるだろうか。

確かにこのたびはオラニエ公の目が行き届いてこの奸計は不発に終わったが、この後の歴史はこのとき播かれた種が完全に無駄になったわけではないことを示すことになる。

☆

国王の返書は三人の盟友にとって全く不十分なものであり、三人組は大胆にも今一度書簡を送る決意をした。

「国王陛下が私どもの申し立てを顧慮に値しないと判断なされたことはいささかも驚くには値しません。その手紙をお送りしたのは、宰相の告発者としてではなく、国王陛下の評議会議員として主君に国の現状を報告する義務があるためでした。宰相の破滅を望むどころか、ここネーデルラントでさえなければ世界のどこでも満ち足りて幸福な地位を築いてくれれば私どもとしても満足です。ただ、宰相がこの地に留まる限り国内に平穏はありえないことは完全に確信するものであります。

祖国が現在おかれている危険な状況において、三人のうち誰一人としてこの地を離れること、ましてやグランヴェルの件で遠路スペインまで赴くことは許されません。

したがって、もし国王陛下が書面による要請に応じられないのであれば、今後国務評議会への出席は免除されることを希望いたします。出席しても宰相の相手をする苦行を受けるのみで、国王に対しても国家に対しても貢献することができず、自分たちから見ても情けない存在でしかないからであります」

そして結びとして、国王陛下に対してあけすけな物言いへの容赦を乞い、「私どものような性の人間は言葉飾るよりも行動でお仕えするものなのです」とした。エフモント伯が国王の親署に感謝して書いた別個の手紙も同じ趣旨のものだった。

この第二の奏上文に対して返ってきた返書の内容は「申し立てについては検討するので、その間は従来通り国務評議会に出席するように」といったものだった。

主君が要請を認めるつもりがないことは明らかだった。この時点から三人は国務評議会への出席を見合わせるようになり、ブリュッセルからも立ち去った。

### グランヴェル放逐 (1563-64)

合法的な手段によって宰相を除くことができなかった今、三人はより効果的と期待される新たな手段による目的達成を目指した。

機会あるごとに自分たちも、またその支持者たちも宰相に対する蔑みの念をあらわにし、その施策にはことごとく嘲笑を投げかけるよう努めた。この侮蔑的な扱いによって枢機卿の傲慢な気構えをさいなみ、他の方法でなしえなかったことを本人の自己愛によって実現しようとしたのである。ただちに成功には結びつくことはなかったが、この手法は最終的には宰相の没落を招くことになる。

宰相が貴族階級の信を失い、民衆が盲目的に支持する三人が宰相への嫌悪の先頭に立ったことが知れるやいなや、宰相を攻撃する民衆の声は高まった。貴族たちが宰相を見下すようになったことで、宰相は広汎な嘲りの標的となり、最も神聖で最も純粋なもののさえ容赦しない誹謗は大胆にもその冒流の手を宰相グランヴェルの名誉に向けるようになった。

国民の大きな不満のもとである新しい教会体制が宰相の権勢の基盤である——これは許すまじき犯罪だった。新たに処刑が行なわれるごとに（そのような見せ物については異端審問官の活動は実に気前がよかった）宰相に対する激しい敵意が新たにされ、恐ろしい実力行使が起こった。しまいにはあらゆる苦難は慣習的にグランヴェルの名と結びつけられるようになった。

この地では国民の意に反して押しつけられた外国人であり、何百万の敵に取り囲まれて孤立無援であり、

その道具は信用できず、遠隔の王権の弱々しい力によつてのみ支えられている。勝ち得るべき国民との接触は信のおけない代理人に頼らざるを得ず、それがみな宰相の行動をねじ曲げて伝え、その動機をゆがめることを至上の目的としている。そして最後に、主であるはずの執政は女性で、国民的な痛罵を共にすることができない——こうしてグランヴェルは理不尽、忘恩、党派抗争、ねたみ、その他放恣で不服従な民のあらゆる悪意の標的とされたのだった。

ここで、グランヴェルが受けた憎悪は本人に責任のある範囲をはるかに越えていたことは述べておくべきだろう。あらゆる方向からグランヴェルに浴びせられた断罪は、当の告発者にとつても個々に理由を示して裏づけることは困難というより不可能だった。グランヴェル時代でなくとも、狂信が犠牲者を祭壇へと引きずっていったことはあった。グランヴェル時代でなくとも市民の血が流され、人権が愚弄され、悲惨が生まれたことはあった。カール五世のもとでは、痛みが新奇だっただけに、より痛切に感じられたはずだ。のちのアルバ公時代のほうが迫害ははるかに徹底して行なわれた。それに比べればグランヴェルの施政などは情け深いとさえ言えたが、それでも当時の人々は、その後継者に対して示したことがないほどの個人的な憤りや侮蔑をグランヴェルに対しては遠慮なく浴びせかけていたのだった。

グランヴェルの生まれの低さを位階のきらびやかさで包み隠すため、そして高い地位によつてできるものなら政敵の悪意が届かないようにするため、執政はローマのつてを通じてグランヴェルのために枢機卿の帽子を獲得した。だが、この榮譽のためグランヴェルはそれまで以上に教皇庁との結びつきを深め、ネーデルラントにおいては異邦人であることをいっそう際立たせることになった。

枢機卿の紫衣はブリュッセルでは新たな罪科と見なされた。忌み嫌うべき衣装であり、それはある意味では今後のグランヴェルの行動原則を高らかに掲げて見せたものと言えた。

最も恥ずべき卑劣漢をもしばしば聖人にしてしまふ名誉ある地位も、尊敬に値する才能も、日々幾多の

血なまぐさい光景によって見せつけられている恐るべき強権さえも、グランヴェルを嘲笑から守ることはできなかった。恐怖と嘲り、恐ろしさど滑稽さが同居している不思議な例だった。

「貴族階級はエフモント伯の発案で使用人に共通の仕着せを取り入れた。それには道化の円錐帽が刺繍されていたが、ブリュッセルじゅうの人々はそれを枢機卿の帽子だと解釈し、それを着た使用人が現われるごとに笑いがまき起こった。この道化帽の記事は宮廷には不快で、のちに一束の矢に変更された。一時の揶揄はまじめな結末に発展することになった。おそらくはこれが「剣と矢の束を持つライオンという」共和国の紋章のものになったものと思われる。」

いまわしい噂がグランヴェルの名誉に烙印を押した。エフモント伯やオラニエ公に対する暗殺未遂が枢機卿のせいになされた。とても考えにくいことまでが信憑性をもった。どんな途方もないことでも、グランヴェルのこととなれば、あるいはグランヴェルから出たこととなれば驚きではなかった。国民はとも文明国とは言えない心情になっており、この上なく相反する感情が併存し、礼儀や道徳心が呈するか細い線は消え去っていた。このような尋常ならざる犯罪の確信は、たいていの場合、実際に起こることの先触れなのだった。

しかし、この陰鬱な構図にあつて、この人物の数奇な運命は同時により偉大な側面を見せる。予備知識のない観察者なら感心して好感し、賛嘆するところだろう。

この人物が目になっている国民は、きらびやかな位階に惑わされず、恐怖にたじろぐことなく、確固として、容赦なく、自然発生的に一致団結して、自分たちの尊厳が受けた犯罪を罰し、政治体制の中樞に無理やり外国人を入れたことに報復しようとしている。そんななかにあつてグランヴェルは常に冷然としており、常に他から孤立していた。外来の反対極性の物質がそれを反発する表面の上に浮遊するかのよう

に。味方であり後ろだてである国王の強権さえも、すでにいかなる協力もすまいと決意している国民の反感を前にしては、グランヴェルの支えとなることはできなかった。国民の憎悪はあまりに強く、個人的な利害を度外視して確かな利益を断わることさえあるほどだった。グランヴェルの施しさえも、あたかも呪わ

れた木の果実であるかのように謝絶された。全国的な排斥の汚名が伝染病の瘴気のようにグランヴェルの上に覆いかぶさっていた。グランヴェルに対しては恩義さえも感じる必要がないと信じられた。

とりまきも近寄らなくなり、友人たちも無口になった。

貴族たちと自分たちの尊厳が傷つけられたことに対し、地上で最も強大な支配者への人々の復讐はこれほどにすさまじいものであった。

# ☆

歴史はこの顕著な先例を一度しか繰り返さなかった。マザラン枢機卿の場合である。しかし、両者はそれぞれ別の時代と国民精神において異なっていた。最高権力さえも嘲笑からの守りとならなかった点では同じだが、フランスがそのイタリア人を笑うことで憤激のガス抜きをしていたのに対し、ネーデルラントは嘲りからたちまち反乱へと移行した。フランスの場合、リシュリューの精力的な施政の長い締めつけのうちにいきなり自由になった。ネーデルラントの場合は古来の自由から外国人による異例の隷属状態へと投げ込まれた。

フロンドの乱が鎮圧されて終わったのも、ネーデルラントの争乱が共和国としての独立に発展したのも、同じように自然な帰結であった。パリジャンの反乱は貧困のなせるわざだった。抑制はきかなかったが大胆さに欠けた。傲慢ではあったが勢いはなかった。その源流と同じく、低俗で庶民的だったのである。ネーデルラントの声は富める者の誇り高く強力な叫びだった。放蕩と飢えとが前者の刺激となった。報復、生命、財産、宗教が後者を活気づけた動機だった。マザランの行動力のもとには強欲だったが、グランヴェルの場合には権勢欲だった。前者は人道的で穏健だったが、後者は過酷で、有無を言わず、残虐だった。フランスの宰相は、有力者の憎悪と民衆の憤激から避難すべき王妃の寵があつたが、ネーデルラントの宰相は一人の男を満足させるために全国民の反感を買ってしまった。マザランに対してはいくつかの党派とそれが武器を提供できる程度の群衆があるだけだった。それがグランヴェルに対しては団結した国民全体

だった。マザランのもとでは高等法院がもとも自分たちのものでなかった権力をこっそりと我がものにしようとした。グランヴェルのもとでは、宰相が狡猾な奸計により奪い去った合法的な權利を議會が取り戻そうとする闘争だった。マザランが相手にしたのは王家に連なる諸侯や王国の貴族たちだったが、グランヴェルは地元貴族階級と諸身分の全体が相手だった。前者が共通の敵を倒してその後がまに座ろうとしていたのに対し、後者の目標はその地位そのものを廃し、一人の人間が独占することが許されない権力を分割することを目指していた。

☆

こうした空気が人々の間に広がる一方で、執政の宮廷における宰相の影響力もぐらつきはじめた。グランヴェルの強大な権勢に対する不満が繰り返し寄せられるにつけ、執政は自分の権威さえもが危うくなっていることに気づかざるを得なかった。グランヴェルに向けられた全国民的な憎悪にそのうち自分も巻き込まれることを、あるいはグランヴェルが長くとどまれば心配されている反乱が起こるであろうことを危惧したのかもしれない。

グランヴェルとの長いつきあい、その指導と先例によって、執政はグランヴェル抜きで統治する資質を身につけていた。グランヴェルの必要性が下がるにつれ、その権勢が重荷に感じられるようになった。それまでかけられていた友好のベールが取り払われてみると、欠点が目につくようになった。執政はそれまで隠そうとしていたのと同じように、今度はこうした欠点を探し出し、数え上げるようになった。

こうして執政の気持ちに枢機卿から離れる一方、貴族たちの度重なる切迫した申し立てに対してはついに心を開くようになった。貴族が執政自身の不安感を自分たちの不満に重ね合わせていただけになおさらだった。エフモント伯は執政に言った。

「実に驚くべきことです。ネーデルラント人でさえなく、この地の福利など関係ないことが周知のはずの人物のために、ネーデルラントの臣民すべてが苦しむことを国王がよしとするなどとは。それも生まれか



らは皇帝の臣下であり、紫衣からはローマ教皇の手先でもある人物の機嫌をとるために。グランヴェルがいまだ生きていられるのはひとえに国王のおかげであります。しかし、今後については国王もその保護を執政殿下に任せることになりましょう。以上、御注進申し上げます」

国務評議会においてないがしろにされることに耐えかねた貴族階級の多くが徐々に出席しなくなることで、これまで宰相の恣意的な施政の憎むべき側面を和らげてきた民主的な審議はその最後の形骸さえも失った。閑散とした評議会室は、その強権的な支配のいまわしさをまざまざと見せつけた。今や執政もグランヴェルが自分の上に立つ主君のように感じた。この瞬間、宰相の追放は決定されたのだった。

☆

この目的に向け、執政は秘書官のトマス・アルメンテロスらをスペインに送り、枢機卿がおかれている状況と貴族たちから伝えられている意向を国王に報告させた。グランヴェルの罷免が国王本人から出たことのように見せかけるためである。手紙に託していくことは、アルメンテロスがおそらく国王から口頭の説明を求められるだろうから、その時に適宜補うよう命じられた。アルメンテロスは申し分ない宮廷人としての能力を発揮し、その任務を全うした。しかし、四時間に及ぶ謁見によっても、長年の蓄積を覆すには至らず、変えようもなく根付いているフェリペ二世の宰相に対する心証を崩すこともできなかった。

国王は長らくその政策や利害とつきあわせて協議していたが、ついにグランヴェル本人がそのぐらつく意思に助け船を出した。自分から辞職を願い出たのである。グランヴェルには今となつてはどうせ時間の問題であることがわかつていた。ネーデルラント全土の嫌悪がなしえなかったことを、貴族階級の蔑みが達成したのだ。さしもの宰相も、今や恐れられることなく、羨望よりも罵倒の的となっている権力にいや気を感じるようになっていたのだった。

一部で信じられているように、身の危険を感じてのことだったかもしれない。確かにそれは考えすぎとばかりも言えなかった。あるいは、免官が宣告ではなく、恩顧という形で下されることを望み、ローマ人

の例に倣ってもはや避けられなくなった運命を従容として受け入れようとしたのかもしれない。フェリペ二世としても、あとになって要求に屈するよりは、国民の要請に寛大に応じるといふ形のほうが望ましい。いずれ認めなければならぬものなら今自発的に承認することによって少なくとも国民に恩を売る形にしたかったということもあるだろう。恐れが頑迷に優り、思慮が誇りにうち勝ったのだった。

グランヴェルは国王の決断がいかなるものとなるか、一刻たりとも疑わなかった。アルメンテロスが戻ってから数日後、グランヴェルは、その時までかうじて卑屈な笑顔を向けていた若干の顔から遠慮とこびが消えたのがわかった。最後に残っていた少数のおべつか使いと点数稼ぎのとりまきが身のまわりからいなくなった。もはや訪れる者もなかった。実りの源泉だった国王の寵が離れたのがわかった。

任期中絶えずつきまとった誹謗は、辞任に際しても遠慮なかった。人々は遠慮会釈なく、グランヴェルが辞意を示す直前にオラニエ公、エフモント伯との和解の意向を漏らし、二人の許しを得るためにほかに手だてがなければひざまづいて謝罪するつもりだったと言いはやした。これほど並はずれた器の人物の経歴をそのような悪口で汚すのはいやしく、恥ずべきことであるが、それを無批判に後生に伝えることはなおさらである。

グランヴェルは国王の命に落ち着き払った威厳をもって従った。数か月前にはすでにスペインにいるアルバ公に、ネーデルラントを去らなければならなくなるかもしれないからマドリッドに隠棲所を用意してほしいと書き送っていた。アルバ公は長いこと思案した。グランヴェルをマドリッドに呼び寄せれば、国王の寵を競う強力なライバルとなるおそれがある。その一方、この重要な友人はマドリッドで憎きネーデルラント貴族に反する活動をする上で貴重な道具となる。結局、復讐が恐れにうち勝ち、アルバ公は精力的にグランヴェルの要請が認められるよう、主君にはたらしめかけた。

しかし、アルバ公の口添えは無駄に終わった。アルメンテロスは、宰相がマドリッドに住めば、その政府を瓦解させたネーデルラント国民の不満のことごとくが、いつそうの荒々しさをもって蒸し返されると

国王を説き伏せていた。つまり、これまでは権力の末端に対する悪弊を非難されてきただけだが、グランヴェルがマドリードに滞在すれば権力の源泉を毒すると疑われることは必定だといふのである。

結局、国王は折よく「グランヴェルの母の病という」もつともらしい口実が見つかったことで、グランヴェルを生まれ故郷のブルゴーニュに送ることにした（一五六四年一月）。

☆

枢機卿はブリュッセルからの出発（三月）にあたって、数日で戻るちよつとした小旅行のように見せかけた。しかし、それと同時に、グランヴェルの施政中、自発的に退去していた国務評議会議員たちにはブリュッセルの国務評議会に戻るよう宮廷の命令が送られていた。

この状況を考えるとグランヴェルの復帰はありそうもなく、すぐ戻るようなそぶりは負けず嫌いの敗残者の強がりだと解釈された。しかし、わずかでも復帰の可能性があることはグランヴェルの退去を祝う勝利感に水を差した。執政自身も、その報告をどう考えていいか決めかねていたようだ。国王への新たな手紙では、宰相復権を国王に思いとどまらせるような申し立てや議論を繰り返しているのである。

グランヴェル本人も、ベルレモンやヴィグリウスとの連絡に乗じてこうした噂をできるだけ長続きさせ、もはやその場において一矢報いることのできない政敵を、たとえ見込みはなくても可能性によって心配させてやろうと努めていた。

実際、この並はずれた人物の影響力に対する恐れはあまりに強く、それを鎮めるため、グランヴェルはついにはその故郷ブルゴーニュからも去らなければならなくなった。

ピウス四世の没（一五六五）後、グランヴェル枢機卿はローマに行つた。新教皇の選出に参加し、同時にいまだ変わらぬ信頼を寄せてくれている主君の用向きを果たすためであった。その後まもなくフェリペ二世はグランヴェルをナポリ副王とした。そこでグランヴェルは南国の気候のとりことなった。どのような変転も曲げ得なかった精神に、官能がうち勝つた。

六十二歳になつて再びスペインの土を踏むことを国王に許された（一五七九）グランヴェルは、絶大な権力をもつてイタリア政局を左右し続けた。陰気な老齡と六十年の政務経験からくる自己満足的な自負心のため、グランヴェルは他者の意見を容赦なく手厳しく判断するようになっていた。因習の奴隸、過ぎ去つた時代の退屈な称揚者だつた。過ぎた世紀の政策は、新たな世紀の政策ではなくなつていた。新しい、若い世代による政府はすぐにこの尊大な監督にいや氣がさした。フェリペ二世自身も、この、何かといえれば父の事跡を褒め称えるばかりの老いた忠臣から離れるようになった。それでも、ポルトガル征服のためフェリペ二世がリスボンに赴くときにはスペイン本領のことは枢機卿の手に託された。

四十年もの長きにわたつて絶えることなく国王の信頼を保ち続けたグランヴェルは、一五八六年、マドリードで完全なる栄光のうちに大往生を遂げた。

## 国務評議会

### 執政の立場 (1564)

宰相がいなくなると、たちまちにして期待された好結果が現実のものとなった。不満を抱いていた貴族たちは評議会に復帰し、旧に倍する熱意をもって国務の遂行に邁進した。自分たちが追いやった人物を惜しむ余地を与えないためであり、また順調な施政によって宰相のはたらきが不可欠ではなかったことを証明するためでもあった。公妃「マルガレーテ」のまわりに集まったとりまきは相当なものだった。みな執政のための意欲、従順、熱意を競い、夜といえども国務の遂行がやむことはなかった。

三つの評議会の間の協調もかつてないほど順調で、宮廷と議会の関係も良好だった。もともと気のいいネーデルラント貴族だけに、信頼と誠意ある対応によりひとたびその主張とプライドが満足させられれば、どんなことでもした。執政は国民の最初の喜びに乗じていくつかの税を承認させた。グランヴェルの在任中には望むべくもなかったことだったが、このたびは貴族層からの絶大な支持が決め手となった。

やがて、執政はこの国民の秘密を学ぶことになる。それはドイツの帝国議会でも何度となく示されてきたことだが、少しを得るためには多くを要求しなければならないということだった。

執政は、長い隷属状態から解放されたことに喜びを覚えた。貴族たちが競って精励することで国務の負担は軽くなり、その気持ちよい恭順のため権力のうまみを心ゆくまで味わうことができた。

### 国王派の貴族たち (1564)

グランヴェルは放逐されたが、その一派は残っていた。その政策は枢密評議会や財務評議会に残されたその配下のうちに息づいていた。首領が追放されてかなりたっても、党派の間には憎しみがくすぶり、オラニエ党や王党派、愛国派や枢機卿派といった呼称がまだ議場を分断し、不和の炎を燃え立たせていた。

枢密評議会議長で國務評議會議員、国璽尚書のヴィグリウス（オランダ語ではヴィフレ）・ヴァン・ザイヘム・ヴァン・アイッタは今や國務評議会の最重要人物であり、王冠と執政冠の最も強固な支えと見なされていた。この有為な古老は、ネーデルラントの反乱史を扱うのにも貴重な貢献をしてくれ、本史もしばしばその友人との間の私信に導きを得ている。

このヴィグリウスは当代随一の法律家であり、神学者で司祭であり、すでにカール五世のもとで数々の要職を歴任していた。ロッテルダムのエラスムスを筆頭とする、時代の華である学識者との親密なつきあいを通じ、また帝国の國務のために方々を旅したことで博識と経験を積み重ね、信念であれ見識であれ多くの点で同時代人の上を行っていた。その学識の名声はその世紀全体に響きわたり、ヴィグリウスの名を後生にまで伝えている。

一五四八年にネーデルラントのドイツ帝国内での位置づけがアウクスブルクの帝國議會で議論されるとき、カール五世が諸州の利害を代弁する者としてこの地に送ったのがこの政治家だった。そして主としてヴィグリウスの手腕によって、交渉はネーデルラントに有利に運んだ。皇帝の没後、ヴィグリウスはフエリペ二世が父から遺贈された才ある大臣の一人であり、父ゆかりの者として尊重した数少ない者の一人でもあった。

早くからの知己である宰相グランヴェルの権勢とともに高みに上ったが、この保護者の没落は共にせずにはすんだ。宰相の権力欲とは一線を画していたおかげで、宰相に向けられた憎悪を受けなかったのだ。ネーデルラントに二十年も住み最重要の國務も任されたことで国王への忠義は立証済みであり、ローマカトリックの教義に熱心に帰依したこともあって、ヴィグリウスはネーデルラントにおける王権の最も傑出した官吏となっていたのだった。

ヴィグリウスは学者ではあったが、思想家ではなかった。世慣れた政治家ではあったが、開明的ではなかった。その意志は友人のエラスムスと同様、過った因習を打破するほどではなかったが、前任者グラン

ヴェルのように己の欲望追求に用いるほど悪くもなかった。怯懦のため理性の導きに従わず、良識というより都合のいい道を奉じることを選んだ。ひとたび自らの務めとなったことは、どんなことでも正義だった。ヴィグリウスは誠実だったが、そのような人間は悪にとつても不可欠で、その誠意に欺瞞がつけ込んだ。

自由の転覆に手を貸したヴィグリウスではあったが、半世紀後であつたなら、自由の立役者としてその名を不滅のものとしたことだろう。ブリュッセルの枢密評議会では専制の手先だったが、ロンドンの議会やアムステルダムの手先であれば、おそらくはトマス・モアやオルデンバルネフェルトのようにその命を捧げたことだろう。

## ☆

財務評議会議長ベルレモン伯は、野党にとつてヴィグリウスに劣らぬ手ごわい相手だった。

歴史家はこの人物の事跡や思想についてごくわずかなことしか伝えていない。その経歴の前半においては、グランヴェル枢機卿の偉大な輝きの陰になり、グランヴェルが舞台から去つたのちは反対派の優勢によつてわきに追いやられた。しかし、残っているわずかな手がかりからは立派な人格が読みとれる。オラニエ公も一度ならず伯を枢機卿のとりまきから引き離して自派に加えようと努めた——オラニエ公がこの人物の価値を認めていた十分な証拠である。そしてそのたびに失敗に終わつた——これは伯が無定見な性格ではないことを示している。

ベルレモン伯は一度ならず、評議会でただ一人、あえて主流派に反して声を上げ、満場の反対に抗して、踏みじられんばかりの王権の利害を擁護している。オラニエ公が金羊毛騎士団の騎士らを自邸に集め、宗教裁判廃止に向けて事前に賛同を得ようとした際、そのようなやり方の非合法性を指摘し、いきさつを執政に報せたのがベルレモン伯だった。その少しあとにオラニエ公から例の集会の件を執政が知っているかと問われた伯は、ためらわずに真実を話した。

ベルレモン伯の行動とされていることはいずれも、権力によつても脅しによつても意を曲げず、一度選んだ方針は断固たる勇氣と変わることなき不屈さをもつて貫き通す人物を描き出す。ただし、その自尊心と専制思想が強すぎて他の道を選びようがなかったとも言える。

☆

ブリュッセルにおける王権支持派としては、さらにアールスホット公爵とマンスフエルト、メーヘン、アーレンベルク伯爵の名を挙げることができる。三人とも生粋のネーデルラント人であるから、ネーデルラント貴族階級全体とともに祖国における教会体制や王権に反対するのに同調してもよさそうなものだった。それだけにその逆の行動には驚きを禁じ得ない。それも反対派の主だったメンバーとは親しい仲にあり、祖国にのしかかる重荷に気づかないわけではなかったとなればなおさらである。

しかし、強大な相手に対して望みの少ない戦いに乗り出すほどの自信も気概もなかった。臆病者の思慮によつて、正当な不満を必要という鉄則に屈せしめ、自尊心にはつらい忍耐を強いた。その柔弱な虚栄心にはそれがせいぜいだった。消極的で慎重なあまり、君主の恩寵によつてじきに得られるものなら、確かな善であっても、正義感に訴えるにしろ脅し取るにしろ力づくで手にしようなどとは思ひもよらなかった。他者の不幸を救うために現実の自分の幸せを手放すなどもつてのほかである。

この者たちはむしろ好機とばかりに自分たちの忠誠を高く売りつけた。貴族階級の多くが反対派に走つた今、忠誠の価値が高じていたのである。真の栄光を目指したのではなく、己の野心に従つて党派を決めたのだった。低劣な知性の野心は、自分より優れた知性の穏和な支配に従うよりは、強権のくびきに屈するほうを好んだ。オラニエ公に仕えたところで得られる恩顧はたかがしれている。だが王権を背にすればその敵手としては手ごわい相手になる。反対派にあつてはその名は数多くの支持者のうちに埋もれ、輝かしいライバルの陰になるしかないが、ほとんど見捨てられた国王派ならそのちっぽけな能力でさえも輝いて見えるのである。



ナッサウ家とクロワ家（アールスホット公爵はこの後者に属する）はここ数代の治世にわたって権勢や名譽で競合關係にあり、その競争心のため両家の間には古くからの確執があったが、宗教上の相違により両者の溝は埋めがたいものになった。クロワ家は往古よりカトリックの儀式や式典の熱烈かつ厳密な遵守で知られていた。ナッサウ伯らは新教に宗旨替えをした。これだけでもアールスホット公爵フィリップ・クロワがオラニエ公に最も敵対する党派を好む十分な理由だった。宮廷はこの個人的な確執をぬかりなく利用し、共和国においてナッサウ家の権勢が増すのに対してこの大物を抗させたのだった。

マンスフェルト伯、メーヘン伯は最近までエフモント伯とは昵懇の仲だった。エフモント伯と共同して宰相に反対の声を上げ、宗教裁判や勅令に抵抗するのにも加わり、これまでのところ名譽と義務にもとるものでない行動は共にしてきた。だがそれも限界に達し、三人は今や別の道を歩んでいた。エフモント伯は疑うことを知らない徳ゆえに絶えず破滅へと駆り立てられていた。マンスフェルト伯とメーヘン伯は危険を察知して安全なうちに身を引いた。エフモント伯とマンスフェルト伯の間に交わされた書簡が残っているが、もう少しのちの時期に書かれたものとはいえ、二人のかつての好誼の実像を伝えてくれる。

国王側に走った友をやりわりとたしなめたエフモント伯に対して、マンスフェルト伯は答えている。「以前は、私も宗教裁判所の廃止、勅令の緩和、グランヴェル枢機卿の排除が必要であるとする意見だったが、今や国王もその願いを聞き入れ、不満の種を取り除いてくださっている。すでに君主の尊厳、教会の権威に対して十分すぎることをしている。国王がおいでになったときに晴れやかな気持ちで気兼ねなくお迎えするつもりなら、今が引き時だ。

私の身のことなら、国王の復讐を恐れはしない。お召しがあれば自信を持っていつでもスペインに出頭し、陛下の正義と善意が下される判決に堂々と身をゆだねるであろう。

こういうことを言うのは、エフモント伯にその勇気がないと疑うからではない。ただ賢明に、もつと自分の身の安全に配慮し、その行動から疑惑を取り除くようふるまってくれることを望むばかりだ」

そして締めくくって言う。

「伯が私の警告に耳を傾けるならば我々の友情はこれからも続く。だがそうでなければ、私は己の義務と名誉のためにはあらゆる友情のきずなをも犠牲にする覚悟はできている」

## 腐敗

貴族階級の力が強まったことで、共和国は、宰相の排除によつて脱したばかりの悪弊以上とも言える害悪にさらされることになった。貴族たちは長年贅沢をしつてきたために困窮し、同時にモラルの低下も招いていた。どつぷりつかりすぎて今さらやめるわけにもいかず、その支配欲を慰め、衰えゆく運勢を今一度盛り返す危険な誘惑に抗しきれなかった。浪費は利益追求を呼び、それが腐敗をもたらし、世俗や宗教界のポストがあらさまに売りに出された。名誉職や特権、特許は最も高い値をつけた者に売り飛ばされた。

正義でさえも取り引きの対象だった。枢密評議会によつて断罪された者が国務評議会によつて放免される。前者が承認を拒んだことも後者から金で買えるのだった。国務評議会はのちに他の二つの評議会の責として、その腐敗の先例となつたのは自分たち自身であつた。

あの手この手を使った利権あさは次々に新たな利益の源泉を切り開いていった。生命、自由、宗教は土地屋敷のようにある金額で保証された。金を出せば人殺しも重罪人も放免された。国民は富くじによつて収奪された。国務評議会議員や州総督の家来や手先が、位階や能力を顧慮することなく要職につけられた。宮廷に請願を提出したい者は州総督やその下僕の手を介さなければならなかつた。

こうした常軌を逸した慣行の誘惑は、ほかならぬ公妃の秘書官トマス・アルメンテロスにも向けられ、この時点まで非の打ちどころのなかつたこの人物を取り込むためにあの手この手が尽くされた。敬意と友好を装つてその信頼を得、接待攻勢によつてその信念を突き崩すことに成功した。その誘惑を一度味わう

とモラルはむしろ、新たな欲望の前にこれまでの腐敗知らずの清廉さは崩れ去った。今や自らもその手を染めた悪弊には目をつむり、自分の罪を覆い隠すためにも他の者の罪を隠蔽した。その黙認のもとに王室の財源が食い物にされ、収税業務の腐敗の前に政府の目的はなかりに失われた。

この間、執政は権力を得て政務にいそむという心地よい幻想の中をさまよい続けており、貴族たちの追従は巧みにそれを助長した。諸党派の野心が女の弱点を手玉に取り、空虚なそぶりやうわべだけのへりくだった服従を示すことで実権を手にしたのだった。ほどなくして執政は完全に党派の掌中に陥り、知らず知らずのうちにその方針を転換していった。

これまでのやり方とは正反対に、他の評議会に属する問題やヴィグリウスが個人的にした提案を、党派が牛耳る國務評議会の場に不法にも持ち込んだのである。グランヴェルの施政中、國務評議会に諮ることゝを不当に無視したのと好対照であった。今やあらゆる政務とあらゆる権力が州総督たちに振り向けられた。あらゆる請願は総督のもとに持ち込まれ、うまみのある官職の任命も総督の采配となった。

その権力の拡大は、法律上の係争さえも当局から取り上げて自らの裁判権のもとにおくまでになった。その裁判所の権勢が拡大するにつれ、州裁判所の権威は低下した。そして当局の威信とともに司法機能と民間の秩序も低下した。まもなく下級裁判所も州政府の例に続いた。ブリュッセルの國務評議会を支配する空気はたちまち諸州の間に広がった。贈収賄、免罪、利権あさり、司法の腐敗が地方裁判官の間に蔓延した。

モラルは地に墜ち、新興宗派はこのあまねく行き渡った腐敗をその勢力拡張の足がかりとした。貴族階級は、自分たち自身が宗教改革支持に傾いているため、あるいは少なくとも専制の道具となる宗教裁判を嫌悪しているために、その宗教観は寛容で、そのため宗教勅令の厳格さは緩和された。多くのプロテスタントに免責証書が下されたため、教会当局はその最高の犠牲を奪われた。貴族階級にとつて、今や国政に与る立場にあることを人々に示すのに、憎き異端審問の宗教裁判所を犠牲にして見せることほど痛快なや

り方はなかった。政治上の判断という以上に本心に駆られてそうしていたのだった。

国民は一夜にしてこの上なく厳格な不寛容の束縛から自由の状態に移行したのだが、長らく自由を忘れていたために節度をもって行使することができなくなっていた。

異端審問官は地方当局の支持を失って、恐怖ではなく嘲りの対象となった。ブルツヘでは、異端者を捕らえようとした異端審問官の配下の者が、逆に市参事会によつて捕らえられて収監され、パンと水しか与えられないという目にあった。ちようどこのころ、アントワープでは群衆が教会当局により異端で告訴された人物を救出しようとして失敗したが、その後、公共広場に立て札が現われた。血で書かれたその内容は、この無実の人物の死に復讐すべく誓い合ったというものだった。

### 国務評議会の優位

国務評議会には腐敗が蔓延したが、ヴィグリウスとベルレモンがそれぞれ議長を務める枢密評議会と財務評議会は今のところ節度を保っていた。

貴族の党派は配下の者をこれら二つの評議会にもぐり込ませることができず、残された手段はできるものなら両者を無力化してしまうことだった。この計画を進めるため、オラニエ公は他の国務評議会議員の協力を確保しようとし、しばしば支持者たちと呼びかけた。

「国務評議会議員はなるほど元老とは呼ばれている。しかし、権力を有しているのはよそではないか。兵に払う金が必要なとき、異端の拡大を押さえ、人々の秩序を保つ問題を扱うとき、相談は持ち込まれるが、実際には国庫も法律も管轄下がない。これでは国務評議会は他の二つの評議会が国家を操る道具ではないではないか。無駄に三つの評議会に分散されている国の政務全般を我らの手で担うことは不可能ではない。それには我々が団結するだけでよい。国務評議会からもぎ取られた政府のこれら二つの重要部門を再び国務評議会に統合し、一つの意志が全体に活力を行き渡らせられるようにしようではないか」

とりあえず、次の内容の計画が内密のうちに合意された。十二名の新たな金羊毛騎士団の騎士が国務評議会に追加される。司法はもともと属していたメヘレン高等法院に復される。恩赦令状、特許状などの認可は枢密評議会議長ヴィグリウスに任せるが、財政は国務評議会の管轄とする、というものである。

宮廷の不信感、そして貴族階級の権勢が高まることへの警戒心のため、この改革にはあらゆる抵抗が予想された。執政に同意させるため、軍の主だった士官が前面に押し立てられ、居丈高に未払い金の支払いを要求してブリュッセルの宮廷を困らせ、拒否されたときには反乱を起こすと脅すものとされた。また、司法手続きの遅れに抗議し、日々勢を増しつつある異端から懸念される危険を誇張する請願や覚え書きを次々に送りつけて執政を悩ませた。社会の混乱状態、司法の乱れ、財政の枯渇を悪く見せるためにあらゆる手が尽くされた。あまりのことに、栄華の幻影にひたっていた執政は冷や水を浴びせられて愕然とするのだった。

執政は三つの評議会を集めてこうした混乱を收拾する手だてを相談した。その多数意見は特派大使をスペインに送り、つぶさに現状を説明して国王に現地の実態を知らせ、望むらくは改革を実行してもらうというものだった。

党派が示し合わせているなど想像だにしないヴィグリウスはこの提案に反対した。

「不満の的となっている問題が深刻であり、これ以上なおざりにすることが許されないことは間違いない。だがそれは我々自身で対処できないものではない。司法は確かに麻痺状態にある。だがその責任は貴族たち自身にあるのではないか。貴族たちがしろにするから司法当局の威信がおとしめられるのだ。総督たちの協力も十分とは言いがたい。異端がはびこっているといっても、それは世俗部門が聖界裁判官を見捨て、貴族階級に倣った一般大衆が当局への敬意を捨て去ったからにほかならない。

諸州は確かに重い負債にあえいでいる。だがそれは財政政策の失敗というよりは、これまでの戦争や国王の必要によるもので、ちよつとした課税によつて徐々に改善できるものである。

もし国務評議会が免罪、免責証書、赦免の乱発をやめれば、もし国務評議会が自らの意識改革に取り組み、法を尊重し、地方当局がかつての威信を取り戻せるようにすれば——すなわち、諸評議会と総督たちが自分たちの義務を果たしさえすれば、こうした不満はすぐにも解消するであろう。

とすれば、なぜスペインに大使を送ったりする必要がある。そのような非常手段を取るようなことは何も起こっていないではないか。もつとも、どうしてもいうのであれば多数意見に反対するものではないが、その場合、大使の第一の任務は、国王にできるだけ早いこの地への行幸を要望することとしていただきたい」

使節の選任については異論の余地はなかった。ネーデルラント有力者のうちで、与野党ともに満足させられるのはエフモント伯しかいなかった。宗教裁判への反感、その愛国的、自由主義的な考え方、非の打ちどころのない清廉潔白な人柄は共和派にとってその行動の保証となった。伯が国王にとっても受け入れやすい理由についてはすでに述べてある。それにしげば第一印象がものをいう君侯に対しては、伯の人をとりこにする物腰がその能弁を支持し、その請願に助けになることが期待できる。王族にはどんなささいな願いごとをするにもこうした説得のこつが欠かせないのである。エフモント伯自身も、家の事柄で国王と相談したいこともあって、スペイン行きを希望していた。

### トリエント公会議の議定書（1564）

このころトリエント公会議が閉幕し「一五六三年十二月」、その議定書をキリスト教世界全体に向けて公布した（「一五六四」）。しかし、その議定書は公会議の本来の目的を達成し、諸宗派の期待を満足させることからはかけ離れたものであり、むしろ両教会の溝を広げ、教会分裂を修復不可能なものとして固定する内容だった。

古いカトリックの教義は純化されるのではなく、ただより明確に規定され、より大きな価値を与えられ

ただけだった。これまで勝手な裁量により行なわれてきた教えの微妙な点やローマ教皇庁の作為や専横が法典化され、体系に昇格された。蒙昧と迷信の未開の時代にキリスト教にまぎれ込んだ習慣や悪習が今やその礼拝の不可欠な部分となり、教義に反駁したりその務めを怠ったりする大胆不敵な者には破門が下された。聖遺物の奇跡の力を疑う者、殉教者の遺骨を敬うことを拒む者、そして不遜にも聖人の代願の効果認めようとしないう者は破門された。そしてローマ教皇庁からの離反の最初のきっかけとなった免罪符の効力については、論駁し得ない教義として確証された。修道院制度は公会議の明確な結論によって保証され、修道の誓いは男子は十六から、女子は十二から認められることになった。そしてプロテスタントの教義はことごとく断罪され、過ちや弱さに対する寛容はいっさい示されず、穏和な手段によって母なる教会の懷に取り戻そうとする動きは全くなされなかった。

プロテスタントにしてみれば、公会議の腹立たしい議事とその不合理な決定によって、長らく教皇主義に対して抱いてきた心からの軽蔑が（まだその余地があったとすれば）増幅され、これまで見過ごされてきた攻撃すべき新たな弱点があらわになった。理性という光明のたいまつを教会の神秘にかくも近づけ、論理によって盲目的な信仰の対象を守る戦いをしようというのは不幸な考えだった。

さらに、トリエント公会議の議定書はカトリック教会に帰依する勢力にとつてさえ満足なものではなかった。フランスは完全に拒否した。国内のユグノーを刺激したくなかったほか、公会議において教皇が我々がものとした至上権が気に入らなかったのである。ドイツのカトリック諸侯の一部も反対を表明した。

どの君主よりも己の大権に敏感なフェリペ二世も、自らの権利に抵触しかねない多くの条項に不満だった。また、教皇が公会議を牛耳った上に突然勝手に終了させたやり方にはいたく気分を害しており、スペイン大使に対する教皇の冷遇にも反発していた。だが、それでもフェリペ二世は公会議の議定書を進んで承認した。そのままの形でもそれが自分の生涯の目標——異端の撲滅——に合致するものだったからである。この問題のためには政治的な配慮はいっさいわきに追いやられた。フェリペ二世はその全属領におい

て議定書の公布と施行を命じたのだった。

ネーデルラント諸州に広がっていた反乱精神はこうした新たな刺激を受けるまでもなかった。民心は煮詰まっており、ローマカトリック教会の評判は多くの人々の間ですでに墜ちるところまで墜ちていた。そのような状況においては、権威主義的でここに不用意な部分のある公会議の議定書は全くもって許しがたいものだった。

フェリペ二世としては、臣下に異なる宗教を認めることは自らの人格を否定するに等しく、たとえそれが異なる天地において異なる法のもとに暮らす人々であつても許すことができなかった。スペインやイタリアと同じようにネーデルラントでもトリエント公会議の議定書を断固として守らせるよう、国王は執政に厳命を下した。

しかし、この議定書はブリュッセルの国務評議会での上なく激しい抵抗にあつた。オラニエ公ウィレムは断言した。

「国民は認めまいし、認められるはずもない。議定書の内容は大部分が基本法の根本原則に反するものであり、そのような理由でカトリック諸侯の一部からすでに拒絶されているほどではないか」

評議会全体がほとんどオラニエ公の側についた。圧倒的多数が、議定書を完全に撤回するか、あるいは少なくとも一定の限定をつけて公布するよう国王に嘆願することに賛成だった。

この提案に反対したのがヴィグリスだった。ヴィグリスは国王命令への文字通りの服従を主張して言った。

「教会はいつの時代にもこのような全世界的な公会議によつてその教義の純粹さと規律の厳格さを保つてきた。祖国をかくも長きにわたつて悩ましてきた過つての見解に対して、まさにこのような議定書ほど有効な対策はほかにない。国務評議会として今それを拒否しろと迫られている。ところどころ市民の権利や基本法と相容れない部分があつたとしても、分別ある穩健な運用をすれば問題ない。その上、必要に迫ら



れて良識を曲げたり、恐れをなして教会の福祉が必要とし、臣民の幸福のための義務でもある政策を放棄したりする諸侯が多いなか、ただ一人務めを果たすということは我らの主君スペイン国王にとっても名誉なこととなるう」

結局、議定書が王権そのものに抵触するいくつかの事項も含んでいた点を利用して、これらの条項だけでも公布から除外するよう提案して本国の判断を仰ぐことになった。そのような不快で王者たる者の尊厳にもとる条項に国王が縛られることのないようにというのが建て前だった。公会議の結論に干渉することにネーデルラント国民の自由を口実として与え、共和国の名を貸そうというのである。

しかし、国王はすでに他の属領ではこの議定書は無条件で受け入れ、施行させていた。国王が他のローマカトリック諸侯にそのような反抗の先例を与え、これまで必死で築き上げてきた体系の基盤をゆるがすようなことを認めるとは思えなかった。

## エフモント伯のスペイン行

### 任務

トリエント公会議の議定書に關して国王に異議を申し立て、プロテスタントに対するより穏やかな処遇を取りつけ、他の二つの評議會の統合を提案する——それがエフモント伯が不平派から与えられた使命だった。執政からは、勅令に対するネーデルラントの民の反発を国王の耳に入れ、その勅令を完全に施行するのが現実的でないことを説得し、国防体制の不備と国庫の枯渇について報告することが託された。

エフモント伯の公式な訓令は議長ヴィグリスが書き上げた。それは司法の腐敗、異端の蔓延、国庫の枯渇についての深刻な訴えを含んでおり、国王のネーデルラントへの行幸を強く求めることとするものだった。あとは使節の弁舌に任されたが、それにあたり伯は執政から、主君の寵を確かなものにする絶好の機会を逃さないようにと入れ知恵された。

エフモント伯の訓令や国王に対してなす申し立ての文面の調子は、オラニエ公にとってはあいまいで、一般的に過ぎるように思えた。

「我々のおかれた苦境についての議長の描写は実態には遠く及ばない。こちらが問題の深刻さを隠しては、どうして国王が適切な対応を取ることができようか。異端者の数を現実より少なく報告するのはやめようではないか。どの州にも、どんなに小さな村にも異端があふれているという現状を率直に認めようではないか。刑罰法規がないがしろにされ、当局に対して敬意ももっていないということを包み隠すのもやめようではないか。そんな遠慮が何になろう。それよりも、国王に、共和国はこのままでは長くは立ちゆかないということを正直に告げようではないか。

確かに枢密評議會は異なる見解を表明するだろう。それは現在の混乱が好都合だからだ。司法の腐敗、全国的な裁判官の墮落の原因は、枢密評議會の飽くなき食欲でなくて何であろう。無名から身を立てた顧

問官たちの華美と贅沢は、収賄によらずしてまかなえようか。人々は毎日のように金を積まなければ顧問官に近づけないと不平を言っているではないか。顧問官の内輪もめは、全体の利害に対する配慮など全く念頭がないことの証左ではないか。己の欲望にとりつかれている顧問官たちが公共の福利を顧慮するだろうか。悪名高い検非違使のために、我々総督が兵士とともに常に待機しているとでも本気で思っているのだろうか。

我々から見れば拒んで当然と思えるような人物に乱発している免責や恩赦を自制してもらおうではないか。犯罪を許せば、社会に害をなし、全般的な悪をのさばらせることになるに決まっている。

ぶちあげた話、私としては、国家機密や国政の業務をこれほど多くの評議会に分けるなど考えられないことだ。国務評議会だけで十分こと足りる。心ひそかにそのような思いを抱いている者もいるが、私はここに私の信念として公言する。問題となっている悪弊すべてを解消するに足る唯一の方策は、他の二つの評議会を国務評議会に統合することである。このたびの使節派遣で国王に要請すべき肝要な点はこのことである。それなくしては今回の派遣も今までと同様、全く無意味で無益なものとなるだろう」

こうしてオラニエ公は集まった評議会の前に先に述べた計画を明らかにしたのである。この新たな提案は分けても主としてヴィグリウスに向けられたものであり、突然目を覚まされたヴィグリウスはオラニエ公の憤然とした調子に圧倒されたのだった。

この見解にブリュッセル枢密評議会の枢密顧問官ヨアヒム・ホッペルスが同調した。古風な道德観と非の打ちどころのない実直さを持ち合わせた人物で、議長的身辺でも最も信頼でき最も有能な友人だった。「この人物の回顧録からは本史でもすでにこの時代の多くの描写を利用してきた。この後のスペイン行きのため議長との間に数多くの書簡が交わされ、我々の歴史叙述の最も貴重な資料の一つとなっている。」オラニエ派の要望に応えるため、ホッペルスは使節への訓令に、主として宗教裁判の廃止、三つの評議会の統合に関する若干の追加をした。執政の同意を得たわけではないが、特に反対はなかったというだけであることを進めてしまっ

た。

エフモント伯が議長に告別の挨拶をする段になって、ようやくショックから我を取り戻した議長は、スペインに着いたら議長職辞任の許可を得てくるように頼んだ。自分の時代は終わった。友人にして前任者であったグランヴェルのように、引退してつましやかな一個人の生活にはいることとし、運命の気まぐれにもてあそばれるのを避けたというのだった。ヴィグリウスの才覚をもってすれば嵐が迫りつつあることはわかっていた。それに巻き込まれるつもりはなかったのである。

### 派遣 (1565)

一五六五年一月、エフモント伯はスペインに赴き、同じような立場の者がかつて経験したことのない好意と尊重をもって迎えられた。国王が率先して範を示したため、いやむしろ国王の政治目的に添うため、カステイリア貴族たちも、フランドル貴族に対する積年のうらみは忘れて、エフモント伯の心をつかむべく競って好意を示した。

個人的な事務は国王との間ですぐ望みのままに片がつき、それどころか期待した以上の成果を上げた。滞在期間中を通じて、君主の歓待ぶりはそれだけでも十分自慢になるものだった。国王はネーデルラントの民に対して抱いている愛情についてこれ以上ないというほど力を込めて保証した。そして人々の願いを聞き入れないでもないこと、宗教上の法令の厳しさをいくぶん弱めることについても期待を持たせた。

しかし、それと同時に国王はマドリッドで神学者たちを委員に任命し、「諸州に対し、人々が要求する宗教上の寛容を認める必要があるか」という問題を諮問した。大勢は、ネーデルラント独特の体制および反乱の恐れを考慮するならば、諸州に対してある程度手心を加えることは許されるという見解だった。

そこでより端的な形で再び問題が提出された。「そうしても許されるかどうかを問うているのではない。そうする必要があるかどうかだ」というのである。その必要はないとの答えを得ると、国王は席を立って

十字架の前にひざまづく、こう言つて祈つた。

「全能なる神よ、神を拒否する者に君臨するようなみじめな境遇に二度とあわせたまわなideくください」  
 フェリペ二世がネーデルラントに対してとることを決意した施策は、この理想にほぼ沿つたものとなつた。宗教の教義に関しては、この君主はこれで最終的な意を決したことになる。危急の際に一時的に刑罰法規の適用を緩和することはあつても、正式には今後決して、完全撤回はもちろん、修正さえもすることはない。

異端者の公開処刑がかえつて日々その信徒を増やしていること、死に臨んでの喜悅とさえ言えるほどの勇気を見る者に限りない賛嘆の念を与え、信者をこのような英雄にしてしまふ教義への尊敬の念を目覚めさせていることを、エフモント伯がいくら説いても無駄だつた。この申し立てを国王が全く意に介さなかつたわけではなかつた。ただ、それは意図とは全く違つた効果をもたらした。国王は、勅令の厳しさをゆるめることなくこうした光景が人心を惑わすのを防ぐ打開策を見出した。今後は処刑を非公開で行なうよう命じたのである。

エフモント伯の派遣任務についての国王の回答は執政宛ての返書（四月二日付）として伯に託された。エフモント伯が帰還にあたって謁見した際、国王はグランヴェルに対する態度の説明を求め、とりわけ枢機卿を嘲笑するために考案された使用人の仕着せに触れた。エフモント伯は、いっさいは遊び半分の冗談から発したもので、王権に払うべき敬意をいささかなりとも減じることとは全く意図していなかつたと断言した。

「あの者たちのうちにそのような不忠な考えの者がおりましたならば、この刀にかけても許しはいたしません」

エフモント伯の出発にあたり、国王は五万グルデンの贈り物をし、その上娘が結婚する際には持参金を出すことを約束した。伯にはまたパルマ公子アレッサンドロ・ファルネーゼを託した。母親である執政マ

ルガレーテへの心づかいとしてブリュッセルに送られることになったのである。

国王のうわべのおだやかさ、ネーデルラント国民に対して表明される心にもない好意は、この実直なフランドル人を欺きおこせた。かくも多くの幸を祖国に持ち帰るといふ、実態とはほど遠い幸福感に包まれ、エフモント伯はマドリードをあとにした。善良な国王からのメッセージに接したときの諸州の喜びを考えると満足感もひとしおだった。

## 帰還 (1565)

しかし、ブリュッセルの國務評議會で国王の返書を開いた瞬間、こうした心地よい希望は冷や水を浴びせられた。その内容はこうだった。

「宗教勅令に関する決意は固く、ゆるぎないものであり、その字句を変更するくらいなら一千の命を犠牲にするのもいとわない覚悟である。その一方、エフモント伯の申し立てもあり、人々を異端の幻想から守り、黙っていれば間違いなく降りかかる処罰を避けさせるためにあらゆる穩健な手段を尽くすことも同じく決意している。エフモント伯の話により、現在見られる信仰上の過ちの主たる原因はネーデルラント聖職者の道德の墮落、過った教育、若者に対するなおざりにされたしつけにあることがわかった。

それゆえ、執政にはここに司教三名に適当な数の学識ある神学者を加えた特別委員会を発足させることを命ずる。その任務は必要とされる改革について協議し、今後人々がちよつとしたつまづきによって道を外れたり、無知のために過った道に転落したりすることがないようにすることである。

さらに、異端者の公開処刑が、罪人にいたずらに蛮勇を誇示し、殉教の栄光を気取って一般大衆を惑わす機会を与えているとの情報に鑑み、委員会はこうした処刑のやり方をよりひそやかなものとし、断罪された異端者がその意志の強さを誇示する機会をなくす方策を検討するものとする」

ただし、委員会がその任務を逸脱することがないよう、フェリペ二世は、熱烈なカトリック信仰の持ち

主として信頼できるイーペル司教を名指しして委員の一名として加えることを求めていた。そして審議はできる限り非公開とし、公開が必要な際にはトリエント公会議の議定書の実施を目的としているよう装うものとしていた。これは、一方では聖職者の秘密会議を開くことによつてローマ教皇庁の疑惑を招かないよう、そして他方では諸州における反乱精神の火に油を注がないようにするためであつたと思われる。

その会合の際には執政が、信頼できる忠実な評議会議員の補佐を得て議長を務め、その議事について定期的にフェリペ二世に報告書を送ることとされた。執政の急場をまかなうため、国王は若干の資金も送つてきた。また、国王の行幸についても前向きな姿勢を示していたが、それはマルタ島に迫ろうとしているトルコとの戦争を終結させることが前提だつた（この五月に攻撃を受け、九月に解放）。

国務評議會を強化し、枢密評議會、財務評議會と統合するという提案については、全く何も触れられていなかった。ただ、本史でもすでに熱烈な王党派として登場したアールスホット公爵が財務評議會に議席と投票権を得た。ヴィグリウスは希望どおり枢密評議会議長からの引退を認められたが、後任のシャルル・ド・ティスナックがマドリードでのネーデルラント問題についての評議會のために長いこと帰国できなかつたため、今後四年の間その任を続けざるを得ないことになる。

## 宗教勅令の厳格化——全国的な反抗

### 国王の真意（1565）

エフモント伯が帰国していくらもたないうちに、まるでスペインから伯のすぐあとについてきたかのように厳格な親書（五月十三日付）が届いた。それは君主の心持ちがいい方向に向かっているというエフモント伯がもたらした喜ばしい報せを真つ向から否定するものだった（フェリペ二世の伝記によると、先の国王の返書はエフモント伯もスペインであらかじめ目を通しており、国王の背信を感じたのはこの時点だったとのことである）。それとともにトリエンツ議定書のスペインで承認されたままの形の写しが送られてきて、ネーデルラントでも公布するものとされた。さらにまた再洗礼派その他の異端数名に対する死刑執行令状も届けられた。

ウィレム沈黙公はこう言った。

「伯爵はスペインの手管にまるめこまれたのだ。虚栄心のためいい気になってその洞察力をくもらされ、己の利のために公共の福利を忘れたのだ」

スペイン政府の奸計が今や明らかになった。この信義にもとるやり方はこの地の主だった人々を憤激させた。それを誰よりも身にしてみて感じたのがエフモント伯だった。自分がスペインの二枚舌政策の道具にされ、祖国の期待を裏切っていたことに気づかされたのだ。伯はいまいましてに言った。

「あの見せかけばかりの恩顧は、この私を同胞の笑いものにし、我が名をおとしめるための手管でしかなかったのか。スペインでなされた約束について国王がこういうやり方をする以上、フランドルの政務など誰にでもくれてやる。私としては、公務から引退することでこの背信行為に関わりがないことを示すまでだ」

スペイン政府にとって、この重要人物の信を失うこれほど確実な手段はなかった。伯を敬愛する同胞た



ちの前で、まんまと出し抜いて見せたのである。

この間、例の特別委員会が任命され、全会一致で次の決議をした。

「聖職者の意識改革にしろ、人民の宗教教育にしろ、若者のしつけにしろ、トリエント議定書においてすでに十分に対策が盛り込まれているので、この議定書をできるだけ早く実施するほか、取り立てて必要なことは何もない。異端に関する皇帝の勅令については全く変更の必要を認めない。

ただし、裁判所に関しては、死罪とするのはかたくな異端者や説教師のみとし、宗派によつて差をつけ、被告の年齢、身分、性別、心持ちに対して配慮をするよう内密に指示を出すことは考えられる。公開処刑が實際狂信者をあおり立てるだけであるというのであれば、ガレー船送りという、英雄的なところがなく、目立たないが同じくらい過酷な罰によつて殉教に対する崇拜をうち砕くことができるであろう。単に軽い気持ち、好奇心、不注意から生じた違反については、罰金、追放、あるいは単に鞭打ちを科するのみとしてもよいであろう」

☆

こうした審議の間、さらにそれがマドリードの国王に提出され、その承認の通知を待たねばならない間にも、時間は無為に過ぎていた。諸宗派に対する訴訟手続きは停止されるか、少なくとも実には進められた。グランヴェル失脚以来、上級評議會に蔓延し、そこから州裁判所に広がっていた無政府状態は、宗教問題に関する貴族階級の穩健な心情とあいまって、諸宗派の意気を上げ、その使徒の布教熱に自由な活動を許していた。世俗部門が支持を取り下げたばかりか、多くの場所で犠牲者を保護する挙に出た結果、異端審問官までもがいないがしろにされるようになっていた。カトリック系住民はトリエント公会議の議定書に、そしてエフモント伯のスペイン行きに大いなる期待を寄せていた。特に後者については、エフモント伯が持ち帰り、誠意から怠りなく言い広めていた喜ばしい報せからしてもあてにできるものと思われた。

宗教上の訴追の過酷さから遠ざかっていただけに、それが以前にも増した厳格さで突然復活されたときの痛みはそれだけひしひしと感じられる。司教たちの提案と執政からの最後の照会に答えてスペインから国王の親書が届いた(十一月)のはこうした状況でのことだった。その内容はこうだった。

「国王の口頭での発言をエフモント伯がどう解釈したにせよ、父なる皇帝が三十五年前に諸州において公布した刑罰法規をいささかなりとも変更するということは、国王は一度たりとも考えたことはない。よって、以後、それらの勅令を厳密に実施することを命じる。宗教裁判は世俗部門からこの上なく積極的な支援を受けるものとし、トリエント公会議の議定書はネーデルラントの全州において無条件に最終的なものとして承認されるべし。」

聖職者の意識改革や人民の教育に関してトリエント議定書が導きとなるに十分であるという点については司教や神学者の見解を完全に是認するが、各人の年齢、性別、心持ちに応じた処罰の手加減については同意できない。皇帝の勅令は決して節制を欠いたものではないと思われるからである。かの地において異端がこれまでにはびこったのは、裁判官たちの熱意の欠如と不忠によるもの以外の何物でもない。したがって、今後はこのように熱意のない裁判官はその職を免じられ、より誠実な者に取って代わられるものとする。宗教裁判は人情に流されることなく、確固として何物も恐れず、悩むことなく定められた道を進み、前後を顧みたりするものではない。国王はそのすべてを是認するであろう。宗教上の過ちさえ起こさなければ、どのような手段を取ることも許される」

### 国務評議会の反応 (1565)

オラニエ派がこの後のネーデルラントのすべての問題の根源だとするこの国王書簡は、国務評議会にこの上なく激烈な反応を引き起こした。不注意か故意にか、これについての仲間内での発言が民衆に漏れて恐慌を広めた。スペイン宗教裁判の恐怖が新たな現実としてよみがえった。それとともに自由の転覆とい

う懸念も新たになった。すでに監獄が建てられ、鎖や枷が鑄造され、火刑のそだが集められているような気になった。世間じゅうがこのただ一つの問題でもちきりだった。恐怖はもはやとどまるところを知らなかった。人々は、ローマがかつてブルートゥスに求めたように、風前のともしびとなった自由を救うことを求めて貴族たちの館に貼り札を貼った。新任の司教を拷問吏と呼んで批判する辛辣な風刺が出回り、聖職者は笑劇であげつらわれ、暴言はローマ教皇庁のみならず王室にも向けられた。

乱れ飛ぶ噂に恐れをなした執政は國務評議会議員を呼び集め、この危機にあつて取るべき方策を諮った。意見は分かれ、議論は熾烈をきわめた。執政は恐怖と義務の板ばさみとなつて結論を出すのをためらつていたが、ついに老齡の議員ヴィグリウスが立ち上がつて、一同を驚かせる意見を言つた。

「今国王陛下の親書を公布するのは愚の骨頂であります。それが引き起こすが必定と思われる反応を陛下にお知らせしなければならなりません。その間、異端審問官にはその権限の乱用や過酷なやり方は控えさせるべきでございましょう」

だが、老いた議長はこの言葉が一同を驚かせたとしたら、オラニエ公が立ち上がつてこの助言に反対したときの驚愕はそれ以上であつた。

「国王の意志はあまりに明白に、あまりに疑問の余地なき形で述べられています。これが陛下の熟慮の結果であつてみれば、これ以上その執行を先延ばしにしようものなら、犯罪的なまでの頑迷さとのそしりは免れません」

そこにヴィグリウスが割つてはいった。

「それはこの私が引き受けよう。陛下の不興には我が身を差し出そうではないか。それによつて国王陛下のためにネーデルラントの平和をあげがなえるのであれば、我らの反対はいつの日か陛下の感謝をいただくことになりましょうぞ」

執政はすでにヴィグリウスの進言に傾いていたが、オラニエ公が猛烈に異議を唱えた。

「我々の度重なる進言がいったい何をもちたのだろうか。先の使節派遣でどのような成果が得られただろうか。皆無ではないか！今さら何を待とうというのです。我々国務評議会が国王の不興を一身に負おうというのか。危険を承知で国王に奉仕するつもりでいても、国王がそれに感謝することなどありはしない」決心がつかず、どうしてよいかわからぬまま、沈黙がその場を覆った。誰もオラニエ公に賛同する勇氣はなく、ましてや反論する氣概のある者など皆無だった。だが、オラニエ公は執政の不安に訴え、選択の余地がないと思わせることに成功した。

国王の命令に従うことにした執政の不幸な決断の結果についてはまもなく見ることになる。だが、その一方で、もしこの不幸な決断をしなかったとして、賢明な不服従によって致命的な帰結は避け得たであろうか。結果は同じであったということを証明するだけのことはなかったのではないだろうか。

とにかく執政は二つの意見のうち、致命的なほうを選択した。どういう結果になろうとも、国王の親書は公布されることになった。こうしてこのたびは党派の意が通り、政府の真の味方であるただ一人の人物が主君のためにその不興をもこうむる覚悟で具申した助言は顧みられなかった。この会議をもつて執政の平和は終わりを告げた。こののち絶え間なくネーデルラントを見舞う争乱のいつさいはこの日に始まるのだった。

評議会が散会となると、オラニエ公は身近にいた一人に言った。

「さてと、大いなる悲劇の幕開けだ」

☆

「このときのオラニエ公のふるまいはスペイン派によつてその不誠実の証として、オラニエ公を悪し様に描くのにご利用されてきた。かいつまんで言うとな次のような論理である。

「国王の施策が成功裏に運ばれるかもしれないというおそれがあったこのときまで、発言も行動も宮廷のやることに反対だったその人が、国王の命令を忠実に実行すれば取り返しのない反感を呼ぶことが確実となると手のひらを

返したように賛成に回った。自分の警告を顧みなかった愚を国王にわからせたいがために、『言ったとおりだ』『だから言ったではないか』と吹聴したいがために、それまで唯一至上の目的だと表明していた国民の福利を犠牲にすることさえいとわなかったのである。それまでの行動すべてが勅令の施行は悪だとみなしていることを立証していた。にもかかわらず、一夜にして自らの信念に背き、正反対の道を行く。国民に関する限り、それまでの方針の理由となつた同じ事情は変わっていない。態度を変えたのは、国王にとつての結果が違ふものになると見たからにほかならない。このように、公にとつて国民の福利が君主に対する己の敵意ほどに重きをなしていなかったことは明らかである。国王に対する己の憎しみを満足させるために、国民を犠牲にするのもいとわなかったのである」

しかし、親書の公布を求めたことで国民を犠牲にしたというのは正しいであろうか。より端的に言えば、公布を主張することで勅令を施行したと言えるのだろうか。その逆に、それが勅令の実施を防ぐ唯一の方法だったからと考えたほうがいいのではないだろうか。国民感情は煮詰まっていた。憤激した民衆が一步もあとに引かない反骨精神を示し（ヴィグリウス自身懸念していたと見られるように、そう思う理由は十分あつた）、国王としても引き下がらざるを得なくなつたかもしれない。オラニエ公はこう考えたのだ。

「我が国民は今や専制権力に対抗しうる勢いを得ている。今この時を逃せば、専制君主は裏取引と陰謀の力で得られなかつたものを奸計によつてかすめ取ることだろう。同じ目的は達成される。ただ、いつその用心と配慮をもつて行なわれるだけだ。だが我が国民をして一つの目的に向けて団結させ、大胆な行動に出させることができるのは極限状況のみなのだ」

すなわち、オラニエ公は国王に対してはその言葉を変えただけのことであり、民衆に関してはその行動は完全に一貫していたことは明らかである。それに共和国に対して負っている以外に、国王に対していかなる義務があつたのだろうか。無法行為が今まさにそのなし手に当然の報いをもたらそうとしているときに、それをくい止めるべきだと言うのだろうか。間違ひなく迫っている悲惨から祖国を救うことになる決定的な一步を圧制者が踏み出すことをとどめるのが、祖国に対する務めだと言えるのだろうか。」

## 勅令への反応（1565）

こうして各州の総督に対して国王の命令が下された。皇帝の勅令ならびに現政府の異端に対する政令、トリエント公会議の議定書ならびに先ごろ開かれた司教会議の答申を厳密この上ない形で施行するため、総督は宗教裁判にあらゆる助力をし、その配下の行政機関にも同様に熱を込めてそうさせるよう命じたものだった。目的達成をより確かなものとするため、各総督はそれぞれの参議会から有能な者を選んで頻繁に州内を回らせ、下級官吏がこれらの命令に従っているかどうか厳しく調べ上げ、その綿密な報告を四半期ごとに首都に送るものとされた。

大司教、司教には、トリエント議定書のスペインからの原本通りの写しが届けられ、世俗権力の支援が必要な場合にはその教区の総督はその兵とでも司教たちの指揮下におかれるものとされた。ただし、司教たちが全州総督たる執政から直接兵を受けたい場合はその限りではない。この決定の前にはいかなる特権も通用しなかった。ただし、国王は諸州や都市の個々の域内司法権はこの執行によって制限されるものではないことを望み、そのように命じていた。

これらの命令が各都市で伝令官によって公に読み上げられたときの人々の反応は、議長ヴィグリウスが懸念し、そしてオラニエ公が期待したとおりのものだった。

総督はほぼ全員が従うことを拒否し、服従を強いられば辞任すると宣言した。総督たちの返書はこうである。

「この命令が前提としている異端宗派の信者数の報告は全くの誤りです。司法当局は日々運び込まれてくる犠牲者のおびただしい数に驚くばかりです。管轄区の五万、六万もの人間を火刑で死なせるのはとうてい彼らの任務ではありません」

「異端者の数の推計は二つの陣営の間で大きな隔たりがある。それぞれの利害や思惑の都合上、数の多少のどちらが

望ましいかによるのであり、同じ党派でもその利害が変わると矛盾した数字を挙げた。新たな抑圧手段や宗教裁判所の導入を訴えたい場合には、プロテスタントの数は無数で限りがないとされた。一方、プロテスタントへの寛容やプロテスタントを保護する法令を論じる際には、取るに足りない数となり、そんな少数の不平屋のために新たな制度を設けるには及ばないとなるのだった。」

トリエント議定書に対しては、とりわけ議定書で無知と退廃を徹底的に攻撃された下級聖職者が抗議の声を上げた。議定書はさらに下級聖職者たちが恐れる改革も含んでいた。そのためこれらの下級聖職者は自分たちの個人的な損得のために教会全体の利害にはおかまいなく、議定書、そして公会議そのものをも痛烈に批判し、人々の心に反乱の種を植え付けたのだった。

かつて修道僧たちが新たな司教に対して上げたのと同じ叫びがよみがえった。カンブレー大司教はようやくのことで議定書を布告させることができたが、多大な反対を押し切ったことだった。大司教が聖職者との対立を抱えていたメヘレンやユトレヒトではそれ以上の難事だった。聖職者たちは（批判する側に言わせれば）モラルの刷新に屈するよりは教会全体を破滅に巻き込むことを望んでいたのだった。

☆

諸州の中でもブラバントが最も声を大にしていた。州議會はその議員が外国の法廷で裁かれなことを保証している強力な特権に訴えた。ブラバントの制定法を遵守すると誓った国王の宣誓や、住民が国王に忠誠を誓った際の条件を大きく取り上げた。ルーヴァン、アントワープ、ブリュッセル、スヘルトーヘンボスは文書によって厳粛に抗議し、それを執政に送りつけた。

執政はいつもはつきりせず、各党派の間を行きつ戻りつし、国王の命に従う勇氣もないが、それに背くのはなおのことだった。再び会合を開き、再びその甲論乙駁を聞き、最後には再び最も危険な意見を採用した。国王に新たに照会を出すことが提案されたと思うと、次にはそんな手段は悠長すぎるとの声が出る。危険は切迫している。この危険に譲歩し、自分の責任で国王の指令を今の事態に適応させなければならな

い。

執政は結局、カール五世がこの州に任命した最初の異端審問官の訓令の中に現在の状況の先例がみつからないかと、ブラバントの記録を調べさせることにした。その訓令は目下の情勢と厳密に対応するものではないものの、国王自身、新規の制度を導入するつもりはないと明言していたではないか。こうして新たな勅令を古くからの法体系になじませることが可能となるはずだった。

☆

執政のこの方策は、宗教裁判の完全撤廃を掲げていたブラバント州議会の高い要求を満足させるものではなく、むしろ他の諸州に同様の抗議をし、同じように大胆な抵抗をする契機を与えることになった。公妃マルガレーテにそれについての態度を決めるとまも与えず、諸州は独断で宗教裁判への服従と協力を取り下げた。つい先ごろ、より厳格に任務を遂行するようきっぱりと命じられたばかりの異端審問官は、突然世俗部門から見捨てられ、いつさいの権威といつさいの支援を奪い去られたのである。宮廷に訴えても空虚な言葉が返ってくるばかりだった。すべての党派を満足させようとした執政は、すべてを台無しにしたのだった。

宮廷、評議会、州議会の間でこうしたやりとりが行なわれている間、全国的な反乱精神が人々の間に広がった。人々は、臣下の権利の調査や国王の大権の吟味に乗り出した。人々はしばしばはばかりことなく、こんなことを口にするようになった。

「ネーデルラント人は臣下の君主への、君主の臣下への責任を知らないほど無知ではない。今はまだその気配もないが、力によって力をはねのける手段はきつと見出されるであらう」

アントワープではいくつかの場所に立て札が立てられたが、それはスペイン国王が宣誓を破ってこの地の自由を侵害したとして市参事会にシュパイアー高等法院への告訴を求めるものだった。ブラバントはブルゴーニュ圏の一部であり、パッサウとアウクスブルクの宗教和議を享受できる立場にあったのである。



やはりこのころ、カルヴァン派がその信仰告白を公表し、その国王に宛てた前文において、自分たちの数は十万にも上るが、それでも静穏を守っており、他の住民と同じようにこの地のあらゆる税も支払っていることを述べ、反乱などを企んでいないことは明らかであると断言した。大胆で煽動的な文書が人々の間を飛び交った。それはスペインの暴政を最も憎むべきものとして描き、国民にその特権を、そして時にはその力を思い起こさせるものだった。

フェリペ二世のトルコに対する戦備、そしてブラウンシュヴィイク公エーリヒが近くで行なっていた（誰もその目的はわからなかった）戦備は、ネーデルラントに武力で宗教裁判を押しつけるのではないかと、の噂に真実味を与えた。主だった大商人たちの多くは、家も商品も捨ててこの地で失われた自由を求めて新天地に旅立つといったことを話していた。他の者は指導者を求めてあたりを見渡し、武力抵抗や外国の援助といったことをそれとなく口にするのだった。

### III 貴族の動向（1565）

この困難な情勢にあつて、執政はついに全く助言者の一人もなく孤立無援になる。現在不可欠と言える唯一の人物であり、この苦境に追いやった張本人とも言える人物にも見限られたのである。オラニエ公ウイレムはこう書いて寄越した。

「今となつては、内戦に火をつけることなく国王の命令に従うことは全く不可能です。どうしても言うなら、私に代わり、陛下のご期待に応えうる、国民の心により大きな影響力をもつ他の誰かにお命じいただくようお願いするほかありません。これまで国王のために常変わらずお仕えしてきた熱意を思い起こしていただければ、このたびの私の行ないが悪し様に解釈されることはありますまい。現在の状況では、祖国と自分自身に害をなすのを避けようとすれば、国王への服従をやめるしか選択肢は残されていないのです」

これをもってオラニエ公ウィレムは國務評議會を辞して所領のブレダに退去した。ウィレムは自領にあつて沈黙のうちに目を光らせ、完全に閑居することなく事態のなりゆきを見守ることになる。ホールネ伯もその例に倣つた。

エフモント伯だけは、常に共和国と王座との間をゆれ動き、常によき市民と従順な家臣を両立させようと無益な試みに心を砕いていた。

エフモント伯にとつては、他の誰よりも君主の恩顧は捨てるに忍びがたいものであり、軽々に決断できる問題ではなかった。執政の宮廷で今開けようとしている輝かしい未来を捨てる気にはなれなかった。これまでオラニエ公がその卓越した知性によつて執政に対する影響力をもつていた——それは偉大な精神が劣つた精神に対してもたずにはいられないような力だった。オラニエ公の引退によつて執政の信頼に空白ができ、それをエフモント伯が、臆病と善良という二つの弱さの間に自然に生じる同情の力により確実に我が手にしようとしていたのである。

執政としては、公然たる党派の指導者との緊密な関係によつて国王の不興を買うことを恐れるのと同じくらい、国王の支持者に排他的な信をおくことによつて民衆の反感を買うことも恐れていた。となれば執政が信をおく人物として、ほかならぬこのエフモント伯ほどおあつたえ向きの存在はありそうもなかった。エフモント伯はどちらの党派に属しているとも言い切れなかったのである。

第三部

ネーデルラントの反乱

## 貴族連盟

### 下級貴族 (1565)

この時点までは、オラニエ公、エフモント伯、ホルネ伯らも本心から国の平和を望んでいたと言えるだろう。公共の福利とともに、君主の真の利益ともなるものを追求してきた。少なくともその努力や行動は、前者のためになるのみならず、後者とも相反するものではなかった。その動機を疑わせたり、その反抗精神を浮き彫りにしたりするような事件はまだ何も起こっていなかった。これまでしてきたことは、自由な国家の一員として、国民の代表者として、国王の助言者として、そして誠意と名誉を旨とする人としての当然の務めであった。宮廷による権利の侵害に抗するために用いた武器は諫言であり、控えめな不平であり、陳情だった。正義感に駆られるあまり分別や節度を越えることもなく、限度を超えてしまうことがたびたびの党派精神とは一線を画していた。しかし、今や共和国の並みいる貴族はその思慮の声に耳を傾けようとはしなくなっていた。もはや節度の枠内に留まっていられない者が出てきたのである。

国務評議会で国の行く末という大問題が論じられ、その宣誓せる代表が理性と正義を力の基盤とすべく総動員し、その一方で中産階級や庶民が不平や威嚇、罵りをむなしく吐露するばかりでいるなか、国民のうちでも最も注目されず、その支持など誰もあてにしていなかった層が動き出した。フェリペ二世が即位のときにその奉仕も窮状も考慮する必要を感じなかった一群の下層貴族である。

こうした下級貴族の大半は、単なる名誉心などではない、ずっと切迫した理由から取り立てを願っていた。多くの者は負債にどっぷりつかっており、自分の収入だけでは抜け出せる見込みはなかった。したがって、フェリペ二世は官職任命でこうした下級貴族を素通りすることによって、誇りなどよりもずっと切実な点で不満を買ってしまったのである。こうした困窮者を無視することによって、時間を持て余して国王の事跡を容赦なく批判する監視人を、悪意ある噂を集め広める人々を作り出してしまったのである。

羽振りが悪くなっても自負心は衰えていない下級貴族たちは、やむを得ず、自分たちの人格と不可分に結びついた唯一の資産——品格と共和国におけるその名の重み——を活用することにした。こうした時代なればこそ通用する「貴族の保護」という貨幣を流通させたのである。今や自分たちに残されている唯一のものであるだけに重要となった自尊心ゆえに、下級貴族は自分たちを宮廷と市民の間の強力な仲介勢力と見なし、自分たちを最後のたのみと待っている圧政下の共和国を救いに駆けつけることが使命だと信じていた。こうした考えは下級貴族のうぬぼれに関する限りはこっけいきわまりないものだが、それから引き出すことのできる実利の点では十分意味があった。

ネーデルラントの富の主要な部分を握っているプロテスタント商人層は、自分たちの宗教を妨げられずに実践するためにはいくらつぎ込んでも惜しくはないと考えていた。商人層にとって、市場で買い手を求めており誰も手をつけていない下級貴族層を利用しない手はなかった。他の時代であったなら富者のおごりから歯牙にもかけなかっただろう下級貴族も、今はその人数、勇気、大衆の間での名望により、そして政府に対する敵意——というより赤貧にある自尊心と絶望と——によって役立ってくれそうに思われた。こうした事情で、商人たちは下級貴族と連携を密にするよう努めた。同時に、反乱に向かう心持ちを丹念に育て、高い自負心をあおり、そして何より重要なことに、時宜を得た金銭援助と輝かしい約束とによってその貧困を利用した。

下級貴族は、落ちぶれたといっても全く利用価値のない者はまれで、自分自身でなくても、少なくともより高位の、より権勢のある貴族とのつながりによってなにがしかの影響力はあった。それに全体としては、団結することさえできれば、王権に対してでも無視できない声を上げることができた。その多くはすでに新教に帰依しているか、ひそかに傾斜していた。熱烈なローマカトリック教徒でさえも、トリエント議定書や宗教裁判に反対するに足る政治的、あるいは個人的な事情があった。そして最後に、下層貴族たちは、自分たちが共和国においてなにがしかの存在になりうる唯一の機会を逃さないほどの虚栄心を持ち

合わせていたのである。

☆

ただし、下層貴族全体としての協力には大いに有望だったが、その誰か一人を取り出して期待をかけるのは無益だし、ばかげたことだった。一堂に集めるだけでもよほどのことがなければかなわなかったが、幸いにも偶然がそのような機会をもたらした。

ネーデルラント貴族の一人モンテニー男爵の婚礼、パルマ公子アレックスandroの婚礼がこのころ相次いでブリュッセルで行なわれ、町には多数のネーデルラント貴族が集まった。この機会に親族は再会し、新しい親交が生まれ、旧交が新たにされた。話は国を覆う窮状でもちきりで、ぶどう酒によるほろ酔い気分でも心もおおらかになった。連帯や外国勢との同盟といったこともそれとなく口にされた。こうした偶然の会合はまもなく秘密の会談となった。社交の場での論議はひそかな談合となった。

さらにホレ伯、シュヴァルツェンベルク伯という二人のドイツ人貴族がこのころネーデルラントを訪れており、しきりに隣国からの支援の期待をあおるのだった。

ナッサウ伯ルートヴィヒ（オラニエ公ウィレムの弟）も少し前にいくつかのドイツ宮廷を訪問してその動静を探っていた。「オラニエ公がフランクフルトでのローマ王選出に立ち会うために突然ブリュッセルから姿を消したのも理由のないことではなかった。多くのドイツ諸侯が集まる場は格好の交渉場所だったに違いない。」

さらに、名高いユグノーの海将コリニエ提督の密使がこの時期ブラバントで目撃されたと言われたことがあるが、これについては疑問視する理由がある。

政治危機が革命の好機だとすれば、今がまさにそれだった。施政を預かるのは女性で、不満を抱く州総督は手綱をゆるめがちだった。国務評議会のほとんどの議員は全く役立たずで、たのみとすべき軍隊もない。保持されている若干の兵はかねて給金未払いのため不満を抱いており、幾度となく空虚な約束にだまされてきたため、今さら新たに約束されても言うことは聞かなかった。その上、この兵を指揮する士官た

ちは宗教裁判のことは忌み嫌っており、そのために剣を抜くだけでも赤面しただろう。そして最後に、国庫には新たに募兵したり外国兵を雇ったりする金はないのだった。

ブリュッセルの宮廷、そして三つの評議会は、内部の不和によって分断されていたばかりでなく、腐敗が蔓延しており、金でどうとでもなった。執政には全権がなく、国王は遠隔だった。ネーデルラントには政府の味方は少数で、不確かで、熱意も欠いていた。党派のほうは数多く、強力だった。民衆の三分の二が教皇主義に憤慨しており、変化を望んでいた。これが政府にとつて不幸な弱点だった。そしてなお悪いことに、こうした弱点を敵は熟知していたのである。

これほど多くの人の心を共通の目的の追求に向けてまとめ上げるにはやはり指導者が必要だった。そしてその計画に政治的な重みをもたせるには若干の有力者の名前が必要だった。この役割を果たしたのが、ナッサウ伯ルートヴィヒであり、ヘンドリック・ヴァン・ブレデーローデであった。いずれもネーデルラント貴族のうちでも最も輝かしい家系に属していたが、自分からこの大業を先導する役割を買って出たのだった。

☆

ナッサウ伯ルートヴィヒ（オラニエ公の弟）は、これほど気高く、重要な舞台に登場するに足る資質を兼ね備えていた。学問を修めたジュネーヴでは教会体制への憎しみとともに新しい信仰への愛着を吸収し、祖国に戻ってからは仲間にこうした考えを広めるのを怠らなかった。大学で感化を受けた共和主義的な熱意は、ルートヴィヒのうちにスペインと名のつくものすべてに対する強い嫌悪感をはぐくんできた。それはルートヴィヒの行動一つ一つの活力の源となり、最期にたおれるそのときまで失うことはなかった。ルートヴィヒの頭の中では教皇主義とスペイン支配は一つのものであった（実際やっていることもそうであったが）。その一方に抱く嫌悪は他方に対する反感を強めることにもなった。

兄弟はその好き嫌いは似通っていたが、それを表わす仕方には大きな隔たりがあった。兄が目的に向か

う迂遠な道は、若く熱気あふれる弟にとつては拷問のようなもので耐えられなかった。冷徹な眼力が兄をゆつくりと、だが着実に目標に導き、その柔軟な分別は目的のためには他のすべてを曲げさえする。弟の向こう見ずなまでの激しさは立ちふさがるものすべてをうち倒すが、それは時に成功をもぎとるものの、破滅を加速させることのほうが多かった。このため、ウイレムは將軍だったが、ルートヴィヒは一発屋以上のものではなかった。聡明な頭脳の指揮を得て初めて信頼できる強力な右腕となるのである。

ルートヴィヒが一度した約束は永久に有効だった。その盟約は世のあらゆる変転でも変わらなかった。たいていが切迫した情勢のもとで結ばれたもので、不幸による結びつきは浮かれた喜びによるものよりも堅いのである。ルートヴィヒは兄のことを愛し、また己の大義をも愛した。そしてついにはこの後者のために死ぬことになるのである。

☆

ヘンドリック・ヴァン・ブレーデロー——ヴィアーネン領主、ユトレヒト城伯——は、かつて主権君主としてホラント州を支配したホラント伯の血を引いていた。こうした由緒ある肩書きもあってブレーデローデは民衆に慕われていた。人々の間では歴代の領主の記憶が息づいており、その後の変化によって得たものが少ないと感じるにつけそうした記憶は価値あるものとなっていた。この先祖伝来の光輝に持ち前の自尊心をふくらまされ、何かという先祖の栄光を口にするブレーデローデは、現在の境遇から先の見通しが暗くなればなるほど、零落したかつての権勢を夢見るようになるのだった。

実力からも高貴な出自からも申し分のない資格のある（と自分では思っていた）名誉や官職から除外されたブレーデローデは（与えられたのは軽騎兵一個中隊だけだった）、政府を憎み、誰はばかりなくその施策を大胆不敵な悪口で攻撃するようになった。それにより民衆の心をつかんだ。また、ひそかに福音派を庇護していたが、それは信念からというよりは、それが異端とされていたからだだった。能弁というよりは多弁、勇敢というよりは無謀で、勇ましくはあったがそれは危険にうち勝てるというより危険を認識し



ないためだった。

ナツサウ伯ルートヴィヒは擁護する大義のために燃えていた。ブレーデローデはそれを擁護することによつて栄光を得たいのだった。前者は信念のために行動できれば満足だったが、後者は自分が先頭に立たなければ気がすまなかった。

反乱という踊りの先導役としてはこれほどうってつけの人物はないが、指導者としては最悪だった。その威勢の基盤は取るに足りないものだったが、大衆の思い込みをもつてすれば、ブレーデローデをホラント州の継承者として担ぎ上げることでも脅威としての重みを与えることもできたはずだ。祖先の所領に対する要求は空虚な名前ではない。だが人心に蔓延する不満にとつては名前だけでも十分だった。この時期に民衆の間に流布していたあるパンフレットはブレーデローデを公然とホラント州の継承者と呼び、それに掲載された銅版画は次のラテン語の銘を高らかに掲げていた。

我はブレーデローデ、バタウィー族の賤しからぬ出なり

栄光あれ、剛毅が一つのページで閉じることなからんことを

### 貴族連盟 貴族盟約 (1565)

この二人のほかにネーデルラント貴族のうちで抜きん出た者として、若き伯爵カール・フォン・マンスフェルト（最も熱烈な王党派の一人としてすでに紹介した人物の息子）、キュレンボルフ伯、ベルヘン伯、バーテンブルフ伯、トウールーズ「フランシュコンテにある領地」領主ヤン・ヴァン・マルニクス、シント・アルデホンデ領主フィリップス・ヴァン・マルニクス「ヤン・ヴァン・マルニクスの弟」を挙げることができる。

この六名が他の若干名とともに、一五六五年十一月なかば、ヴァン・ハンメスという金羊毛騎士団の紋章官の家で連盟を結成した。この六名がこの場所で、かつて一握りの同志がスイスの自由を勝ち取ったよ

うに、祖国の運命を定めたのだった。そしてこの連盟が四十年にわたる戦争の口火を切り、自らは決して享受することのなかった自由の礎を築いたのだ。この連盟の目的を述べた次の宣言には、フィリプス・ヴァン・マルニクスが最初に署名した。

「さるよこしまな者どもが敬虔な熱意の仮面をかぶり、実際には貪欲と野心から出た邪悪な助言を行なつて我らの慈悲深い国王を説き伏せ、この地方にいまわしい異端審問の宗教裁判所を導入させた。（このよくな裁判所は、人間と神のあらゆる法に反し、残虐さにおいて異教徒の野蛮な制度さえもはるかに凌駕するものである。異端審問官を他のあらゆる権力の上に置き、人を永遠の隷属状態におとしめ、その罠によつて善良な市民を絶えざる死の恐怖にさらすのである。なぜなら、この制度のもとでは聖職者でも、不実の友でも、スペイン人でも、あるいは単なるごろつきでも、いつでもこれと思う者を法廷に引き出させ、拘置させ、断罪させ、処刑させることができるのである。しかも被告は告発者に対面することも、無実の証拠を提出することも許されないのだ。」

それゆえに、我ら下名の者は我らの家族、我らの財産、我らの身体の安全をはかることを誓ひ合つた。我らはこの目的のため神聖なる連携によつて相互に義務を負ひ、団結する。そして厳肅な宣誓によつて、この裁判所がこの地方に導入されることに對し、力のあたう限り反対することを誓う。その試みが公然と行なわれようと内密に行なわれようと、またいかなる名のもとに偽装されようとこの決意は変わるものではない。

我らはまた同時に、我らの主君たる国王に對していかなる不法なことも企てていないことを宣言する。むしろ国王大権を支持、擁護し、平和を維持し、反抗という反抗をできる限り抑えることが我らの変わらぬ目的である。この目的に従ひ、我らは政府を神聖なものと見なし、言葉においても行動においても尊重することをすでに誓つており、今ここに再び誓うものである。全能なる神よご照覧あれ！

さらに、我らはいかなる時、いかなる場所においてであれ、この盟約において述べる条項に関わるあら

ゆる攻撃に対して互いを防衛することを神かけて誓う。我らはここに、我らの迫害者が行なういかなる訴追も、反乱、煽動その他いかなる名で粉飾してあらうとも、告発された者に対する我らの誓いを無にした、なされた約束を自分たちから免除したりする力はないことを誓い合った。

宗教裁判に抵抗してなされるいかなる行為も反乱の名で呼ばれるいわれはない。したがって、そのような罪科で逮捕される者は誰であつても力の限り支援し、あらゆる可能な手だてを尽くしてその解放を実現すべく努力することをここに誓う。その際には他のすべての行動においてと同様、ただし異端審問の宗教裁判に関しては特に、連盟の多数の見解、また我らが全員一致によつて顧問や指導者に指名する人物の決断に服するものである。

この証として、またこの連盟の確認のため、我らは天地およびその内なる万物の創造者で、心や良心、思考に通じたまい、我らの純粹さをご存じであられる生ける神の神聖なるみ名にかけて誓う。我らの試みが成功と榮譽に恵まれるよう、主に聖霊のお力をこいねがう。主の名の栄光のために。そして祖国の恵みととしえの平和のために」

この盟約はただちに数か国語に訳され、またたく間に各州にばらまかれた。

短期間で加盟者を増やすため、盟約に加わった各人は友人、親族、支持者、家来を集めた。盛大な宴が催され、まるまる何日も続いた。苦難のどん底にあつても享樂生活への性向を抑えられない快樂好きな国民には逆らえない誘惑である。

こうした宴に顔を出した者は誰もが——どんな人でも歓迎された——親しみを込めて友情を保証され、ぶどう酒が回つてくると大勢に流され、猛烈な雄弁の熱意に説き伏せられるのだった。多くの手が署名まで導かれた。二の足を踏む者は非難され、臆病者は脅され、忠誠心のささやきはわめき声で圧倒された。何だか知らずに名前を書いている者さえいて、ずつとあとになつて初めてばつ悪そうに尋ねるのだった。その場の熱狂が有無を言わさなかつた。多くの者は軽い気持ちで宴にやつてきた。卑小な者は輝かしい

団結に惹かれ、臆病な者には数がその気にさせた。うさんくさい手段も用いられ、オラニエ公、エフモント伯、ホールネ伯、メーヘン伯などの署名と印章が偽造され、この計略で連盟は何百もの加盟者を得た。とりわけ標的とされたのが軍の士官だった。武力行使に発展したときに軍隊の保護を得るためである。この計略は多くの者、特に下級士官に対して有効だった。ブレードローデ伯などは考える時間がほしいと言った旗手に対して刀を抜いたこともあった。

あらゆる階級、身分の人々が署名した。宗教は関係なかった。カトリックの神父でさえ連盟に加わった。動機はまちまちだったが、口上はみな似通っていた。カトリック教徒なら単に宗教裁判の廃止と勅令の緩和を望んでいた。プロテスタントなら究極的な良心の自由を求めている。一部の大膽な者が企んでいたのは現政府の完全な転覆以外の何物でもなかった。最下層の者は卑劣にも全体的な混乱に希望をかけていた。このころシュヴァルツェンベルク伯、ホレ伯のための送別の宴がブレダで、次いでホーフストラーテンで催され、主だった貴族を多数これらの地に呼び集めた。その中には盟約にすでに署名した者もいた。オラニエ公、エフモント伯、ホールネ伯、メーヘン伯はこの後者の宴に出席していたが、特に申し合わせがあったわけでもなく、連盟に関わってもいなかった。それでもエフモント伯の秘書の一人、他の三名の貴族の従者の一部は公然と参加した。この催しでは三〇〇名もが盟約に加盟した。

そして執政の前に出るのに武装して行くべきか、非武装で行くべきか、宣言書を持て行くか請願書にするかといった問題が議論された。ホールネ伯、オラニエ公が（エフモント伯はそもそもこの計画をよく思っていないかった）この点についての審判者として意見を求められた。二人が結論として勧めたのは穏健と恭順の道だった。それでもこの役割を引き受けたことで、連盟の大膽な企てをなかば公然と認めたとの非難に口実を与えることになるのだが、とにかく二人の助言に従って、非武装で請願という形で奏上することになり、ブリュッセルに集まる日時が決められた。

## 宮廷の内幕 (1565-66)

この貴族たちの共謀について初めて執政の耳に入れたのは首都に戻ったばかりのメーヘン伯だった。

「陰謀が企てられており、三〇〇もの貴族がかんています。宗教に関するもので、一味は宣誓によつて団結し、外国からの支援をあてにしております。まもなくご自身でその実態をご覧になることでありましよう」

メーヘン伯は強く迫られてもそれ以上のことは言わなかった。

「ある貴族が口外しない約束でうち明けてくれたことです。私は名誉にかけてそれを誓いました」

実のところ、執政の要望に応えようとしなかったのは、おそらく名誉がどうのという問題よりも宗教裁判に対する反感からだったのだろう。宗教裁判を助長するようなことをする気はさらさらなかったのだ。メーヘン伯に続いてエフモント伯が執政に盟約の写しを届け、若干を除外して共謀貴族の名を伝えた。ほぼ同じころ、オラニエ公が書いてきた。

「聞くとここでは軍勢が集められており、四〇〇の士官がすでに決まり、二〇〇〇の兵が武器を携えてまもなく現われる模様です」

このように噂は意図的に誇張され、誰もが危機を大げさに伝えていた。

こうした驚くべき情報に啞然とした執政は、ただひたすら心配に駆られるままに、その時点でブリュッセルにいた国務評議会議員を急遽召集した。同時に、オラニエ公とホールネ伯には急使を送り、国務評議会への復帰を求めた。

二人が着く前に執政はエフモント伯、メーヘン伯、ベルレモン伯と現在の危機的な状況にどう対処すべきかを相談した。問題は、武力に訴えるか非常事態に屈し連盟の要求を認めるかだった。あるいは約束だけ与えて応じる姿勢を見せ、スペインからの指示を得、金や兵を集める時間をかせぐことも考えられる。

第一の策については必要な資金が、そしてそれ以上に必要な軍隊の信頼性が欠けていた。軍隊にもすでに連盟の手が回っているかもしれないのだった。第二の策が国王に認められないことは明らかだった。それに連盟の貴族を抑えるどころか士気を高めることになりかねない。それに対して、適切な柔軟さを見せ、このたびの件についてただちに無条件の恩赦を与えれば、反乱を萌芽のうちにすみ取ることができると思われた。この最後の案はメーヘン伯、エフモント伯の賛同を得たが、ベルレモン伯は反対した。

「噂は実態を誇張しております。それほど大規模な軍備がそれほど秘密裏に、それほど短時日のうちに準備できるはずがありません。二、三人の狂信者にときつけられた一握りの無法者の寄せ集めにしかすぎぬことでございます。何名か首をはねてやればおとなしくなるものと思われます」

執政はまもなく開かれることになっている国務評議会の意見を待つことにした。そしてその間も手をこまねいていたわけではなかった。各地の最重要拠点の防備の点検が行なわれ、必要な修理がただちに実行された。外国宮廷に派遣されている大使は警戒を強めるよう命令され、スペインには急使が送られた。同時に、まもなく国王の行幸があるとの噂を改めて広め、外見上は泰然として攻勢を待ち受ける姿勢をとり、それに屈するそぶりはつゆほども見せなかった。

☆

一五六六年三月の末（盟約の締結から四か月がたっていたことになる）、ブリュッセルで国務評議會の全議員が集まった。出席者はオラニエ公、アールスホット公、エフモント伯、ベルヘン伯、メーヘン伯、アーレンベルク伯、ホルネ伯、ホーフストラーテン伯、ベルレモン伯ほか伯爵数名、モンティニー領主、アシクール領主、金羊毛騎士団の全騎士、そして議長ヴィグリウス、枢密顧問官ブリュセル、その他の枢密顧問官だった。

陰謀の目的についてより詳しい情報をもたらさずさまざまな文書が提出された。執政のおかれたあまりの窮状に不平派は力を得、この機に乗じるのをためらわなかった。長年抑えてきた鬱憤を晴らすかのように、

口々に宮廷や政府への痛烈な批判を浴びせた。オラニエ公は言った。

「つい最近、国王はスコットランド女王メアリーのイングランドに対する企ての支援として四万金グルデンを送りましたが、その一方でネーデルラントが負債にあえぐのは放置しております。この資金援助がいかにも時宜を得ず、無駄に終わったこと「金はエリザベス女王の手に落ちた」はさておくとしても、なぜわざわざ友人として大切で、敵としては恐るべきイングランド女王の怒りを招くようなことをなさるのでしょうか」

オラニエ公はこの機に国王がナッサウ家に対して、とりわけオラニエ公に対してひそかに抱いてきた憎悪に触れることさえ遠慮しなかった。

「国王が我が一族の宿敵と謀って、手段を選ばず私を排除しようとしていることは明らかであります。ただ好機が訪れるのを今や遅しと待っているのです」

オラニエ公の先例に続いてホールネ伯ほか多くの者が口を開き、口をきわめて己の功績や国王の忘恩について述べ立てた。執政は苦勞してようやく騒ぎを鎮め、議論を本題に戻すことができた。問題は、宮廷に請願を持参すると伝えられている連盟を引見するかどうかである。

アールスホット公、アーレンベルク伯、メーヘン伯、ベルレモン伯はその提案に異を唱えた。ベルレモン伯は言った。

「ちよつとした覚え書きをもたらずのに五〇〇もの人数が必要とはいかに。相容れない恭順と反抗が同居しているようなもので、ろくな結果にはなりません。一味のうちから人品いやしからぬ人物を一人寄越させればよいではありませんか。大げさな騒ぎも、思ひ上がりもなし。ただ書類を提出すればよい。そうであれば門を閉ざし、執拗にはいり込もうとする者がいないよう厳重に監視するのです。もし実力行使に出るようなら、一味のうち最初に罪を犯した者を死刑にするがよろしいでしょう」

息子が連盟に加わっていたマンスフェルト伯も、党派に反対の立場を明らかにし、息子にはただちに連

盟を脱退しなければ相続から外すと脅してあると話した。

メーヘン伯、アーレンベルク伯も請願を受け取るのに消極的だった。だが、オラニエ公、エフモント伯、ホールネ伯、ホーフストラーテン伯などは熱烈にそれを勧めた。

「連盟に加わっている者が名誉ある清廉の士であることは知られているとおり。その大半は我々とも友情や血縁によってつながりがあり、その行動についてはあえて認めることとしたい。請願の提出はすべての臣下に認められていることです。国の最も下層の人々にも認められている権利をかくも声望ある集団に拒むのは、不正でなくて何でありましょう」

多数決による議決の結果、非武装で参上し、静穏にふるまうことを条件に、連盟の引見を認めることになった。議員たちの口論に多くの時間が浪費されたため、さらなる協議は次の会合に持ち越さなければならず、翌日、再び評議会が開かれた。

☆

前日のように無益な不平不満のうちに議論の筋が見失われることのないよう、執政はすぐさま本題にはいった。

「伝えられるところによるとブレーデローデが宗教裁判の廃止と勅令の緩和を要求する連盟の名による奏上文を携えてこちらに向かっているということです。これにどう対応するかについてこの評議会の判断の導きを得たいと思います。これについて意見を述べていただく前に言っておきたいことがあります。

そなたたちの中にも我が父皇帝の宗教勅令を公然と非難し、非道で野蛮だと人々に説いてはばからない者があると聞いています。では尋ねますが、そなたたち自身、金羊毛騎士団の騎士、枢密顧問官ならびに国務評議会議員のおの方が、その当の勅令に賛成票を投じたのではありませんか。議会がそれを合法と認めたものではありませんか。以前正しいと宣言されたことが、どうして今非難されるのでしょうか。これまで以上に必要になったからだとでも言うのでしょうか。ネーデルラントではいつから宗教裁判が異例の



ものになったのでしよう。皇帝がそれを創設したのはまる十六年も前のことではありませんか。どの点でそれが勅令より残忍だというのでしよう。もし勅令が配慮のたまものだと思えるなら、もしそれが議会の多数の同意によつて承認を得たものであるならば、この宗教裁判への反対はどうしたことでしょう。宗教裁判は、文字通りに遵守されれば勅令よりもはるかに人道的なものなのではありませんか。

では、自由に意見を述べてください。このことで結論に杵をはめようとは思いません。ただ、そなたたちの務めは、感情に流されぬようにすることです」

国務評議会はいつものように両派に分かれた。だが宗教裁判や勅令の文字通りの執行を擁護した少数の声は、オラニエ公を筆頭とする反対派の多数に葬られた。オラニエ公が口を切った。

「天の采配により脅威がいまだ遠いうちに私の主張が顧慮されていたならば、極端な手段に頼らざるを得なくなるまで事態が悪化することはなかったものを。過つた信仰をもつ人々が、矯正のための施策によつてかえつて深みにはまることもなかったはず。我々はみな、肝要な一つの点においては一致しています。誰もがみなカトリック教の安泰を願っています。この目的が宗教裁判の力なしに達成できるならばそれでよし。我々は財産も生命もそのために投げうつでありましょう。だが、お聞きのようにまさにその点で我々多数は意見を異にしているのです。」

宗教裁判には二つの種類があります。一つはローマ教皇庁が我がものとしている宗教裁判、もう一つはいにしえより司教によつて行使されてきた宗教裁判。思い込みと慣習の力により、後者は軽く、耐えられるものとなっています。ネーデルラントでもそれに対する反対はほとんどなく、司教の増員によつて有効に機能することと思われまふ。なのになぜ執拗に前者を導入しようとするのでしょうか。その名前だけで我らのあらゆる感情が逆なでされるようなものを。多くの国ではそのようなものなしでやっているのに、なぜ我らに押しつけられねばならないのでしょうか。

これはルター以前には誰一人知らなかった制度です。それを皇帝が導入した。だがそれは精神的な監督

者が不足しており、数少ない司教はあてにならず、人間感情を知らない聖職者が判事の職から除外されていた時代のことです。今やすべてが変わり、司教の数も州の数にまで増員されています。どうして政府の政策を時代の精神に見あったものに適応させられないのでありましょうか。

我々に必要なのは過酷ではなく穏和です。人々の反感は明らかです。それが反乱として暴発しないようにするには、人々の思いをなだめることをしなければならぬ。ピウス四世の死とともに、異端審問官の全権委任状は無効となっています。新教皇はまだその権限の承認状を送つてきておらず、それなしでは本来誰も職権を行使できないはず。したがって、今こそ、誰の権利も傷つけることなく、宗教裁判を停止できる好機なのです。

これまで宗教裁判について述べてきたことは勅令についてもあてはまります。かつて時代の必要がそれを求めていたとしても、その時代はすでに去ったのです。長きにわたる経験によりようやく学び得たことは、異端に対して火刑や剣ほど無意味な手段はないということです。過去数年間に限っても諸州において新教がいかに広まったことか。その普及の原因を調べて行き当たるのは、己が犠牲となつてまで信条を貫く人々の神々しさです。同情と賛嘆の念に駆られた人々は、かくもゆるぎない勇氣を出して守ろうとする信仰こそが真実なのではないかと、口にしないまでも感じはじめているのです。

フランスやイングランドでは同じ過酷な仕打ちがプロテスタントに対して加えられてきたものの、ネーデルラント以上の成功を収めたと言えるかどうか。ごく初期のキリスト教徒も、殉教者の血が教会の種となると誇らかに語ったではありませんか。キリスト教がかつて遭遇した最大の敵であったユリアヌス帝もその真理をよく知っていた。迫害が熱意に火をつけるだけとの信念から、ユリアヌス帝は嘲笑と愚弄に訴え、それが武力よりはるかに強力であることを見出したのです。

ビザンティン帝国ではさまざまな時代にさまざまな異端の教師が現われた。コンスタンティヌス帝時代にはアリウスが、コンスタンティウス帝時代にはアエティウスが、テオドシウス帝時代にはネストリウス



具申が無駄に終わらなかったのは、軍備の破滅的な状況や国庫の枯渇のため、武力によって押し通すという反対の路線は不可能だったという現実を負うところが大きかった。

当面嵐の猛威を避け、政府の態勢を整えるのに必要な時間をかせぐため、連盟の要求の一部を認めることが合意された。また、皇帝の刑罰法規を緩和することも決議された。もし皇帝本人がその日評議会の場に現われたとしても間違いなくそうしただろうと思われ、実際、治世中一度は現在とよく似た状況にあつて、それが皇帝の尊厳にもとるものとは考えないという態度を示したことがあつた。宗教裁判は現在その制度がない地域に新たに導入されることはないとされ、従来からあつた地域でもより穏健な姿勢で臨むか、完全に効力を停止されるものとされた。その理由として挙げられたのは、(当局が恐れをなしたとか、請願が承認されたなどといった祝勝の口実をプロテストにいささかなりとも与えないよう)新たな教皇からまだ承認されていないという点だった。この国務評議会の結論をただちに文書にするよう枢密評議会に指示が出された。こうして準備を整え、連盟を待ち受けるのだった。

## 乞食党

### 貴族連盟の請願（1566）

連盟の参加者が近づいているとの知らせがブリュッセルじゆうに広まったとき、國務評議会の議員たちはまだ立ち去っていないかった。連盟は騎馬二〇〇でしかいなかったが、噂によりその数は大幅に誇張されて伝わった。執政は狼狼のあまり、大臣たちに、乱入者に対して門を閉ざすべきか、避難して身を守るべきかと相談した。いずれの案も不名誉として却下された。結局のところ、貴族たちの静かな入市で暴力に対する恐れは静まった。

到着後最初の朝、貴族たちはキュレンボルフ邸に集まり、ブレーデローデの指揮に従い、参加者は他のどんな義務よりも互いのために優先し、必要とあらば武器を取ることも辞さないことを改めて誓い合った。この会合でスペインからの手紙が披露された。それによると、みなが名を知っており、高く評価しているあるプロテスタントが生きたまま火刑にされ、じわじわと殺されたとのことだった。似たような前置きをいくつかした上で、ブレーデローデが一人一人名指しして、自分たちならびに不在者の名において新たな宣誓をし、古い宣誓を確認することを求めていった。

翌一五六六年四月五日が請願提出の日と決められた。参加者の数は今や三〇〇から四〇〇に上った。そのうちには高位の貴族の関係者も多く、国王や執政自身に仕える者もいた。

ナッサウ伯、ブレーデローデ伯を先頭に貴族たちは四列縦隊をなして宮殿に向かって進んだ。ブリュッセルじゆうがこの異様な光景を固唾をのんで見守った。ここに見える一団は、請願者にしてはあまりに大胆かつ不敵であり、先導する二名は懇願するというたちの人物ではなかった。その一方、反乱というにはそぐわない整然とした静けさがあった。

執政は評議会議員、金羊毛騎士団の全員に囲まれてこの一行を迎えた。ブレーデローデが丁重に口上を

述べた。

「ここに妃殿下の前に参りこしましたるこれら高貴なネーデルラント人は、自分たちのみならずまもなくやってくる大勢の名において、請願を提出したいと存じます。その重要性とともにその謙虚なことはこの厳肅な行進が証明しております。この集団の代表者として、私どもの請願書をお受け取りいただきませうようお願い申し上げます。祖国の福利や国王の權威と相容れない内容はいっさい含まれておりません」  
ここでマルガレーテが言った。

「もしこの請願が本当に祖国の安寧、国王の權威に反することを含んでいないのであれば、間違いなく認められることでしょう」

ブレーデローデが先を続ける。

「私どもの団体に疑わしい意図を勘ぐり、それによつて妃殿下の心証を害しようとする者がいたのは腹立たしく、慚愧に耐えません。それゆえ妃殿下にはかくも重大な訴えをした張本人の名を明かし、しかるべく形で公に訴え出させていただきますよう、それによつて罪あると判明した者が当然の処罰を受けるよう望むものであります」

執政は答えた。

「むろん、連盟の好ましくない目的や盟約の噂を聞いて各州の総督に注意を呼びかける必要を感じはしましたが、そのことに他意はありません。ですが、そうした情報の出どころを明かすことは決してありません。」そして執政は不快感をあらわにして付け加えた。「私に国家機密の漏洩を要求する権利は誰にもありません」

執政は連盟に対し、請願への回答を受け取りに翌日出頭するよう指示し、今一度評議会との相談に臨んだ。

請願文にはこうあった（高名なバルドウインが起草したとも言われている）。

「私どもはこれまで国王陛下への忠誠を欠いたことはありません。今もそのようなことは思いもしておりません。しかし、たとえ主君の不興を買うことになろうとも、強権的な宗教裁判の導入や長く執拗に追求される勅令が祖国にもたらそうとしている危険な結果について、これ以上陛下がご存じないままにしておくことはできません。

長いことこれらの問題に対処するための全国議会が招集されるものと期待して己を慰めておりました。ですが、この希望さえ消えた今、執政にこの危険についてご注進申し上げるのが務めと思うに至りました。このため妃殿下には、好意的で事情に通じた人物をマドリッドに派遣し、国王に全国民の要求に応えて、宗教裁判を廃止し、勅令を撤回し、その代わりに全国議会の場にて新たにより人道的なものを起草させるよう説得させていただきたくお願いいたします。ただし、その間、国王の決定を知らされるまでは、勅令を緩和し、宗教裁判の効力を停止するようお願い申し上げます」

「もしこの謙虚な要請が顧慮されないようであれば、不幸な展開となったとしても、神も、国王も、執政も、評議会議員各位も、私どもが本分を尽くしたことの証人となつてくださるものと信ずるものであります」

☆

翌日、連盟は同じように隊列を組んで、しかしいつそう大勢となつて（この間にベルヘン伯、キュレンボルフ伯が支持者とともに合流していた）回答を受けるべく執政の前に現われた。回答は請願書の余白に書かれており、このような内容だった。

「宗教裁判や勅令の効力を完全に停止することはたとえ一時的であつても執政の権限を越えることである。しかし、連盟の願いに応え、貴族の一名をスペインにある国王のもとに派遣し、また請願事項につい

て影響力の及ぶ限りの支援をする。その間については、異端審問官には節度をもつて職務を遂行するように勧告する。ただし、その返礼として連盟の側でも暴力行為は慎み、カトリックの信仰を害するようなことを企てないことを期待する」

こうしたあいまいで一般的な約束は連盟を満足させるものではなかったが、それでも第一段階としては常識的に望みうる最大限のものと言えた。請願が認められるかどうかが連盟の主目的ではなかった。現在のところ、足場を得たこと、認知された存在となったことだけで十分だった。今後反乱精神はこの上に立脚し、必要とあらば政府にゆさぶりをかけることもできる。このため連盟は計画に従って行動し、回答に満足し、あとは国王の御心に任せることとした。実際、この請願の茶番全体は連盟のより大胆な計画を、その本性を現わすに足る力を得るまで隠蔽しておくためだけに考えられたもので、重要なのは、この偽装を続けられること、請願が順調に受理されることであり、すみやかに承認されることではなかった。

三日後に提出した新たな覚え書きでは、執政に対し、連盟がしたことは務めを果たしただけであり、ひとえに国王に奉仕しようとする熱意からきたものであったとの書面による確認を求めた。公妃が確答を避けると、代表者を送って謁見で直接この要請を繰り返させた。執政の答えはこうだった。

「連盟の意図について判断を下す前に、時をおいて、今後のふるまいをじっくり見させてもらいます」

## 12 食党 (1566)

祝宴をその発端とする連盟は、祝宴によつて完成した形を与えられた。二度目の請願が提出されたまさにその日、ブレーデローデはキュレンボルフ邸で連盟の参加者を饗応した。三〇〇名ほどの客が集まった。ほろ酔い気分が勇気を与え、その大胆さは数が増えるにつれて高まった。

そんなとき、たまたま一人が、再び請願が届けられたと聞いて目に見えて青ざめた執政にベルレモン伯がフランス語でささやくのを漏れ聞いたことを披露した。



「乞食（フランス語ではギュー、オランダ語ではヘーゼン、ドイツ語ではゴイセン）の一団など恐れることはございませぬ」

実際、下級貴族の多くは資産の管理が悪く、まさに乞食の名に値していた。目下最も頭を悩ませていたのが団体の名称だったこともあって、みなこの表現に飛びついた。企図の不遜な部分を卑下のうちに包み、同時に請願者としての性格にもかなううってつけの称だった。たちまちこの名のもとに杯が交わされ、「乞食党万歳」の叫びに満座の喝采がかぶさった。

食事のあと、ブレードローデは、当時のさすらいの巡礼や托鉢修道僧が持っていたような袋を首から下げて登場し、一同の連盟への参加を感謝したあと、その場にいる一人一人のために財産も命も投げ出す覚悟があると誇らかに宣言し、一同全員の健康を祈念して木のジョッキから飲んだ。全員が声高く同じことを叫び、ジョッキが回され、各人がそれに口をつけて同じ誓いの文句を繰り返した。一人一人に乞食の金袋が配られ、それぞれ自分用の釘にかけた。

この余興の騒ぎに引かれ、ちようど館を通りかかったオラニエ公、エフモント伯、ホールネ伯がはいってきた（参内のためホーフストラーテンを呼びに来たらしい）。三人はホストのブレードローデから杯を共にするようしきりにせがまれた。

「エフモント伯はのちに弁明書にこう書いている。「だが我々が飲んだのは小さなグラス一杯だけで、そのときの叫びは『国王万歳、乞食党万歳』だった。私が乞食党の名を聞いたのはこのときが初めてで、もちろん喜びはしなかった。だがあの難しい時代にあつては、心ならずもしなければならぬことはよくあつた。私は罪のない余興としか思っていないかった。」」

この三人の有力者の入場で参加客たちの喜びは新たになり、そのお祭り気分は度を超していった。多くの者は酔いが回り、参加客も給仕人も区別がなくなり、まじめな者とふざけた者、酔った絵空事と国政論議とが道化芝居のようにごちゃまぜになった。国を覆う窮状はらんち騒ぎの土台となった。

ことはこの場だけにとどまらなかった。ほろ酔い気分での決意をしらふの時に実行に移そうとした。民衆に対し、守護者の存在をはっきりと示し、党派の熱意を目に見える形で掲げてやる必要があった。この目的のためには乞食党の名を大々的に示し、その親交の証を利用することほど望ましい手だてはなかった。数日のうちにブリュッセルの町には、托鉢修道僧や痛悔者が着るような灰色の衣があふれた。連盟の参加者はみな家族や家中の者全員にこの服を着せた。一部の者は薄く銀をきせた木の椀、同様のカップやナイフを、一言で言えば乞食たる者の道具一式を帽子につけたり、ベルトからぶら下げたりして身につけていた。首にはのちに乞食銭と呼ばれる金貨もしくは銀貨をかけた。それは一面には国王の肖像とともに「国王に忠実なれ」との銘が、反対側には組み合わせた二つの手が食料囊を抱えており、「乞食の袋に至るまで」との文句が見えた。

ネーデルラントで今後教皇主義と決別し、国王に対して武器を取る者すべてが名乗ることになる「乞食党」という名称の起源はこのようなものであった。

### 穩健路線 (1566)

連盟の参加者は別れ別れになって各州に散らばる前に今一度公妃の前に現われて、スペインからの国王の回答が到着するまでの間、民衆を過激に走らせないためには異端に対する寛大な路線が必要であると注進した。そして、もしこれに反するやり方をして事態が悪化しても、自分たちは進言によって務めを果たす努力はしたことを忘れないようにと付け加えた。

執政はこれに答えて言った。混乱が起る余地のないような施策を行なうつもりではいるが、もしそれにもかかわらず争乱になったとしたら、その原因は連盟以外に考えられないだろうと。こうして執政は、連盟のほうでも約束を守ることを、とりわけこれ以上新たな加盟者を加えず、秘密の会合をもたず、前例のないことを始めないよう、真剣に警告した。そして連盟を安心させるため、秘書官のベルティに異端審

問官や世俗の裁判官に宛てた書簡を見せてやるよう指示した。それは、異端の罪に世俗の犯罪が加重されていない場合には節度を勧告するものだった。

ブリュッセルを出発する前に、連盟の加盟者のうちから連盟の事務の面倒を見る四名の総務が、そしてさらに各州一名の幹事が選出された。若干名がブリュッセルに残り、宮廷の動向に目を光らせることになった。

ブレーデローデ、キュレンボルフ、ベルヘンもとうとう五五〇の騎馬に付き従われて町を出た。三人の指導者は城門を出たところで今一度マスケットの斉射で表敬してからそれぞれの道に別れた。ブレーデローデはアントワープへ、他の二名はヘルダーラントへの道を取った。

執政は、アントワープの市当局にブレーデローデのことを警告すべく急使を送った。ブレーデローデが着いてみると、千以上もの人々が投宿先の宿に詰めかけていた。なみなみとつがれたぶどう酒の杯を手窓辺に出たブレーデローデは人々に話しかけた。

「アントワープ市民のみなさん。私は財産と生命の危険を冒して、みなさんを宗教裁判の重圧から解放するためにやってきました。もし私とともにこの計画に参加し、私を指導者として認めるならば、このみなさんへの乾杯を受け、証人のしるしに手を上げていただきたい」

こう言ってブレーデローデが人々の健康のために乾杯すると、手という手が上げられ、歓喜の叫びがこだました。この劇的な一幕ののち、ブレーデローデはアントワープを発った。

☆

貴族の請願が届けられた直後、執政は枢密評議会に、勅令を、国王の命令と連盟の要求の中庸を行く新しい形で起草し直させていた。次なる問題は、一般に穩健路線と呼ばれていたこの緩和された形をただちに公布するか、まず国王に提出して承認を得るかだった。オラニエ公は第一の案を支持したが、枢密評議会は、このように重大な一步を、それも主君の明確な指示に反することを事前に知らせもせず行なうこと

は危険すぎるとして反対した。

それに、この穩健路線でも国民が満足しない恐れがあった。そもそも人々が求めていた議会の召集なしに策定されたものなのである。そこで議会の同意を得るため、というよりむしろ議会から同意をかすめ取るため、執政は巧みにも問題を各州に個別に諮った。

最初はアルトワ、ナミュール、ルクセンブルクといった自由の浸透していない地域である。こうすることにより各州が互いの反対運動を鼓舞することを防ぐのみならず、自由の根付いているフランドル、ブラバントといった州を賢明にも後回しにすることによって、そうした州までもが他州の先例に押し流されるように仕組んだのである。この上ない不法なやり方によって諸都市の代表は不意をつかれ、民意を問うこともできないうちに同意がもぎ取られ、いつさいの経緯について箝口令が敷かれた。こうした手法により、執政はいくつかの地方では穩健路線への無条件の同意を勝ち取り、他州でも若干の変更だけで同意を取りつけた。

ルクセンブルク、ナミュールは問題なく批准した。アルトワ州議會は、偽りの情報提供者には応報の刑罰が下されるという条件を追加しただけだった。エノー州議會は、その地方に認められた特権と真つ向から対立する財産没収の代わりに別の適当な処罰を導入することを要求した。フランドルは宗教裁判の完全廃止を要求し、告訴された者に自分の州に上訴する権利が保証されるよう求めた。ブラバント州議會は宮廷の謀略により出し抜かれた。ゼーラント、ホラント、ユトレヒト、ヘルダーラントは最も重要な特権を享受している諸州であり、それを護持する警戒心も最大だったが、これら諸州には最初から意見が求められなかった。

各州裁判所にも新たに起草された穩健路線についての検討が求められたが、スペインまで届かなかったところを見るとその具申は好意的なものではなかったと見てよいだろう。

この穩健路線——実際にその名に値する内容であつた——の主要な論点から、もともとの勅令がどうい

ったものであったかをうかがい知ることができる。穩健路線にはこうある。

「異端宗派の著述家、その代表と伝導師、またこれらの者をかくまったり異端の集会を幫助、隠蔽したりした者、世間を乱した者は絞首刑にされ、その財産は（その地方の法が許せば）没収される。ただし、その過ちを棄てることを誓えば罪を減じて剣による斬首とし、その遺産は遺族に残される」

子を思う親の愛に対するむごい罫である！

条文はさらに続く。より軽い異端は悔悛すれば赦免される。悔悛しない場合には国外追放が科されるのみで財産は没収されないが、他者を惑わすことを続ければこの規定の恩恵は受けられなくなるものとする。ただし、再洗礼派はこの条項の適用から除外するものとし、根本的な悔悟によって購わない限り、その財産の喪失を宣告される。そして再犯、すなわち異端に逆戻りした場合には慈悲を与えることなく死罪に処すものとする。

この条文に見られる、勅令よりも一歩進んだ生命や財産の尊重は、スペイン政府の姿勢の変化のためと思いたくもなるが、貴族たちの断固とした反対によって余儀なくされて勝ち取られたものでしかなかった。それに、この「穩健路線」は根本的な悪制度の基盤を何一つ取り除いておらず、ネーデルラントの人々が満足するものではなかった。人々は不満のあまり、「穩健路線」(Moderation)ではなく「強権路線」(Moordeation)と呼ぶのだった。オランダ語で *moord* とは「殺害」の意である。

このようにして議会の同意がもぎ取られると、穩健路線は枢密評議会に提出され、その署名を得てスペインの国王に送付された。国王の承認を得て法律としての効力を得るためである。

## 使節派遣 (1566)

連盟との間で合意されていたマドリードへの使節派遣は、当初ベルヘン侯「貴族盟約の最初の署名者の一人であったベルヘン伯ウィレムと混同しないよう注意」に託されることになっていたが、目下の国王の心持ち

に確信がもてないベルヘン侯は、このように微妙な交渉を一人で背負うのが気が重いこともあつて補佐役を求めた。

その役としてモンティニー男爵に白羽の矢が立てられた。モンティニー男爵は以前にも似たような任務について、立派にやり遂げたことがあつた。だが、それ以後状況は大きく変わっており、この二度目のマドリード行きがどのように受け入れられるか懸念するの無理はなかった。そこでモンティニー男爵は公妃との間で身の安全をはかる取り決めた。執政が事前に君主に書状を送り、その間、自分自身は同僚とともにゆつくりと旅をし、途中で国王からの返答を受け取れるようにするというのである。

あたかも守護神がマドリードで待ち受ける恐ろしい運命から男爵を救おうとしたかのように、不測の障害によつてその出発は遅らされた。ベルヘン侯がテニスボールが当たつたけがのため、すぐには出発できなくなつてしまつたのである。しかし、モンティニーは執政からのたつての懇請を受けて一人で出発した。しかし、その結末は、人々の負託をスペインで果たすのではなく、そのために死すこととなるのである。

### オラニエ公一派の動向（1566）

この間、ネーデルラントでの事態は大きく動いていた。先に貴族たちがとつた行動は政府との間の完全とも言える断絶を招いており、オラニエ公やその味方としてもこれ以上、これまで共和国と宮廷との間で維持してきた慎重な中道的態度を続け、これほどにかけ離れた両者に義理を尽くすことは不可能だと思われた。その信念からすれば、この抗争に参加せずにいるのはよほどの自制を要したに違いない。その生来の自由を愛する心、愛国心、寛容主義はその公の職務のために課される束縛にさぞ苦悩したに違いない。その一方で、フェリペ二世の不信感、具申に対する長年の変わらぬ軽視、公妃マルガレーテの人を軽んじる処遇といったことのため、奉公の熱意も冷め、あれほどの嫌悪を押さえて務めてきたのに一向に報われない職務を続けていくことへの抵抗もさぞや大きくなつていたことだろう。

この思いはスペインからもたらされる情報によっても強められた。それによると貴族連盟の請願に対する国王の強い不快感も、それに際してオラニエ公たちがとった行動についての不満も、疑いないところだった。さらに、国王は近々新たな施策に乗り出すものと見られていたが、それは祖国の自由の支えであり、連盟参加者にも友人、血縁を多くもつオラニエ公の一派としては与し得ない性質のものとなると思われる。いた。

貴族連盟がスペインでどのような名で呼ばれるかに、今後取るべき道がかかっていた。もしも請願が反乱と呼ばれるようであればもはや選択の余地はない。準備が整わないのを承知で思い切つて宮廷に向かつて本心を宣言するか、さもなくば利害を共にし、心情をも同じくする人々を敵として扱うのを助けるかしかなかった。

この危険な選択を避けるには公務から完全に手を引くしかなかった。一部の者は以前実施したことがある方策だったが、現在の状況にあつてはそれは単なる急場の策ではなかった。

全国民の注視の目がこの一派に注がれていた。その信念には限らない信頼が、その人格には個人崇拜にも近い全国的な敬意が寄せられており、この人々が採用した大義は崇高なものとなり、棄てられた大義は地に墜ちる。この人々が国務に携わつていたことが、たとえそれが名目的なものでしかなかったとしても、反対派を押さえ込んでいた。この人々が国務評議会に出席していた間は、かろうじて穏健な手段の成果が期待され、実力行使は回避されていた。この一派が承認を控えていたことで、たとえそれが本心からのものでなかったとしても、党派は自信を失った。逆に、これほど重みのあるお墨付きが得られる希望がかすかにでもあれば、反対派はただちにその本領をいかになく發揮するだろう。これらの人物の手を通せば好意的に迎えられて成功すること間違いなしの同じ政府の施策が、その関与なしでは疑われ、不毛なものになる。国王の譲歩でさえこれら民衆の友が勝ち得たものでなければ、その効力の主要な部分を失うのだった。

それに、この一派が国務から完全に手を引けば、執政は最も必要としているときにその助言を取り上げられることになる。しかも、それにより宮廷に盲従し、共和制の機微も知らない一派が力を得れば、問題を悪化させ、民心の憤激を極限にまで追いやるだろう。

こうしたすべての動機が（そのどれを重視するかはオラニエ公を好意的に見るかそうでないかの立場による）みな一様にオラニエ公に執政を見限り、公務への参与をいっさい取りやめるようにし向けた。

この決意を実行に移す機会はすぐやってきた。オラニエ公は新たに修正された勅令をただちに公布するよう主張したが、執政は枢密評議会の提案を容れてまず国王に送付することにした。オラニエ公はさも憤激しているように装ってぶちまけた。

「これではつきりしました。私が何を助言しようとことごとく不審の目で見られてしまう。国王としても、忠義を信じられないような家臣などいますまい。私としても、受け取る気のない君主にご奉公の押し売りをする気はさらさらない。私が公務から身を引くことがお互いにとつて最善なようです」

ホールネ伯もほぼ同じ趣旨のことを表明した。エフモント伯は、医師の指示だとしてアーヘン（エクス・ラ・シャペル）の湯治場に行く許可を求めた。もともと本人は（告發文書の述べるところによれば）いたって健康に見えたのであるが。

このような行動が必ずや招くであろう結末に恐れをなした執政は、オラニエ公に厳しく言った。

「私のいさめも公共の福利も、そなたに決意をひるがえさせるのに足りないとしても、己の評判のことはもう少し大切になさい。ナッサウ伯ルートヴィヒはそなたの弟。そのルートヴィヒとブレーデローデ、連盟の頭目がおおつびらにそなたの客人となっていました。請願は実質的にそなた自身の国務評議会での主張と同じです。今、国王の大義から離反すれば、誰が見てもそなたが陰謀を助長していることになるのではありませんか」

オラニエ公がこのとき実際に国務評議会から去ったとする記録は見あたらない。しかし、もしそうだと



しても、すぐ気を変えたものと思われる。このすぐあとにまだ公務についていることがわかつていのである。エフモント伯は執政のいさめを聞き入れたらしい。ホールネ伯だけが実際に領地の一つに引き下がった「そして三か月の間活動を控えた」——二度と皇帝にも国王にも仕えない決意で。

### 乞食党の躍進（1566）

この間、乞食党員は諸州の間にちらばり、行く先々で自分たちの運動の成果を都合のいいように脚色して吹聴した。その言うところによれば、宗教の自由が十分に保証されたことになっており、その発言を裏付けるため、真実で足りない部分はまやかして補った。たとえば、偽造された金羊毛騎士団の文書では、今後何人たりとも政治犯罪を犯さない限り、宗教上の理由だけの投獄、追放、死刑を恐れる必要はないと厳かに述べられた。さらに政治犯罪が加わった場合でも連盟だけが裁判権をもち、その規定は国王が議会とともに別の取り決めをするまで効力をもつものとされた。

金羊毛騎士団は最初のデマ情報がいりやただちに国民の誤解を解こうと熱心に努めたが、偽情報は短時日のうちにすでに党派に重要な貢献をしていた。真実の影響が一瞬だとすれば、偽りでもこれだけの時間もただけで真実の代わりとなれるのである。それに、たとえ事実でなくてもふりまかれた噂は、執政と騎士団の間に不信の念を目覚めさせ、プロテスタントに新鮮な希望を与えて勇気づけるよう計算されていた。その一方、刷新を考えていた人々には見せかけの正当性を与える役をした。信じはしないにせよ、その行ないのうわべを飾る役には立ったのである。

この偽りの幻想はすぐ化けの皮がはがれたが、通用していたわずかな期間の間に、途方もないことをいくつも誘発し、制御のきかない放恣をそこにもたらしたため、もはやあと戻りは不可能だった。すでに動き出した路線を維持することは、絶望のみならず惰性から必要とならざるを得なかった。

逃亡していたプロテスタントは、状況好転の報せに接するや、不本意ながら去らざるを得なかった郷里

に戻ってきていた。隠棲していた者たちは隠れ家から出てきていた。これまで胸中でのみ新教に信奉してきた者はこうした寛容政策に勇を得て今や新教への帰依をおおっぴらに宣言していた。どの州でも、乞食党は宗教と自由の柱と呼ばれ、その名は高らかに称揚された。

同志は日々増加し、多くの商人もその記章を着用しはじめた。商人は乞食錢に変更をもちらした。十字に組んだ二本の遍歴杖を入れたのだが、それはあたかも、宗教を守るためにはいつでも家屋敷をなげうつ用意があると言っているかのようなだった。

乞食党連盟の結成は物事に全く異なる形を与えることになった。個々人のわめきでしかなかったためこれまで無力で見下されてきた庶民のつぶやきが、恐るべき一つの形にまとめ上げられ、団結によって力を、方向性を、そして永続性を獲得したのである。反乱を志向する者は誰もが畏敬すべき強力な団体の一員と自覚するようになり、大胆な考えでもみなが不満を持ち寄るこの場所に持ち込めば安全だと感じるようになった。連盟に大切な同志が加わったと言わればうぬぼれ屋は悪い気はしなかった。巨大な奔流のうちに埋没して、人目につかず、責任もないことは臆病者には魅力だった。

連盟が国民に示した顔は、宮廷に向けたものとは全く異なっていた。その目的がこの上なく純粹なものであったとしても、建て前どおり実際王権への敵意がなかったとしても、大衆が目をとめるのはその行動のうちの違法な部分のみだった。そんな大衆にとつては崇高な意図も何もないのである。

## プロテスタントの公然化

### プロテスタントの三宗派

ネーデルラントでユグノーやドイツの新教徒が思想というその危険な商品をさばく市場をみつけるのに今ほどの好機はなかった。主だった都市は怪しげな来訪者、変装した諜報員、あらゆる異端宗派の使徒であふれ返った。正統教会から分離して誕生した諸宗派のうち、ネーデルラント諸州では主に三つの宗派の伸張が著しかった。

まずフリースラントやその近辺は再洗礼派が席卷した。ただし、再洗礼派は三派のうちでは弱小宗派で、管理機構も組織もなく、兵力もなく、その上内輪の争いが続いていることもあつて脅威は最も小さかった。ずっと重要なのが南部諸州、とりわけフランドルで主流となつているカルヴァン派である。カルヴァン派はユグノー、ヘント共和国、スイス諸州、ドイツの一部といった近隣地域に強力な味方があり、その教えは若干の違いを除けばイングランド王室でも信奉されているものだった。数の上でも特に商人や一般市民の間では最大だった。そもそもこの一派の教義を広めたのは主としてフランスから放逐されたユグノーだった。

ルター派は数の上でも富の上でもこれには劣っていたが、貴族階級に多くの信者がいることで重みがあった。主としてドイツと境を接するネーデルラント東部を勢力下においており、北部の若干の地方でも優勢だった。ドイツの有力諸侯がその同盟者であり、帝国における宗教の自由がネーデルラントにおいても有効であるとするその主張には理があると言えた（ブルゴーニュ協約によりネーデルラントも帝国に属していた）。

アントワープがこれら三宗派の合流点だった。この地では群衆が異端者を包み隠し、あらゆる国民が混ざり合ううちに自由が醸成されていた。各派の間には、教皇主義、とりわけ宗教裁判、そしてその道具で

あるスペイン政府に対する等しく消したい憎悪のほかは何も共通点はなかった。しかし、各宗派が互いに向ける猜疑の目そのものがその熱意をきたえ、狂信の赤熱が冷めるのを防いでいたのである。

### 穩健路線の拡大解釈

執政は、穩健路線の構想に対する国王の裁可を待つ間、乞食党を懷柔するため、各州の総督や地方官吏に異端に対する訴追を当面緩和するよう勧告した。これまでこの陰惨な処罰の職務に携わつてきながら嫌悪感を感じずにはいられなかった多くの者は、この指示を熱心に実行し、極限まで拡張して解釈した。地方上層部の大半は心中では宗教裁判やスペインの暴政には反感を抱いており、ひそかに新興宗派のいずれかに帰依している者も多かった。そうでない者でも仇敵スペイン人の機嫌をとるために同胞が虐待されるのはごめんだった。こうして誰もが意図的に執政の指示を誤解し、宗教裁判も勅令も完全に放棄されたも同然となった。

### 公然説法の始まり（1566）

この政府の自制が乞食党の巧みな宣伝と相まってプロテスタントを表舞台に引き出した。いずれにせよ、これ以上潜んではいられないほどの勢力になっていた。これまでは夜間に秘密の集会をもてること満足していたが、今やおおつびらにそうした集会をもつ危険を冒せるだけの数も力もあると考えるに至つたのである。

まもなくフランドル全土に広がるこの大胆な試みは、アウデナールデとヘントの間のどこかで始まった。青天のもとでの説教に人々を引き出した最初の人物はオーヴァーエイセル生まれのヘルマン・ストリツカーという元修道僧で、大胆不敵かつ熱心、才気煥発にして堂々たる押し出しで、流々たる弁舌の持ち主だった。この試みには新奇さもあつて七〇〇〇ほどの会衆が集まった。その地域の判事は勇敢ではあつた

が思慮に欠けていたようで、剣を抜いて群衆に分け入り、説教師を捕らえようとしたのだが、他に武器とてない群衆が石を投げつけたためさんざんな目に遭わされた。重傷を負って倒れた判事は、懇願して命が助かっただけでも幸運だった。

最初の試みのこの成功が二度目に勇気を与えた。アールスト近郊で、今度はもつと大勢が集まったが、今回は長剣、火器、鉾槍で武装しており、集会場に至るすべての道には歩哨を配置し、手押し車や荷車でバリケードまでつくっていた。たまたま通りがかった者も、望むと望まざるとにかかわらず札押に参加しなければならなかった。そのために集会場の周りには監視役が配置された。入り口には書籍商が陣取り、プロテスタントの教理問答書、教化用の小冊子、司教たちへの風刺を販売した。説教師ヘルマン・ストリッカーは、手押し車や木の幹を用いて即席につくられた説教壇から語りかけていた。その上に張ったカンバス地の日よけが日差しや雨を防ぎ、人々はその説教の一部たりとも聞き逃さないよう風下に立った。話の呼び物は教皇主義の罵倒だった。近くの川から水が汲んでこられ、新生児の洗礼はそれ以上のものものしい儀式なしに行なわれた。キリスト教初期の習慣に従ったものとの触れ込みであった。ここではサクラメントはカルヴァン派のやり方に従って施された。男女が夫婦として結ばれ、婚姻の解消も行なわれた。この集会に参加するため、ヘントの人口の半分が市門を出てやってきた。

こうした例はやがて他の地方にも広がり、まもなく東フランドル全域に及んだ。西フランドルからはペリンゲン出身の別の修道士くずレピーテル・ダテヌスが現われ、同じような活動をした。ある時は一万五〇〇〇もの会衆がその説教のために村々から集まった。数で気が大きくなった群衆は、数名の再洗礼派が殉教のために留置されていた監獄に押し入った。

トゥルネーではカルヴァン派フランス人アンブロシウス・ヴィルがプロテスタントの人々を同じような騒動に駆り立てた。人々は同じように囚人の解放を迫り、認められなければ町をフランス人に引き渡すと脅した。町は無防備だった。守備隊は裏切りを恐れた隊長が城塞に引き上げてしまい、その上兵たち自

身も同胞に矛先を向けることを拒んでいたのである。新教徒たちはその豪胆をさらに進め、市内の教会の一つをプロテスタントに供することを要求した。それが拒否されると他の都市の例に倣って実力行使でプロテスタントの礼拝の法的承認を勝ち取るべく、ヴァランシエンヌ、アントワープと同盟を結んだ。

これら三都市は互いに密接な連携をとり、いずれにおいてもプロテスタントは同じように勢いがあつた。とはいえ、誰も単独では悶着を起こす気にはなれなかつたので、時を同じくして公然礼拝を開始することにした。

ブレードローデがアントワープに現われたことがその勇気を決定づけた。指定された日には、六万の老若男女が町を出ててんやわんやとなり、母はまだいとけない子まで引つ張つていった。

トウルネーとヴァランシエンヌでも同じことが起こつた。

集会場のまわりには荷車をしつかりつなげて列がつくられ、その背後には目立たぬように武装した者が配置された。襲撃から礼拝を守るためである。説教師にはドイツ人もユグノーもいて、ワロン語で語つた。その一部は最下層の出で、この神聖な事業が天職だと信じ込んだ職人までいた。もはや司直の權威からも、法からも、捕縛吏の出現からもおびやかされることはなかつた。

多くの者は、あれほど騒がれた外国人がどのような新しい珍奇な教義を語ってくれるかとの単なる好奇心からやつてきていた。ジュネーヴでの慣習に従つてフランス語の歌詞で歌われていた賛美歌の響きに引かれて来ただけの者もいた。多くの者は説教を聞きにきたといつても愉快な見せ物に引き寄せられたようなもので、教皇やトリエント公会議の教父たち、煉獄、その他もろもろの正統教会の教義がおもしろおかしくこきおろされるのをあてにしているのだつた。それは極端にやればやるほど、庶民の耳には心地よい。そして他者よりも抜きん出て突拍子もない話をした弁士には、まるで劇場のように満場の拍手が送られた。それでも、このようにして正統教会に投げかけられた嘲笑は、聞く者の心に全く影響を与えなかつたわけではなかつた。嘲笑のうちにしばしばまぎれ込んでいる一握りの理性もまたしかりである。真実を求める

気などさらさらなかった多くの者も、そうと知らずにいくばくかのものを持ち帰ったのである。

こうした集会は何度か繰り返され、そのたびに人々の大胆さは度を増していった。しまいには、礼拝を終えてから説教師たちの家までついていくのに武装した騎馬隊の護衛をつけた凱旋行列を仕立て、これ見よがしに法を愚弄するようにまでなるのだった。

### アントワープでのオラニエ公の仲裁（1566）

アントワープの市参事会は矢継ぎ早に公妃に急使を送り、当地を訪れて実状を見、可能なら短期間でもアントワープに留まってほしいと懇願した。それが不穏分子の不埒な行ないと市の完全な荒廃を防ぐ唯一の手だてであり、主だった商人は略奪を恐れてすでに町を去る準備をしているというのである。国王の威光に傷をつけるわけにはいかなないのでこのような危険な賭けに応ずるわけにはいかなかったが、代わりにメーヘン伯を送って市当局と守備隊の導入について交渉させることにした。ほどなくしてこの訪問の目的をかぎつけた暴民がメーヘン伯を取り囲んで騒々しく叫び立てた。

「こいつが乞食党の憎んであまりあるかたきだってことはわかってるぞ。牢獄とか宗教裁判とかを持ち込もうってんだらう。すぐこの町から出ていけ」

騒ぎはメーヘン伯が市門の外に出るまで静まらなかった。

この町のカルヴァン派は今度は市当局に陳情書を提出した。もはや数が増えすぎて秘密裏に集会をもつことはできないとして市内に専用の礼拝所を要求したものだった。

市参事会は公妃自らが当地を訪れて窮地を救ってくれるよう、あるいは少なくともオラニエ公を送ってくれるよう新たに要望を出した。オラニエ公は民衆がいささかなりとも聞く耳を持つ唯一の人物で、アントワープ城伯という世襲称号によってアントワープの町とは特別なきずがあるのだった。これ以上事態が悪化するのを避けるため、執政は気が進まないながらもこの二番目の要求に応じてオラニエ公にアント

ワープを託すはなかった。公務からいつさい手を引くと固く決意していたオラニエ公はいくら懇願されても首を縦には振らなかったが、ついには執政の熱心な説得と人々のかまびすしい要望に応じることにした。

アントワープからはブレードローデがおびただしい供を連れて市門を出て半マイルのところまでオラニエ公を迎えに出ており、双方は互いに表敬のためのピストルの斉射をした。

アントワープでは町じゅうの人がこの救済者の歓迎に繰り出したようだった。目抜き通りは群衆であふれ、建物はより多くの見物人を入れるために覆いが取り払われた。生け垣の奥から、教会の庭の塀から、そして墓地からも人々が一目見ようと背伸びしていた。民衆のオラニエ公への愛着は素朴な形で発露した。「乞食党万歳！」

老いも若きもオラニエ公に向かってこう叫ぶ。すると他の者が応じる。

「見よ、我らに自由をもたらすお方だ！」  
ルター派は叫ぶ。

「この方がアウクスブルクの信仰告白をもたらずぞ！」  
他の者も声を上げる。

「もう乞食党など用済みだ。もうわざわざブリュッセルまで行く必要もない。この方が我々のすべてだ！」  
何を言っているかわからない者はとてつもない喜びを賛美歌に託し、進みながら高らかに合唱した。オラニエ公は厳粛な表情をくずさず、静まるよう合図したのだが、誰も聞こうとしないのを見ると、本気とも芝居ともつかぬ不興を見せてこう叫んだ。

「何たることだ。なすべきことを考えなければならぬと言うのに。今していることをいつか悔やむときがくるぞ」

歓呼の声は馬車が市中に乗り入れるとさらに高まった。



オラニエ公は諸宗派の首脳を呼んで別々に事情を聞いたが、最初の会談で、問題の根源が各派の間の相互不信、そして市民が政府の意図に対して抱く疑惑にあると確信し、信頼回復が第一の務めだと心に決めた。

まず第一に、最も人数の多い集団であるカルヴァン派に対し、説得と計略の両面を通じて武器を置かせようとし、これには苦勞の末どうにか成功した。しかし、そのすぐあとに弾薬を積んだ荷車がメヘレンで目撃され、ブラバントの郡代が武装した一団を引き連れてアントワープ近郊に頻繁に現われたこともあって、カルヴァン派は礼拝への襲撃を恐れるようになった。そこで、不意をつかれる心配のないよう城壁内に礼拝場所をあてがうようオラニエ公に懇願した。オラニエ公はこのときもなだめることに成功した。

オラニエ公の存在のおかげで、聖母被昇天日（八月十五日）も幸い争乱に至らずにすんだ。この祝日には例年のように大勢の人が町に繰り出し、何が起こってもおかしくない状況だったのである。聖母マリアの像がいつもの壮麗さで町中を運ばれたが、じやまがはいることにはなかった。若干の悪口と偶像崇拜についての控えめなつぶやき——それがこの行列に対して非カトリック民衆が起こした行動のすべてだった。

### サントリュイアン集会（1566）

執政のもとに各州からプロテスタントの行き過ぎについて憂慮に堪えない報告が届けられ、オラニエ公の危険な手にゆだねざるを得なかったアントワープでのことの展開を案じているころ、別の方面からの新たな脅威が発生した。

プロテスタントの公然の礼拝について最初の正式な報告を受けた段階で、執政は貴族連盟に対して約束どおり秩序の回復に手を貸すよう求めていた。ブレーデローデ伯はそれを口実に連盟の総会を開いたのだが、政府にとっては今ほど危険なタイミングはなかった。そもそもプロテスタントの群衆がこれほどまでのことをしたのはひとえに連盟の存在と保護に励まされたことだった。連盟によるこれ見よがしの勢力

の誇示は、諸宗派の自信を高め、それに比例して執政の勇気を萎えさせるのだった。

集会が開かれたのはリエージュの都市サントリュイアンで、ブレードローデとナッサウ伯ルートヴィヒは二〇〇〇の連盟参加者の先頭に立ってこの地にはいった。マドリードからの国王の回答が大幅に遅れていることはその方面からの吉報が望めないことを示しており、どう転んでもいいように執政から自分たちの身柄についての保証状をもぎ取っておくことが適当と考えられた。

参加者のうちでもプロテストアント群衆に不純な動機から同情を感じている者は、その暴走は連盟にとつて好都合な状況だと見なした。身を屈して手を結んだ民衆がうまくやっているようなのを見て貴族たちは態度を変えるようになった。以前の賞賛に足る熱意は不遜と反抗へと墮していった。多くの者は社会混乱と公妃の窮状を利用してより強い態度に出、次々に要求を積み上げるべきだと考えた。

連盟のカトリックの参加者の多くは、心中ではいまだ強く国王派に傾いており、連盟に関わったのも内なる信念からというよりはその場の雰囲気にならされてのことだった。それが今や全面的な宗教の自由を確立しようという提案を聞いて仰天し、安易に加わった計画がいかに危険なものであったかを知って愕然とするのだった。それに気づくや、若きマンスフェルト伯はすぐさま脱退した。内部の不和により、性急のなしたものがくずれ、連盟の団結が人知れずして弱められる過程がすでに始まっていたのだった。

☆

エフモント伯とオラニエ公が執政から権限を与えられて連盟との交渉にあたることになった。連盟からは十二名が選ばれ（ナッサウ伯ルートヴィヒ、ブレードローデ、キュレンボルフなど）、メヘン付近の村ドゥフレで二人と会談した。執政は二人の口を借りて問いただした。

「この新たな動きはどうしたことですか？スペインに大使を送れと要請されたので送りました。勅令や宗教裁判が厳格すぎるとの不満があつたのでいずれもゆるやかなものとなりました。全国議会の開催が提案されたので国王に要望を提出しました。その承認は私の権限ではないからです。私が知らぬ間に怠ったこと、

あるいはしてしまったことでもあるのでしょうか。サントリュイアンで例の集会を開く必要があるほどのことを。

連盟が気にしているのはおそらく国王の怒り、そしてその報いでしょうか。懸念が大きいのはわかります。ですが国王の慈悲はもつと大いなるものです。人々の間に騒擾を起こさないとした連盟の約束はどこへいったのですか。国王大権を侵すくらいなら私の足下に身を投げ出して死ぬつもりだと言った立派な言葉はどこへいったのですか。改革家たちのしていることはすでに反乱の一步前まできており、国を破滅させかねないものです。

あの者たちは連盟に支持を求めています。もし連盟がこれを黙認するならば、その犯罪に荷担したと言われてもそれは自ら招いたことと言うべきでしょう。もし真に主君のためを思うのであれば、群衆の暴走をこれ以上傍観していることは許されません。ですが、実際のところは、連盟こそが危険な先例によって荒れ狂う暴徒の先を行き、祖国の敵と手を結んだのではありませんか。連盟に関する悪い噂も、このたびの不法な集会が裏づけているようなものです」

この叱責に対し、連盟は正式な申し開きの覚え書きを用意し、代表者三名がブリュッセルの國務評議会に届けた。

「私どもの請願に関して妃殿下がしてくださったことにはいたく感謝しております。その後妃殿下の約束に反する変更がなされたとの不平もございませぬ。ですが妃殿下の命令にもかかわらず、どの地方から私どもの同胞たる市民が情け容赦なく裁きの場に引き出され、宗教上の理由で死罪を宣告されているという報告が絶えず耳にはいつています。その報告に偽りが無いことはこの目で確かめている以上、少なくとも裁判官は妃殿下の命令を何とも思っていないと結論せざるを得ませぬ。

連盟として約束したことは誠実に果たしています。公共の場での説教を防ぐよう、力の及ぶ限り努めても参りました。しかし、マドリードからの回答が長らく遅れていることで人々の心に不信が根ざしたとし

ても、全国議會開催の希望がかなえられなかったことでこれ以上お上に何を約束されても信じられなくなつたとしても、それは不思議なことではありません。連盟は国の敵たる者と同盟を結んだことはなく、結ぼうと思つたことさえありません。フランスの軍勢がネーデルラント諸州に侵攻したならば、私ども連盟は真つ先に駆けつけ、侵入者を撃退して見せることでありましょう。

しかし、連盟は妃殿下に包み隠さず具申することを望んでおります。妃殿下のお顔に私どもに対する不快感が現われていたようにお見受けしました。妃殿下のおそばでは、私どもに対する敵意で知られた者どもが寵をほしいままにしているのが目につきます。まるで伝染病患者のように私どもとのかかわりを警告されたとか、国王の到着が私どもの審判の日の開始だと告げられたといった話を毎日のように耳にします。私どもに対して示されたこうした不信任感が、私たち自身のうちに不信任を芽生えさせたとしても、それは自然なりゆきではないでしょうか。

また、私ども連盟の評判を落とさんがための反逆のそしり、サヴオイ公その他諸侯の軍備——これは世評によれば私どもに向けられたものです——、国王がフランス宮廷にスペイン軍の国内通過をかけあつてゐること——この軍勢もネーデルラントに対するものと言われています——、その他似たようなできごとには数多く、私どもが自衛を考え、国外の友とのつながりによつて力をつけようとしたとしてもそれは自然なことではないでしょうか。

巷間に流布する不確かで曖昧な噂に基づいて、私どもはこのプロテスタントの群衆の暴走に荷担していると非難されています。ですが、世間の噂にかかつては誰だつて標的になりうるものではありませんか。確かに私どものうちにはプロテスタントもいます。宗教上の寛容は願つてもない恩恵でしょう。ですがその者たちとて君主に対する責務を忘れたことはありません。

このたびの集会を開いたのは国王の怒りを恐れてのことではありません。国王は善良です。そして公正でもあると思いたいところです。したがつて、私どもが求めているのは赦しではありません。私どもの行

動、それもこれまで陛下の御ためになしてきたご奉公の中でも決して軽視できないものである行動について忘却を望んでいるのではありません。

また、ルター派、カルヴァン派の代表がサントリユイアンで私どもに加わっていたことは事実です。それどころか私どもに請願を持参いたしました。それはこの覚え書きに添付して妃殿下に提出いたします。そこにありますように、彼らは、もし連盟が保護を買って出、全国議会の招集に向けて動くことを約するならば集会を非武装で行なうとしております。いずれも妃殿下にお伝えする必要があると考えました。私どもがいくら請け合ったところで、妃殿下ならびに主だった顧問によって同時に確認されない限りは効力をもち得ないからです。

妃殿下の顧問のうちでもオラニエ公、ホールネ伯、エフモント伯以上に私どもの運動の状況に通じ、私どもに対して偏見のない心をお持ちの方はおいでなりません。私どもは、このお三方に必要な権限が与えられ、お三方の知らないうちに兵を動員しないことが約束されれば、喜んで仲介者としてお迎えします。なお、この保証は一定の期間についてのみお認めくだされば結構です。その後については期日どおりに失効させるか継続するかは国王陛下の御心にお任せいたします。もし失効となれば、私どもに身体と財産を安全なところに移す時間が与えられるのが公平というものかと思われれます。それには三週間もあれば十分かと存じます。最後に、私どものほうでも、私どもの仲介者であられるこのお三方の同意なしに新たな行動を起こさないことを誓約いたします」

連盟がこれほど強気に出られたのは、強力な支援と徹底的な庇護をあてにできたればこそだった。執政としては、強く抵抗する力こそないものの、要求を認めるつもりはさらさらなかった。だが、ブリュッセルでは国務評議会の議員のほとんどが地元州に戻るか適当な口実を設けて公務から引き下がるかしてしまっている。顧問も資金もなく（資金不足のため執政は聖職者の慈悲に頼らざるを得なくなり、それでも足りないときは富くじを使った）、スペインからの指示が引き延ばされるばかりでいつこうに届かない宙

ぶらりんの状況にあつて、執政はついにサントリュイアンに集まつた連盟との交渉にはいるという屈辱的な方策に追い込まれた。連盟がさらなる行動を起こす前に国王の決定をもう二十四日間待ってもらふためである。

国王がいまだに請願に対する決定的な返事を保留しているというのは確かに異常なことだった。ずっとあとから送られた書簡にも返事が届いているのは周知の事実だった。執政は国王に強く訴えた。また、プロテスタントによる公然説法が始まるや、モンテイニー男爵のあとを追いかけてベルヘン侯を遣わした。その後の事態の展開を直接見た立場からの生々しい証言によつて報告書を補完し、国王の決意を早めるためである。

### スペイン派遣使節 (1566)

その間、ネーデルラントの使節モンテイニー卿フロランスがマドリッドに到着し、盛儀を尽くして迎えられた。その使命の内容は、宗教裁判の廃止、勅令の緩和、国務評議会の強化ならびに他の二つの評議会の合併、全国議会の招集、そして最後に国王のネーデルラント行幸を求める執政からの要請だった。

だが、国王は時間かせぎのことしか考えていなかった。モンテイニーの同僚が到着するまでは最終的な結論を下すつもりはないとして、モンテイニーには聞こえのいい言葉で氣を持たせておいた。その間、モンテイニーは毎日のように望む時間に国王に謁見し、公妃からの連絡やそれへの返事はその都度報せるようにとの指示を受けるのだった。

また、モンテイニーはしばしばネーデルラント問題についての評議会への出席も許され、ことあるごとに全国議会こそがこれまでの混乱に対処する唯一の手段であり、他の方策をいっさい無用にする最善の策であると指摘した。さらに、過去のことにすべてについての無条件かつ全面的な大赦だけが、すべての不平の根底にあり、どんな好意的な政策もみな帳消しにしてしまう不信感をぬぐい去ることができる、と主張し

た。また、現地の状況に通じ、同胞の国民性を知悉している立場から、国王が率直な態度を示してその意図に裏がないことを確信させさえすれば、ネーデルラントの住民は変わらぬ忠誠を尽くすであろうことを請け合いまでした。その一方で、抑圧の標的とされ、スペイン貴族の嫉妬心の犠牲とされる恐れが解消しない限り希望はないとした。

ようやくモンテニニーの同僚がマドリード入りすると、使節派遣の目的が連日審議の題目となった。

### スペイン本国の対応 (1566)

この時国王はセゴビア近郊の森の離宮におり、國務評議会もこの地に召集した。出席者はアルバ公、フエリア伯ドン・ゴメス・デ・フィゲロア、聖ヨハネ騎士団大分領団長ドン・アントニオ・デ・トレド、王妃付家政長官ドン・ファン・マンリケス・デ・ララ、エボリ公にしてメリト伯ルイ・ゴメス、王太子付主馬頭ルイス・デ・キハダ、ネーデルラントの〔次期〕國務評議会議長シャルル・ド・ティスナック〔ネーデルラント出身者〕、國務評議会議員クルトヴィル〔ネーデルラント出身者〕である。

評議会の審議は何日にも及んだ〔七月下旬〕。二人の使節はともに出席していたが、国王本人は臨席していなかった。この場でネーデルラント貴族のふるまいがスペイン人の目によって吟味されるのである。

一步一步、はるかな遠因にまでさかのぼって、できごと相互の間に実際にはありもしない関連づけがなされ、その場の勢いから生じたことが綿密に計画され尽くされた陰謀だと見なされた。全くの偶然により相次いで生起し、物事の自然のなりゆきにより導かれていた貴族たちのさまざまな行動や試みが、全面的な宗教の自由を実現し、政治の実権を貴族階級の手握るために考え抜かれた計略によるものとされた。

それによると、まず第一歩が乱暴な形での宰相グランヴェルの放逐で、グランヴェルには貴族階級が望んでいた権力の座にあったというほかに何らのとがもなかったとされた。第二段階がエフモント伯のスペイ

ン派遣により宗教裁判の廃止と刑罰法規の緩和を要求し、國務評議会の強化に国王の同意を迫ることだった。しかし、こうしたおとなしい手段で隠密に目的を遂げることが不可能とわかると、第三のより不敵な手段——乞食党という結社による陰謀——によってそれを宮廷からもぎとろうとしたのである。同じ目的のための第四の段階がこのたびの使節派遣で、とうとう臆面もなく仮面をかなぐり捨て、ふてぶてしくも国王に対してなした理不尽な提案によりこれまでの一歩一歩の狙いがどこにあったかを白日のもとにさらけ出したというのだった。それとも——スペイン人の論法はこう続く——宗教裁判の廃止が完全な信仰の自由以外の目的をもっているともいうのだろうか。宗教裁判がなくなればそれとともに良心の導き手まで失われてしまうのではないだろうか。提案されている「穩健路線」はあらゆる異端を不問にしてしまうものではないか。國務評議會を強化し他の二つの評議會を抑制する計画は、貴族たちの都合のいいようにかの地の政府を完全につくりかえてしまうこと以外の何であろうか。ネーデルラント全州の統一政体をつくろうというのではないか。公然說法における異端の徒党については、國務評議會での有力者の結託や乞食党の連盟がなしえなかった同じもくろみから出た第三の陰謀も同然ではないか。

しかし、起源がどうあれそれで事態の重要性、切迫さが減じるわけでないのは確かだった。国王自身がブリュッセルにじかに赴くことが事態を迅速かつ抜本的に改善する最も有効な手だてであることは疑いない。だがすでに季節も進んでおり、出発の準備をしている間にすぐ冬になってしまう。一年中で最も時化する季節であり、フランス、イングランド船に襲われる危険も考えると、海路は安全とは言えなかった。このため短い北回りの経路をとるわけにはいかなかった。それに反乱分子がその間にワルヘレン島を押さえ、国王の上陸に抵抗するかもしれない。こういった理由から春になるまでは出発は考えられなかった。唯一の完全な救済策がとれないなら、部分的な改善策で満足するほかない。そこで評議會は国王に提案をした。まず第一に、教皇の宗教裁判を諸州において撤廃し、司教たちの宗教裁判で我慢すること。第二に、伝えられた「穩健路線」よりも宗教と国王の名誉が保たれるような勅令の緩和プロセスを打ち出すこ



と。第三に、人心を安心させ、人道的な方策は一通り尽くすため、悪質な犯罪を犯したりすでに法的に起訴されたりしている者以外、誰に対しても恩赦を与える全権を執政に与えること。その一方で、あらゆる結社、連帯、公然の集会および説法は今後は嚴罰をもって禁止されること。ただし、この禁令が犯された場合、執政はその裁量において、反抗的な者を力によつて服従させるために正規兵や守備隊を用い、そしてまた必要とあらば新兵を募集し、適当な司令官を指名することができる。最後に、陛下が主だった都市、高位聖職者、貴族階級の指導者に対して、その一部には自筆で、そしてみな一様に慈悲深い調子の手紙を書けば、奉公の熱意をかき立てるのに有効と思われるというものだった。

この國務評議會の決議の提出を受けて国王がまづしたことは、王国内の主要地点、そしてネーデルラントにおいても公の祭列と祈祷を命じ、決断するにあたつての神の導きを祈るよう命じることだった。國務評議會の場に現われた国王は、この決議を裁可し、発効させた。

しかし、全國議會については無意味と断定し、にべもなく拒絶した。いくつかのドイツ人連隊を国王の負担で維持し、そしてよりいっそう奉公に励むよう長らく未払いだった給金を支払うことを約束した。執政には非公式の手紙で内密のうちに戦争の準備を始めるよう命じた。三〇〇〇の騎兵と一万の歩兵をドイツで集めることとし、そのために執政には必要な書類を与え、三十万金グルデンもの金を送った。また、この決議に添えて、若干の個人や都市に対して自筆の手紙を送り、この上なく慈悲深い言葉でこれまでの奉公において示してきた熱意に感謝し、今後もしその忠義を求めた。

最も肝要な点——国民が何よりもこだわっている議會の召集——では国王は一步も引なかった。国王のこの限定的であいまいな好意には何の意味もなく、恣意的な心持ちに依存する部分が大きすぎて人心にとつて安心材料となるものとは言えなかった。そして提案された穩健路線は、人民にはまだ厳しすぎるものであったが、国王は寛大すぎるとして承認しなかった。こうした限界にもかかわらず、国王はこのたびに限っては国民のために異例の譲歩をしたと言える。教皇の宗教裁判はあきらめ、古くからの習わしにあつ

た司教による宗教裁判だけを残すものとされた。ネーデルラントの人々にとってスペインの評議会は思いのほか公正な審判を下したのだった。

この賢明な譲歩が別の時期、別の状況であつたなら期待した効果につながったものかどうか。それはわからない。いずれにせよこの譲歩は遅きに失した。国王の手紙がブリュッセルに届いたとき、聖像破壊運動がすでに始まっていたのである。

## 聖像破壊運動

### 起源

聖像破壊運動というこの異常事態の起源について、多くの歴史家がするようにわざわざ遠くさかのぼる必要がないことは明白である。

確かに、フランスの新教徒がネーデルラントにプロテスタントの萌芽を育み、その地の信仰上の同胞がスペイン国王と平和的に和解することを何としても防ごうと努めた可能性はあるし、むしろ大いにありうることである。自分たちの不倶戴天の敵を自国のことで手一杯にしておくためである。したがって、諸州においてユグノーの手の者があらゆる手を尽くして抑圧された同胞に大胆な希望を吹き込み、正統教会に対する敵意をあおり、不平のもとになつてゐる重圧を強調して知らず知らずのうちに不法行為をそそのかしたのも自然なことだった。

連盟のうちには、共犯者を増やすことで勢いを失つた大義の助けになると考えている者、かつて国王に警告した不幸な事態が実際に生起しないと連盟の正当性を保てないと思つてゐる者、全面的な犯罪行為のうちに己の罪を隠蔽したい者がいたことは考えられる。

しかし、聖像破壊運動がサントリュイアン会議で示し合わされた綿密な計画の帰結とは考えられない。あれほど多くの貴人や武人の厳肅な会合で、しかも参加者の多くはカトリック信者だったというなか、明白な流神行為をあえて提案するような無謀をあえて冒す者がいたのだろうか。聖像破壊は特定の宗派をいためつけるといふよりは宗教一般に対する敬意、さらにはあらゆる道徳心を踏みにじるものであり、救いようのない墮落者でもなければ思いつかないことである。それにこの暴動では、その勃発はあまりに突然で、その遂行はあまりに乱暴でとてつもないもので、生起した時点での一時の激情のなすところとしか考えられない。その上、それに至るまでの状況の帰結と考へても十分自然であり、その発生を説明するのにそれ

ほどさかのぼる必要はないのである。

粗暴でおびたらしい群衆——社会の最下層の出自で、手ひどい扱いやどこまでも追いかけてくる死罪の危険により荒れすさび、土地から土地へと追い立てられ、絶望へと追い込まれている——その群衆が礼拝を隠れて行ない、最も神聖な人間普遍の権利を悪魔のわざであるかのように隠すことを強いられた。眼前では体制派教会の礼拝堂が誇らしげにそびえ立ち、その中では尊大な隣人たちがぬくぬくと贅沢な礼拝にふけっている。その一方で自分たちは市壁の外に追いやられ、それもおそらくは少数派によって追い立てられ、さびれた林の中、照りつける真昼の日差しのもとで恥ずべきことのようにこそこそと同じ神に仕えるのだ。市民生活の場から未開の地に押しやられ、ある恐ろしい瞬間に自然状態の権利に目覚めたのだ！ 数的に多数であればあるほど、置かれた境遇が不自然なものに思われた。驚きとともに真実が自覚された。自由な空、すぐ手に取れる武器、精神の混乱と心情の高ぶりといったものが狂信的な弁士の暗示を後押しした。その場の勢いが呼びかける。示し合わせも何もしゃない。すべての目が同じことを語っている。ほとんど口になれないうちから決意は固まっていた。不法行為に訴える覚悟までできたものの、誰も何をするかはわからなかった。猛り狂った一団は先を競うように突進した。

敵対宗派のぬくぬくとした繁栄は自分たちの窮状と比べると屈辱的だった。その寺院の壮麗さは禁教にとつては侮蔑そのものだった。街道に立てられた十字架の一つ一つ、聖像の一つ一つは自分たちの抑圧の上につくられた祈念碑だった。このすべてを復讐の手によつて葬らねばならない。このおぞましい無法の発端となったのは狂信だったが、それを完遂したのはここに豊富なけ口を見出した卑俗な情念だった。

## 発端 (1566)

聖像に対する攻撃は西フランドルとアルトワの、リース川から海岸までの地域で始まった。職人、船頭、農民の荒れ狂った一群に売春婦、乞食、強盗や無頼漢が加わって三〇〇ほどの数となり、こん棒や斧、金

づち、はしご、縄を持って（鉄砲や剣を装備している者はごくわずかだった）狂信の激情とともにサントメル付近の町や村に突入した。閉ざされている教会や修道院の扉をぶち破り、祭壇を倒し、聖人の画像や彫像を破壊して足下に踏みじった。

この流神行為に高ぶった群衆は新たな群れの合流も得て、カルヴァン派の強力な一団の支援が期待できるイーペルへの直線街道を突き進んだ。抵抗を受けることなく大聖堂に押し入り、はしごを使って絵を壊し、斧を使って説教壇や会衆席もたたき壊した。祭壇の装飾を奪い、神聖な器物を盗んだ。

メーネン、コミーヌ、ウエルヴィイク、リール、アウデナールデがすぐこの例に続き、数日のうちに同様の暴動はフランドル全土に広がった。

## アントワープ（1566）

アントワープにこの事件の第一報が届いたとき、町は聖母被昇天日（八月十五日）の祭りに引き寄せられて放浪者であふれていた。オラニエ公の存在でさえ、サントメールの同胞のあとに続くとはやる狂乱した群衆を押さえ続けることはできそうもなかった。だが、宮廷からの命令でオラニエ公はブリュッセルに召し出された。執政は国王からの書状を披露するために国務評議會を召集していたのだ。このため、アントワープは暴徒の思うがままに任されることになった。

オラニエ公の出発が争乱への合図となった。祭りの初日に群衆が見せた意味ありげな不敵な態度を見て群衆の無法を恐れた司祭たちは、マリア像はほんのしばらく祭列に出したあと、普段のように教会の中央に安置せず、聖壇所に避難させた。これに触発された一部のいたずら者はわざわざマリア像を訪ねて嘲笑気味になぜ早々に退がってしまったのかときいた。説教壇に登って説教師のまねをし、教皇主義者に議論をふっかける者もいた。このおふざけを怒ったカトリックの船頭が引きずり降ろそうとし、説法席で乱闘になった。

同じような光景が翌晩にも繰り返された。群衆の数は増し、多くはすでに怪しげな工具を持っていたり、武器を隠し持っていたりした。ついにある者が「乞食党万歳！」と叫ぶと、たちまち群衆全体が繰り返し、マリア像にも同調が求められた。一緒にいたわずかなカトリックはこの無法集団に対してはなすすべがないと見切りをつけ、一つを除いてすべての戸に鍵をかけて教会を出た。

新教徒だけになると、賛美歌を、政府から禁じられている新しい節で歌うことが提案された。歌が終わらないうちに、合図でもあったかのようにマリア像に向かって殺到し、刀や短剣で突き、頭を切り落とし、娼婦や泥棒が祭壇から大きなろうそくをもぎ取って彫像に火をつけた。当時の工芸の精をきわめた美しいオルガンはめちやめちにされ、絵は塗りつぶされ、彫刻は粉々に破壊された。主祭壇の向かいにあった、二人の罪人の間ではりつけにされている等身大のキリスト像は、由緒ある貴重な作品だったが、縄をつけて引き倒され、斧で分解された。その一方、両側の罪人はうやうやしく保護された。ホスチアは床にばらまかれ、足で踏みつけにされた。聖餐で用いられるどう酒がたまたまみつかる、乞食党のために乾杯された。聖油は靴を磨くのに使われた。墓まであばかれ、朽ちかけた遺体をばらばらにし、踏みについた。

このすべては見事なまでに整然として行なわれ、まるで各人が事前に役割を割り当てられていたかのようだった。誰もが隣の者に手を貸した。危険な作業もあったわりにはけが人は出なかった。暗闇の中、あちらこちらから巨大な塊が崩れ落ち、はしごの最上段でも破壊の榮譽をめぐつてとつくみあいがあったにもかかわらずである。数多くの小さなろうそくが下で悪行をはたらいている人々を照らしていたとはいえ、誰一人見分けがつかなかった。信じがたいほどの迅速さで作業は成し遂げられた。高々一〇〇名の群衆が数時間のうちに七〇の祭壇をもつ寺院——ローマのサンピエトロ大聖堂に次いでキリスト教世界で最大かつ最も壮麗な寺院——を破壊し尽くしたのだった。

大聖堂の破壊では飽き足りなかった。そこからくすねたたいまつやろうそくを手に、群衆は深夜ごろ、

残った教会、修道院、礼拝堂も同じ目にあわせるべく繰り出した。新たな蛮行のたびに群れはふくれ、泥棒たちは収穫の機会に引き寄せられた。金目の物は、器、祭壇布、金、法衣など手当たり次第に持ち去った。修道院の地下蔵にはいつては酩酊するまで飲んだ。さらなる暴行を招くのをおそれて、修道士も尼僧も止めようとはしなかった。

おぼろげに聞こえてくるこの騒動は寝入りばなの市民を驚かせたが、深夜のため実際以上に危険が増幅されて感じられた。市民は教会を守りに駆けつけるのではなく、自宅の守りを固めて恐怖と不安のうちに夜明けを待った。

日が昇ると、昨晚の破壊の惨状が明らかになった。だが夜の間の所業が夜明けとともに終わったわけではなかった。まだ無傷の教会や修道院が残っており、これらも同じ目に見舞われた。

破壊行為はまるまる三日続いた。破壊する教会関係の物がなくなった暴徒が世俗財産にも同様の攻撃に出るやもしれなかった。蔵を略奪されることを恐れ、また相手の数が案外少ないことを知って勇気づけられた町の富裕層は、武装して自宅の門前で警戒するようになった。市門は一箇所を除いて閉ざされており、聖像破壊者たちはそこから市外に飛び出し、郊外で同じ蛮行を続けた。

この間を通じて、地方政府の役人が介入しようとしたのは一度きりだった。それほどまでにカルヴァン派（この略奪集団はカルヴァン派に雇われているものと信じられていた）の力は恐れられていたのである。

この破壊行為による損害ははかりしれなかった。聖母マリア教会では四十万金グルデンは下らないと推算された。このたびのことで多くの貴重な美術品が破壊され、多くの価値ある手稿、歴史や外交に重要な多くの記念碑が失われた。市当局は死罪を掲げて略奪品の返却を命じ、これについては信者の蛮行を恥じるプロテスタント説教師も当局を支援し、効果を上げた。こうして多くの物品が返還された。暴徒の指導者は、もともと略奪ではなく狂信と復讐が主眼だったためか、あるいは隠れた上層部から指令を受けたのか、今後こうした行き過ぎが起こらぬよう、これからは襲撃の際にも隊伍を組んで秩序をもって行なうこ

とに決めた。

## ヘント (1566)

この間、ヘントの町も同じような事態になることを恐れていた。アントワープでの聖像破壊運動勃発の第一報に接するや、ヘントの市当局は主だった市民たちとともに教会荒らしを力によって撃退することを誓い合った。この誓約は民衆にも提案されたが、人々の声は割れ、このような信心に根ざした行ないをじやまするつもりはさらさらないと公言する者も多かった。こうした情勢にあつて、カトリックの聖職者たちは教会の動座でも貴重な物は城塞に保管することが適当と考え、一般家庭に対しても同様にして祖先が献納した物の安全を図ることが認められた。この間、あらゆる儀式は停止され、裁判所は閉鎖された。敵の襲撃を今かと待ち受けるかのように、町は次なる展開を待つておののくのだった。

ついには突出した一団が市の長官に代表を送つて不遜な要求を突きつけた。

「上層部から、他の都市の例に倣つて聖像を教会から運び出すよう命令されている。抵抗されなければ穩便にことを運び、危害は最小限にとどめるだろう。さもなければ教会を襲撃することになる」

これだけではない。厚顔にもこの作業に司法官憲の助力まで要請したのである。当初この無体な要求に仰天した長官も、官憲の目の届くところで行なわれれば歯止めになるだろうと思い直し、要求を認めることにした。

## トゥルネー (1566)

トゥルネーでは、守備隊が聖像破壊防止に動こうとせず、その目の前で教会の貴重品が奪われた。金銀の器物やその他の装飾品が埋められていると知らされていた暴徒は床全体をめくり返してあさった。

みつかったものの中には、ヘント市民の反乱の先頭に立つて戦いにたおれ、ここトゥルネーに埋葬された



ヘルレ公爵アドルフの遺体もあった。このアドルフは実の父に反旗を翻し、敗れた老人を監獄まではだし、何マイルも引きずっていったが、この仕打ちに対してのちにシャルル突進公から報復を受けたのである。それから半世紀以上が経過した今、運命は、親に対する罪に対して教会に対する罪をもつて報いた。父殺しの遺骨を今一度辱めるため、狂信が神聖を侵す必要があったのであった。

## 全国化（1566）

トゥルネーの聖像破壊集団にヴァランシエンヌからの者が加わり、周辺地域の修道院を破壊してまわり、何世紀もかけて集められた貴重な蔵書が灰になった。この悪例はまもなくブラバントに広がった。メヘレン、スヘルトーヘンボス、ブレダ、ベルヘン・オブ・ゾームが同じ目に見舞われた。この蛮行の洗礼を受けずにすんだ州はナミユール、ルクセンブルク、そしてアルトワ、エノー両州の一部だけだった。わずかに四〇五日のうちにブラバントとフランドルだけで四〇〇もの修道院が略奪された。

ネーデルラント南部で吹き荒れた同じ狂乱はまもなく北部をも襲った。

ホラント州の都市アムステルダム、レイデン、ハーグでは自発的に教会の装飾を放棄するか強奪されるのを目にするかの選択肢が与えられた。デルフト、ハールレム、ハウダ、ロッテルダムは市当局の断固とした対応によって破壊を免れた。

同じような暴行はゼーラント州の諸島でも行なわれ、ユトレヒト州のユトレヒト市やオーヴァーアイセル州、フロニンゲン州のいくつかの都市も同じ狂乱の被害にあった。

フリースラント州はアーレンベルク伯によって、ヘルダーラント州はメーヘン伯によって同様の運命から守られた。

**執政と連盟の締約 (1566.8)**

各州でのこうした争乱が誇張されて報告されると、執政が国務評議会の特別会合の手配をし終えたばかりのブリュッセルには警戒感が広がった。聖像破壊集団はすでにブラバントに侵入している。暴徒が強力な支持をあてにできる首都には宮廷の眼前で蛮行を再開するとの脅迫が寄せられた。

執政は、ネーデルラントの中心にいて州総督や金羊毛騎士団に囲まれていても安全とは思えず、身の安全を図るため、アールスホット公が避難先として確保していたエノー州モンスへの逃亡を考えていた。聖像破壊集団の手に落ちて不名誉な譲歩を強いられることがないようにするためである。騎士たちはそのような恥ずべき逃走は騎士団が公妃を守る勇氣も熱意もないかのような印象を与えることになると指摘し、命にかえても執政の安全を守ると誓って騎士団の名誉に泥を塗るようなことは控えてほしいと訴えたが、公妃の気持ちを变えることはできなかった。ブリュッセル市当局は窮地にある市を見捨てないでほしいと懇願し、国務評議會は弱気な行動は謀反人の無礼を増すばかりだと強く申し入れをしたが無駄だった。執政の絶望的な決意は動かさなかった。

矢継ぎ早に使者が到着して聖像破壊集団が首都に向かっているとの警告をもたらした。執政は逃走のための準備を整えておくことを命じ、朝早く、隠密に行動に移すことにした。

夜明けに老ヴィグリウスが執政の前に現われた。貴族たちの機嫌をとるため、執政が長いこと無視しつけてきた議長である。ヴィグリウスが準備の意味を問いただと、執政も脱出するつもりであることを認め、ヴィグリウスも身の安全を図るため同行するのがいいと持ちかけた。老人は公妃に言った。

「このような結末は二年も前から予測できたはずでござります。私が並みいる廷臣より率直に物を申したため、妃殿下は私の申すことを聞こうとなさらず、悪意ある提案ばかりに耳を傾けておいででした」

執政は間違っていたこと、うわばだけの誠実さにだまされていたことを認めたが、今はこうするしかないのだと言った。これにヴィグリウスは応じた。

「国王の命令には断固として服従を求めるおつもりですか」

「そのつもりです」

「では政治手腕の奥義たる偽装にこそ活路を求めなさいませ。諸侯の味方をするふりをして、とりあえずはその協力によりこの嵐を乗り切るのです。心にもないことでも、諸侯を信頼しているように見せかけます。この争乱に立ち向かうべく妃殿下の大義に加わることを誓わせるのです。その気がありそうな者は味方として信頼なさいませ。ですがそれ以外の者もないがしろにして離反させてはなりません」

ヴィグリウスは諸侯がやってくるまで執政を会話で引き止めた。諸侯が執政の脱出を認めるはずがないことは計算済みだった。諸侯が現われると、ヴィグリウスはそつと部屋を出て市参事会に市門を閉ざして宮廷関係者が町を出ることを防ぐよう命じた。

この最後の一手がどんな説得よりも効果があった。居城で囚われの身となった執政は、貴族たちの説得に応じ、貴族たちもその血の最後の一滴まで執政を守ることを誓った。執政はマンスフェルト伯を市の守備隊長に任じ、取り急ぎ守備隊を増員し、宮殿全体を防備させた。

☆

国務評議会が開かれた結果、緊急事態に鑑みて譲歩するのが得策という結論に達した。

プロテスタントの公然礼拝がすでに始まっているところでは容認することとし、教皇の宗教裁判は廃止、異端に対する古い勅令も撤廃を宣言し、そして何よりも連盟の貴族たちが要求している制約なしの大赦を認めるというのである。同時にオラニエ公、エフモント伯、ホールネ伯その他若干名が連盟の代表者としての件について話し合う任を託された。厳粛に、そして疑問の余地のない形で、連盟の参加者は請願提出を理由としていっさい責任を問われないものとされ、国王のあらゆる官吏や当局はこの保証の精神に従って行動し、現在も将来も前記の請願に関して連盟の何人に対してもいかなる危害を加えることもしないよう命じられた。その代わり、連盟も国王陛下に対して真実かつ忠実なしもべたること、力のあたら限り秩序

の再建と聖像破壊者の処罰に尽くすこと、群衆に武器を置くよう説得し、国王の内外の敵への対処を積極的に支援することを約した。

そのことを相互に保証する文書が正式に起草され、執政、連盟双方の全権代表によって署名された。なかでも免責証書は公妃自身の手によって署名され、その印章によって確認された。

執政本人が国王にふるえる手でうち明けたところによると、執政がこのつらい一步を踏み出すまでには気の重い葛藤があり、これを了承したのは目に涙を浮かべてのことであつた。いっさいは、自分をブリュッセルでとりこにし、力づくで合意させた貴族たちの責任であるとし、とりわけオラニエ公のことをいまいましげになじるのだった。

## 事後処理 (1566)

ことが一件落着すると、総督たちはそれぞれの州へと急いだ。エフモント伯はフランドルへ、オラニエ公はアントワープへと。

アントワープでは、プロテスタントの群衆が略奪された教会をまるで拾得物のように我がものとし、戦勝者のように占拠していた。オラニエ公はそれを合法的な所有者に返還させ、その修復を命じ、それらの教会にカトリックの礼拝形式を復活させた。聖像破壊者のうち有罪となつた三名は絞首台でその冒涜の罪をあがなつた。暴徒の一部は追放となり、他の多くの者も処罰された。

後日、オラニエ公は各言語——民族と呼ばれていた——の代表四名を集めて意見の一致に達した。冬が近づいており戸外での説法は不可能になるので市内の三箇所礼拝場所を認めることとし、新たな教会を建てるなり個人宅をその用に供するなりしていいものとする。そこでの礼拝は毎日曜日と祝日の常に同じ時間に行なわれるものとし、それ以外の日には認められない。ただし、その週に祝日がない場合には代わりに水曜日が認められる。どの宗派も司祭は二名までとし、ネーデルラント出身か、あるいは諸州のいず

れかの主要都市に帰化した者とする。すべての者が世俗のことがらにおいては地方当局およびオラニエ公に服従することを誓い、他の市民同様、あらゆる賦課の対象となる。何人たりとも説法に武装して参加してはならないが、帯剣だけは許されるものとする。説教師は演説で正統宗教を攻撃してはならず、宗旨上 unavoidable 内容、道徳に関わる件のほかには論争となる点に触れてはならない。指定された地域外では賛美歌を歌ってはならない。説教師、教区委員、助祭の選出においては、また他の長老会の会合においては、政府の派遣する人物が毎回立ち会い、その内容をオラニエ公と市当局に報告するものとする。その他の点については、プロテスタントも正統宗教と同じ保護を受ける。この取り決めは、国王が議会の同意を得て別の決定をするまで有効とする。ただし、変更がなされた場合でも、各人が家族や財産とともに国を去ることは自由とされるべきである。

オラニエ公はアントワープからホラント、ゼーラント、ユトレヒトへと飛び、同じような平和回復に向けた取り組みをした。オラニエ公の不在中、アントワープはホーフストラーテン伯の監督下におかれたのだが、伯は穩健な人物で、連盟支持者ではあったが、国王への忠誠を欠いたことはなかった。この措置においてオラニエ公が職権を大幅に逸脱したことは明らかだった。国王のためではあっても、まさに主権君主のようにふるまったのである。オラニエ公は弁明として、市当局がこれらあまたの強力な宗派を監督するには、その礼拝に立ち混じり、その目の前で行なわせたほうが、野放しで自由にさせておくよりずっと容易になるのだと主張した。

ヘルダーラントではメーヘン伯はより厳しい態度で臨み、プロテスタントを完全に押さえ込み、その説教師は残らず追放した。

ブリュッセルでは執政はお膝元の利を生かして公然説法をたえ市外であつてもやめさせた。これに関してナッサウ伯ルートヴィヒが連盟の名において合意済みの締約を引き合いに出し、ブリュッセルは他の都市に認められている権利さえも認められないのかと問いただした。執政は、もしブリュッセルに締約調

印前から公然説法があつたとしても、それが今見られなくなつたのは自分の責任ではないと答えた。しかし、それと同時に、市民たちには非公式な形で、公然説法に出席した最初の者を絞首台に送る意図を隠さなかつた。こうして執政は少なくとも首都だけは忠誠を確保したのである。

トウルネーを鎮めるのはより困難だった。本来モンテニの管轄だが、マドリード滞在中のモンテニに代わつてホールネ伯に託されていた。ホールネ伯はプロテスタントにただちに教会を明け渡し、市壁の外の礼拝堂で満足するよう命じた。だがプロテスタントの説教師たちがこれに反論した。それらの教会が建てられたのは人民の利用に供するためであつて、その人民とは一握りの神父ではなく多数派のことであるはずだと。その者たちがカトリックの教会から放逐されるのであれば、自分たちの教会を建てる資金くらい提供するのが当然だというのだつた。これに対する市当局の返答はこうだつた。たとえ少数派だとしても、信頼できるのはカトリックである。教会建立は禁止しないが、町がプロテスタント派の聖像破壊集団からこれまでに受けた被害を考えれば、この上教会建立の負担をかぶせられるいわれはないと。双方が延々と口論しあつたのち、プロテスタントはかろうじていくつかの教会を保持できることになつた。安全のため、それらの教会には歩哨がおかれた。

ヴァランシエンヌでもプロテスタントはノワルカルム領主フィリップス（やはりマドリード滞在中のベルヘン侯の不在によりこの地の統治を任されていた）を通じて提示された条件の承認を拒んだ。フランス生まれの改革派の説教師ラグランジュがその雄弁によつて人心を完全に掌握しており、断固として市内に自分たちの教会を持つことを要求し、認められない場合には町をユグノーに明け渡すことも辞さない構えを見せるよう説いた。カルヴァン派の数的優勢とユグノーとの連帯のため、総督も強硬手段に出ることができなかった。

エフモント伯もまた、国王への奉公の熱意を示すため、その温厚な天性に無理を強いた。ヘントの町に守備隊を導入し、謀反人の主だつた何人かを死に追いやった。教会は再開され、カトリックの礼拝が復活

した。すべての外国人は例外なく州外に退去するよう命じられた。カルヴァン派（だけ）には市外に教会を建てる場所が認められた。その代わり、カルヴァン派のほうは市当局に対するこの上なく厳格な恭順を示し、聖像破壊運動に対する訴追において積極的に協力することを誓うものとされた。エフモント伯はフランドル、アルトワでも同様の措置を行なった。とりまき貴族の一人で連盟参加者でもあるベッカード・ゼー・ル領主ヤン・カッセンブロートは、若干の連盟参加者からなる騎馬隊の先頭に立って聖像破壊集団を追跡し、フランドル州ヘラルツベルヘン（フランス語名グラモン）近くのエノー州の町に突入しようとしている一団を襲い、三十名を捕虜にした。そのうち二十二名はその場で絞首刑にされ、残りは鞭打って国外に追い立てられた。

これほど重要な務めを果たしておけばまさか国王の不興を買うことはあるまいと思うところかもしれない。このたびのオラニエ公、エフモント伯、ホールネ伯のはたらきは、国王が言葉によっても実行によっても恩顧をかけているノワルカルム、メーヘン、アーレンベルクといった忠誠派に優るとも劣らぬ熱意を示すものであり、そうした寵臣のどんな功績よりも効果があつた。しかし、この熱意も奉公も遅すぎた。これまで国王の勅令に反対するのに声を大にしすぎていた。その施策に強く反対しすぎていた。宰相グラインヴェルに対する攻撃で国王の気分を害しすぎていた。この三人には赦しの余地はなかった。時間も、悔悛も、これほど重要な貢献による埋め合わせも、こうした負の評価を君主の心から消し去ることはできなかったのである。

## スペイン本国の反応

聖像破壊運動の勃発ならびに新教徒との間に結ばれたカトリックの威信にもとる締約の報せが届いたとき、フェリペ二世はセゴビアで病床にあつた。同時に、執政からはネーデルラント行幸を求める切迫した懇願が繰り返された。これについては議長ヴィグリウスが友人ホッペルスと交わした書簡でも毎度のよ

うに触れられている。ネーデルラント貴族の多く（たとえばエフモント、マンスフェルト、メーヘン、アーレンベルク、ノワルカルム、ベルレモン）も直接国王に手紙を書き、それぞれの州の情勢を報告し、不満分子との間でなした取り決めについて説明すると同時に弁明した。

ちようどこの時期にドイツ皇帝から書簡が届き、フェリペ二世にネーデルラント臣民に対して寛容をもつて接するよう勧め、仲介を申し出ていた。皇帝はブリュッセルの執政にも直接手紙を書いていた。それには主だった貴族への手紙も添えられていたが、それが届けられることはなかった。この忌まわしい事件がかき立てた当初の怒りが静まると、国王はいっさいを評議会に付託した。

評議会で幅をきかせているグランヴェールの一派はフランドル貴族の行動と教会冒読者の暴走との間に密接な関係を見出そうとするのに熱心だった。それは両派の要求が似通っていること、そしてとりわけ後者が行動を起こすのに選んだ時期からして明らかだというのである。グランヴェール派によれば、貴族たちが和平の三条項を送ったのと同じ月に聖像破壊運動が始まった。オラニエ公がアントワープを去ったまさにその晩に教会が略奪された。この騒動の間じゅう、鎮圧のために武器を取ろうという動きは全く見られず、実行された措置はいずれも宗派を利用するものだった一方、純粋な信仰の維持に資するような施策はほとんどくなくおざりにされた。聖像破壊者の多くは、自分たちの行動はすべて諸侯も承知で、同意も得ていたと証言している（もつとも、そうしたならず者が完全に独断でなした犯罪でも大人物の名前を隠れみのにすることは全く自然なことではあるのだが）。高位の貴族たちが、全国議会開催を勝ち取るため乞食党のために尽力すると約束したことになっている文書が提出された。ただし、貴族たちはこれをきっぱり否定した。

グランヴェール派によれば、ネーデルラントの煽動分子には四つの異なる党派がある。その一つが教会を冒読したごろつきの一団である。第二がこれを雇って非道な行為をさせたさまざまな宗派。諸宗派の保護者にまでなった乞食党が第三。そして封建的な主従関係、血縁、友情によって乞食党に傾いている高位の



貴族たちが第四のグループをなす。この四つのグループには互いに多かれ少なかれつながりがあり、共通の目標に向けて共同している。したがって、このすべては救いようもないほど毒されており、みな等しく有罪だというのだった。政府は少数の孤立した構成員に対して警戒するだけではすまされない。全体に対処しなければならぬのである。

民衆がそのかされただけであり、けしかけたのが高位の者だったことがはっきりした今、いくつかの点で欠点が明らかになった従来の方策は修正するのが得策である。すべての階層を区別なく抑圧し、貴族たちを軽視すると同時に下層階級にも厳しくあたる限り、両者が支援しあうのは必定である。貴族は支持者を得、民衆は指導者を得る。両者を分断するには不均等な処遇をするにしくはない。民衆とは極度の困窮に追い詰められない限り常に臆病で怠惰なもので、少しばかりアメをちらつかせればたちまちにして崇拜していた保護者を見捨てるだろう。自分たちがその運命を共にすることさえなければ、貴族たちへの処罰も当然の報いと思うようになるだろう。こうして国王には、今後は大多数の民衆に対しては寛容を示し、厳しい取り締まりは党派の指導者に対してのみ向けることが提案された。ただし、不名誉な譲歩をしたとの印象を避けるため、皇帝の仲介を受け入れるのが望ましいとされた。人々の要求の正当性を認めて受け入れたのではなく、ひとえに皇帝の仲裁ゆえに、国王が純粹にその寛大な気持ちからネーデルラントの臣民の希望をかなえたという形にするのである。

### 国王のネーデルラント訪問構想

国王自身によるネーデルラント訪問の問題が再び取り上げられた。この件についてこれまで挙げられてきた困難のこととくが、現在の緊急事態の前に消え去ったようだった。ティスナックとホッペルスはこう述べる。

「今こそ、陛下自身がかつてエフモント伯に対して与えた、一千の命を犠牲にするのもいとわぬという

ご覚悟を実行に移す時が来たのです。ヘントの秩序回復のため、カール五世は敵地を通つての危険で困難な旅を敢行しました。一つの都市のためにそれだけのことをしたのです。今はネーデルラント全体の平和がかかっているのです。それどころか、ネーデルラントの領有そのものが危ぶまれていると言つてもよろしいでしょう」

これがスペインでの多数派の見方だった。国王の行幸は、これ以上引き延ばすことのできない事項と見なされるようになっていた。

となると問題は、大勢の供回りを連れていくか少数のみにとどめるかであった。この点でエボリ公とフィゲロア伯は、個人的な利害の対立もあつてアルバ公と衝突した。国王の旅行が軍勢を引き連れてのものとなればアルバ公の存在は欠かせないものになる。一方、平和裡にことを運べばアルバ公はそれほど重要ではなく、ライバルたちに道を譲らなければならない。最初に発言したのはフィゲロアだった。

「軍勢となれば、領内を通過する諸侯を警戒させずにはいられません。抵抗を受けることだつてあるかもしれない。その上、沈静化するはずの諸州に無用な負担をかけ、人々をあれほどの行動に駆り立てたあまたの不満にさらに上乘せることになりましょう。平和のうちに機能している裁判所であれば有罪の者と無罪の者とはつきり区別できるのに、そのような負担は国王の臣民すべてに区別なくのしかかります。そのような方策の尋常ならざる無法は、党派の指導者たちの間にこちらの行動に対する警戒心を呼び起こすことになります。もともと気まぐれと軽率から出た施策に対しても、向こうは慎重に、団結して行動するようになることでしょう。自分たちの行動が国王にここまでさせたと思えば絶望の淵に追いやられ、そうなれば何をしでかすかわかりません。」

国王が謀反人の前に軍勢を率いて現われれば、人々に対してもっている最も重要な利点、すなわちその地の君主としての威光を失うことになります。そうした威光は、そのみに頼っているところを見せてやれば、それだけ強力なものとなるものです。その一方、もし軍勢を率いて現われれば国王はいわば謀反人

と同じ土台に立つことになります。そうすれば、スペイン軍に対する国民的な反感が人民を利することを考えると、向こうは難なく兵を集めることでしょう。この方策は、君主としての地位が与える確かな利点を手放して、軍事行動の不確かな結果に賭けることにほかなりません。それは効果を上げられたとしても、必然的に臣民の一部を破滅させるものです。

軍勢を率いての行幸の噂は先に広まるでしょうから、悪しき側についたとの自覚のある者はみな防衛態勢を整え、内外の兵力を動員し、合流させる時間をもつことができます。その際にも全国的な警戒感が重要な役に立つことになります。この進軍の最初の標的が誰になるかがわからないため、罪少ない者までも謀反人の大軍に合流するよう駆り立て、国王にたてつくなど考えもしなかった者を国王の敵に追いやってしまうのです。

その一方、もしそのようなものしい軍勢なしでの行幸となれば、残忍な審判者というよりも怒れる父親のような態度で臨むならば、善良な人々の勇気は鼓舞され、悪人は危険になる前に滅びることでしょう。人々は、あの事件が重大視されておらず、国王にとって強圧手段を取るほどのことではなかったのだと安堵することでしょう。

人は、救われる余地があるのに、公然たる暴挙に出ることによってその可能性を無にすることは避けたがるものです。したがって、好戦的な態度によつて取り返しもつかなくなるものすべてが、穏健な平和的な手段を取れば得られるのです。忠実な臣民が極悪な謀反人と同じ処罰に巻き込まれずにすみ、悪人のみに国王の怒りのすべての重みが降りかかるのです。最後に、こうした遠隔の地域にまでスペイン軍を輸送するとした場合にかかる莫大な費用を節約することができます」

これにアルバ公が反論した。

「だが、全体に危機が迫っているというのに一部の市民の損害など考えている場合だろうか。忠実な心持の者がゆえなく苦しむからといって、謀反人を懲罰しない理由になるだろうか。罪は全土に及んだ。で

は処罰もそうでなげいけない。謀反人が行動によってしたことを、他の者は怠慢によって同じように引き起こしたと言えるのだ。謀反人があれほどの成果を上げ得たのは、黙認したそれらの人々の責任でなくて何だというのだ。最初の動きがあったときになぜ止めようとしなかった。

暴力的な手段に訴えるほど絶望的な状況ではないと言うが、国王が到着したときにもそうでないと誰に保証できよう。ことに、執政から送られてくる連絡にはことごとく事態は急速に破局に向かって進んでいるとあるではないか。国王がネーデルラントに着いて初めて軍勢を率いてくるべきだったと悟る——そのような危険を冒す必要があるだろうか。

謀反人が外国の支援を取りつけたことはまぎれもない事実である。最初の兆候を見て指令を出せば駆けつける手はずになっている。では敵が国境を越えたときに戦備に着手する時だというのだろうか。民の忠誠心が問題になっているのに、手近なネーデルラントの軍勢のみをたのみとするような危険を冒すのが賢明なことと言えるだろうか。

執政にしてもその書簡で絶えず訴えているではないか。勅令を実施し、反乱をくい止めるのをこれまで妨げてきたのは適当な軍勢がないためにほかならないと。統率のとれた圧倒的な軍勢のみが、合法的な君主への抵抗を続ける希望を根こそぎにできる。確実に破滅するという見通しだけがやつらに要求を下げさせることができる。それに、十分な兵力なくして国王のお身を敵地に送り込むわけにはいかないし、謀反人どもと国王の名誉にかなう合意に至ることもできはしない」

軍勢の有無については発言者の権勢がきいてこのアルバ公の議論が優位となった。

次なる問題は、国王が旅路につく時期とその経路だった。海路の旅はあらゆる側面から見て危険この上なく、トリエント近くの峠を越えてドイツにはいるか、サヴォイからアルプスを越えるかしかなかった。第一の経路は、軍勢を率いたスペイン王の旅路に無関心でいられようはずもないドイツのプロテスタントの攻撃にさらされる危険があった。アルプス越えはこの遅い時期には考えられなかった。それに必要なガ

レー船をイタリアから呼び寄せて修理する必要がある、それには数か月は必要だった。最後に、カステイリアのコルテス〔等族議会〕がすでに十二月に予定されており、国王も臨席しなければならない。出発は春までは無理だった。

☆

一方、執政は、国王の威光をあまり傷つけずに現在の窮状から脱するためにどのように対処すべきか、明確な指示を求めてきている。国王が臨御によつて問題解決にあたることができるまでの間、何もしていないわけにはいかなかった。そこで公妃には二通の書簡が送られた。一方は公のもので議会や評議会に示すもの、もう一方は内密で、執政だけが目にするはずのものである。

公の書簡では国王は体調が回復したこと、王女イサベル・クララ・エウヘニア（のちオーストリア家の大公アルブレヒトの妃としてネーデルラント総督妃となる「一五九八」）の誕生を報告し、自らネーデルラントを訪れる確固たる意思を宣言し、すでに必要な準備にも着手しているとした。全国議会の開催については前回同様に否定した。

この書簡では執政がプロテストアントや連盟との間に結んだ締約については触れられていなかった。現段階できっぱり拒否するのは賢明ではなかったし、かといってその効力を承認するわけにもいかなかった。一方では軍備を増強し、ドイツから新たな連隊を集め、反抗する者には武力でもって応じるよう命じた。あとは主だった貴族の忠誠心に期待するものであり、貴族のうちには宗教に対しても国王に対しても偽らない忠節を抱いている者を多く知っていると述べて締めくくった。

秘密書簡のほうでは、執政はやはり何としても全国議会の開催を阻止するよう命じられたが、人々の声に抗しきれず、譲歩せざるを得ない場合には、少なくとも国王の威光が傷つくことのないよう、国王が同意したことは誰にも知られないようはからうものとされた。

## プロテスタントの動向（1566）

スペイン本国でこうした会合が行なわれている間、ネーデルラントのプロテスタントは力づくでもぎ取った特権を最大限に活用していた。教会建設が認められた場所では工事は驚くほど迅速に完成された。老いも若きも、貴人も庶民も石を運ぶのを手伝った。作業をはかどらせるため、女たちも装飾品を犠牲にした。

両宗派はいくつかの都市で独自の長老会や教会会議を発足させ（その最初はアントワープだった）、自分たちの礼拝形式の基礎を整えた。また、プロテスタントの教会一般に関する緊急事態に対処するための共同基金への募金を募ることも提案された。

アントワープではその町のカルヴァン派がホーフスターテン伯に覚え書きを提出し、自分たちの宗教の自由な実践を守るために三〇〇万ターラーの募金を申し出た。この文書の写しが大量にネーデルラントに出回り、他の者をその気にさせるためにこれ見よがしに大金の引き受けに署名する者も多かった。

こうした気前のいい申し出については、反宗教改革側によってさまざまな解釈がなされた。たとえば、この誓約を果たすために必要な額を集めるという名目のもとに、嫌疑をかけられることなく軍資金を募るつもりだと言い切る者もあった。賛否どちらの立場から募金を請われるにしろ、重くのしかかり国を荒廃させる戦争のためより、平和の維持のためと言ったほうが募金に応じる人が多いと考えられるからである。他の者はこうした申し出はプロテスタントの一時的な戦術にすぎないと見ていた。政府と対決するだけの力がつくまでの間、宮廷を縛り、ためらわせておくことが狙いだというのである。さらに別の者は、ふんだんな資金を誇示して執政をおじけづかせると同時に味方を鼓舞するためのこけおどしにすぎないと断言した。

だが、この提案の真の動機が何であつたにしろ、発案者はほとんど得るところがなかった。募金は時折ばらばらとしか集まらず、宮廷も黙殺しただけだった。

## 連盟の退潮（1566）

さらに、聖像破壊運動の行き過ぎは、連盟の大義を押し進めてプロテスタントの利害に貢献するどころか、そのいづれにも取り返しのない害をなしていた。廃墟となった教会——ヴィグリウスの言を借りれば、神の家というよりも馬小屋のように見えた——の光景にカトリック教徒、とりわけ聖職者たちが憤激した。これまで連盟の一員だったカトリック教徒はのきなみ離反した。聖像破壊運動の暴走は、連盟が意図的にたきつけ、あおったものではなかったとはいえ、その遠因となったことは間違いない。

カルヴァン派が主流となった町という町でその不寛容のためカトリックが無慈悲に抑圧されているのを見るにつけ、カルヴァン派について長く抱かれてきたイメージは完全に崩壊した。その点からもカトリック教徒は、優位に立たせたら自分たちの宗教が脅かされかねない宗派の支援をばったりやめてしまった。こうして連盟はその最も有力な構成員の多くを失った。さらに、それまで好意的な市民のうちに見られた味方や後援者も離れていった。連盟の地位は目に見えて低下しはじめた。

連盟加盟者の一部が執政に取り入ろうとして、また不満分子とつながりがあるとの疑惑を晴らすために聖像破壊者に対して行なった過酷な仕打ちは、今度は逆に聖像破壊運動を支持する人々の間での評判を傷つけることになった。

連盟は両派に対して同時に信を失いつつあったのだった。

☆

こうした人心の変化を知るや、執政はただちに、連盟を徐々にむしばんで完全崩壊に至らしめる、あるいは少なくとも内輪もめによって弱体化させると思われる計画に乗り出した。その目的のために利用したのは、国王が一部の貴族に宛ててしたため、執政の裁量でいかようににも利用してよいとして同封してきた非公式の書簡だった。好意的な言辞にあふれるそうした手紙は名宛人にいかにも内密のようにして届けら

れた。しかし、その秘密は露見し、そのような手紙を受け取っていない誰彼の耳にもはいるようにはからわれた。疑惑を少しでも広めるため、大量の写しが流布された。

この計略は見事に図に当たった。連盟の構成員の多くは、そのような輝かしい将来が約束されている者の誠意を疑うようになり、首脳部や支持者から見放されることを恐れて、執政が申し出た条件に我先に飛びつき、宮廷との間の一刻も早い和解を望む姿勢を明らかにした。執政はまた国王の行幸が近いという噂もぬかりなく広めており、これも大いに役立った。国王の臨御にいいことが期待できない多くの者は、これが最後かもしれない恩赦の申し出を迷わず受け容れた。

このような非公式書簡を受け取った者にはエフモント伯とオラニエ公がいた。両者とも、スペイン本国の計略家がこちらの名をおとしめ、その動機や意図に疑惑を投げかけるために広めている悪し様な評判について国王に苦情を述べていた。ことにエフモント伯は、生来の疑うことを知らない率直さで、君主に対し、最も期待することを何でも教えてほしいと、国王の歡心を得、国王への奉公の熱意が認められるためになすべき具体的行動を指示してほしいと乞い、言われれば何でも実行すると請け合っていた。

国王は議長ティスナックを通じてその返答を伝えてきた。誹謗に反論するには国王の命令への完璧な服従を示すことが最善である、その命令はこの上なく明確に述べられており、さらなる説明も具体的な指示も必要ない。熟慮し、吟味し、決定するのは君主の役目であり、無条件で従うのが臣下の務めである。臣下の名譽はその服従にある。手足が頭よりも賢いかのようにふるまうのはふさわしくない。伯が新教徒の脱線を抑えるのに最善を尽くさなかったとする非難があるのは確かだが、今からでも、国王が実際に到着するまで少なくとも平和と秩序を保つことによって過去の怠慢の償いをすることはできる、というのだった。

国王がエフモント伯を言うことを聞かない子供のようにたしなめたのは、相手の性格を知つてのことだった。その友オラニエ公に関しては計略と欺瞞の助けを借りる必要があつた。オラニエ公もその手紙にお





た。

ウイレムの監視の目は単にスペイン宮廷にはとどまらなかった。フランスにも、最も遠隔の宮廷にも密偵を放っていた。また情報を得るのに手段を選ばぬことでも批判を浴びている。最も重大な暴露は、フランス駐在スペイン大使フランシスコ・デ・アラバから公妃への手紙を略取したものだ。

その書状で大使は、ネーデルラントの人々の罪悪感のおかげでその地に専制権力を樹立する好機がやってきたことをとうとうと述べていた。執政に対しては、貴族たちの目をごまかすため、当の貴族たちがこれまで用いてきた手法をまねて、聞こえのよい言葉と恩着せがましい態度によってつなぎとめておくよう助言していた。そしてこう締めくくっていた。国王はこれまでのあらゆる問題は貴族たちが隠れた起爆剤になっていたことを承知しており、すでにスペインにいる二名ともども好機あり次第捕縛するつもりである。二度と野放しにするつもりはなく、たとえ相続した領土の一部を失うことになろうとも見せしめて全キリスト教世界を震え上がらせる決意であるというのだった。

この悪い報せはベルヘンとモンテニーがスペインから書いてくる手紙によっても裏づけられた。二人ともスペインの有力者たちの侮蔑的なふるまい、国王の二人に対する態度の変化について苦々しげに語っていた。オラニエ公は、国王の聞こえのいい約束というものがどれほどのものかを実感するのだった。

### デンデルモンデ会談 (1566.10)

スペインから届く手紙も国王が軍勢を率いて出発しそうな情勢や国王がネーデルラント貴族に抱いている敵意をありありと伝えてきていた。オラニエ公は大使アラバの手紙をこれらの手紙とともに弟ナッサウ伯ルートヴィヒ、エフモント伯、ホールネ伯、ホーフストラーテン伯に見せた。

これら五名の騎士がフランドルのデンデルモンデに赴き、安全保障のための方策を協議したときのことである。ルートヴィヒは激情に任せて何も考えずに今すぐ武器を取って要所を押さえるべきだと主張した。

軍勢を率いた国王のネーデルラント入りを何としても阻止しなければならないのである。スイスやドイツのプロテスタント諸侯、ユグノーにも呼びかけて、武装してスペイン王の領内通過に抵抗するよう説得する。フェリペ二世がそうした障害を乗り越えてきたときにはネーデルラント国境で軍勢をもって迎え撃つ。そしてルートヴィヒ自身がフランス、スイス、ドイツとの防衛条約を交渉し、ドイツ帝国内で四〇〇〇の騎兵とそれに見合う歩兵を募る役を買って出た。必要な資金を集める口実には事欠かない。そして商人や改革派が必ずや支援してくれると請け合った。

だが、弟より慎重で思慮深いウイレムはこの提案に反対の意を表明した。実行には数限りない困難が伴い、今のところそれを正当化する理由もないというのである。ウイレムが言うには、宗教裁判は事実上廃止されており、勅令もほとんど忘れ去られているし、宗教上の自由もそこそこ認められている。よって、今のところこのような実力行使に出るに足る理由はないのだった。ウイレムとしてもそのような口実が遠からず——それからでも準備が間に合うくらい近い将来——出てくることは確信していた。よって、オラニエ公の考えは、その機会が訪れるまでは辛抱強く待ち、その間は注意深く事態の進行を見守る、そしてどうにかして民衆に迫りつつある危険をわからせ、民衆の協力が必要な状況となったときにすぐ動けるように準備しておくことだった。

もし居合わせた者がこのオラニエ公の意見に同意すれば、影響力の点でも構成員の人格の高潔さでも申し分ないこの強力な集団によつて、国王の意図は深刻な抵抗を受け、国王としてもそれを完全に放棄することを強いられていたことだろう。しかし、集まった騎士たちの決意はエフモント伯の意外な発言でゆるがされた。

「それほど無謀なことを試みるくらいなら、あらゆる災難が降りかかるほうがましだ。アラバとかいうスペイン人のたわごとなどに動かされはしない。あのような者にフェリペ二世のような口の重い君主の考えを読み、心に秘めていることをうかがい知ることができるだろうか。モンティニーの伝える情報が示して

いるのは、国王が我らの奉仕の熱意に対して大いに疑念を抱いており、我らの忠義にも信用できない点があると考えているということくらいではないか。そのことについては、我らの側に十分すぎるほど原因があつたと言わなければなるまい。

私は本気でこう思っている。今まで以上に職務に精出すことで国王の評価を取り戻し、今後のふるまいによつてできるものならこれまでの行動が起こしてしまつた不信感をぬぐい去りたいと。

私を頼っているあまたの一族のしがらみを断つて亡命者として外国の宮廷を渡り歩くことなどできようか。受け入れてくれる者みな、重荷となり、支援してくれる者みな、奴隷となり、外国人の従僕となる。

それも自国でのわずかばかりの制約を逃れたために。かつて寵を受け、感謝を受けるに申し分のないはたらきをしたしもべに対して陛下が心ない態度をとるはずがない。以前、ネーデルラントの臣民についてあれほど好意的で慈悲深い御心を示され、この私に直接、あれほど力を込めて真剣に請け合つてくださったあのお方が、今そんな暴君のような計画を企んでいるなどとは決して信じられん。

もし我らが国を以前の平穏な状態に戻し、謀反人を罰し、暴力的に押さえ込まれたところでカトリック式の礼拝を復活させるならば、いいか、スペインからの軍勢の話など二度と出なくなるだろう。このやり方が諸君にお勧めしたいもので、私自身、範を示している。同胞の多くもすでにこの考えに傾いている。私に関して言えば、国王の怒りからは何ら恐れることはない。私の良心が私の無罪の証明となる。私は我が宿命も運勢も国王の正義と慈悲にゆだねている」

ナッサウ伯、ホールネ伯、オラニエ公がいくら決心を変えさせようと努めても、迫りつつある避けられない危険に目を開かせようとしても無駄だった。エフモント伯は本心から国王に心酔していた。国王から受けた好意、それを示すときの国王の丁重さがまざまざと脳裏に焼き付いていた。国王が同僚たちのうちでも別してエフモント伯を取り立てて見せたことはこうして効を奏したのである。

エフモント伯が同郷人の大義を擁して国王に抵抗したのも、党派心からというよりは侮辱されたと思い

込んだからだ。政府の厳格な施策に反対したのも確固たる信念からというよりは気性と天性のやさしさからだ。自分のことを偶像視している国民の愛情に流されてしまったのだ。耳に心地よい肩書きを放棄するには虚栄心の強すぎる伯は、それに値することを何かする必要に駆られていた。家族を一瞥するだけで、己の行動が悪し様に呼ばれるだけで、それが危険な方向に解釈されるだけで、罪という言葉がさやかれただけで、自己陶醉にひたるエフモント伯は恐れおののき、慌てて本来の職務に戻ってしまうのだ。

オラニエ公の計画はエフモント伯の離反で挫折した。民心をつかみ、軍隊の信頼を得ているのはエフモント伯で、これら抜きではどんな計画も効果的に進めることは全く不可能だった。みなエフモント伯のことは間違いないと当て込んでいただけに、その思わぬ脱落で会合そのものが全く無意味になった。こうして一同は結論に達することなく別れ別れになった。

デンデルモンデ会談の参加者はみなブリュッセルの國務評議会に出席することになっていたが、実際に赴いたのはエフモント伯だけだった。執政はエフモント伯からこの会談の内容をさぐろうとしたが、引き出せたのはアラバの手紙だけだった。エフモント伯はこのために写しを取っており、厳重な抗議とともに執政の前に提出した。それを見た執政は最初顔色を変えたが、すぐ平静を取り戻すと、ぬけぬけと偽物だと言ったのけた。

「これが本当にアラバのものであるはずはありません。私のところに届かなかった手紙はないのですから。これを入力したとかいう者は他の手紙には手を出さなかったのでしょうか。どう考えても本物のはずありません。ただの一番も未配はなく、ただの一通も紛失しなかったのですから。それに、国王が私にさえ伝えていないような秘密をアラバに託すなどどうして考えられましょうか」

## 内戦

### 執政の態度 (1566)

この間、執政は貴族たちの間の分裂を利用して、すかさず、内輪もめですでに空中分解しつつある連盟の凋落を決定づける手を打っていた。時をおかずに、ドイツからはブラウンシュヴァイク公エーリヒが準備万端整えていた兵を呼び寄せ、騎兵を増強し、ワロン人から五個連隊を募ってマンスフェルト伯、メーヘン伯、アーレンベルク伯などの指揮下においた。オラニエ公にも兵を預けないわけにはいかなかった。あてつけがましく指揮権を与えないことで感情を害したくはなかったし、オラニエ公が総督をしている諸州は切実に兵を必要としていたこともある。用心としてオラニエ公にはワルデンフィンガー大佐を付け、そのすべての行動を監視させ、危険と見られる方策は未然に防がせることにした。エフモント伯はフランスの聖職者から一五〇〇の兵を維持する資金として四万金グルデンの献金を受け、兵は最も危険と思われる地点に分配された。各州の総督は軍備を増強し、弾薬を蓄えておくよう命じられた。

あらゆる方面でこうした準備が精力的に進められていたことからして、執政が今後取ろうとしている方針に疑問の余地はなかった。優位を確信し、この強力な支援も確保すると、執政はそれまでとはがらりと調子を変えて謀反人に対するようになった。先に不安と必要からプロテスタント側に認めた譲歩についてはこの上なく恣意的な解釈をし、暗黙のうちに認めたあらゆる自由を単なる説教の許可に限定しようとした。当然含まれると思われた他のいっさいの宗教行為や儀式については、新たな布告によって明確に禁じられ、違反者は反逆者同然に訴追されるものとされた。プロテスタントは秘蹟について正統教会と異なる考え方をもつことは許されたが、異なるしかたで秘蹟を受けることは罪とされた。プロテスタント流の洗礼、婚礼、葬礼は死罪をもつて禁じられた。宗教を認めながらその実践を禁じるというのは実に残酷な形で人を愚弄するものだった。

だが執政がこうした卑劣なやり方で誓約を逃れようとするのも、それを押しつけられたときの臆病さの裏返しでしかなかった。説教のごくささいな変更やちよつとした行き過ぎがとがめられ、一部の説教師は指定された場所以外で職務を遂行した罪で裁判にかけられ、断罪され、処刑された。執政は一度ならず公の場で、連盟は執政の恐怖心につけこんだのであり、脅迫によつて押しつけられた締約には拘束されないと断言した。

### ヴァランシエンヌ包圍開始 (1566)

聖像破壊運動に参加したネーデルラントの全都市中で、執政が最も危険を感じたのはエノー州ヴァランシエンヌだった。ここほどカルヴァン派の勢力が強いところはなく、エノー州が伝統的に誇る反乱精神はこの地では自然になじんでいるのだった。フランス国境に近く、言語的にも習俗的にもネーデルラントよりはフランスに近いこともあって、昔からこの町では過激なことはせず注意深い統治が行なわれてきた。だがそれによつてこの町は自らの重要性をより意識しただけだった。先の教会冒涇者の暴動の際には、町はもう少しで緊密な関係にあるユグノーに明け渡されるところだった。ちよつとしたきつかけさえあればその危険が再発しかねなかった。

こうした事情から、ネーデルラント全都市のうちでもヴァランシエンヌは、執政が準備でき次第すぐにも強力な守備隊を送り込むつもりでいる地点の第一だった。不在のベルヘン侯に代わつてエノー総督を務めるノワルカルム領主フィリップスがこれを拝命し、今、軍勢を率いてヴァランシエンヌの城壁前に現われた。

町からは市当局を代表して使節が送り出され、多数派であるプロテスタント住民が反対を表明しているとして守備隊の件を思いとどまるよう嘆願した。

それに対し、ノワルカルムは執政の意思を伝え、守備隊受け入れか包圍戦かの選択肢しか与えなかった。

それでもノワルカルムは町に駐屯するのは高々騎兵四個中隊、歩兵六個中隊であると説明し、自分の息子を入質として差し出すとまで申し出た。

こうした条件が提示された市当局は受諾の方向に傾いたが、そこに説教師のペレグリン・ラグランジュ——民衆の使徒であり偶像であり、ここで屈すれば人身御供にされるのが必定であり、なんとしてもそれを阻止する必要があった——が支持者たちの先頭に立って現われ、その雄弁の力により条件を拒絶するよう民衆をあとりにたてた。

市の回答がもたらされると、ノワルカルムは国際法に全く反して使者らを鎖につなぎ、捕虜として連れ去った。ただし、その後執政からの明確な命令を受けて解放せざるを得なかった。マドリードからできる限り穏健な態度に出るよう内密の命令を受けていた執政は、市に対して繰り返し守備隊受け入れを要請させた。

しかし、ヴァランシエンヌが断固として拒否の姿勢を貫こうとすると、公式の布告によつてヴァランシエンヌは反乱状態にあると宣言され、ノワルカルムは正式な包囲戦の開始の裁可を与えられた。他の州はこの反抗的な町に助言にしろ資金にしろ武器にしろ支援することを禁じられた。市内のあらゆる財産は没収とされた。本格的な包囲戦になる前に戦争の何たるかを見せつけ、冷静に考え直す時間を与えるため、ノワルカルムはエノー、カンブレー全域から兵を集め、サンタマンを奪取し、近隣地点に残らず守備隊を置いた。

☆

ヴァランシエンヌに対する政府の対応から、似たような状況におかれている各都市は自分たちに対してどのような運命が待ち受けているかをうかがい知ることができ、たちまちにして連盟全体が動き出した。避難民の群れからあわただしく集められた三、四〇〇〇の乞食党の軍勢と、聖像破壊運動に加わった群衆の名残りとはトウルネー、リールの近辺に現われ、これら二都市を押さえてヴァランシエンヌの敵を攪乱



しようとした。

この軍からの一隊はプロテストント住民と連携してリール奪取を試みたが、リールの長官は幸いにもこれを撃退して町を維持することができた。

同時に、ローノワ付近で無駄に時間をつぶしていた乞食党の軍はノワルカルの奇襲にあい、完膚無きまでにたたきのめされた。必死の奮闘で突破に成功したわずかの者はトゥルネーの町に逃げ込んだ。

勝利者はただちにトゥルネーに対して開城と守備隊受け入れを要求した。すんなり従ったおかげでトゥルネーに対しては比較的穏健な処置がなされた。ノワルカルムは、プロテストントの長老会を廃止し、説教師を追放し、反乱の首謀者を処罰し、ほとんど完全に中断していたカトリックの礼拝を復活させることでよしとした。長官として強固なカトリック信者を任命し、十分な守備隊を残すと、ノワルカルムは勝利軍とともにヴァランシエンヌの包囲に戻った。

☆

強固な防備を誇るヴァランシエンヌは精力的に防衛の準備を進め、とことんやり抜くべく固く決意していた。住民はこれまでに長い包囲戦に備えて弾薬や糧食の蓄えを怠っていないかった。武器を持てる者は職人だろうが何だろがみな兵士になった。城壁の前の家、特に修道院は、攻撃の際、包囲軍に盾として利用されないよう取り壊された。少数の国王支持派は多勢の前に気圧されて何も言わず、カトリック教徒もなりをひそめていた。無政府状態と反乱が秩序に取って代わり、向こう見ずな牧師の狂信が法となった。同志の数は多く、絶望からくる勇氣にあふれ、救援を固く信じ、カトリック教に対する憎悪は極限にまで高まっていた。多くの者はいかなる慈悲も期待できず、誰もが傍若無人な守備隊による社会全体の隷属化を憎んでいた。

ノワルカルムはあらゆる方面からの増援を得て強大な軍勢を手にするまでになり、長期の包囲戦に備える必要物資も不足なく補給されていた。今一度穏和な手段でヴァランシエンヌを説き伏せようとしたが、

町は屈しなかった。ついにノワルカルムは塹壕掘りに着手し、包囲戦の準備を開始することを命じた。

### 執政と連盟の対立の先鋭化（1566）

この間、執政の立場が改善するのに比例してプロテスタントの立場は悪くなる一方だった。貴族連盟の参加者は徐々に減って、当初の三分の一にまでなった。その最大の擁護者のうちに数えられたエフモント伯などは国王派に移り、確かなものとあてにされた募金は細々としか集まらなかった。党派の熱意は目に見えて冷め、この時期まで続いてきた好天の季節も終わって青空説法は続けられなくなった。その他の事情も加わって、退潮の党派は要求を下げ、非常手段に訴える前にあらゆる合法的手段を尽くそうとするようになった。

その目的のためにアントワープで開催され、連盟からも若干名が参加したプロテスタントの総教会会議では、執政のもとに代表を送ってこのたびの約束違反に抗議し、締約を思い起こさせることが決議された。ブレードローデがこの任を引き受けたが、ブリュッセルから締め出されるというにべもなく不面目な扱いを味わわれた。

そこで連盟全体の名による覚え書き提出という手段に訴えることにした。そこでは公妃の約束違反のため、連盟の保証を信じて武器を置いたプロテスタントに対して面目を失い、連盟が苦心して成し遂げた成果が無に帰したと不満を述べていた。さらに、執政は人々の目の前で連盟をおとしめようと謀り、連盟参加者の間の不和をあおり、それどころかその多くを犯罪人として訴追したと非難した。そして執政に対し、プロテスタントからその宗教の自由な実践を奪った先の布告を撤回し、そして何よりもヴァランシエンヌの包囲を中止し、新規に募兵された部隊を解散することを要求した。そうした条件が認められなければ、連盟としては社会の平和は保証できないというのだった。

これに対する執政の回答はそれまでの控えめな調子からはかけ離れたトーンのものであった。

「この覚え書きを送りつけてきた連盟とはいったい何者なのか、実に謎です。以前やりとりをした連盟は私の知る限り解散したはずです。少なくともこの陳情にその全員が関わっているはずはありません。何もかも満足して本分に戻った者を私自身直接に数多く知っているからです。

何者にせよ、このいわれもなく名前も出さずに陳情を送りつけてきた者は、もし私がプロテスタントに完全な宗教の自由を保証したと言うのであれば、私の言葉を少なくとも非常に誤った形で解釈しています。公式の許可なくあちこちで開始された説教を、始まってしまった場所では認めるよう促された際、私がいかに気が進まなかったかは誰もが知るところです。それが宗教の自由を認めたことになるはずがないではありませんか。私が不法な長老会を保護し、国家の中に国家を認めるような考えを抱いていたなどありませんか。この私がそれほど我を忘れることがありえましょうか。忌むべき教団に合法的な地位を認め、教会と国家のあらゆる秩序を覆し、私自身の神聖な宗教を忌まわしいしかたで冒瀆するなど。そなたたちにそのような許可を与えた者があるならその者にすぎるのは勝手です。ですが、私には通用しません。

そなたたちは私が免責や保証を与えた締約に背いたと非難しているのでしょうか。過去については大目に見る用意はありますが、今後なされることについてはそうはいきません。去る四月の請願のことでそなたたちに不利益をこうむらせることはしないつもりで、私の知る限りそのようなことはこれまで行なわれていないはずです。しかし、今度同じように国王の尊厳を侵した者には、その罪の結果を負う覚悟をしていただきます。

最後に、締約を守れと言いますが、自分たちが先に破っておきながらよくもそのようなことが言えたものです。教会が略奪され、聖像が破壊され、諸都市が反乱へと引き込まれたのはいったい誰の教唆によるのですか。諸外国と同盟を結び、不法な募兵に着手し、国王の臣民から不当な税を徴収したのは誰ですか。私が兵を集め、それによって勅令の適用を厳格にしたのには、そうした理由があるのです。

今私に武器を置けと言う者が本当に祖国や国王のためを思っているとは思えません。我が身がかわ

いければ、私の行動についてとやかく言う前に、己の行動に非がなきよう気をつけるべきです」

この高飛車な宣告で、連盟の抱いていた友好的な決着の希望は消えた。執政がこのような態度に出るからには、強力な支援を手に行っているに違いなかった。軍はすでに動員されている。ヴァランシエンヌ前に布陣する敵がそれだ。連盟の中心だった人々も去った今、執政は無条件の服従を求めているのだ。

☆

連盟の今の退潮を考えれば、公然と反旗を翻しても事態はこれ以上悪化のしようもなかった。無防備のまま怒れる君主の手中に身を投じれば、どのような運命が待ち受けているかは明らかだった。しかし、武力に訴えれば少なくとも運命は不確かなものになる。したがって、連盟は後者の道を選び、防衛に向けて真剣に動きはじめた。

ドイツ新教徒の助力を得るため、ナッサウ伯ルートヴィヒはアムステルダム、アントワープ、トゥルネー、ヴァランシエンヌといった都市にルター派のアウクスブルク信仰告白を承認するようはたらきかけ、宗教の面でドイツ諸侯との間に密接なきずなをつくろうとした。だがこの提案は不発に終わった。カルヴァン派のルター派に対する嫌悪感カトリックに対する憎悪さえをものぎかねないものだったのである。ナッサウ伯はまたフランス、プファルツ、ザクセンから補給を受けるべく精力的に交渉を始めた。

ベルヘン伯は自領の城の防備を固めた。ブレードローデはレック河畔の強固な都市ヴィアーネン（ブレードローデが主権を主張している都市）に少数の手勢とともにはいり、緊急に防衛態勢を整え、連盟からの増援とともにナッサウ伯の交渉の結果を待った。

今や公然と反旗が翻され、そこかしこで軍鼓の音が聞こえた。町という町で兵が行進し、軍資金が集められ、新兵募集が行なわれた。しばしば両派の手の者が同じ場所ではち合わせし、執政の側の徴税吏や募兵役人が町を去ったと思ったら、今度は連盟側の運動員から同じような無法を受けるのだった。

## スヘルトーヘンボス (1566)

執政はヴァランシエンヌから「ブラバント州」スヘルトーヘンボスに目を向けた。スヘルトーヘンボスではつい最近も聖像破壊運動が暴発したばかりで、プロテスタント一派が大いに力をつけていた。

市民に平和裡に守備隊受け入れを認めさせるべく、執政はブラバント出身の参事官スヘイフト、ペータースヘイム出身の市参事会員メローデをこの地に使節として送り、メローデをこの地の長官に任じた。交渉によつてこの地を確保し、市民から新たな忠誠の誓いを求めるためだった。

同時に、部隊を率いて近くにいるメーヘン伯は二人の使節の任務遂行を支援し、すぐ守備隊を投入できるように、この市に接近することが命じられた。

しかし、ヴィアーネンでこうした動きの情報を得たブレードローデは、自派の士気を高め、執政のもくろみをくじくため、すでにこの地に手の者を送っていた。アントン・ヴァン・ボンベルフという人物で、激しやすいカルヴァン派だったが、勇敢な兵士でもあった。ボンベルフは参事官が執政から託されてきた手紙を入手し、市民を激昂させるような厳格で尊大な口調の偽物とすりかえることに成功した。同時に、公妃からの二人の使節が町に対してよからぬたくらみを持っているかのような疑惑を投げかけた。これが見事に図に当たり、猛り狂った群衆が使節の身柄を捕らえ、拘禁するまでになった。

ボンベルフ本人は八〇〇〇の群衆から指導者として迎えられ、その先頭に立って、戦闘隊形で迫りつつあるメーヘン伯に向かっていった。重砲も使ったその激しい応戦にメーヘン伯は目的を遂げることなく撤退を強いられた。

執政は使節の解放を要求すべく、今度は司法官吏を送り、拒否の場合には包囲戦を開始すると脅してきた。しかし、ボンベルフとその一派が市庁舎を取り囲み、勝手に降伏できないよう市当局に市の鍵を引き渡させた。執政からの使者は嘲笑のうちに追い返され、捕虜の扱いはブレードローデの命令次第だとの回答を伝えさせた。城門の外で待機していた伝令が市に宣戦を布告すべく現われたが、それだけは参事官が

くい止めた。

☆

スヘルトーヘンボスの威圧が失敗したのち、メーヘン伯はユトレヒトにはいった。ブレードローデ伯がこの都市を狙っていたのを妨げるためである。すぐ近くのヴィアーネン付近で宿営していた連盟の軍勢からさんざん悩まされていたユトレヒトは、メーヘン伯を守護者として大手を広げて迎え、伯が定めた礼拝に関するすべての変更に同意した。

メーヘン伯は間髪をおかず、レック河畔のヴィアーネンを臨む位置に堡壘を築かせた。ブレードローデは市内で攻撃されるのをただ待っているつもりはなく、軍の精鋭を引き連れてこの防衛拠点を去ってアムステルダムへと急いだ。

### アントワープ城外の戦い（1567.3）

オラニエ公はといえば、こうした動きのさなか、アントワープで無為に時を過ごしていたように見えるが、一見して静かに見える裏ではその活動が休むことはなかった。連盟が募兵を開始したのも、ブレードローデが所領の城塞を固めたのもオラニエ公の指示によるものだった。ブレードローデにはユトレヒトで鑄造させた大砲三門を提供した。その目は宮廷の動きをも余すことなく見張り、連盟には次に攻撃の危険がある都市について警告を発し続けていた。

だが、その至上命題は総督としての自分の統治下にある主要拠点を押さえることであつたようだ。ブレードローデのユトレヒトやアムステルダムに対する計画をひそかに全力を挙げて支援していたのもそのためだった。最も重要な地点は国王の上陸地点になると思われるワルヘレン島である。オラニエ公はこの地の奇襲作戦を立てた。その遂行は連盟の貴族の一人でオラニエ公の近しい友でもあるトゥールーズ領主ヤン・ヴァン・マルニクス（シント・アルデホンデ領主フィリップスの兄）に託された（一五六七）。

☆

トウルーズはミデルブルフ（ワルヘレン島にあるゼーラント州の首都）の前市長ペーター・ハークとひそかに通じており、それを利用してミデルブルフやフリシingenに守備隊を投入する機会を期待していた。しかし、この計画のためにアントワープで開始された募兵はいくら内密にやっても市当局の注意を引かないわけにはいかなかった。そこで当局の疑惑をまぎらすと同時に計画遂行にも資するため、オラニエ公は、すべての外国人兵および国の公職その他の業務に従事していない者に対し、伝令によって公式に、ただちに市から退去するように伝えさせた。批判者が言うには、オラニエ公は市門を閉ざしさえすれば、疑わしい兵士はいともたやすく一網打尽にできた。それを市から追放したのは集結地点に追い立てるためだったという。

これらの外国人はただちに船でスヘルデ川を下って（フリシingenのランメケンスに至ったが、少し前にフリシingenに到着したアントワープの商船から事情が伝わっていたため、船団は入港を許されなかった。ミデルブルフ近くのアルネマイデンでも同じ困難に遭遇し、市内でプロテスタントが支援のために蜂起しようとしたのも不発に終わった。

やむなくトウルーズは目的を果たせないまま船団を反転させ、再びスヘルデ川をさかのぼった。アントワープから数百メートルほどのオステルウェールまで引き返したところで外国人を降ろして沿岸で野営した。アントワープからの合流を期待する一方、アントワープのすぐ近くに自分がいることで市当局によって押さえつけられている同志の士気を高めるためでもあった。市内で募兵にあたってくれたカルヴァン派聖職者の助けにより、トウルーズの小規模な軍勢は日々ふくれていき、しまいにはアントワープの周辺全域で襲撃を繰り返してアントワープ当局にとっても脅威となるまでになった。激怒した市当局は市の民兵を繰り出そうとしたが、この案は、オラニエ公が兵に市を空けさせるのは賢明ではないという口実でまんまと葬った。

☆

この間、執政は取り急ぎ小規模な軍を編成した。それはフィリップス・ヴァン・ローノワの指揮下、強行軍でブリュッセルからアントワープに向かってきた。同時に、メーヘン伯は乞食党の軍をヴィアーネンに封じ込め、手を空けさせないことに成功し、ヴィアーネンの同志はアントワープ周辺での動きを知ること、同胞の救援に駆けつけることもできなかった。

ローノワはアントワープ近郊に到着すると、敵襲など思いもせずに略奪に出てばらばらになっていた烏合の衆に奇襲をかけ、恐るべき血の海のうちにたたきのめした。トゥールーズはわずかに残された兵とともに司令部として使っていた館にたてこもり、かなりの間追いつめられた者の勇気を見せて奮闘した。

正攻法ではトゥールーズを館から追い立てることはできないと見たローノワは館に火を放った。炎を逃れた少数の者は敵の剣にかかるか、スヘルデ川で溺れるかした。トゥールーズ本人は敵の手に落ちるよりは炎に焼かれることを選んだ。一〇〇〇を超える敵を一掃したこの勝利は、勝者にとって実に安上がりなものだった。全軍のうち、失ったのはたったの二名だったのである。連盟側で投降した三〇〇ほどは、アントワープからの攻撃が恐れられていたこともあって、慈悲の余地なくその場で切り捨てられた。

### アントワープの騒動 (1567.3)

アントワープでは、実際に戦闘が始まるまでそのような事態は予想だにされていなかった。

早期に情報を得ていたオラニエ公は前日、大事をとってアントワープとオステルウェールを結ぶ橋を破壊させていた。表向きの説明は、市内のカルヴァン派がトゥールーズの軍勢に合流するのを防ぐためというものだった。真の動機はおそらく、カトリック側が乞食党の背後を突くことを恐れたか、あるいはローノワが勝利を上げた場合に市になだれ込もうとするのを防ぐためであったと思われる。同じ名目のもと、オラニエ公の命令で市門も閉ざされた。



こうした動きの意味を理解できない住民たちの心は好奇心と警戒心の間でゆれ動いたが、オステルウェールからの大砲の音で事情を知った。わめきたてる群衆が城壁に押し寄せてその通路に上がると、風が硝煙を吹き払ったので戦闘の一部始終をすっかり見渡すことができた。両軍とも市のすぐ近くに位置しており、旗印まで見分けられ、勝者と敗者の声もはっきりと聞き分けられた。

戦闘そのものよりおそろしかったのはこの町の人々の表情だった。城壁の上には対峙しているどちらの軍に対しても敵も味方もない。平原で起こることのすべてが城壁の上に驚喜と同時に落胆を呼び起こした。この戦闘の行方に見る者それぞれの運命がかかっているかのようにであった。勝利と敗北、敗者の恐怖と勝者の猛威——戦場での動きの一つ一つが町の人々の顔つきで見取れた。こちらには押されている側を支援し、逃げる者を引き留めたいとはやる悲痛だがむなししい望みが、そちらには敗者を追い、斬りつけ、根絶したいという同じくはかない焦燥が見られた。いよいよ乞食党が敗走すると、一万が歓喜した。トゥールーズが最後に駆け込んだ館は炎に包まれており、二万の市民の希望はトゥールーズとともに消えた。

しかし、当初の恐怖による麻痺状態はすぐ猛烈な復讐心にとつて代わられた。戦死した將軍の未亡人は、泣き叫び、両手をもみしぼり、髪を振り乱して群衆の間を押し進み、復讐を、同情を懇願した。民衆が信奉する説教師ヘルマン・ストリックカーにたきつけられ、カルヴァン派は武器を取り、同胞のかたきをとるか、さもなければ運命を共にする覚悟だった。考えもせず、計画も指導者なしで、ただその苦悩に、狂乱状態にのみ導かれ、群衆は戦場に通じる市の赤門に押しかけた。しかし、出ることはできなかった。門は閉ざされており、群衆の先頭にいた者は引き返そうとして後続の者とぶつかった。何千に何千が加わり、メル橋へのすさまじい奔流となった。

みな口々に、謀られた、閉じこめられた、と叫んだ。教皇主義者に破滅を、裏切り者に死を！暴動を予感させる押し殺したつぶやきが群衆の間に広まった。これまでのことはすべてカルヴァン派を破滅させるためにカトリックが仕組んだことだと疑いはじめていた。頼みの軍は葬り去られた。今度は抵抗力のない

人々の番だ。

この不吉な疑惑は瞬く間に全アントワープに広がった。これまでのことが今にしてはつきりしたとの思いのうちに、さらに悪いことが待ち受けているものと恐れられた。恐怖による不信感が誰ももの腦裏を離れなかった。両派とも相手を恐れ、誰もが隣人に敵を見た。謎が懸念と恐怖をあおる。これほど人口の多い都市にあつては恐るべき状態である。ちよつとした集まりが騒動となり、どんな噂でも事実となり、ごく小さな火花が猛火につながり、激しい軋轢のためあらゆる情熱はそれだけ激しく燃え上がる。カルヴァン派の名で呼ばれる者はみなこうした風評にかき立てられた。

一万五〇〇〇の群衆がメール橋を押さえ、兵器庫から奪った重砲を設置した。同じことが別の橋でも起こる。数のおかげでその勢いは圧倒的で、市はその手中にあつた。想像上の危機から逃れるために、アントワープ全市を現実の破滅の一步手前まで追いやったのである。

☆

騒動のことを聞きつけるとオラニエ公はただちにメール橋に飛び、大胆にも猛り狂う群衆に分け入ると、静粛を命じ、話を聞くよう求めた。もう一方の橋ではホーフストラテン伯が市長ストラレンに伴われて同じ試みをしたが、弁舌でも人氣でも注意を引くにはとても及ばなかったので、騒々しい群衆にオラニエ公の話を聞くよう呼びかけた。こうしてアントワープじゅうの人がオラニエ公のまわりに殺到した。

オラニエ公は人々に理解してもらおうと声を上げた。門を閉ざしたのは単に、どちらが勝つにしろ勝利者が市になだれ込むのを防ぐためであり、そうしなければ市は兵士たちの略奪の餌食となつていただろうと言った。

だが無駄だった。気の立った群衆は耳を貸そうとせず、中でも大胆不敵な一人がオラニエ公に銃口を向け、裏切り者呼ばわりした。われんばかりの喧噪で人々は赤門の鍵を求め、オラニエ公としてもしまいは鍵を説教師ヘルマンの手に渡さざるを得なくなつた。

しかし、オラニエ公は持ち前の沈着さを失うことなく言った。今しようとしていることをよく考えてみるべきだ、門外では敵の騎兵六〇〇が待ちかまえているのだぞと。この急場の思いつきは、おそらく当のオラニエ公でさえ思ってもみなかっただろう真実からそれほど遠くはなかった。勝軍の将はアントワープの騒動を知るやただちに全騎兵に騎乗を命じ、混乱に乗じて市に突入しようと準備していたのである。

オラニエ公は続けた。少なくとも私は前もって己の安全を確保しておくことにする。私の例に倣う者は将来の禍根を避けることができるだろう。その場の思いつきで口にされ、早速行動に移されたこの言葉は効果があつた。いちばん近くにいた者がオラニエ公に続き、さらに次の者が続いた。結局、先走つて市外に飛び出した若干名は、誰も続いてこないのを見ると、自分たちだけで六〇〇の騎兵を相手にする気はうせた。こうしてみなメル橋に戻り、歩哨、騎哨が置かれ、その夜は武装したものものしい雰囲気の中に過ぎた。

アントワープの町は、今、恐ろしい流血と略奪の脅威にさらされていた。この切迫した事態にあつて、オラニエ公は特別参事会を開催し、四つの民族から誠実に優れた者が集められた。オラニエ公は、カルヴァン派の暴走を抑えたければ軍隊をもつて臨むほかはないと言つた。そこで急遽町のカトリック住民を地元民、イタリア人、スペイン人を問わず武装させ、できるならばルター派にも合流してもらうことが決議された。

富を誇り、数におごるカルヴァン派は他宗派をことごとく軽んじており、その傲慢さはルター派をその敵として久しかった。この両プロテスタント教会の間の敵意は全く和解しがたい性質のもので、正統教会に対する憎悪を足場に力を合わせることもできないほどだった。これまで市当局はこの相互の対抗心を大いに活用し、一方の宗派を利用して他方を抑えてきた。特にその成長ぶりが脅威であつたカルヴァン派を牽制するのに役立つた。こうした配慮から、オラニエ公は弱者であり、より穏健な宗派であるルター派を暗黙のうちに保護下におき、さらにルター派のためにドイツから宗教指導者を招く手はずも整えた。論争

の種となる説教によつて互いの憎悪の火を絶やさないようにするためと思われた。オラニエ公はルター派に對し、国王がその信条をカルヴァン派よりも好意的に考えているという幻想を与え、カルヴァン派と歩み寄ることとでせつかくのよい心証を傷つけないよう忠告した。こういうわけでオラニエ公は、当座の間、カトリックとルター派に手を結ばせることは難しくはないと判断した。それが憎んであまりある競争相手を押さえつけるためのものとなればなおさらである。

夜が明けるところ、カルヴァン派の群衆に對して一つの軍勢が對峙した。その軍勢を背にしたオラニエ公の雄弁は、こうした強力な説得材料をもたなかった昨晚よりもずっと効果的で、ずっとよく受け入れられた。カルヴァン派は武装しており、大砲も有していたが、立ちほだかる敵の数が優勢なのを恐れ、先に使節を送つて寄越し、友好的な解決を求めてきた。

オラニエ公の手腕により各派に満足のいく形の決着を見た。それが宣言されると、まずスペイン人、イタリヤ人はただちに武器を置いた。カルヴァン派がそれに続き、さらにカトリック、そして最後にルター派が武装解除した。

アントワープではこの一触即発の状態は二日二晩続いた。カトリックの手によりメール橋の下に火薬樽がしかけられており、カルヴァン派が別の場所でカトリックに對してしたように、橋にひしめくカルヴァン派の全軍を吹き飛ばすことが企まれた。市の破壊がその一瞬にかかつていた。それが防げたのは、オラニエ公の冷静沈着な対応あればこそだった。

## ヴァランシエンヌ (1567)

ワロン人の軍勢を率いるノワルカルムはいまだヴァランシエンヌの前に陣取つていた。ヴァランシエンヌは乞食党の救援を信じて、執政からの度重なる非難にも断固として動じずにおり、降伏の考えはことごとく退けていた。

包囲側の将は、ドイツからの増援が届くまで包囲を進めてはならないとの明確な命令を宮廷から受けていた。国王は、節度からか恐れからかとはともかく、無実の者を罪人の運命に巻き込み、忠実な臣民まで謀反人と同じ運命に巻き込む突撃という力づくのやり方を嫌っていたのである。

しかし、籠城側の反抗心は日増しに高まった。包囲側の無策に大胆になり、頻繁に打って出ては包囲軍を悩ませ、市の前のいくつかの修道院に火をつけては略奪品を持って帰るまでになった。

市の前で無駄に過ごしている時間が謀反人とその同盟者に利用されるのに耐えかね、ノワルカルムは町を強襲する許可をすぐにも国王から取りつけるよう執政に求めた。フェリペ二世からの回答はいつになく早かった。当面は単に強襲に向けての準備を進めることで満足せねばならず、それを実行に移す前にしばらくは準備作業の恐怖による効果を待つべきであるとされた。それでも明け渡されない場合には突撃は許可されたが、住民の生命に最大限の配慮を払うものとされた。

執政は、ノワルカルムに最終手段に訴えることを認める前に、エフモント伯とアールスホット公に全権を与えて今一度反乱軍と友好的に話をつけようとした。両名は市の代表者と会談し、幻想を捨てさせるようあらゆる手を尽くした。トゥールーズが敗北して市民たちの唯一の頼みの綱が失われたこと、乞食党の軍勢はメーヘン伯がくい止めていることを伝え、市がこれまでもちこたえられたのは、ひとえに国王の猶予のおかげであると論じた。過去については完全な恩赦をもちかけ、誰もが自ら選ぶ裁判所で己の潔白を自由に立証できるとした。この特権を利用する意思のない者は十四日のうちにすべての所持品を持って町を去ることが認められる。町の人々に要求されるのはただ一点、守備隊の受け入れだけである。

この条件を考慮する時間を与えるため、三日の休戦が認められた。代表が市に戻ってみると、市民たちはこれまで以上に和解に否定的だった。この間、乞食党の新たな募兵の噂が広まっていたのである。トゥールーズについては、勝利を上げて強力な救援軍を率いて向かってきているところだと信じられていた。市民たちの自信のほどは、休戦を破って包囲軍に砲撃をしかけようとしたほどだった。

市当局はようやくのことで平和的な解決に向けて一定の前進を得ることができた。それは次の条件で市参事会員十二名を野営地に送るというものであった。ヴァランシエンヌを反逆罪で非難し、国家の敵と宣言した布告を撤回すること。双方の捕虜は解放されること。守備隊の入城は、希望する者が自らとその財産の安全をはかつてのちにすること。いかなるしかたであれ住民を悩ますことはせず、守備隊の費用は国王が負担する旨の誓約を行なうこと。

ノワルカルムはこれらの条件に激怒し、使者たちを虐待しかねない剣幕だった。ノワルカルムは使者に言った。

「町の明け渡しに來たのでなければすぐ去るがよい。さもなければ後ろ手に縛って送り返すまでだ」

使者は悪いのはカルヴァン派の頑迷さだとし、これ以上反抗的な町の人々とはやっていけないし、運命を共にする気もないので陣営に置いてほしいと目に涙を浮かべて訴えた。ひざまづいてエフモント伯のとりなしまで求めた。しかし、いくら懇願してもノワルカルムは聞く耳を持たず、その命令で持ち出された鎖を目にすると使者たちは不承不承ヴァランシエンヌへの帰途についた。

将軍がこの厳しい対応をしたのは、冷酷さからではなく必要からだった。前回使者を拘留したことで公妃の叱責を受けたことも記憶に新しい。また使者が戻らなければ町の人々は間違ひなく、前回同様拘留されたものと思うだろう。それに、町に残っている少数の好意的な市民を離反させたり、盲信的で乱暴な群衆のえじきとしたりするわけにはいかなかった。エフモント伯も自らの和解の努力が失敗に終わったことに憤激し、次の晩、馬で町の防備の偵察に出、陥落は時間の問題だと確信すると満足して陣営に戻った。

ヴァランシエンヌはなだらかな傾斜地から平野に至る立地にあり、風光明媚であるとともに防衛適地でもあった。一方の側はスヘルデ川と小さな川に接し、反対側は深い堀、厚い城壁、塔に守られており、どんな攻撃だろうとはね返せるように見えた。しかし、ノワルカルムは、堀がほとんど地表面まで埋まったまま放置されている箇所をいくつか発見し、突撃の際にはこれを利用するつもりだった。

町を取り囲んで分散していた各部隊を集め、嵐の夜、ベルフ郊外を一兵たりとも失わずに占領した。

ここでノワルカルムは、ボシユ伯、若き伯爵カール・フォン・マンズフェルト、若き「ジル・ド・」ベルレモンに担当地区を割り当てた。猛烈な放火で敵を城壁から追いやりつつ、連隊長の一人が率いる部隊ができる限りの迅速さで接近した。町のすぐ前、市門の正面に、籠城軍の目の前でほとんど損失も受けずに防塞と同じ高さの砲台が築かれた。ここから市街は四時間にわたって絶え間ない砲撃を受けた。籠城側が若干の大砲を設置していたニコラス塔は最初に崩れたものの一つだった。大勢ががれきの下敷きとなって死んだ。大砲は目立った建物を片っ端から標的にし、住民の間にもすさまじい数の死傷者が出た。数時間のうちに主だった建物は破壊され、市門にもかかなりの大きさの突破口が開かれ、籠城軍はこれ以上の防衛は不可能と観念して慌てて二名のらっぱ手を送って話し合いを求めた。

交渉は認められたが、攻撃は中断されることなく続いた。それだけに使者は、わずか二日前に拒否したその条件で町を明け渡すという線で和議を結ぶぼうとやっきになっていた。しかし、今や状況は変わっていた。勝者は条件のことなど聞く耳持たなかった。絶え間ない砲火に、住民も城壁の修理が追いつかなくなっていた。崩れた城壁が堀を埋め、そこに敵が突入できる突破口ができていた。

完全な破壊が確かと知り、夜明けごろ、町は無条件降伏した。攻撃は実に三十六時間間断なく続き、市街には三〇〇〇の砲弾が撃ち込まれた。

ノワルカルムは厳格に統率のとれた勝利の軍勢を率いて町に入城し、出迎えた女や子供は緑の枝を捧げて慈悲を乞うた。全市民はただちに武装解除され、市の長官とその息子は首をはねられた。反逆者のうちでも最も罪の重い者三十六名（そのうちにはラグランジュおよびもう一人のカルヴァン派説教師グイー・ド・デ・ブレッセがいた）はその頑迷さを絞首台で償うことになった。官吏はみな地位を追われ、町はそのいっさいの特権を剥奪された。ただちにカトリックの礼拝が完全な形で復活され、プロテスタントの礼拝は全廃された。アラス司教が市内に居を構えることになり、今後の服従を確かなものとするため強力な

守備隊がおかれることになった。

### 国王軍の勝利（1567）

注目を集めていたヴァランシエンヌの運命は同様の過ちを犯した他の諸都市への警告となった。ノワルカルムはその勝利の勢いを駆ってただちにマーストリヒトへと軍を進めた。マーストリヒトは抵抗することなく降伏し、守備隊を受け入れた。

そこからトゥルンハウトへと進軍し、その存在によってスヘルトーヘンボス、アントワープの住民を威圧しようとした。スヘルトーヘンボスではボンベルフの指揮のもと乞食党一派がいまだ万事を取り仕切っていたが、ノワルカルムの軍勢が接近すると恐慌をきたし、指導者とともに慌てて町を去った。ノワルカルムは無抵抗で受け入れられ、公妃の使節二名は即座に解放された。トゥルンハウトにも強力な守備隊がおかれた。

またカンブレーは、主流派であつたカルヴァン派が放逐していた大司教に市門を開き、歓呼のうちに迎えた。その入城を血で汚さなかった大司教はまさにこの勝利に値すると言えた。

ヘント、イーペル、アウデナールデも投降して守備隊を受け入れた。

ヘルダーラント州ではメーヘン伯が反乱分子をほぼ一掃し、恭順を回復していた。フリースラント州とフロニンゲン州ではアーレンベルク伯が同じことを成し遂げた。ただし、伯のやり方は一貫性も辛抱強さも欠いており、またこれらの戦闘的な共和国が執拗にその特権を固持し、強力な防備を力に抵抗したので、

こちらはより困難を伴い、実現はやや遅れることになった。  
ホラント州を除き、ネーデルラント全州が公妃の凱旋軍の前に降った。反対派の士気は地に墜ち、もはや逃亡か無条件の屈服以外に道は残されていなかった。



## オラニエ公の辞任

### 新たな宣誓要求（1567.2）

乞食党連盟の結成以来、とりわけ聖像破壊運動の勃発以来、諸州の間では抵抗と独立の精神があらゆる階層の間にあまねく広まっていた。

諸党派が入り乱れ、執政も忠実な味方を見分けるのが困難なほどで、しまいには誰を頼りにしていいかわからなくなった。疑わしい人物と忠誠な者とを区別するしるしは徐々に失われ、その境界線は以前ほどはつきりしなくなっていた。

またプロテスタントのためにしばしば法体系の変更を強いられ、その多くが急場しのぎかその場の思いつきにすぎなかったため、法はその確実性と拘束力を失い、それを運用する立場にある個々人の勝手な裁量にゆだねられるようになった。しまいには、多くの多様な解釈のうちに、法の精神は埋没し、立法者の意図は見失われた。

プロテスタントとカトリックの間、乞食党と王党派の間には密接なつながりがあり、その利害はしばしば共通のものとなったため、カトリックや王党派は法のあいまいさのために残っている抜け穴を利用し、プロテスタントの友人、知人のために人為的な区別立てをすることで職務上の厳格さをすりぬけるのだった。その考えでは、公然たる反逆者でなければ、乞食党の一味でなければ、また異端者でなければ十分で、自らの性向に合わせて職務を修正し、国王への服従に勝手きわまりない枠をはめるのだった。責任感もなく、総督、上から下までの官吏、地方役人、軍司令官は職務の遂行にこの上なく不熱心になり、罰せられることはないと言って反逆者やその支持者に対しても危険なまでの寛容を示した。そのため執政の施策はことごとく無に帰した。

国の要職にあるこれほど大勢の者の校紀のゆるみは、さらなる不都合な帰結をもたらした。争乱分子が

確かな実態をはるかに超える支持をあてにするようになったのである。というのも、単に宮廷派への協力に不熱心だというだけで味方に数えたのであった。こうした幻想により人々がより大胆になったという意味では、それは現実であるのと何ら変わりなかった。その結果、不確かな家臣というものは、国王の公然の敵に対する過酷な処分は適用されないながら、それとほとんど変わらぬ危険性があつたのである。

とりわけ、オラニエ公、エフモント伯、ベルヘン伯、ホーフストラテン伯、ホールネ伯をはじめとする高位の貴族の場合がそうだった。執政はこれらのはつきりしない臣下たちに立場を明らかにさせる必要を感じていた。それにより反逆者たちから支援の幻想を奪い去るか、少なくとも国王の敵の仮面をはぐためである。この後者は、軍隊を投入する必要がある、その指揮をまさにこれらの貴族たちの誰かにゆだねなければならぬ今、とりわけ重要だった。

そこで新たな宣誓を起草させ、すべての者にローマカトリックの信仰を奨励し、聖像破壊者を訴追し、可能なあらゆる手を尽くして異教の撲滅に努めることを誓わせることにした。それはさらに、国王の敵を自らの敵として扱い、執政が国王の名のもとに名指しした者には区別なく敵対することを求めていた。執政としては、この宣誓により貴族たちの誠意を確かめたかったのではなく、ましてや味方につける望みは抱いていなかった。むしろ、疑惑のある一派が宣誓を拒んだ場合にこれを遠ざけ、その手から悪用されている権力を取り上げること、また宣誓に違反した場合にはこれを処罰する口実とすることが目的だった。

宮廷はこの宣誓を、金羊毛騎士団の騎士全員、上から下までのあらゆる国の公僕、あらゆる官吏や役人、あらゆる軍の士官——すなわち国の信託を受けた職についているすべての者に対して求めた。マンスフェルト伯がその第一号で、ブリュッセルの國務評議会で公に宣誓を行なった。アールスホット公、エフモント伯、メーヘン伯、バルレモン伯がこの例に続いた。ホーフストラテン伯、ホールネ伯はもっともらしい口実を設けて逃れようとした。

ホーフストラテン伯は先ごろメヘレンの総督職に関する件で執政から受けた不信のしるしに感情を

害していた。いつまでもメヘレンに総督不在でいるわけにはいかず、かといって伯はアントワープが必要だという口実で、執政はメヘレン州を伯から取り上げて、執政がより信頼できる者に与えてしまったのである。ホーフストラーテンは重荷の一つから解放してくださったことに礼を述べ、ついでもう一つも除外いただければ完璧だと付け加えた。

ホールネのほうは己の決意に忠実に、強固な都市ヴェールトにおける地所の一つに暮らしており、職務からは完全に手を引いていた。伯は公務を離れており、国王にも共和国にも何らの義務もないと考えるとして宣誓を拒否した。ホールネについては結局は宣誓は免除されたいらしい。

ブレードローデ伯の場合、残された選択は決められた宣誓をするか騎兵中隊の指揮権を返上するかだった。共和国の公職についているわけではないとしてあれこれと逃げを打とうとしたのも無駄に終わり、ブレードローデは後者の道を選び、偽誓を避けた。

## オラニエ公の立場 (1567)

オラニエ公は長らく疑惑がつきまわっていたこともあり、他の誰よりもこのみそぎが求められていた。必要から公の手にゆだねられていた権限の強大さからしても、執政がこの宣誓を要求するのはもつともなことだった。だが、オラニエ公に宣誓をさせようとする試みはことごとく失敗に終わった。しかし、オラニエ公に対してブレードローデなどと同じように宣誓か辞任かといった単純な二者択一を突きつけるわけにはいかなかった。当人が申し出ているようにすべての公職からの辞任を認めるのでは執政にとって意味がなかった。オラニエ公が独立を自覚し、その本心がもはや外向けの礼儀や責務に縛られないと考えるようになったときにいかに危険な存在となるかは明らかだった。

デンデルモンデ会談以来、オラニエ公は適当な機会があり次第国王への奉公をやめ、情勢が改善するまでネーデルラントそのものから立ち去る決意を固めていた。苦い失望の経験から群衆に依拠せざるを得な

い希望がいかにあてにならないものか、口ばかり威勢のいいその熱意がいざ実行を求められるといかにはなく消え去るものかを教えられた。すでに軍隊が投入されている。ずっと強力な軍勢がアルバ公に率いられてやってくることも知っていた。抗議の時は過ぎた。今となつては、執政と有利な取り決めを結び、スペインの将軍がこの地に至るのを防ぐには、軍を背に臨むのでなければ見込みはなかった。だが今、ここでその軍勢を集めよというのだろうか。どんな計画を実行するにも必要となる軍資金がなかった。これほど切迫した窮状におかれたのも、プロテスタントがこれ見よがしな献金の約束を果たさなかったためだった。

さらに、ねたみと宗教上の憎悪とがプロテスタント二派を分断しており、プロテスタント信仰の共通の敵に対するのに必要な連合が構想されるたびに妨げになってきた。カルヴァン派がアウクスブルク信仰告白を拒否したことでドイツのプロテスタント諸侯はみな立腹しており、帝国内からの支援は期待できなかった。エフモント伯が王党派についていたことで、ワロン人の優秀な部隊も失われた。ワロン人の兵士はサンカンタンで、グラヴリースで勝つことを教えられた将軍に心酔しており、何があろうと運命を共にするつもりだった。そしてまた、聖像破壊運動が教会や修道院に及ぼした蛮行のため、富裕で力ある体制派聖職者層の多くが連盟から離反してしまっていた。この不幸な突発事件の前には半数以上を味方につけるまでになっていたのがふいになったのである。一方、執政はその策略により、連盟自身からも日々参加者を引き離していった。

こうしたいっさいの事情を考慮して、オラニエ公は、現在の情勢下では現実的でない計画を時局が好転するまで延期することにした。そしてこれ以上この地にとどまっても何ら打つ手がないばかりか、自身自身の身の破滅が確実であることから、ネーデルラントを去ることにした。方々から集めた情報からしても、数多くの不信感の現われからしても、相次ぐマドリッドからの警告からしても、もはやフェリペ二世がこちらをどう思っているかについて疑問の余地はなかった。不確かな部分が残っていたとしても、スペイン

で進行中の大規模な軍備を知れば疑問など消し飛んでしまったはずだ。しかも、それを指揮するのは、表向きのカムフラージュとして伝えられているように国王ではなく、オラニエ公が独自のルートでつかんでいたところによると、アルバ公なのだ。

アルバ公はオラニエ公の宿敵で、最も警戒すべき相手だった。人心の機微に通じ、フェリペ二世の内心の奥まで見透かしたオラニエ公にとって、いったん警戒心を呼び起こしてしまったこの国王と心からの和解に至ることを期待することはできなかった。自分の行動を実に客観的に判断するオラニエ公は、友であるエフモント伯とは違って、蒔いてもいけない種から国王の恩寵という実が得られるとは考えられなかった。フェリペ二世からは敵意以外の何も期待できず、その直感はその敵意が形となって現われる前にその場を去ることを勧めていた。

☆

オラニエ公はこれまで新たな宣誓を行なうことを頑として拒んできた。執政からの相次ぐ書面による警告も効果はなかった。執政はついに自分の秘書ベルティをオラニエ公のいるアントワープに送ることにし、オラニエ公の良心に強く訴え、突然奉公から身を引けば国のみならず、オラニエ公自身の名声にとつてもよからぬことになる、警告させることにした。

執政はすでに別の使節を通じて伝えていた。オラニエ公が求められている宣誓を拒んでいることはすでにオラニエ公の名誉に影を投げかけており、反逆者と通じていると非難する一般の声に真実味を与えているが、それがこの一方的な辞任によつて疑いのない事実となるだろう。君主が臣下を罷免するのはよいが、臣下のほうから君主を見放すのはいかなるものかと。

執政の代理人が着いたとき、オラニエ公はアントワープの自邸にいた。どうやらすでに公務から退いて私事に専念しているようだった。ホーフストラーテン同席の場で述べられたオラニエ公の答えはこうだった。

求められた宣誓を拒んだのはそのような要求がかつて州総督たる者に対してなされたためしを知らないからだ。すでに国王には永遠の忠誠を誓っており、新たに宣誓を行なうことは暗黙のうちに最初の誓いを破ったことを認めることになる。また、以前の宣誓は祖国の権利と特権を保護することを求めているが、このたびの新たな宣誓によつて最初の宣誓に反する義務を課されることがないとは言ひ切れない。また、奉公のために必要とあらば誰に対しても例外なく敵対することを求める条項はオラニエ公のドイツにおける封建領主である神聖ローマ皇帝さえをも対象とすることになり、封臣として皇帝に弓引くことは良心が許さない。また、この宣誓をすれば、友人、親族、自分の子供、さらにはルター派である妻まで虐殺の犠牲に供する必要を押しつけられる。その上、宣誓の文面によれば、国王が気まぐれや一時の情熱から要求することごとくに従わなければならなくなる。国王はこれまで常にプロテスタントに対してなされてきた反発を禁じ得ない過酷な処分さえ求めてくるかもしれない。この宣誓は自分の人間としての感情に反するものであり、受け入れることはできない。

オラニエ公は最後にアルバ公の名を苦々しげな調子で漏らしかけたが、すぐ口をつぐんで沈黙した。こうしたオラニエ公の反対理由にベルティが一つ一つ答えていった。

確かにこのような宣誓がこれまで総督たる者に求められたことはなかった。だがそれは諸州が現在のよくな状況になかったからである。今新たな宣誓が求められるのは総督が最初の宣誓を破ったからではなく、以前の誓いをよく思い起こし、現在の切迫した情勢にあつていつその奉仕にはげんでもらうためである。この宣誓によつて祖国の権利や特権に反することが求められることにはならない。国王もオラニエ公と同じようにそれを守ることを誓っているからである。確かにこの宣誓は皇帝や、公につながるがあるかもしれない他の君主との戦争には触れていないが、それが本当に問題ならそのような事態に備える条項を挿入するのは簡単なことである。人間としての感情に反するような任務を与えないよう配慮はされるし、地上のいかなる権力といえども妻子に敵対する行動を強いることはしない。

そしてベルティは最後の、アルバ公に関する点に触れようとしたが、オラニエ公は自分の発言のこの部分に立ち入られるのを望まず、口をはさんだ。

「国王がネーデルラントに来ることになっているが、国王のことは知っている。国王陛下は臣下の一人がルター派と結婚したことが我慢ならないはずだ。したがって、強いられる前に、家族全員を連れて自発的に追放の身に甘んじる決意をしたのだ。」そしてこう締めくくった。「どこにしようと、私は国王の臣下としてふるまうつもりだ」

このようにオラニエ公が挙げた動機には強引なものがあつた。オラニエ公を決心させた真の原因は、オラニエ公が触れようとしなかったまさにその一点にあつたのだった。

### ウイレブルック会談 (1567.4)

ベルティは自分の力で説得することは観念したが、まだエフモント伯の雄弁によりオラニエ公を説き伏せられることを期待していた。そこでエフモント伯との会見（一五六七）を提案し、オラニエ公も同意した。オラニエ公としても、出発前に今一度友を抱きしめたい気持ちであり、またあわよくばこのお人好しの友を確かな破滅の道から連れ戻したいと思っていた。この記念すべき会見（秘書ベルティのほか若きマンスフェルト伯も立ち会っていた）は二人の友が相まみえる最後となる。

会見が行なわれたのはブリュッセルとアントワープの間、ウイレブルックというルーペル河畔の村だった。この会合の成果いかんにその最後の希望がかかっているカルヴァン派は、会見の行なわれた部屋の煙突に隠れた密偵を通じてその内容をさぐり出した。

居合わせた三人ともがオラニエ公の決心をひるがえさせようとした。しかし、三人共同しての要望もオラニエ公を動かすことはできなかった。

「ここで我を通すと所領を失うことになるぞ、オラニエ」

ハーヴェレ公エフモントがオラニエ公を窓辺に誘いながら言った。

「そして貴公は命をだ、エフモント。」オラニエ公が答えた。「逆境にあらうと、少なくとも私は、祖国にも友にも、真に必要なときに言葉でも行動でも助けてやれるということが慰めになる。だが貴公は友人も祖国も己とともに破滅に引きずり込もうとしているのだぞ」

オラニエ公は今一度、これまで以上に熱を込めて人民の側に戻ってくるように言った。エフモント伯の手腕のみが人民を救うことができるのだと。そして、そうしないならばせめて己自身のためにスペインから近づきつつある嵐を避けてほしいと懇請した。

しかし、オラニエ公の先見の明のたまものであるこの議論がいくら明快であっても、真の友情から出る気づかいだけがもつことのできる活気と熱意を込めて展開されようとも、エフモント伯の判断力を縛っている致命的な思い込みをうち砕くことはできなかった。

オラニエ公の警告は心の憂鬱から出たものだと思われた。エフモント伯にとつて、世界はまだばら色だった。少年期、青年期にどっぴりつかって過ぎた豊かさ、快適さ、そして豪奢から足を踏み出すことなど、それだけが人生を価値あるものに行っている何千という人生の安逸をあきらめるなどできるはずもなかった。しかもそれが、伯の浮かれた心持ちからすれば思い過ぎとは言わないまでもはるかかなたの災厄を避けるためだという。このような犠牲をエフモント伯に求められるはずもなかった。

しかし、伯がこれほど軟弱でなかったとしても、生まれてこの方の恵まれた状況で優雅な生活に慣れきった選帝侯家出身の妃に、何よりも心にかけている愛する妻や子にどうして不自由を味わわせることができるのか。考えただけでもエフモント伯の心は沈んだ。そういうことを本能に求めることができるのは、卓抜した思想のみだった。

「無駄だぞ、オラニエ。貴公の悲観的な知性にそう見えるからといって、私にまで憂鬱なものを見方をさせようとしたってな。公然説法をやめさせ、聖像破壊者をこらしめ、反乱を鎮圧し、平和と秩序を回復す



る——これだけのことを見事にやってのけたからには、国王とて文句のつけようはないだろう。国王は善良で公正だ。私にはその恩寵を受ける資格がある。そして私は自分の権利を手放すつもりはない」

オラニエ公はいまいに苦悶の声を上げた。

「そうか、あくまで国王の恩寵を信じるというならばやむをえん。だがいやな予感を禁じ得ないのだ。どうか思い過ごしであってほしい。エフモント、スペイン軍が我が祖国の破滅を期して侵入する、その足がかりに貴公がなることのなきよう祈っている」

情感を込めてこう言くと、オラニエ公は友を引き寄せ、その腕にひしと抱きしめた。長い間、まるで生涯忘れぬように心に焼きつけておこうとするかのように、オラニエ公の目は友を見据えていた。その目から涙がこぼれ落ちた。二人の友が相まみえるのはこれが最後のこととなった。

## 辞任 (1567.4)

その翌日、オラニエ公は執政に辞表を書いた。執政には常変わらぬ敬意を持ち続けると述べ、改めてこの決断を悪く思わないでほしいと願った。こうして三人の弟と自らの家族全員を連れて自領のブレダに赴いたが、そこでは若干の個人的な事務処理に必要なだけしかとどまらなかった。

長男のフィリップス・ウイレムはルーヴァン大学に残された。ブラバントの自由と大学の特権の保護下で危険はないと考えられたのである。もしこれが本当に企まれたものでなかったとしたら、他の実に多くの場合に敵の出兵を正しく予見していたオラニエ公とは思えぬ軽率だった。

ブレダではカルヴァン派の代表たちが今一度、まだ希望があるものかどうか、もはや救いようのない状態にまでなってしまったのかどうかを尋ねた。オラニエ公はこう答えた。

「かつてした同じ助言を繰り返すまでだ。アウクスブルクの信仰告白を承認するのだ。そうすればドイツからの支援が期待できる。どうしてもそれができないというのなら、六十万グルデン以上の金を集める必

要がある」

カルヴァン派は答えた。

「第一の条件はわたくしたちの信条、良心と相容れないものです。ですが、資金については、使途を教えてください。ただければ集められるかもしれません」

オラニエ公は不快感もあらわに声を上げた。

「ならん。使途を明かせば、目的そのものがふいになる」

こう言うとおラニエ公は会見をうち切り、代表たちを退がらせた。

オラニエ公は資産を浪費し、改革のために膨大な負債を抱え込んだことで非難された。しかし、オラニエ公はいまだ年六〇〇〇グルデンの地代収入があると請け合った。出立前に、オラニエ公はいくつかの屋敷を抵当にホラント州から二万グルデンを借りた。

人は、オラニエ公ともあろう者が抵抗することなく苦境に身を屈し、あらゆる努力を放棄してしまうことが信じられなかった。だがオラニエ公が胸に抱いていることは誰も知らなかった。誰もその心のうちを見透かすことはできなかった。スペイン王に対してどのような態度をとるかときかれたとき、オラニエ公はこう答えた。

「おとなしくしているまでだ。私の名誉や財産が侵されない限りはね」

まもなくオラニエ公はネーデルラントをあとにし、生まれ故郷ナッサウの町ディレンブルクで隠退生活にはいった。奉公人として、あるいは自発的に従う者として数百もの人々がオラニエ公についてドイツに渡った。まもなく、ホーフストラーターテン伯、キュレンボルフ伯、ベルヘン伯も、むやみに不確かな運命に身をゆだねるよりは自発的な亡命生活を選んでこれに続いた。

オラニエ公の退去はネーデルラントの人々にとっては守護天使がいなくなったに等しかった。オラニエ公を崇拝する者は多く、オラニエ公に敬意を払わぬ者はいなかった。オラニエ公とともにプロテスタント

の最後のよりどころが失われた。それでも、人々はあとに残った者全員合わせたよりも、亡命の身にあるこの人物に希望をつないでいた。

カトリック教徒でさえオラニエ公が去ったことを残念に思わざるを得なかった。オラニエ公はカトリックをも専制から保護していた。カトリック教徒をカトリック教会自体の抑圧から守ったことも少なからずあり、対立宗派の凶暴な熱狂から救われた者も多かった。

オラニエ公からアウクスブルク信仰告白を信奉する新教徒（ルター派）との同盟を勧められて気分を害したカルヴァン派の少数のはぐれ者だけが、ひそかに感謝の儀式を行ない、敵が立ち去った日を祝うのだった。

## 乞食党連盟の崩壊

### 体制派となったエフモント伯（1567）

友に別れを告げたあと、エフモント伯は急ぎブリュッセルに戻った。執政から忠誠の報償を受け、宮廷の華やかさや我が世の春を謳歌するうちに、オラニエ公の深刻な警告が胸中に残した若干の暗雲を振り払うことにしたのである。オラニエ公が亡命した今やエフモント伯のひとり舞台だった。共和国のどこを見てもその栄光をくもらせるライバルはいなかった。旧に倍する熱を込めてエフモント伯ははかない宮廷の恩顧を得るべく努め、それに十分すぎるほど値すると思っていた。

ブリュッセルじゅうの人々に喜びを共にさせなければ気がすまなかった。豪華な宴や一般向けの祝祭を催し、執政も、伯の胸中に一片の疑惑も残さぬためもあつて頻繁に顔を出した。求められた宣誓をしただけでは飽きたらず、最も信心深い者以上の敬虔さ、最も熱心な者以上の熱意を発揮してプロテスタントを根絶し、武力によってフランドルの反抗的な都市を平定するべく努めた。

旧友ホーフストラーテン伯や乞食党の他の参加者に対しては、これ以上教会の庇護のもとに復し国王と和解するのを躊躇するならこれを限りに友情を絶つと宣言した。これまでに取り交わされた親書はみな返しあい、これによりエフモント伯と乞食党の断絶は後戻りのできない公然たるものとなった。

エフモント伯の離脱とオラニエ公の亡命がプロテスタントの最後の希望をうち砕き、乞食党連盟の息の根を止めた。参加者たちは進んでどこか先を争って貴族盟約に背を向け、政府の呈示する新たな宣誓を行なった。プロテスタント商人がいくら貴族たちの約束違反に抗議しても無駄だった。その弱々しい声はもはや顧みられることなく、連盟に供与してきた資金は完全にふいになった。

最も重要な諸地点が平定され、守備隊が投入された。反逆者は逃走するか、死刑執行人の手で葬られた。ネーデルラント諸州には救世主となる人物はいなかった。すべては執政の強運の前に屈した。

## アントワープの屈服（1567）

勝利に勢いづく軍勢はアントワープに向かって進軍した。激しい執拗な戦闘ののち、アントワープの町からは最も危険な反逆者を取り除かれた。ヘルマンとその支持者は逃走し、市内部の争乱要因は力を出し尽くしてしまった。人心も徐々に落ち着きを取り戻し、猛烈な狂信者にたきつけられることもなくなつて理性的な助言に耳を傾けるようになった。町の富裕層は、長期にわたる無政府状態で手ひどい打撃をこうむつた通商・貿易の再興のためにも、平和を切実に望んでいた。

迫りくるアルバ公の恐怖は効果てきめんだつた。スペイン軍がこの地に及ぼす災厄を防ぐため、人々は執政の穏やかな手にその身をゆだねようと急いだ。和議を申し入れ、政府側の条件を聞くため、自分たちのほうからブリュッセルに全権代表を派遣した。この自発的な動きに執政はうれしい驚きを禁じ得なかつたが、喜びに任せて性急にことを運んだりはしなかつた。執政は、アントワープが守備隊を受け入れるまではいかなる申し入れも聞くわけにはいかないし、聞くつもりもないと断言した。今となつてはこれにも反対の声は出なかつた。

翌日、マンスフェルト伯は戦闘隊形の騎兵十六個中隊を率いてアントワープに向かつた。アントワープと公妃の間では、厳粛な締約が結ばれ、アントワープはカルヴアン派の礼拝形態を禁じ、その説教師を残らず追放し、ローマカトリック教の以前の盛儀を復活させ、荒らされた教会に以前の装飾品を返還することになった。古来の勅令は元通りに施行し、他の都市と同じように新たな宣誓を受け入れ、そして最後に、武器を取つたり教会冒涇に加わつたりして反逆を犯したすべての者を司直の手に引き渡すこととされた。

他方、執政は過去のことはすべて忘れ、さらには罪人について国王に取りなしをすることまで約束した。恩赦がおぼつかずに亡命を望む者にはみな一か月の猶予が与えられ、その間に資産を現金化し、安全な場所に移れることが認められた。ただし、大罪を犯した者、前条によつて除外された者は例外とされた。

この締約が結ばれるやただちにアントワープや周辺地域のカルヴァン派、ルター派のすべての説教師は伝令によつて二十四時間以内にこの地を去るよう警告された。町の通りや市門は、神の栄光のために住み慣れた土地を去り、迫害される信仰のためにより平和な新天地を求める避難者であふれ返った。こちらでは夫が妻に、父が子らに永遠の別れを告げ、あちらでは一家そろつて出発の準備をしている。アントワープ全体が喪中の家のようなだった。どちらを向いても悲痛な別れの光景があつた。プロテスタントの教会の扉には封印がされた。宗教そのものがもはや存在しないかのようなようだった。

四月十日が説教師の出発に定められた日だった。市当局に最後のいとまごいをするため市庁舎に現われた説教師たちは涙を禁じえず、悲痛な胸の内をはき出した。自分たちは犠牲にされたのだ、無惨にも見捨てられたのだ。この仕打ちに対してアントワープが深い償いをする日が必ずや来るであらうと。

これ以上にいたましかつたのはルター派の聖職者の申し立てだった。ルター派は市当局自身がカルヴァン派に抗する説教をさせるためにこの地に招いたものだった。国王がルター派については好意的でないでもないという偽りの説明のもとにカルヴァン派に抗する勢力に引き入れられ、自分たちの協力によつてカルヴァン派が屈服させられるやいなや用は済んだとばかりに見捨てられ、カルヴァン派と同じ境地におかれて己の愚かさを悔いるのだった。

数日後、執政は勝ち誇つてアントワープに入城した。一〇〇〇のワロン人騎兵、金羊毛騎士団、すべての総督や顧問官、そしてその宮廷全体と官吏の大群が付き従つていた。執政が最初に訪れた大聖堂は、いまだ聖像破壊運動の蛮行の痕跡がいたましく、信仰厚い執政は悲嘆の涙を流さずにはいられなかった。その直後、逃走中に捕らえられた反逆者四名が公共広場で処刑された。プロテスタントの儀式で洗札を受けた子供はカトリックの神父によつてもう一度洗札を受けさせられた。異端の学校はみな閉鎖され、教会は取り壊された。

ネーデルラントのほぼ全都市がアントワープの例に倣い、プロテスタント説教師を追放した。四月の終わりにはカトリックの教会は修復され、以前にも増してきらびやかに飾り立てられた。その一方でプロテスタントの礼拝所は壊され、ネーデルラント十七州において禁教の痕跡はことごとく消し去られた。

強い者につくのが常の民衆は、つい先ごろまで熱狂的に擁護したこの不幸な人々に対し、今度はその破壊を加速させるのに同じように熱心だった。ヘントではカルヴァン派が建立した壮麗な礼拝堂が襲撃され、ものの一時間とたたずにあとかたもなくなつた。破壊された教会の木材を利用してカトリックの教会で暴行をはたらいた者のための絞首台がつくられた。処刑場はどこも死体が積み上げられ、牢獄は死を宣告された犠牲者であふれ、街道は避難する人々でごつた返した。この殺戮の年の犠牲者は膨大な数に上つた。最も小さな町でも五十、少し大きなところでは三〇〇にも上る人が死に追いやられた。しかも、このほかに、市外で郡代の手に捕らえられ、暴行をはたらいたならず者として寛容もなく、それ以上の審問もなしで即刻絞首刑に処された者も多かった。

☆

執政のアントワープ滞在中に、ブランデンブルク、ザクセン、ヘッセン、ヴェルテンベルク、バーデンからの使節が到着し、避難してきた宗教上の同胞のためにとりなしを申し出た。追放されたアウクスブルク信仰告白派の説教師たちは、ドイツにおけるアウクスブルクの宗教和議〔二五五〕には神聖ローマ帝国の等族としてブラバントも加わっていることから、その保証する権利を主張してこれら諸侯の保護を求めたのだった。

外国の使節の到着に警戒した執政は、アントワープ入りを阻止することはかなわなかったが、接待の名目のもと、使節らを絶えず監視下に置き、町の平穏が乱されることがないよう手を打った。

執政に対する時宜を得ない強気な態度からしても、その要求を通すことが本心でないことは想像できた。使節らの言い分はこうだった。アウクスブルク信仰告白は福音の精神に合致する唯一のものであり、それ

がネーデルラントの正統宗教となるのは至極当然のことである。それをかほどに過酷な勅令によって迫害するのは実に不法であり、許されるべきことではない。そこで、執政には宗教の名において自分の統治下におかれた人々にそのような過酷な扱いをしないよう求めるといったのだった。

執政は、ドイツ担当大臣シュターレンベルク伯を通じて答えた。そのような口上は返答に値しない。ドイツ諸侯がネーデルラント難民に対して示してきた同情からして、国王が政策を説明した書簡よりも、幾人かのならず者——破壊されたあまたの教会にその足跡を残したその者ども——の主張に信をおいていることは明らかである。スペイン王の臣民のことはスペイン王自身に任せ、外国で不穏な空気をあおるような不毛な努力はやめたほうが身のためであるとした。

使節たちは何ら成果を上げることなく、数日後にアントワープをあとにした。ザクセンの使節などは、非公式の謁見で執政に主君はやむなくこのたびのことを行なったのであり、ハプスブルク家にも率直に報告してあると弁明した。

## 北部の平定（1567）

ホラント州からの情報で執政の勝利が完全なものとなったのは、ドイツの使節たちがまだアントワープを去る前のことだった。

メーヘン伯を恐れるブレーデローデ伯は、ヴィアーネンの町を新たににつくった防塞もろとも見捨て、非カトリック教徒の助けを得てアムステルダムにはいつていた。アムステルダムでは、住民の蜂起を苦勞して抑えたばかりの市当局はブレーデローデの滞在をひどく懸念したが、逆にプロテスタントは新たな勇氣を与えられた。その支持者は日々ふくれ上がり、ユトレヒト、フリースラント、フロニンゲンといった州から、勝ち誇ったメーヘン伯、アーレンベルク伯に追い立てられた多くの貴族が流れ込んだ。みなそれぞれに思い思いの扮装で市内にはいり込むすべを見出し、指導者の身邊に集まってその強力な親衛隊となっ



た。

新たな蜂起を心配する執政は、秘書の一人ヤコーブス・デラトーレをアムステルダム市参事会に遣わし、いかなる手だてを講じてでもブレード伯を排除すべしとの命令を伝えさせた。市当局も、自らブレードを訪ねて執政の意思を伝えたデラトーレも、ブレードに町を出させることはできなかった。デラトーレなどは自室にいるところをブレードのとりまきの数人の貴族に襲撃され、書類をすっかり奪われた。機を見てさつと逃れなければ命さえも危なかったかもしれない。

この事件ののち、ブレードはまる一か月アムステルダムにとどまった。プロテスタントにとっては力無き英雄であり、カトリックにとっては重荷であり、家賃をためるほかにはこれといってすることはなかった。

一方、ヴィアーネンに残された勇猛な軍は、南部諸州からの多数の避難民によって強力になる一方だった。メーヘン伯はそれで手一杯で、逃走したプロテスタントのことまで手が回らなかった。

しかし、ついにはブレードもオラニエ公の例にならって現実に屈し、望みのない大義を見限る決意をした。ブレードは市参事会に対して、若干の金額を都合して清算を助けてもらえればアムステルダムを去る意思があることを伝えた。早いところ厄介払いしようと参事会は早速金の調達に乗り出し、若干の銀行家が市参事会の保証で金を用立てた。その晩、ブレードはアントワープを發ち、砲艦でヴリーまで運ばれ、そこから幸いエムデンまで逃れることができた。

ブレードがその無謀な計画に巻き込んだ者の多くに比べ、ブレード本人の運命は比較的恵まれていた。ブレードは翌一五六八年、ドイツに持つ居城の一つで死んだ。失望をまぎらすために暴飲暴食に溺れたのが原因だった。その未亡人メルス女伯爵はより輝かしい運に恵まれ、プファルツ選帝侯フリードリヒ三世と再婚した。

ブレードの退場はプロテスタントの大義にとってほとんど影響はなかった。ブレードが火

をつけた運動を維持してきたのはブレードローデではなく、したがってブレードローデの死とともに消えるものではなかったのである。

☆

ブレードローデが不面目な逃走によって見捨てた小さな軍勢は、勇猛で、若干の決然たる指導者もいた。確かに給与を支払ってくれる者が逃げたあとまもなくばらばらになったが、勇気と飢えのためしばらくはまとまっていた。

ディートリヒ・フォン・バーテンブルフ指揮下の一部の者がアムステルダム奪取を目指して出撃したが、メーヘン伯が精銳十三個中隊を率いて救援に駆けつけ、断念させた。反乱軍は付近の修道院を略奪することによしとし（そのうちでもエフモントの大修道院の被害が著しかった）、その後ワールラント「アムステルダム北方でザイデル海沿いの湿地帯」に進路を転じた。その地一帯の沼地のため追撃をかわせると思つたのである。しかし、メーヘン伯はそこまで追つてきたので、慌てふためいてザイデル海に活路を求めるほかなかった。

バーテンブルフと二名のフリースラント貴族ベイマ、ガラマは一二〇の兵と修道院からの略奪品を載せてホルネの町付近から船出し、フリースラントに渡ろうとしたが、舵手が裏切つてハルリンゲン付近で船を浅瀬に座礁させたため、アーレンベルクの部隊に属する隊長の手にかかり、残らず捕虜にされた。一般兵士についてはアーレンベルク伯がその場で判決を言い渡したが、捕虜中の貴族については執政のもとに送られ、そのうち七名が斬首された。最も生まれの高いもう七名については（そのうちにはバーテンブルフ兄弟、若干のフリースラント貴族も含まれる）、みな若さの盛りにあつたが、アルバ公のために残され、その施政の開始を誇らかに告げる処刑に供されることになる。

メーデンブリックから船出し、メーヘン伯の小舟艇に追われた他の四隻に乗っていた兵はもう少し幸運だった。逆風のため進路を外れ、ヘルダーラントの岸に打ち上げられ、そこでまがりなりにも無事上陸す

ることができた。ホイゼン近くでライン川を渡つて幸いにもクレーフエに逃れることができ、旗印を引き裂き、ちりぢりになった。

メーヘン伯は修道院の略奪でぐずぐずしていた若干の騎兵中隊を北ホラントで捕捉し、これを完全に翻弄した。その後ノルカルムと合流し、アムステルダムに守備隊を投入した。

乞食党の軍勢で最後に残った三個中隊はヴィアーネン付近で堡壘を攻略しようとしているところをブラウンシュヴァイク公エーリヒに攻撃され、粉砕された。その指揮官レネッセは捕らえられ、しばらくしてユトレヒトのフレーデンブルフ城で斬首された。その後、エーリヒ公がヴィアーネンにはいったとき、通りには人っ子一人いなかった。第一報を聞くや住民も守備隊も逃げ出してしまつていたのである。公はただちに防備を取り壊し、この乞食党の牙城を無防備都市にしてしまった。

今や連盟の創立者たちはちりぢりになつていた。ブレードローデとナッサウ伯ルートヴィヒはドイツに逃走した。ホーフストラーテン伯、ベルヘン伯、キュレンボルフ伯もそれに続いた。マンスフェルトは脱退し、バーテンブルフ兄弟は牢獄で不名誉な末路を待つばかりだった。トゥールーズは戦場ではなばなく散つていた。連盟参加者で敵の刃や死刑執行人の斧から逃れた者も、助かつたのは命だけだった。こうして団結を誇示すべく名乗つた乞食の称が、ついに悲惨な現実となつてしまつたのだつた。

### 乞食党連盟の末路 (1567)

当初あれほど輝かしい希望を呼び起こし、抑圧に対する強力な防波堤となると思われた気高い連盟は、こうしてはじめな最期を迎えた。団結がその力だった連盟にとつて、不信と内部分裂が破壊となつた。多くのたぐいまれなる美点を見出し、発達させたが、最も肝心なものを欠いていた。分別と節制である。それなくしてはいかなる計画もうまくいくはずなく、心血をそそぎ込んだ計画もついでえることは必然であつた。

もしその目的がその主張通りに純粹なものであったならば、あるいはせめて設立時ほどに純粹であり続けていたならば、成熟前に崩壊に至らしめた状況にも抗することができたかもしれない。失敗したとしても歴史上光榮あるものとして記憶されていたかもしれない。しかし、連盟に加わっていた貴族たちが直接にせよ間接にせよ聖像破壊運動の狂乱に関与していたことは明らかであり、それは連盟の威厳を保ち、その手を汚さずにいられる程度のもではなかった。貴族たちの多くはその崇高な大義をならず者集団の狂気と引き換えに手放してしまったのである。

宗教裁判の限定と勅令の残酷な非人道性の緩和については連盟の功績と見ることもできる。しかし、この一時的な救済の代償はあまりに高かったと言うべきだろう。その企てのために何千もの人々が命を落とし、上流市民の流出とともにその活力が世界の他の土地に持ち去られ、その上、諸州にアルバ公を呼び寄せ、スペイン軍を呼び戻す結果になってしまったのだった。また、この危険なきつけかけがなければ間違った気を起こすことなどなかった善良で平和を愛する人々が、連盟の名に熱くなり、罪重き企てに引き込まれた。その成功に期待をあおられたものの、期待は実現せず、人々は破滅に放り込まれた。

それでも、こうした弊害について、連盟もその効用によつてかなりの埋め合わせをしていることは否定できない。連盟こそが個々人を臆病な利己心から引き出して団結させ、連盟こそが君主制の抑圧のもとでほとんど消えかかっていた健全な公共心をネーデルラントの人々の間によみがえらせ、ばらばらだった国民の間に団結をもたらした。人民の団結さえあれば専制君主も思うがままにはできないのである。確かに試みは失敗し、ぞんざいな結び目はたちまちほどけてしまった。しかし、失敗の繰り返しによつて国民は最後にはちよつとやそつとでゆるむことのない永続的な連合に至るのである。

## 執政の得たもの (1567)

乞食党の壊滅によってオランダの諸都市はたちまちもとの服従に帰した。諸州の間では執政の武力に屈しない都市は一つとしてなかった。しかし、地元民、外国人を問わず出国する者が続出し、ネーデルラントは危機的なまでの人口減にみまわれた。アムステルダムでは避難民のあまりの大群に、北海、ザイデル海を渡る船舶が不足するほどで、この商業都市の華はその繁栄の終焉に直面していた。

この全国的な亡命の動きを警戒した執政は、急ぎ各都市に励ましの手紙を書き、聞こえのよい約束によって市民たちの沈む心を立ち直らせようとした。国王の名において、国家と教会に忠誠を誓うすべての者に完全な恩赦を約束し、公式な布告を発して逃亡しようとする者に国王の恩顧を信じて戻るよう求めた。また国民が恐れるスペイン軍の駐留を、たとえ国境まで現われたとしてもやめさせることを請け合い、それどころか必要とあらばスペイン軍がネーデルラントにはいるのを武力で阻止することさえ仄めかした。執政としても、ここまで苦勞してようやく実現にこぎつけようとしている平和の栄光を新参者におめおめと渡すつもりはなかったのだった。しかし、その言葉を信じて戻った者はごくわずかだった。そのわずかの者はやがてその決断を悔いることになる。

何千もの人々がすでに去っており、さらに数千が続いた。ドイツとイングランドにはネーデルラントの避難民があふれた。亡命者たちはどこに行こうとその風俗習慣、さらには民族衣装さえも墨守した。祖国を完全に失い、二度と帰ることがないと思うのはあまりに忍びなかったのである。かつての富の名残りの一部でも持ち出せた者はいくらもいなかった。大多数の者は施しにすがって生きていかねばならず、新たな祖国にもたらししたものといえ、勤勉と技量、有益な労働力、そして実直な市民だけだった。

執政は今ようやく、その施政を通じてこれまで一度たりともできなかった明るい報告ができる状況になり、急ぎ国王に送った。その概要は次のようなものだった。

「諸州の間に平穩を回復し、それを維持できる態勢にある。異端宗派は根絶され、ローマカトリックの礼

拝が元通りの威光をもつて再興された。反逆者はそれにふさわしい処罰をすでに受けたか、あるいは牢獄でそれを待つのみである。各都市には守備隊がおかれて固められている。

したがって、スペイン軍をネーデルラントに送る必要はなく、今やその投入を正当化するものはない。スペイン軍の到来は、これほど苦勞して確立した秩序と平和を無にし、切実に必要とされている通商・貿易の再興を妨げ、国民に新たな出費を強いることによってその唯一の存立基盤を奪うことになる。すでにスペイン軍接近の噂だけで、ネーデルラントからはその最も富裕な何千もの市民が失われた。実際にスペイン軍が姿を現わせばネーデルラントは廢墟と化すだろう。もはや屈服さすべき敵もなく、鎮圧すべき反乱もないとなれば、この軍隊の進軍の動機は、人々にとつて懲罰以外に考えられなかった。こうした空気のもとではスペイン軍の到来は榮譽あるものとはなりえなかった。もはや必要という方便は通用せず、この強權的な手段は抑圧の憎むべき一側面にしかすぎず、人心を今一度離反させ、プロテスタントを絶望に追いやり、その防衛のために諸国の同胞を武装させるはめになる。

執政は国王の名において国民に外国の軍隊を導入しないことを約束しており、現在の平和はひとえにこの保証によるものである。したがって、国王が執政の保証を覆すようなことがあれば平和を保ち続けることはできない。ネーデルラントはその君主、国王を愛情と敬意をもつて迎えるだろう。しかし、そのためには父として来るべきであつて、懲罰をもくろむ国王として臨むべきではない。苦勞してこの地にもたらした平和を享受しに来てほしい。今再びそれを破壊するためではなく」

## アルバ公の軍備とネーデルラント遠征

### 国王行幸の計画（1567）

しかし、マドリードの評議会の決定は執政の意向とは異なるものだった。宰相グランヴェルは、現地にはいなくても手の者を通じてスペイン政府を牛耳っていた。宗教裁判所長官スピノーサとアルバ公とがそれぞれに憎悪、迫害精神、あるいは私利に駆られて穏健派のエボリ公ルイ・ゴメス、フェリア伯、そして国王の聴罪司祭フレスネダといった者の意見を採決でうち負かした。

強硬派の主張はこうだった。確かに今のところ蜂起は鎮められている。しかし、それは反逆者たちが国王が軍勢を率いてやってくるという噂に恐れをなしたからにほかならない。現在の平穏は恐れによるものでしかなく、悔悟からきたものではない。恐怖から解放されればすぐ再び勃発するだろうというのだった。

実のところ、ネーデルラント人の過ちは、国王に、その専制的な意図を正義の名を借りて遂行する長らく待ち望んでいた絶好の機会を提供することになった。したがって、執政が成し遂げたという平和的な解決は国王の意向とは全くかけ離れたものだった。国王としては、その専制的な気性にとつて久しくしゃく種のあった諸州の自由を剥奪する合法的な口実を求めていただけなのだった。

この時点まで、国王は自らネーデルラントを訪ねるつもりであるということを、巧みな偽装により広く信じさせていた。だがその実、そのようなことはフェリペ二世は全く考えていなかった。

そもそも旅というものが、国王の機械仕掛けのごとくに規則的な生活にはそぐわなかった。それにその限られた鈍い知性は、日々新たに押し寄せる雑多な新しいできごとに手一杯でそんな余裕はなかった。この旅に特に伴う困難や危険は、生来の消極性、安楽主義にはおそろしいものだったに違いない。とすればなおのこと、常に一人で決断してきており、これまでいつも人を自分の主義に合わせることはあっても自分の主義を人に合わせたことのなかった国王にとって、このネーデルラント行きには利点も必要も見出す

ことはできなかった。

さらに、フェリペ二世は国王の尊厳を守ることにかけては世のどの君主よりもうるさくこだわっており、たとえ一刻たりともそれにとめることは許せなかった。国王の頭の中ではそのような旅には不可欠な盛大さというものがあり、それに要する費用だけでも気乗りがしない理由として十分で、ライバルのアルバ公を国王の身辺から遠ざけたかったとされる寵臣ルイ・ゴメスの影響力を待たずともなかった。

それでも——出発するつもりなどさらさらなかったにもかかわらず——フェリペ二世はその恐怖を利用することが不満分子の危険な結末を防止し、忠誠派の士気を支えるとともに反徒のこれ以上の前進をくい止める上で得策だと考えていた。

できるだけ長く擬態を続けるべく、フェリペ二世は出発に向けてこの上なく大がかりで人目を引く準備を行ない、そのような計画に必要なことは何一つ見逃さなかった。船団の準備を命じ、士官を任命し、供回りの者を決めた。このような戦備が外国の宮廷に呼び起こす疑惑を静めるため、大使を通じて真意が伝えられた。フランス国王には国王自身とその随行者が領内を通過できるように要請し、サヴォイ公には二つの経路のうちどちらがいいかを相談した。途上にあるすべての都市、要塞のリストをつくらせ、その間の距離を正確に調べさせた。サヴォイからブルゴーニュまでの経路全域にわたって地図の作製が命じられ、サヴォイ公が必要な職人や測量技師の提供を求められた。

欺瞞は徹底していて、執政に対しては少なくとも八隻の船をゼーラントに用意しておき、スペイン出港の報せを聞き次第出迎えに派遣するよう命じた。執政は実際にこれらの船を準備させ、すべての教会で国王の船旅がつつがないことを祈禱させた。もつとも、人々は陰ではマドリードの宮殿にいては陛下も海難を恐れるものもないものだと言ひ合うのだった。

国王はその役どころを完璧にこなし、これまでこけおどしとしか思っていなかったマドリード駐在の使節ベルヘンとモンテイニ―も警戒するようになり、その懸念はブリュッセルの友人たちにも伝染した。こ



のころセゴビアの国王が三日熱にかかったこと——あるいはそのふりをしたこと——が出發を遅らせる格好の口実となり、その間も準備作業は精力的に続けられていた。

☆

姉からの再三の執拗な問い合わせにはつきりした説明をせざるを得なくなると、国王は、まずアルバ公が軍勢とともに先行し、途上の反乱分子を一掃するとともに、国王の到着にさらなる光輝を添えるものとした。

しかし、まだアルバ公に身代わりをさせるつもりであることを明かすわけにはいかなかった。ネーデルラント貴族が、国王に対してなら拒むはずのない慎みをその臣下にも示すとは期待できなかったからである。しかもその臣下というのが、残虐さで国民全体に知れ渡っており、その上外国人で、基本体制の敵として憎悪の的になっている人物なのだ。現に、アルバ公が実際に到着してかなりたつまで国王自身もじきにやってくるものと広く信じられていたが、アルバ公が施政の幕開けで示した残虐さが争乱を引き起こさなかったのはそのためとしか考えられなかった。

スペインの聖職者階級、特に宗教裁判関係者は、このネーデルラント遠征に関し、聖戦でもあるかのように国王に寄進した。スペインじゅうで新兵募集が熱心に行なわれた。サルディニア、シチリア、ナポリ、ミラノの副王、総督は守備隊任務についているイタリア、スペイン兵のうちから精鋭を引き抜いてジェノヴァ領内の集結地点に派遣するよう命令が下された。そこでアルバ公が連れてくるスペインからの新兵と交代するのだ。

同時に、執政には、エーベルシュタイン伯、シャウエンブルク伯、ロドローナ伯指揮下のドイツ人歩兵数個連隊をルクセンブルクに、また若干の輕騎兵大隊をフランシュコンテで待機させておくよう命じられ、スペインの將軍がネーデルラントにはいり次第ただちにこれを補強できるようにした。ベルレモン伯にはやってくる軍勢に糧食を補給することが任された。本来の軍の維持費用ならびにこうした新たな出費をま

かなうため、執政には二十万金グルデンが送られた。

しかし、フランス宮廷がユグノーの脅威という口実でスペイン軍本体の領内通過を拒んできたため、フェリペ二世はサヴォイ公、ロレーヌ公に話を持ち込んだ。スペインへの依存度の大きい両者ともスペイン王の要請を拒否できる立場にはなかった。スペイン軍の通過によって生じうる不都合から領内を保護するため、前者は歩兵二〇〇〇と騎兵一個中隊をスペイン王の費用で維持することを条件とただけだった。同時に、サヴォイ公は通過中の軍勢に必要な補給を提供することを請け負った。

この行軍の噂にフランスのユグノーやスイスのジュネーヴ人、シュヴィーツ人、グラウビュンデン人が反応した。コンデ公とコリニー提督は、フランスの宿敵に痛撃を加えるこれほどの好機を逃すことのないよう、シャルル九世に進言した。両名は、シュヴィーツ人、ジュネーヴ人、そしてフランス国内のプロテスタント臣民の助けがあれば、スペイン軍の精鋭をアルプス山中の峠道で撃破するのはたやすいと主張し、その計画のためにユグノー五万の軍勢で支援することを約束した。しかし、この計画の危険な側面は否定しようもなく、シャルル九世はこの申し入れは適当な口実をつけて断わり、スペイン軍行軍中の王国の安全には備えるので心配は無用であると言った。

シャルル九世は急ぎフランスの国境地方に兵を派遣し、ジュネーヴ、ベルン、チューリヒといった共和国やグラウビュンデン人もこの例に倣った。みな、自分たちの宗教と自由に対するこの強敵に断固として抵抗する覚悟を決めていた。

## アルバ公の行軍（1567）

一五六七年五月五日、アルバ公は、アンドレア・ドーリアおよびフィレンツェ公コジモの用意した三十隻のガレー船でカルタヘナを出港した。八日後にはジェノヴァに上陸し、待っていた四個連隊と合流した。しかし、アルバ公は到着直後に三日熱にかかり、数日間、ロンバルディアで身動きがとれなかった。近隣

諸国はこの遅延の間に国境防備に努めるのだった。

回復したアルバ公はモンフェラートのアステイで全兵員の閲兵を行なった。その威力は、数ではなく、その武勇にあつた。数の上では騎兵、歩兵合わせても一万あまりにしかならなかった。この長く、危険な行軍において、役にも立たない人員を抱え込むのは行軍の足を引つ張り、補給の困難を増すだけであり、避けたかった。必要となればネーデルラントの現地で兵を集めることはできる。この一万の熟練兵はその核となればいいのだ。

この軍勢は、小規模な分、それだけ選りすぐりの者たちだった。カール五世がその先頭に立つてヨーロッパを震撼させた無敵の軍団の生き残りから成っていた。血に飢えた無敵の集団——そのうちには古代マケドニアのフランクス「重装歩兵密集隊形」が息づいていた。長年の修練で身につけた迅速さと柔軟さを併せ持ち、いかなる苦境にも屈せず、その指揮官の成功に誇りをもち、長い勝利の経験で自信にあふれている。解き放たれれば脅威となるが、統率によつてさらに脅威となる。その南国の情熱とともに穏やかで豊かな土地に放たれ、教会が断罪した敵に対して容赦はしない。

こうした好戦的な狂信、名誉欲と武勇の伝統に対して、むき出しの肉欲が補助となつた。スペインの將軍にとつて、この荒くれ者の集団を統率する最も強力で最も信頼できる手段として、部隊内での快楽と肉欲の蔓延は意図的に大目に見ていた。その暗黙の承認のもと、イタリア人娼婦が部隊に付き従つた。アペニン山脈越えに際してさえも、生活必需品の費用がかさむため軍勢を極力小さくする必要があつたが、この肉欲のはけ口を放棄するよりは数個連隊を残すほうを選んだのである。

「この軍勢のこうした快楽に満ちた行軍は、その目的の陰気なまでの真剣さ、建て前上の神聖さと奇妙な対照をなしている。これら女性軍の数はあまりに膨大であり、混乱防止のため、女性軍も独自の規律を導入することを思いついた。それぞれの旗のもとに集合し、隊列をなし、見事な軍隊的な秩序をもつて各大隊の後ろを行進し、厳密な決まりに従つて階級、報酬ごとに分かれたのである。ある者はなにに司令に、ある者はなにに隊長に、ある者は懷具合

はさまざまだが兵士だれそれに。それはくじ次第であり、またその料金の高低に従うものであった。」

アルバ公は兵士たちの道徳の面では拘束をゆるめようとしたが、他の面では極端なまでの規律によって締めつけた。例外は勝利の時だけで、ゆるめられるのは戦闘の時だけだった。アルバ公は、好色で貪欲な兵士ほど勇敢に戦うと言ったアテネの将イフィクラテスの金言を実践していたことになる。欲情が長く抑えられて耐えがなくなっていればいるほど、ただ一つ開かれたはけ口からほとばしるのもいつそう激しいものとなったことだろう。

☆

公爵は約九〇〇〇のほぼスペイン人からなる歩兵を四つの旅団に分け、四人のスペイン人にその指揮を任せた。アルフォンソ・デ・ウリョアは九個中隊から成る三二三〇のナポリ旅団を率いる。サンチョ・デ・ロドーニョは十個中隊三二〇〇のミラノ旅団を指揮する。同数の中隊からなるシチリア旅団の兵一六〇〇を指揮するのはフリアン・ロメロ。ネーデルラントで戦った経験もある古参の武人である。「七年前、そのネーデルラントからの退去をめぐって全国議会で多大な論争の的になったスペイン人連隊の一つを指揮していた人物である。」ゴンサロ・デ・ブラカモンテ率いるサルディニア旅団は新たに募兵された新兵三個中隊により前記旅団と同数になっていた。さらに、各中隊には十五名のスペイン人マスケット兵が配された。

騎兵はイタリア人三個大隊、アルバニア人二個大隊、スペイン人七個大隊からなり、その数は一二〇〇は超えなかった。その指揮権はフェルナンド・デ・トレド、フェデリコ・デ・トレドというアルバ公の息子二人にゆだねられた。

元帥はチェトーナ侯キアッピン・ヴィテツリ。この高名な將軍はフイレンツェ公コジモがスペイン王に提供したものだ。そしてガブリエル・セルペロンが砲兵将校である。サヴォイ公からアルバ公に貸されたウルビーノの熟練の技師フランチェスコ・パチオットは新たな防塞建築に登用される。

その旗のもとにはさらに大勢の義勇兵、スペイン貴族階級の精鋭が従った。その大部分はカール五世のもとドイツで、イタリアで、そしてチュニスの前で戦った古参である。その一人、クリストフォロ・モンドラゴーネは敵陣からの弾丸飛雨の中をミュールベルク付近で剣を口にくわえてエルベ川を渡り、舟橋の建設のために皇帝が必要とする舟を対岸から運んできた（一五四七）スペインの英雄十人の一人だった。サンチョ・ダビラはアルバ公からじきじきに軍事の手ほどきを受けた人物だった。さらにカミロ・ディ・モンテ、フランシスコ・フェルドウーゴ、カルロ・ダヴィラ、ニコラウス・バスタ、マルティネンゴ伯――みな高貴な情熱にあふれ、かくも卓越した指揮官のもつて軍歴を開始しようと、あるいはこの輝かしい戦役ですでに得た名誉にさらに武功を一つ加えようと燃えていた。

閼兵ののち、軍勢は三隊に分かれてモンスニ越えにかかった。十八世紀前にハンニバルがたどったとされている経路の一つである。

前衛を率いるのはアルバ公自身。フェルナンド・デ・トレドが中央（ロドーニョがその補佐につけられた）、そしてチェートーナ侯が後衛である。本隊のために道を切り開き、宿営地で糧食の用意をするため、兵站総監フランシスコ・デ・イバラがセルベロン將軍とともに先行した。朝前衛が去った地点に、晩になると中央が到着し、翌日には今度は中央がその地を後衛に明け渡した。こうして軍勢はサヴォイ・アルプスを整然と越えていき、十四日のうちにこの危険な山越えを完了した。

フランスの觀察軍がドーフィネ国境、ローヌ川の流れに沿ってその側方に付き従い、右側方ではスイス同盟軍が目を光らせていた。スペイン軍は七マイルの距離でその目前を通過した。これらの觀察軍はいずれも攻撃に出ることはなく、ただ国境防備に専念していた。スペイン軍団が急峻な岩山を登り、降りる間、あるいはイゼール川の急流を渡るとき、あるいは一列になつて一人ずつ岩の間をくぐり抜けるとき、一握りの兵もあればこの進軍を完全にくい止め、山地に押し返すこともできただろう。そうなれば軍勢は取り返しのつかない壊滅的打撃をこうむったはずだ。各宿営地点には一日分の、それも全軍の三分の一の糧食

しか用意されていなかったのである。しかし、スペインという名前に対する本能的な畏怖の念によって敵の目はくらまされ、有利な立場が目にはいらなかった——あるいは少なくともそれを利用しようという気を起こさなかったのだった。

敵がそれに思い至ることのないよう、スペインの將軍はこの危険な峠道をできるだけ静かに通り過ぎるべく急いだ。それはまた、住民感情を害すれば敵も黙ってはいまいと確信してのことでもあった。行軍中の規律はこの上なく厳密に保たれ、農民の小屋一つ、畑一つ荒らされなかった。「一度だけ、ロレーヌにはいったとき、騎兵三名が羊数頭を群れから盗み出したことがあった。アルバ公は報告を受けるとただちに所有者に羊を送り返し、罪人には絞首刑を命じた。この判決は、アルバ公への表敬に国境まで出迎えに来ていたロレーヌの將軍のとりなしによって、三人のうちからくじで選ばれた一名に対してのみ執行された。」歴史上、これほどの大軍がこれほどの長い行程をこれほど見事な秩序をもって行軍したことはほかになかっただろう。

恐ろしいほどの幸運の星が死の使者であるこの軍勢をあらゆる危難を越えて無事に導いた。驚嘆すべきはこの指導者の手腕かその敵のふがいなさか、どちらとも言いがたいものがある。

フランシュコンテでは新規に編成されたブルゴーニュ騎兵四個大隊が本隊に加わった。ルクセンブルクではエーベルシュタイン伯、シャウエンブルク伯、ロドローナ伯指揮下のドイツ人歩兵三個連隊によって増強された。

### ネーデルラント到着 (1567)

アルバ公は数日間行軍を止めたティヨンヴィルからフランシスコ・デ・イバラを執政のもとに送った。イバラは表敬と同時に兵の宿営について協議するよう指示された。執政のほうからはノールカルムとベルレモンがスペイン軍の陣営に派遣された。公爵の無事到着を祝うとともに慣例的な表敬の挨拶をするためである。同時に、公爵に対して国王からの権限委任状の呈示を求めるよう指示されていたが、アルバ公は

その一部しか見せなかった。

執政からの使節に続いてフランドル貴族の大群が押し寄せた。新たな副王に取り入るのに早すぎることはないと思う、あるいは早めに恭順の意を示すことで目前に迫った懲罰を和らげようとする者たちである。そのうちにはエフモント伯もいた。エフモント伯が進み出ると、アルバ公は並みいる人の前で指さして言った。

「異端の元締めがやってきおった」

その声はエフモント伯本人にも聞こえるほどはっきりしており、エフモント伯はその言葉に驚き、足を止めて青ざめた。しかし、アルバ公はとっさに口走ったことを訂正すべく、穏やかな表情でエフモント伯に歩み寄って友のような抱擁で迎えた。エフモント伯は己の恐れを恥じ、この予兆のことは何でもなかったのだと問題にしなかった。エフモント伯はこの新たな友情のしるしに二頭の見事な乗馬を贈り、アルバ公もおごそかかつ丁重に受け入れた。

諸州は完全に平和であり、反抗のおそれはないとの執政の断言を受け、アルバ公はこれまでネーデルラントから給金を得ていたドイツ人連隊のいくつかの任を解いた。ロドローナ指揮下の三六〇〇がアントワープに宿営することになり、その地のワロン人守備隊は信頼しきれないとして引き上げられた。ヘントその他の要地にはその都市の規模に応じた守備隊が投入された。アルバ公自身はミラノ旅団とともにブリュッセルに向かい、この地の主だった貴族たちのきらびやかなとりまきが付き従った。

ブリュッセルでもネーデルラントの他のすべての都市と同様、恐怖と懸念が先に広まっていた。身に見える者はもちろんそうでない者まで、アルバ公の到着を、審判の日を前にした罪人のように不安のうちに待ち受けていた。家族、財産、祖国といったものから離れられる者はとくに逃亡していたか、そうでなくてもこの機に逃亡した。執政自身の報告によると、スペイン軍の進軍により諸州は十万人の人口を失っており、国を挙げてのこの逃走はいまだ絶えることなく続いていた。

しかし、スペインの將軍の到着は、ネーデルラントの人々にとっていまわしいものではあつたが、それ以上に執政にとつても不愉快で残念なことだつた。長年の苦難に満ちた年月の末、ようやく甘美な平和を、誰にもじやまされることのない権力を味わうことができるようになった。それこそが八年にわたる施政の間待ち望んでいた到達点であり、常にはかない望みとして抱き続けてきたものだつた。不安のうちの労苦、心労や夜ごとの警戒の果実が今よそ者によつてもぎ取られようとしている。この外国人は、執政が逆境のうちから長年にわたる苦心によつてようやく勝ち取ることできた成果のすべてを一瞬にして手にしようとしている。執政を押しつけ、勞せずして名声を奪ひ去ろうとしている。すばやい成功によつて、執政のはなやかではなくとも根本的な功績にうち勝とうとしている。

宰相グランヴェルの退去以来、執政は誰からも干渉されない爽快さを存分に味わつてきた。実権がないだけになおのこと、貴族たちのへりくだつた敬意のうちに形ばかりの権力を堪能していた。だが、そうしているうちに虚栄心のとりことなり、ついには最も誠実な臣下——執政に対して常に眞実を口にしてきた國務評議會議員ヴィグリウス——さえをも、その冷淡さによつて疎遠にしてしまつていた。

今、突然にして、執政の行動を監視し、その権力を分け合う者が押しつけられた。上官でこそなかったが、その高慢で頑固で尊大な性向は宮廷作法によつても和らげられることなく、執政の自尊心にとつて決定的な打撃となることは確實だつた。

アルバ公派遣をやめさせるため、執政は国王への申し立てであらゆる政治的議論を展開し、スペイン軍の駐留はその必然的な帰結としてネーデルラントの商業の完全な衰退を招くと主張したが無駄だつた。すでにこの地で回復されている平和について、そしてその平和実現における執政自身の功績を説明し、少しは報われる資格があるとしたが、これも効果はなかつた。報われるどころか、長年の苦勞の果実が外国人の新参者に奪われ、その成果のいっさいが正反対のやり方によつて再び無に帰すのを目にしなければならぬとは耐えられないことだつた。アルバ公がアルプスを越えた段階になつても、執政は最後の試みとし



てせめて軍勢の規模を縮小するよう要望したが、これも無駄に終わった。アルバ公はその権限委任状をフルに活用する決意だったのだ。

やるせない不興のうちに、今、執政はアルバ公の到来を待ち受けた。傷ついた自尊心からくる涙が祖国のために流した涙と混ざり合った。

### アルバ公の着任 (1567.8)

一五六七年八月二十二日、アルバ公がブリュッセルの市門の前に現われた。軍勢はただちに市周辺に配され、アルバ公自身は真つ先に国王の姉に表敬訪問をした。

執政は病床でアルバ公を迎えた。心に受けた痛手のため本来に健康を損なっていたのかもしれない。しかし、非公式な謁見によつて公の傲慢な自尊心を傷つけ、その勝利感をいくらかでも減じようとしていたとも考えられる。

アルバ公はスペインから携えてきた国王からの手紙を渡し、自らの辞令の写しを呈示した。それはネーデルラントの全軍の最高指揮権をアルバ公にゆだねるというもので、その文面からは民政はこれまでどおり執政の手に任されるものと思われた。

しかし、二人きりになるや、アルバ公は新しい委任状を取り出した。それは先のものとは全く異なる内容だった。この新しい委任状によると、アルバ公は自分の裁量で戦争を開始し、要塞を建築し、随意に諸州の総督、諸都市の守備隊長、その他の国王に仕える官吏を任命、罷免し、過去の問題に関する査問を行ない、その張本人を処罰し、忠誠派に恩賞を与えることができることとされていた。これほど広汎な権限はほとんど主権君主に匹敵するもので、執政の権限をはるかに超えていた。愕然とした執政はその衝撃を隠すのは容易ではなかった。執政はアルバ公に、もしかしたら第三の委任状、あるいは少なくとも特別な命令も持っているのではないかと尋ねた。さらに踏み込んだ、そして明確に述べられたものである。

アルバ公はきつぱりとそれを認めた。しかし、その内容はあまりに立ち入ったものであり、今日のところは踏み込む必要はなく、折を見て出すのがよいだろうとした。

到着後数日のうちにアルバ公は第一の訓令の写しを各評議会および州議会の前に提出し、一刻も早く行き渡るように印刷させた。宮殿は執政が使っていたので、アルバ公は当面キュレンボルフ邸に陣取ることにした。乞食党の同志たちがその名を受けた場所である。その前に今、驚くべき運命の変転によりスペインの専制がその旗印を掲げたのだった。

☆

ブリュッセルの町は今や静まり返っていた。時折静寂を破るのは耳慣れない武器の音だけだった。アルバ公が町にはいつて数時間とたたないうちに、その随行者は解き放たれた猟犬のように四方八方に散らばっていった。どちらを向いても外国人の姿が目についた。

通りは閑散とし、家という家は錠が下ろされ、娯楽は中止され、公共広場には人影もなかった。町全体が疫病に襲われたかのようなだった。知り合いを見かけても普段のように足を止めて談笑することなく足早に過ぎ去る。通りにスペイン人が現われると人は足を早めた。物音がするたびに、司法官憲が戸をたたいたかのように飛び上がった。貴族たちもどうなることかとびくびくしながら家に閉じこもっていた。新任の副王が何か思い出すきっかけにならないよう、みな公の場には顔を出さないようにしていた。

ネーデルラントとスペインはその国民性を入れ替えたかのようなだった。今やスペイン人がおしやべりで、ブラバント人が無口だった。不信と恐怖が戯れや娯楽の心を奪ってしまった。強いられたいかめしさは表情さえもこわばらせた。今にも一撃が下されるかと人は絶えず恐れおののいていた。スペインの軍司令官を城壁内に迎えてからというものの、まるで毒杯を飲み干して毒がきいてくるのを今か今かと待ち受けるような気持ちだった。

## 逮捕 (1567.9)

人心があまねく張りつめているのを見て、アルバ公は獲物が逃げ出す前に計画遂行を急ぐことにした。その最初の目標は、最も疑惑の深い貴族の身柄を確保し、党派からはその指導者を、自由を抑圧すべき民衆からはそのたのみとする柱を完全に奪い去ることだった。

うわべの友好を見せることで当初の警戒を解かせ、特にエフモント伯には以前と同じ安心感を取り戻させることに成功した。アルバ公はそのために二人の息子フェルナンド・デ・トレド、フェデリコ・デ・トレドを巧みに利用した。若く人好きのする二人は伯のフランドル人気質にはよりなじみやすかった。

同じような狡猾なやり方により、ホールネ伯もブリュッセルにおびき出すことに成功した。ホールネ伯はこれまでアルバ公の施政のすべり出しを離れたところから観察することに決め込んでいたのだが、友の成功を見て引き寄せられたのだった。

貴族の一部は——その筆頭がエフモント伯だったわけだが——以前の陽気な生活を取り戻しさえした。ただし、その楽しみは心からのものとはならず、あとに続く者も多くはなかった。

キュレンボルフ邸には絶えず大勢の人がつめかけていた。新しい副王の身辺に群がった人々は、恐怖と不安におののきながらもうわべだけは陽気に見せるのだった。ことにエフモント伯は気軽な様子でこの館に出入りし、アルバ公の息子たちをもてなし、またもてなされるのだった。

この間、アルバ公は計画遂行のためのこれほどの好機は二度とないと考えた。ちよつとした不注意でもあれば、この二人の獲物をまんまとこちらの手中におびき寄せた安心感を台無しにしかねないのだ。

ただ、第三の男——ホーフストラーテン——も同じわなに捕らえなければならぬ。ホーフストラーテンももつともらしい用向きの口実をつけて首都に呼び出していたのだった。

アルバ公自身がブリュッセルで三人の伯爵の身柄を拘束すると同時に、ロドローナ大佐がアントワープ市長ストラーレンを逮捕する。オラニエ公の親友で、カルヴァン派を奨励した疑惑がもたれていた人物

である。そして別の者がエフモント伯の秘書をしているとりまき貴族の一人ベッカーゼール領主ヤン・カッセンブロート、そして同時にホルネ伯の幾人かの書記を拘束し、書類を押収する手はずになっていた。

☆

この計画遂行のために定められた日（九月九日）がくると、アルバ公はすべての国務評議会議員、そして金羊毛騎士団の騎士を、国事についての協議があるとして召し出した。この場にはアールスホット公爵、マンズフェルト伯爵、ベルレモン伯爵、アーレンベルク伯爵がネーデルラントを代表して、そしてスペイン人からはアルバ公の息子たちのほかにヴィテッリ、セルベロン、イバラが出席していた。若きマンズフェルト伯も会合の場に現われたが、父からの合図を受けてさっと姿を隠し、そのすばやい逃走によって、かつて乞食党連盟の一味だった伯に迫っていた破滅を免れることができた。

アルバ公は意図的に協議を引き延ばし、行動に出る前に、他の一味の捕縛の首尾を伝えるはずのアントワープからの急使が着くのを待った。疑惑を招かぬため、技師バチオットが会議に出席していくつかの防塞の図面を提出するよう求められた。

ついにロドローナが任務遂行に成功したとの情報はいった。それを聞くと、アルバ公は巧みに討議を打ち切ると、評議會を散会とした。エフモント伯がドン・フェルナンドと始めたゲームの決着をつけにその部屋に向かおうとしたとき、アルバ公の親衛隊の隊長サンチョ・ダビラがエフモント伯を呼び止め、国王の名において剣を差し出すよう要求した。同時に、スペイン人兵士の一隊が示し合わせたとおり突如隠れ場所から姿を現わし、伯を取り囲んだ。思ってもみない事態にエフモント伯は暫時言葉も出ず、何が何かわからなかった。やああつて平静を取り戻すと、落ち着き払って剣を外し、それをスペイン人の手に渡しながら言った。

「この剣は、これまで一度ならず国王陛下の御ためにはたらき、功あったものだ」

同じころ、別のスペイン人士官が、やはり危険が迫っているなどとはこれっぽかしも思わず家路につこ

うとしていたホールネ伯を逮捕した。ホールネ伯がまずきいたのはエフモント伯のことだった。友もまさにその瞬間、同じことになっていると聞かされたホールネ伯は、抵抗をあきらめて降伏した。

「私はエフモントに導かれてこまできた。運命を共にするのをもっとというものだ」

二人の伯爵は別々の部屋に監禁された。

キュレンボルフ邸内でこうしたことが進行している間に全守備隊が動員され、武装して館の前に勢ぞろいした。中で何が起こっているのか、誰もうかがい知ることはできなかった。謎めいた恐怖がブリュッセルじゅうを駆け抜けた。まもなくしてこの不幸な事件の噂が広まった。住民誰もが我がことのように感じた。多くの者にとつて、エフモント伯の運命に対する同情よりも、伯が惑わされていたことへの批判が先に立った。誰もがオラニエ公が難を逃れたことを喜んだ。ローマでことの次第を聞いたグランヴェル枢機卿の最初の質問も、沈黙公も捕らえたかということだったという。否との答えを聞くと、グランヴェルは首を振った。

「沈黙公を取り逃したのなら、何も得られなかったも同然だ」

運命はホーフストラテン伯のことは容赦した。病のため旅が遅れ、旅路の途中で事件の報せを聞いたのである。伯は急ぎ引き返し、幸いにも破滅を逃れることができた。

エフモント伯は拘束直後に文書を書かされた。ヘントの城塞の守備隊長に宛てて要塞をスペイン人大佐アルフォンソ・デ・ウリョアに引き渡すよう命じるものだった。二人の伯爵は、ブリュッセルのそれぞれの場所では何週間か拘禁されたのち、スペイン人兵三〇〇〇の警護のもとヘントに移送され、翌年中ごろまで監禁の身となった。

その間にあらゆる書類は押収された。アルバ公の見せかけの友好にだまされて残っていた多くの大貴族が同じ目にあつた。アルバ公の到着前に反乱により捕らえられていた者に対しても、これ以上遅らせることなくことごとく死刑が執行された。エフモント伯の逮捕の報せを聞くと、賢明にもスペイン人將軍の到

着を待たずにすでに安全の地に逃れていた十万に加え、さらに二万ほどの住民が放浪の旅に出た。

「避難民の多くはユグノーの軍勢を増強することになった。ユグノーはスペイン軍のロレーヌ通過を機に兵力を集結させ、今やシャルル九世に激しく攻め立てていた。そんな事情からフランス宮廷としてはネーデルラントの執政に援助を求める権利があると考えた。ユグノーは、スペイン軍の進軍をバヨンヌで二つの宮廷の間に結ばれた（一五六五）陰謀を実現するための動きと見なしており、スペインのせいで眠りから覚めされたのだという言い分である。フランス国王がひとえにスペイン軍の進軍ゆえに追い込まれた窮地から救い出す義務がスペイン宮廷にはあるというのだ。アルバ公は実際アーレンベルク伯をかなりの軍勢とともにフランスの母后の軍に合流すべく送り、さらにその援軍を自ら指揮することまで申し出たが、それは謝絶された。」

これほどの貴人に対しても矛先が向けられた今、もはや誰も安全だとは思えなくなった。多くの者は亡命というまっとうな決断をこれまで先延ばしにしてきたことを悔いるばかりだった。逃亡は日に日に難しくなってきた。アルバ公はすべての港の閉鎖を命じ、移住は死罪を持つて禁止した。今や乞食党員さえもが幸運だったと思われる。祖国と財産を捨てることによって、少なくとも生命と自由は守ることができたのだから。

## アルバ公の施政とパルマ公妃の退場

### 血の評議会 (1567)

最も疑惑の深い貴族の身柄を確保したのち、アルバ公の第一歩は、宗教裁判の權威を復活させ、トリエント議定書の施行を再開し、穩健路線を廢し、異端に対する勅令を本来の嚴格さで改めて公布することだった。

スペイン宗教裁判所はネーデルラント国民全体を最も重い反逆罪で有罪であるとの宣告を出した。カトリックと異端、忠誠派と反逆者の区別もなかった。後者は実際の行動によって、前者はそれを黙過したことによって罪を犯したというのである。除外された者もわずかにあったが、その対象者は意図的に公表されなかった。この判決を国王は公式文書によって確認した。

フェリペ二世は、執政が国王の名においてネーデルラントの民と結んだいかなる約束にも縛られず、いかなる締約にも拘束されないものであり、今後国王から期待される救済は国王の好意によるもののみであると宣言した。

宰相グランヴェルの放逐に関わった、また貴族連盟の請願に参加した、あるいはそれについて単に好意的なことを口にしたすべての者、トリエント議定書や宗教に関する勅令、あるいは司教新設に反対する請願を提出したすべての者、プロテスタントの公然說法を黙認したか本気で抵抗しなかったすべての者、乞食党の記章を着用し、乞食党の歌を歌った、あるいは連盟成立に際して何らかの形で喜びを表明したすべての者、非カトリックの説教師に宿を貸したりかくまったりした、またカルヴァン派の葬式に参加した、あるいは単にその秘密集会のことを知っていて通報しなかったすべての者、ネーデルラントの特権をふりかざして政府にたてついたすべての者、最後に、人間ではなく神に従うべきだとの意見を述べた者——これらすべての者はみな区別なく、国王大権の侵害および大逆罪のかどで法が定める処罰の対象になると宣

言された。

そうした処罰は、有罪となった者に手心や温情を加えることなく、また位階、性別、年齢に関係なく、後世への示しとして、未来永劫の恐怖となるべく、アルバ公に下される訓令に従って執行されるべきものとされた。

この宣言に従うならばネーデルラントにはもはや無実の人間は存在しなかった。副王は国民の運命を左右する選択を手に行っているのだった。財産も人命もその意のまま、その一方、あるいは両方を維持できた者は、副王の寛大、慈悲のたまものとしてありがたく受けなければならなかった。残虐であると同時に細部まで考え抜かれたこの方策によって、国民は抵抗手段を奪われ、団結はもはや不可能となった。

万人に例外なく下された判決を誰に対して執行するかはアルバ公の胸一つにかかっていたため、各人は目立たぬようひっそりと暮らしていた。なるべく副王の注意を避け、貧乏くじが降りかからないようにするためである。一方でアルバ公が例外とした者はある意味公に負い目を感じ、生命と財産の価値に匹敵する義理ができたことになる。国民全部を処罰することは実際にはできないため、アルバ公は自然、恐怖と恩義という何よりも強いきずなで国民の大部分の忠誠をつなぎとめることになった。犠牲者として選び出した者一人に対し、見逃してやった十人の心を勝ち得ることができたのだ。

アルバ公が命じた流血のさなかにあっても、この方針を続ける限り公自身の権力が乱されることはなかった。この強みを手放すのは、資金の逼迫から国民誰にも例外なくのしかかる重荷を導入せざるを得なくなったときのことである。

☆

日々手元に集まってくるこの血なまぐさい業務を増進させ、制度の不備から犠牲者を取り逃すことがないよう、また一方ではこの政策と相容れない特権を墨守する、公にしてみれば手ぬるすぎる議会から干渉されないようにするため、アルバ公は特別裁判所を設置することにした。この裁判所は十二名の刑事裁判



官で構成され、過去の騒動を調べ出し、辞令の字句に忠実に判決を下すものだった。

このような裁判所の設置からしてすでに、何人たりとも自分の州外で裁かれることはないと明確に定めたネーデルラントの自由に反するものである。しかし、アルバ公はその不正をさらに進め、この地の最も神聖な特権に反してネーデルラントの自由の公然たる敵であるスペイン人にこの裁判所の議席と投票権を与えたのである。

議長を務めたのはアルバ公自身、その次にはバルガスというとある神学士だった。バルガスは生まれからはスペイン人だが、女弟子に暴行して母国からは疫病神のように追放されていた。恥知らずで冷酷無比の悪漢で、その胸中では貪欲、情欲、そして残忍さがせめぎあっていた。その下劣な人品については両派の史家の一致するところである。

主だった判事はアーレンベルク伯、フィリップ・ヴァン・ノワルカルム、ベルレモン伯（ただし、一度も陪席しなかった）、ヘルダーラント参事官ハドリアン・ニコライ、アルトワおよびフランドルの州議会議長ヤコーブス・メルテンスとペーター・アセット、ヘルダーラントの評議會議員ヤコーブス・ヘッセルツとヤン・ド・ラ・ポルト、スペイン生まれの神学博士ルイス・デル・リオ、政府検事長ヤン・デュボワ、法廷書記デラトールレである。

ヴィグリウスの申し立てに基づき、枢密評議會はこの裁判所への関与を免じられた。メヘレンの高等法院からも引き抜かれた者はなかった。

判事たちの評決は単なる勧告であって最終的なものではなく、決定権はアルバ公自身が留保していた。会期には特別の決まりはなかったが、判事たちはアルバ公が必要と認めるたびに正午に集まった。

しかし、三か月もたつとアルバ公自身はあまり顔を出さなくなり、ついにはお気に入りのバルガスに任せきりになった。その精勤ぶりはおどましいほどで、まもなく判事たちはみな、自分たちが手を染め、立ち会わねばならない不名誉な任務にうんざりして、スペイン人のデル・リオ博士、書記デラトールレを除い

てみな出席を控えるようになった。「重要人物への判決（たとえばアントワーブ市長ストラレンへの死刑判決）でもバルガス、デル・リオ、デラトーレの三名の署名しかなかった。」

最も気高く、有為の人物たちの命がスペイン人の無頼漢の手に握られており、国民の聖所、その特権や特許までもがかり乱され、封印も破られ、領主と等族との間のこの上ない内密の契約が信義に反して暴露されるといふ実状には身の毛もよだつものがある。

「血の評議会において重要きわまりない事柄、人の生死に関わる決定さえもがいかに無情に軽々しく扱われていたかの例として、評議会議員ヘッセルツについて伝えられている事例を紹介しておこう。ヘッセルツは会議中たいていは眠っており、死刑判決について自分の評決を述べる番になると、居眠り半分で「はりつけだ！ はりつけ！」と叫ぶのが常であった。ヘッセルツのこの決まり文句は周知のものとなっていた。ちなみに、ヘッセルツの妻——議長ヴィグリスの姪——は婚姻の文書に国王の裁判官という、ヘッセルツを全国民の怨嗟の的にした陰惨な職務を辞任することを明記させた。」

十二人評議会（設立の目的から騒乱評議会と称されていたが、その実績から一般には血の評議会の名で知られていた——憤慨した民衆がつけた呼び名である）の審理には再審ということはなかった。控訴は認められなかった。その判決は最終的なものであり、他のいかなる権威も口をはさめなかった。先の反乱に關係する件ではこの地のどの裁判所も裁判権を認められず、そのため他の裁判所の機能はほとんど停止した。メヘレンの高等法院はないも同然だった。国務評議会も開かれなくなり、その権威も完全に地に墜ちた。まれにアルバ公も若干名の国務評議会の議員たちと国務について協議することはあったが、そのための機会も場所はアルバ公の部屋で、正規の形を取ったものではなく、個人的な話し合いという以上のものではなかった。いかなる特権も、あれほど用心深く確認されたいかなる免責証書も騒乱評議会の前では無意味だった。

「バルガスは俗なラテン語の一言のもとにネーデルラントの自由をうち砕いた。ルーヴァン大学の自由を主張しよう

とした者に対してこう言ったのである。「そのほうどもの特権は我らの関知するところではない」」

あらゆる証書、締約文書が提出させられ、強引この上ない解釈、さらには変更を強いられた。アルバ公が作成させた判決文にブラバント州議会の反対が予想されるようなときには、ブラバントの印章なしで有効とされた。神聖この上ない個人の権利も侵害され、前例のない専制が家庭生活の場にまではいり込んだ。これまでプロテスタントや反逆者がこの地の有力家系との婚姻によつて大いに勢力を拡張していたことに鑑み、アルバ公はすべてのネーデルラント人に、位階や官職を問わず、事前に公に申請して許可を得ることなく婚姻を取り結ぶことを禁じる布告を発し、違反者には死罪と財産没収を科すものとした。

騒乱評議会から召喚を受けた者は誰であろうと出頭しなければならなかった。聖職者も平信徒と同様に、この上ない尊敬を集めている者も聖像破壊運動に加わったごろつきと同様である。出頭しなかった者は——実際にこのこ出ていった者はほとんどなかったのだが——国外追放を命じられ、財産は国庫に没収とされた。しかし、出頭した者、あるいは運悪く捕まった者となればもはやそれまでだった。

一つの町から同時に二十名、四十名、しばしば五十名もが召喚された。最初に雷が落ちるのは決まって富裕層だった。祖国や家庭を大切と思わせるようなものを何も持たない庶民は事前の召喚状なしに突然逮捕された。六万から十万グルデンという財産を自由にできる富裕な商人が後ろ手に縛られ、一介のならず者のように馬の後ろで刑場に引かれていくのが何人も見られた。ヴァランシエンヌでは一時に五十五名もが斬首されたこともあった。

あらゆる監獄は（アルバ公は施政の開始後ただちに大量の監獄をつくらせていた）罪人でいっぱいだった。絞首、斬首、八つ裂き、火刑が日々恒常的に行なわれる行事となった。ガレー船送りや追放は比較的正常だった。死罪に値しないほど軽いと思われる罪がほとんどなかったからである。

このようにして莫大な富が国庫にもたらされた。しかし、新副王やその手下の金への欲望はそれで収まるどころかますますかき立てられるばかりだった。その狂気の目指すところは、国民全体を乞食におとし

め、すべての富を国王とそのしもべの手に集めることであるかのように思われた。こうした没収財産による一年の歳入は一流国の歳入に匹敵すると推算された。国王に提出された報告書の推計では、二〇〇〇万ターラーという信じられない額に上っている。

この政策をいつそう非情なものとしているのは、最もおとなしい臣民、最も正統的なカトリック教徒という、普通なら迫害の対象になるはずのない人々にまでしばしば最も厳しい打撃となったことである。というのも、資産が没収されれば、請求権をもつ債権者は権利を失った。それが出資していた病院や公共施設も破滅した。そこからわずかばかりの生活費を受けていた貧民はこの唯一の生活の糧が干上がるのを目にすることになった。没収財産に対する正当な請求権をあげて十二人評議会の前に（他の裁判所にとってこのような申し立てはとも引き受けられる状況ではなかった）主張する者は、長引く、費用のかさむ訴訟で身代を使い果たし、結審を見る前に乞食に身を落とすことになった。

かような法の転覆、かような所有財産への無法、かような人命の浪費は、文明国の歴史上、他にかるうじて一つだけ例がある。しかし、ローマ時代のキンナ、スッラ、マリウスは挑発を受けたのちに勝利者として征服されたローマに入城したのであり、少なくとも何らの仮面もなしに行動した。だが、それをネーデルラントの副王は法というまことしやかなベールに隠れて実施したのである。

一五六七年の終わりまでは国王の行幸は確かなことと思われており、善良な人々はその到着に最後の望みをつないでいた。フェリペ二世世を出迎える目的のために用意させた船はまだフリシンゲンで待機しており、連絡あり次第いつでも出港できる状態だった。ブリュッセル市もスペイン兵守備隊の受け入れを了承したが、それも国王が市内に滞在するとの建て前を信じたからだだった。しかし、出発が冬から春、春から夏へと延期されるうちにそうした期待はしぼんでいった。しかも、新副王はいくらもしないうちに絶大な権力を行使するようになり、それは王者の先触れというよりは、国王本人を不要とする全権をもった代理となることを示していた。

## 執政の辞任 (1567.9)

諸州の苦境を完全なものとするかのように、執政というその最後の守護天使もが今この地を去ろうとしていた。アルバ公に広汎な権限を与えた委任状を見せられて自分の統治が事実上終わったことを疑問の余地なく思い知らされたその時以来、マルガレーテは執政の名をも捨てる決意を固めていた。九年間享受してきた不可欠なものとなった権力が誇らしげな後継者の手にあるのを見ること、威光、栄光、光輝、崇敬、その他最高権力者ならでこそ受けられるさまざまな敬意の表象ことごとくが他人の手に渡るのを目にすること、そして失ったものを日々目のあたりにし、それが一度は自分のものであったことを思い出させられることは、女の身にとって耐えられることではなかった。その上、アルバ公はまかり間違っても、獲得した権威の行使を控えめにしてそれを失った者の痛みをやわらげるような配慮をする男ではなかった。

さらに公妃の心を辞任に傾けたのは、統治権力が二人の手に分散してはこの地の平穩にとつての危険要因になりかねないという点である。州総督の多くは宮廷からの明確な指示なしではアルバ公の命令には従わないとし、公を共同統治者と認めようとはしなかったのである。

権力の中心の急速な移行に廷臣が無関心でいられるわけもなく、公妃はその変化を痛切に感じずにはいられなかった。国務評議会議員ヴィグリウスのようにいまだ執政に忠実な者もいるにはいたが、それも執政本人に愛着があるからではなく、外国人の新参者の後塵を拝するのが気に入らないからであり、また新たな副王のもとで一からやり直すのは誇りが許さなかったからだだった。しかし、大多数の者は、両者の中道を行こうと努力しながらも、昇る太陽と沈みつつある星に払う敬意に差をつけているのを隠すことはできなかった。ブリュッセルの王宮は日に日に閑散とし、キュレンボルフ館に詰めかける人混みは日増しに増えていった。

しかし、何よりも執政の感受性を傷つけたのは、ホールネ伯、エフモント伯の逮捕だった。その計画も

遂行もアルバ公の一存で行なわれ、執政には同意を求めるどころか通知さえされなかった。まるで執政など存在していないかのような扱いだった。確かにアルバ公は、ことがなったあとで、計画を知らせなかったのは執政の名をこのようないまわしい行為に巻き込むことを避けるためだったと説明して執政をなだめようとした。しかし、このようなおためごかしで執政のプライドが受けた傷をふさぐことはできなかった。このたびのことはほんの序の口にすぎないはず。同じような侮辱を今後二度と受けることのないよう、執政は秘書のマキアヴェルを弟王の宮廷に送り、執政職を辞す許可を求めさせた。

公妃マルガレーテの辞任要請は難なく認められたが、さすがに国王も執政へのこの上ない尊敬の念を示すようあらゆる配慮をした。姉の願いを聞き入れるために、自らの、そしてネーデルラントの利害をあえて度外視して辞任を認めることにしたとさえ述べた。書状とともに三万ターラーの贈り物が送られ、公妃には二万ターラーの年金が割り当てられた。

「ただし、公妃の存命中に刊行されたパンフレットを信じるならば、この年金はあまりきちんと支払われなかったようである（パンフレットの表題は「オラニエ公負傷についての考察、一五八二」というもので、刊行地は記されていないが、ザクセン選帝侯のドレスデンの蔵書中に見ることができる）。それによると、公妃はナミュールで不遇をかこっており、息子であるパルマ公子（ネーデルラント執政となっていた）からの援助も不十分で、秘書アルドブランディンなどはこの地での生活を亡命と呼んでいたほどだった。」

同時にアルバ公には、公妃に代わって全ネーデルラントの全州総督とし、無制限の全権を付与する辞令が届けられた。

☆

マルガレーテとしては、厳肅な全国議会の集まりの前で執政職を辞すことを認められなかった。そのことは国王に対してもそれほど遠回しでない形で伝えていた。しかし、この願いはかなえられなかった。公妃はことのほか儀式が好きだった。そしてまさにこの都市で盛大な退位式典を行なった父、皇帝カール五

世の例がマルガレーテの心を限りなく引きつけていたようだった。最高権力を手放すことを強いられたのだから、できるだけ華やかにそれをしたいと望んだとしても責められはすまい。

その上、公妃はアルバ公に対する国民的な憎悪が自分に有利にはたらいっていることを見逃さなかった。そんなこともあつて、心地よく感動的な見せ場を余計に楽しみにしていたのである。善良な執政のためにネーデルラントの人々が流す涙を見れば晴れやかな気持ちになったことだろう。それに自分の涙を加えるのも心地よいに違いない。そうした万人の同情のもとでならば、玉座を降りるのもどんなにか楽になったことだろう。執政であつた九年間の期間中、運が向いていたときには民衆の敬意を勝ち得るようなことはほとんどしておらず、主君の賞賛がその望みのすべてだった。しかし、今、公妃の目には、国民の同情というものが、他のすべての望みを断たれた失望を少しなりとも埋め合わせる唯一のものとして大いに価値あるものとなっていたのである。

公妃としては、自分が、善良な心根と、ネーデルラントの民を深く思う気持ちから進んで身を犠牲したのだと思ひ込もうとしていた。だが、国王はただ姉の気まぐれを満たすために全国三部会を召集する危険を冒すつもりはさらさらなかった。公妃としても、諸等族に対して別離の書簡を送ることで満足せざるを得なかった。この文書において、公妃は自分の施政全体を振り返り、いささか自負も込めて自分が立ち向かわなければならなかった困難、巧みな舵取りによつて防ぐことのできた害悪を並べ立てた上で、しめくくりとして、自分は務めを完遂して去るのであり、後任者には犯罪者の処罰をゆだねるのみだと述べた。同じことは国王も何度となく聞かされた。さらに公妃はあらゆる論を尽くして、アルバ公の施政がうまくいった場合、その功績は自分のものだと言張するのを怠らなかつた。公妃は、自分の功績は疑いのないところではあるが、不肖の身には荷がかちすぎるとして国王の足下に差し出したのだった。

しかし、偏見のない後世の目で見れば、手放しでこうした好意的な見方を認めることには躊躇を感じざるを得ない。同時代人が声をそろえて、またネーデルラント自身の証言もがそれを支持しているとはいえ、

第三者として執政の言い分をもう少し厳密に検証する権利は認められていい。動かされやすい民衆の心は、悪が少ないことを即、善とし、現実の悪政という圧力のためにこれまで忍んできたことを賞賛してしまうくらいがある。

ネーデルラント人の憎悪はすべてスペインという名に集約されていたようである。執政を諸悪の根源として非難すれば国王やそのとりまきへの悪口を減じることになるが、人々はむしろスペイン人にいっさいの非難の矛先を向けたいのだった。アルバ公のネーデルラント統治を基準としてその前任者の功罪をはかることは適當ではない。

確かに、国王の要求を満たしつつネーデルラントの人々の権利を侵さず、人の道も外れないのは決して容易なことではなかった。しかし、その相矛盾する二つの責務と格闘した結果、マルガレーテはいずれも実現できなかった。いたく国民感情を害し、それでいてたいして国王の役にも立たなかった。

最後にプロテスタントの徒党を撲滅したのは事実だが、これについては執政自身の手腕というよりたまたま暴発した聖像破壊運動という敵失に負うところが大きかった。計略によって貴族連盟を瓦解させたのは事実だが、その前にすでに内部抗争によってその根幹はゆらいでいた。長年の間あれこれと手を尽くして果たせなかったことも兵の動員というその一事によって達成できたが、それはマドリッドから命じられたことだった。平穏となった国土をアルバ公に引き継いだのは確かだが、その平穏化が多分にアルバ公到来の恐怖によるものであったことは否めなかった。

その一方、執政はその報告によりスペイン政府を誤った方向に導いた。病そのものについては知らせることなく、散發的な症状のみを伝えたからである。国民全体の思いや声を報告することなく、諸党派の無法ばかりを伝えたからである。その失政は人々を犯罪へと駆り立てた。不満は与えたのに、十分な恐怖心を与えなかったからである。凶暴なアルバ公をこの地に招いたのも執政自身だった。諸州の騷擾の原因は国王の政策の過酷さというよりその執行を託された官吏の頼りなさによるものだと言王に信じさせたか



らである。

マルガレーテには思慮も才気もあった。通常の事態ならばそつなく対処する政治手腕も身につけていた。しかし、過去に例のない非常時にあつて新しい方針を打ち出したり、知略によつて古い政策から抜け出したりする創造性は持ち合わせていなかった。誠実こそが最善の策である土地柄において、イタリア式の権謀術数を用いようとしたのが不運だった。それにより人々の心に不信の種を植えてしまったのである。文句なしに執政の長所とされている寛容についても、その弱さと臆病さにつけこんで国民の断固とした勇気が勝ち取ったというのが実状だった。執政が自発的な決意により王命の文字どおりの執行から逸脱したことは一度としてなかった。その立派な徳も、国王の指示に含まれる残忍な趣意を取り違えることはなかった。必要から認めざるを得なかったいくばくかの譲歩にしても、まるで与えすぎるのを恐れるかのようにおずおずとためらいがちになされ、その善行もけちくさく条件をつけてこまぎれになされたため得点にはならなかった。

他の場面では執政に欠けていたとされる側面が、為政者としては強すぎたのだ——女性らしさというものが。

グランヴェル放逐後、その気になればネーデルラントの民の保護者になることもできたが、ならなかった。何よりも望んだのは国王に認められることであり、何よりも恐れていたのは国王の不興だった。その精神にはすぐれたものはあつたが、執政は結局のところ凡人だった。その心に気高さを欠いていたからである。執政はその陰惨な権力をかなりの節度をもつて行使し、その施政を残忍な専制で汚すことはなかった。それどころか自分の一存で決められるときには執政の行為は常に人道的だった。のちに、執政が崇めていたフェリペ二世がマルガレーテのことなどとうに忘れてしまったころになつても、ネーデルラントの人々はいまだ執政のことを懐かしんでいた。しかし、執政本人にはその栄光に値するようなどころはとうていなく、それはむしろ後任者の非人間性ゆえのことだった。

執政は一五六七年の十二月の末ごろブリュッセルをあとにした。アルバ公はブラバントの州境まで付き添い、そこから先はマンスフェルト伯に護衛の任を託して急ぎ首都に戻った。今やアルバ公は単独の執政〔全州総督〕としてネーデルラントの民に君臨するのである。

追

補

## エフモント伯、ホールネ伯の裁判と処刑

### 告発 (1567-68)

二人の伯爵は、逮捕されてから数週間後、スペイン人兵三〇〇〇の護衛のもとにヘントに送られ、そこで八か月以上の間城塞に幽閉された。裁判はアルバ公が過去の騒乱調査のために首都ブリュッセルに設立した十二人評議会のもとで正式に行なわれる。

政府検事長ヤン・デュボワが起訴状を作成した。エフモント伯に対する起訴事項は九十項目、ホールネ伯に対しては六十項目に及んだ。ここでそれを挙げていく余裕はない。それにその例はすでにいくつか上に挙げてある。どんなささいなことだろうとあらゆる行動が、また行動しなかったことが冒頭陳述に述べられた観点にそって解釈された。「両伯爵はオラニエ公と共謀してネーデルラントにおける国王の権威の転覆ならびにこの地の政府の篡奪をはかった」というのである。グランヴェル放逐、エフモント伯のマドリード行き、乞食党連盟、それぞれが総督をしている州でプロテスタントに対してなした譲歩——すべてがその計画にそってなされ、互いに関連をもっているものとされた。こうして取るに足りないできごとにも重きがおかれ、ある行動が別の行動をゆがめて悪く解釈するのに用いられた。ほとんどの事項について、それだけですでに反逆罪に値するものとして扱うよう念を入れた。全体として反逆罪の判決を容易に引き出せるようにするためである。

起訴状は四人兩名のそれぞれに届けられ、五日以内に返答をすることが求められた。それがすんでから弁護人や代理人を雇うことが認められた。弁護人、代理人は兩名に自由に会うことが許されたが、起訴事実が反逆罪であるため、友人らの面会は禁止されていた。エフモント伯はフォン・ランダスとブリュッセルの若干の有能な法律家数人を起用した。

その第一歩は二人を裁こうとしている法廷の正当性を問うことだった。金羊毛騎士団の一員として、騎

士団の団長である国王自身によってしか裁かれることがないというのがその言い分である。しかし、その異議は却下され、証拠の提出を迫られ、従わない場合には法廷抗拒として訴追されるとした。

エフモント伯は八十二項目については申し分ない根拠をもって回答をしている。ホールネ伯も起訴状に對して一点一点回答した。起訴状も弁明書も現存している。このような弁論を前にしては、偏見のない法廷であれば二人とも無罪放免となったはずだ。検事は証拠の提出を迫り、アルバ公からも繰り返しすみやかに提出するよう通達が出された。しかし、両名は、法廷の違法性に対する異議を新たにすることによって一週また一週と引き延ばした。ついにはアルバ公は改めて九日間の期限を切って証拠の提出を求めた。この期間内に従わなかった場合には罪状を認め、あらゆる弁明の権利を失ったものと見なされるとした。

裁判の進行中、二人の伯爵の身内や友人も手をこまねいていたわけではない。エフモント伯の妻——生まれからはバイエルン公女である——、ドイツ帝国諸侯、さらには皇帝、スペイン国王にまで嘆願した。ホールネ伯太妃（囚われの伯爵の母）もドイツの主だった諸侯の家門とは友情あるいは血縁によりつながりがあり、同じようにしてはたらかけた。この不法な審理には誰もが声高に異を唱え、ドイツ帝国の自由に訴え（ホールネ伯も帝国の伯爵としてそれに浴する権利がある）、ネーデルラントの自由、金羊毛騎士団の特権を主張した。エフモント伯妃はドイツのほとんどすべての宮廷を夫のために動かした。スペイン国王とその副王には被告人のためのとりなしが殺到したが、二人とも相手に回すばかりで自分で取り合おうとはしなかった。ホールネ伯太妃はスペイン、ドイツ、イタリアのあらゆる金羊毛騎士団員から騎士団の特権を証明する確認書を集めたが、アルバ公は今回の件には無効だとして却下した。

「伯らが訴えられている犯罪はネーデルラント諸州に関して犯されたもの。ネーデルラントに関する問題について国王から唯一の審判者とされているのはこの私なのだ」

政府検事長が起訴状を書き上げるのに四か月かかり、二人の伯爵が弁明書を用意するのに五か月が与えられた。どうせ役には立たない証拠の提出に時間と労力を空費する代わりに、二人は法廷の違法性を突く

ことに時間を費やしたが、役に立たないことではそれ以上だった。証拠を提出すれば最終的な判決を遅らせ、そうして時間をかせいでいる間に友人たちの尽力が実を結ぶことだって不可能ではなかったかもしれない。だが、あくまでも法廷の非合法性にこだわることで、アルバ公に審理を切りつめるきっかけを与えてしまった。最後の期日が過ぎた一五六八年六月一日、十二人評議会は両伯爵を有罪とし、同月四日、死刑宣告が言い渡された。

## 判決（1568）

二十五名のネーデルラント貴族が前後三日のうちにブリュッセルの広場で断頭台の露と消えた処刑は、二人の伯爵を待ち受けている運命への恐るべき序曲であった。エフモント伯の秘書をしていたベツカーゼール領主ヤン・カッセンブロートは、拷問台でも守り通した主への忠節、聖像破壊運動のさなかにあつて示した国王への忠義に対してかように死をもって報いられた不幸な者の一人だった。他の者は乞食党の蜂起の際に武器を手に行っているところを捕らえられたか、貴族たちの請願に関与したかどで逮捕・起訴された者だった。

アルバ公としては判決の執行を急ぎたい理由があつた。ナッサウ伯ルートヴィヒがフロニンゲン州のヘイリヘルレーの修道院付近でアーレンベルク伯に戦いを挑み、武運に恵まれ、これを破つたのである。戦勝後ただちにフロニンゲン市に進撃し、これを包囲していた。ルートヴィヒの軍勢の勝利がその党派の士気を上げた。その兄オラニエ公もこれを支援すべく軍を率いて接近中であつた。

こうした状況からこれら遠隔の州がアルバ公の存在を必要としていた。だが、重要な四人の運命を見届けるまではブリュッセルを離れる気にはなれなかった。全国民は二人の伯爵に心酔しきっており、その気持ちは両者の不幸な運命によって少なからず強められていた。厳格なカトリック教徒でさえこれほどの重要人物二名を弾圧してのアルバ公の勝利はよく思っていないかつた。反乱軍がアルバ公に対して少しでも優

位に立とうものなら、それどころかそんな噂が立ちさえすれば、ブリュッセルに革命が起き、二人の伯爵も解放されかねない情勢だった。

それにドイツ諸侯からアルバ公、あるいはスペイン国王に届けられる嘆願やとりなしは日々増加していた。皇帝マクシミリアン二世までエフモント伯妃に「夫の生命について何ら心配することはない」と請け合っていた。こうした強力な要請を受けて国王が心変わりして囚人の助命を考えないとも限らない。あるいは副王の迅速な処置を信じて、これほど多くの諸侯からの要請に譲歩するそぶりをして死刑判決を撤回するかもしれない。その恩赦が手遅れになることを信じてのことだ。アルバ公としては、判決後、遅滞なくすみやかに執行するに十分な理由だった。

判決が言い渡された翌日、二人の伯爵は三〇〇〇人のスペイン兵に護衛されてヘントの城塞からブリュッセルに連れてこられ、大広場（グランプラス）のプロートハウス（元製パン会館でブルゴーニュ時代以来フランス語では「王の家（メゾン・デュ・ロワ）」として知られる）に収容された。

翌朝、十二人評議会が開かれ、アルバ公もめざしく自ら出席した。書記プランズが封印された兩名の判決を開封し、公式に読み上げた。両伯爵は反逆罪で有罪とされた。その理由は、オラニエ公の恐るべき陰謀に賛同して助長し、貴族連盟を庇護し、その総督職その他の任において国王や教会に対して不忠をはたらいたというものだった。兩名は公開の場において斬首されることとなり、その首は槍に突き刺してさらされ、アルバ公の明確な命令なしに降ろしてはならぬこととされた。そのすべての財産、封土、権利は国庫に没収されることになった。判決文はアルバ公と書記プランズが署名しただけだった。評議会の他の面々の同意は求められさえしなかった。

六月四日から五日にかけての夜、すでに眠っていた囚人のもとに判決がもたらされた。アルバ公が判決文を預けたのはイーペル司教マルティン・リトフだった。二人の囚人に死に臨んでの心の準備をさせるた

めに特別にブリュッセルに呼び寄せたのである。この命令を受け取ると、司教はアルバ公の足下に身を投げ出し、目に涙を浮かべて囚人たちへの慈悲を、少なくとも執行猶予を乞うた。だがアルバ公は荒々しい怒気を含んだ声で答えた。わざわざイーペルから呼び寄せたのは、判決に反対させるためではなく、神の言葉によって不幸な伯爵たちの気持ちを慰めるためだと。

## 処刑 (1568)

司教が最初に判決を伝えたのはエフモント伯だった。

「これほど、過酷な判決とは！」愕然とした伯は真つ青になつて声を上げた。「このような報いを受けるほど国王陛下の御心を損じていたとは考えもしなかった。だがそれが現実なら、観念して運命に身をゆだねるほかあるまい。死によつて我が罪があがなわれんことを！そして我が妻子が苦しむことのなからんことを！これまでの奉公からして、これくらいは期待させてもらつてもいいだろう。死については、それが神と我が国王とのご意志であるならば観念して受け入れるまでだ」

こう言うときエフモント伯は司教に対し率直に、恩赦の余地はないものかと真顔で尋ねた。それが否と知ると、懺悔をし、司教から秘蹟を受け、司教のあとに続いて熱心にミサを唱えた。最後の時に神の御心になうにはどの祈禱が最も適当で、御心を動かすものかと尋ねた。それには主キリスト自身が教えた主の祈りほどふさわしいものはないと言われ、エフモント伯はすぐさま唱えようとした。だが家族への思いが妨げになり、ペンとインクを求め、二通の手紙を書いた。一通は妻に、もう一通は国王に宛てたものである。国王に宛てた手紙は次のような内容だった。

「陛下、

今朝、陛下がお下しになつた判決を聞きました。私としましては、陛下の御身やご奉公に反することも、古来の真なるカトリック教に反することも一度として試みたことはありません。ですが、神が私にお与え



になった運命には抗うことなく身をゆだねる所存でございます。もしこれまでの騒乱の際の私の黙認、発言、行為で私の務めにもとるように見えるものがあつたとしても、それは間違いなくよかれと思つてのこと、あるいは情勢によつて余儀なくされたことであります。どうぞ私をお許しくださいませ。そして私のこれまでのご奉公に免じて、どうぞ私の不幸な妻、哀れな子供たち、家中の者たちを哀れみくださいますよう、陛下に伏してお願ひ申し上げます。陛下のご厚意を固く信じつつ、神の無限の慈悲に我が身をゆだねます。

ブリュッセル、一五六八年六月五日、最期の時を前にして。

陛下の最も忠実な臣下にしてしもべ、

エフモント伯ラモラール」

この手紙をエフモント伯は司教の手に託し、確実に届けるよう念を押した。万全を期すため、自筆の写しを国務評議会議員ヴィグリウス——評議會のうちでも最も高潔な人物——に送つた。どうやら実際に国王に届けられたのはこちらのほうだったことは間違いないさそうである。エフモント伯の家族は後日、判決により国庫に没収されていたすべての財産、封土、権利を回復された。

この間、ブリュッセルの大広場では市庁舎の前に処刑台が建てられていた。その上には頂部に鉄の尖端をもつ二本の棒が固定され、全体は黒い布で覆われていた。スペイン人守備兵二十二個中隊が処刑台を取り囲んでいた。これほどまでの用心深さも決してやりすぎではなかった。

十時から十一時の間、スペイン人衛兵がエフモント伯の部屋に現われた。衛兵は慣例に従つて手を縛る縄を用意していたが、エフモント伯は心の準備はできており、おとなしく死に臨むと断言して縛るのは免除してもらつた。伯は執行人の仕事をやりとやすくするためダブレットの襟を切り取るのも自分でやつた。赤ダマスクのローブを着、その上に金でへり飾りをした黒いスペイン風の外套をはおっていた。伯はこのいでたちで断頭台に現われた。付き添っていたのは軍団長ドン・フリアン・ロメロ、サリナスという名の

スペイン人隊長、そしてイーペル司教だった。処刑台のわきには宮廷の執事長が赤い杖を持って馬上に控えており、死刑執行人はその下に隠れていた。

エフモント伯は最初断頭台の上から人々に話しかけようとしたが、司教に諭されて思いとどまった。聞こえないだろうし、もし聞こえたとしたら、民衆の現在の危険な心理状態を考えると暴動を誘発しかねない。そんなことになれば友人を破滅に陥れるだけだというのだ。しばしの間、エフモント伯は処刑台の上を気高い威厳をもって行たり来たりし、国王と祖国のためにもつと名誉ある死に方が許されなかったことを嘆いていた。最後の最後まで、エフモント伯は国王が本気だとは信じられず、この過酷な刑も処刑の恐怖を味わわせるためだけのものだと思い込んでいた。

最後の時が近づき、終油の秘蹟を受ける段になると、何かを探し求めるようにあたりを見回した。それでも何も変わりそうもないのを見て取ると、フリアン・ロメロに向かい、今一度、恩赦の希望はないものかと尋ねた。フリアン・ロメロは肩をすくめ、うつむいたまま何も言わなかった。

エフモント伯は齒をきつと食いしばり、外套とローブを脱ぎ去るとクツシヨンの上にひざまづいて最後の祈りの準備をした。司教が十字架を捧げて口づけさせ、終油の秘蹟を授けた。それが済むとエフモント伯は去るように合図をした。絹の帽で目隠しをし、最後の一撃を待った。――遺体と流れ出る血の上にすぐさま黒い布がかぶせられた。

処刑台のまわりにひしめきあっていたブリュッセルじゅうの人々は、運命の一撃をまるで自分に振り下ろされたかのように感じた。恐怖の静寂のなか、すすり泣きの音だけが際立っていた。市庁舎の窓から処刑を見守っていたアルバ公自身、犠牲者が死ぬと目をぬぐった。

☆

まもなくしてホールネ伯が処刑台の上に現われた。友よりも激しやうい性格の上に国王を憎む動機も強かったこともあって、判決を伝えられたときのホールネ伯はエフモント伯ほど平静ではいらなかった。

もつとも、ホールネ伯の場合、エフモント伯ほど不当ではなかったというべきであろうが。ホールネ伯は国王に対する痛烈な非難の言葉をぶちまけ、司教は苦勞してようやく、敵を呪うよりもつと有効に最後の時を過ごすべきだとわからせることができた。いくぶん落ち着いてくると、ホールネ伯は当初拒否するつもりだった懺悔もした。

ホールネ伯も友と同じ者に付き添われて断頭台上上った。歩きながら多くの知人に挨拶した。エフモント同様、縛られてはおらず、黒いダブレットに外套姿で、頭には同じ色のミラノ製の帽子をかぶっていた。断頭台上上って布で覆われた死体を見たホールネ伯は、近くにいた者にそれが友の遺体かと聞いた。それを確認すると、スペイン語で二こと三こと言い、外套を脱ぎ捨て、クッションの上にひざまづいた。運命の一撃が振り下ろされると、群衆の間から悲鳴が上がった。

二人の首は断刑台の上に設置されていた棒の頂に固定されてさらされた。午後三時過ぎになつて降ろされると、遺体とともに鉛の棺に納められて埋葬された。

処刑台のまわりは多くの監視や刑吏が固めていたにもかかわらず、ブリュッセル市民がハンカチを取り出して流れる血に浸そうとするのを止めることはできなかった。人々はそれを貴重な聖遺物でもあるかのように持ち帰るのだった。

## 訳者によるインターミッション

実は一七八八年十月にシラーが上梓した『オランダ独立史』は第一部、第二部、第三部からなる第一編だけであった。計画では六編構成となるはずだったが、シラーのその壮大な構想はついに未完のままに終わった。この第一編は一五六八年のオランダ独立戦争勃発の直前で終わっているため、オランダが独立を達成する経緯に関心のある読者にとっては物足りなさを禁じ得ないが、シラー自身がまえがきで述べているように、導入部を丁寧扱った叙述はその後の展開について学ぶ際にも大いに助けになる。シラーのこの未完の『オランダ独立史』を読んでおくだけでも他の著者による叙述を読む上での予備知識として有用であることは訳者自身経験したこともある。

シラーは第一編だけでこの大著を放棄してしまったわけではなく、ほかに「エフモント伯、ホールネ伯の裁判と処刑」および「アントワープの攻囲」を発表している。この前者は上に訳出した。「アントワープの攻囲」は一五八四年から一五八五年にかけてのパルマ公子アレックスサンドロ・ファルネーゼによる名高いアントワープ攻略を扱ったものであるが、その叙述にはいる前に、それまでの間の十六年間の経緯を駆け足でたどっておくことにする。

### オラニエ公対アルバ公（オラニエ公の最初の攻勢（1568-71））

執政マルガレーテに代わってネーデルラントを治めることになったアルバ公は、一五六七年の着任早々から強権路線を明白にした。九月にはエフモント伯、ホールネ伯が逮捕された。時を同じくしてマドリッドでは、ネーデルラントから使節として派遣されたモンティニーが逮捕され、ブリュッセルの騒乱評議会での死刑判決に基づき獄中で処刑された（一五七〇）。その同僚ベルヘン侯が同じ運命をたどらずにすんだのは、少し前に自然死していたからにすぎなかった。

一五六八年一月、アルバ公は最初の公開処刑を行ない、オラニエ公ウィレムにも召喚状を出した。オラニエ公が出頭を拒むとその領地・財産は没収された。一方、ウィレムがルーヴアン大学に残っていた長男フリプス・ウィレムは大学の自由にもおかまいなしに逮捕され、スペイン本国に護送された。

こうしたアルバ公の強硬路線からすると、ネーデルラントを去り、ドイツの郷里ディレンブルクに戻ったオラニエ公の判断は正しかったと言える。オラニエ公は、アルバ公の圧政からネーデルラントの自由を守るには、勢いに乗じた暴発ではなく、外国で組織された軍勢を率いての侵攻しかないと考えており、ネーデルラントからの亡命者やドイツ人傭兵からなる軍を集めつつあった。ただし、給金がもらえなければ従うのをやめ、盗賊と化し、悪くすれば寝返りさえするのが傭兵である。オラニエ公はドイツ諸侯やストラスブールの商人に支援を訴えた。

この一五六八年四月、オラニエ公は自らのネーデルラント侵攻を正当化する宣言書を作成してネーデルラントに流布させた。国王フェリペ二世に対してはあくまでも忠誠を表明した上で、国王のために横暴なアルバ公に抵抗する必要があるという趣旨のものであった。

プロバガンダと並行して、ネーデルラントへの最初の侵攻作戦が開始された。オランダ独立戦争の勃発である。ただし、これから述べるいきさつからもわかるように、この戦争は長らくの間、オランダ（北部ネーデルラント）のためだけの戦争でも、独立のための戦争でもなかったことは留意しておく必要がある。

この侵攻作戦の基本は、まず三方面から軍勢をネーデルラントに侵入させ、機を見てオラニエ公自身が決定的な一撃を加えるというものだった。

前哨戦の主力を託されたオラニエ公の弟ルートヴィヒはエムス川を渡って最北部のフリースラントに侵攻した（四月二十四日）。その四日前、別の一隊がマーストリヒトでマース川を越え、ネーデルラントに東から攻め入っていたが、これはまもなく敗退した。第三はユグノー部隊で、これは北フランスからアルトワに侵攻する予定だったが、フランス王につぶされ実現しなかった。結局、ルートヴィヒの軍だけが

海乞食を名乗る海賊集団の支援を得てネーデルラントの北端に足がかりを築くべく奮闘する。

これに対してブリュッセルのアルバ公は、アーレンベルク伯、メーヘン伯を差し向けた。両名はルートヴィヒを挟撃するつもりだったが、ルートヴィヒはその裏をかき、五月二十三日、アーレンベルク伯を待ち受けてヘイリヘルレーの戦いで討ち取ることに成功した。

緒戦をまずは勝利で飾ることができた反乱軍だったが、アルバ公は囚われの身にあつたエフモント伯、ホルネ伯の死刑判決を取りつけ、急遽ヘントからブリュッセルに連れ戻して処刑した（六月五日）。また、ルートヴィヒの補給が困難になったところにアルバ公がじきじきに出陣し、エムス河畔のイエミンゲンの戦い（七月二十一日）で完膚無きまでに打ち破った。

オラニエ公ウイレムは弟ルートヴィヒを支援すべく、デュースブルクに集結した軍勢を率いて九月のはじめにリエージュに侵入、そこからマース川に沿って北上した。しかし、アルバ公はウイレムの弱点を知っていた。すぐ決戦に応じようとはせず、傭兵を主体とするウイレムの軍勢の疲弊を待ったのである。そして十月十九日の夜、オラニエ公の軍勢はヨールヘ川渡河中をアルバ公に襲われて大損害をこうむった。ウイレムはフランスに逃れて再起を図ろうとしたが、フランス政府から退去を命じられ、翌年初頭、やつとのことでストラスブールに帰り着いた。

こうして、オラニエ公の第一回のネーデルラント侵攻はさんざんな失敗に終わった。

これまでオラニエ公はネーデルラントの自由のためには戦つても、特にプロテスタント主義を掲げるつもりはなかったのだが、やはりカルヴァン派の助力を得ることが重要であることを実感していた。そこで一五六九年夏、ルートヴィヒとともにフランスで三度目の戦乱を起こしていたユグノーの軍勢に身を投じた。その和平に際しては南フランスのオラニエ（フランス語ではオランジュ）公領が返還され、公領の総督となったルートヴィヒはフランス政界にも足がかりを得ることができた。また、ユグノー勢力下のフランスの港ラロシエルが海乞食を迎え入れ、オラニエ公と海乞食の正式な協力関係が発足した。

こうしてオラニエ公は次の反撃の機会をうかがっていた。

折しもネーデルラントではアルバ公が導入した（一五六九年三月）十分の一税の実施をめぐって反対が募っていた。一五七一年七月にアルバ公が政令によって本格施行を強行しようとしたのが諸州の反発を再燃させていたのである。民兵も政府への協力を拒む態度を明確にした。最も忠実な王党派ベルレモン伯でさえ、十分の一税がネーデルラント住民の忠誠心を損なっているとの報告をマドリッドに送り、元枢密評議会議長ヴィグリウスも、アルバ公は国王の意志を無視して意固地になっているだけではないかと勘ぐったほどだった。

オラニエ公の機会は遠からずやってくるものと思われた。

## オラニエ公の第二の攻勢（1572-73）

一五七二年三月、スペインはイングランドに圧力をかけ、海乞食に対して港を閉鎖させた。しかし、このスペインの外交圧力は、皮肉にもネーデルラントで蓄積していた不満の爆発のきっかけをつくることになった。

入港できずに春の嵐に見舞われた海乞食の二十五隻の艦隊が、四月一日、スペイン守備隊が留守にしていた（フランスとの国境守備に引き抜かれていた）ブリールに入港、まんまとこの地の確保に成功したのである。この報せを聞くとラロシエルに残っていた海乞食の艦隊も出撃し、スヘルデ川の出口を固める要衝フリシンゲンを奪取した（四月六日）。これをきっかけにホラント、ゼーラント、フリースラント州でオラニエ公を支持し、反乱陣営に門戸を開く都市が続出した。

当初慎重な姿勢を崩さなかったオラニエ公も事態の進展を見て決意を固め、七月八日にデュースブルクからライン川を渡り、ヘルダーラントに侵入した。

七月十九日にはスペイン勢力下にあるハーグで招集されたホラント州議会に対抗してドルドレヒトで

独自の州議会が開催された。国王の権威を否定する大胆な行為である。この州議会は、スペイン側の任命した総督も無視して、オラニエ公がまだフェリペ二世のもとでのホラント、ゼーラント、ユトレヒトの総督であるとする主張を承認したのだった。

この反乱側の州議会にはまもなくしてロッテルダム、ハーグが加わり、デルフトが力づくで転向させられるに及んで、ホラント州の有力都市で国王派に留まっているのはアムステルダム、ユトレヒトくらいのもものとなった。同様にゼーラント州でも反乱軍の包囲に耐え続けているのはミデルブルフのみとなった。しかし、その矢先の八月二十四日にフランスでサンバルテルミーの虐殺が起こった。フランス政府によるユグノー弾圧である。このため、あてにしていたユグノーの戦力は壊滅状態になった。フランスからの脅威がなくなったことでアルバ公は兵力を自由に使えるようになり、ネーデルラント南部では、北部に呼応してモンスを占領して立てこもっていたルートヴィヒがスペイン軍の前に開城を余儀なくされた。一度は反乱側についたメヘレン、ルーヴァン、アウデナールデもアルバ公に屈服させられた。

南部を平定したアルバ公は北部に目を転じ、ズトフェンでの虐殺（十一月）によりヘルダーラント、オーヴァーアイセル、フリースラントの反乱熱をくじくことに成功した。さらにホラント州にまで侵入し、ナールデンで徹底した虐殺を行なった（十二月）。スペイン軍はさらに一五七三年七月にはハールレムを攻略し、ここでも徹底した処罰を行なった。

反乱軍にとって運が上向きはじめたのは十月なかばのことだった。アルバ公の息子フェデリコ指揮するスペイン軍がアルクマールに迫ったのを激戦の末に撃退し、海上でも海乞食がザイデル海でスペイン海軍に対して大勝を上げることができたのである。

一向に反乱が終息しようとしないうことで、フェリペ二世もアルバ公の強硬路線には見切りをつけていた。この十一月、後任として穏健派のレケセンスがネーデルラントに着任した。

帰国したアルバ公は宮廷スキャンダルで一時国王の勘気をこうむるが、一五八〇年にポルトガル王家が



断絶したときにはその武名が買われて再び表舞台に登場する。軍勢を率いてポルトガル入りし、ポルトガル王女を母とするフェリペ二世の王位継承を確保したアルバ公は、その二年後に世を去ることになる。

### オラニエ公対レケセンス（1574-76）

ネーデルラントの騒乱を終わらせるには諸州の権利を尊重するしかないとの認識がスペイン本国でも広がっていた。穏健派の執政レケセンスを起用したフェリペ二世は、一五七四年三月にはレケセンスにアルバ公が導入した騒乱評議会と十分の一税を廃止する権限を与えた。しかし、スペイン兵がネーデルラントに残る限り、ネーデルラント諸州は和平に応じようとはしなかった。

反乱軍はそれに先立つ二月、ミデルブルフをついに陥落させてゼーラント州の制覇を完成させていた。ホラント州中央部のレイデンの包囲にかかったスペイン軍もまもなく姿を消した。

しかし、喜んだのもつかの間、オラニエ公を思わぬ悲報が襲った。マース川を渡ってホラント方面に向かっていた弟ルートヴィヒ、ハインリヒが四月十四日、ネイメーヘン近くのマース河畔のモークの戦いで大敗し、兄弟ともに戦死したのである。レイデンからスペイン軍が姿を消したのはこのためだったのだ。勝利を上げたスペイン軍は、五月にはレイデン包囲に戻った。

レイデン攻略において、スペイン軍は前年のアルクマールのようにがむしやらに攻め立てることはせず、厳重に包囲して兵糧を断つ作戦に出た。レイデンが陥落すればハーグ、デルフトも危なくなる。この包囲戦は反乱の帰趨を決するともいえる重要なものだった。

レイデン解放のためには一帯を水没させる洪水戦術しかなかった。オラニエ公ウィレムはロッテルダムで開かれたホラント州議会でその必要を力説したが、可決されたのは七月の末になってのことだった。しかし、水位はなかなか上がらず、救援船団がロッテルダムを出発できたのは九月十日のことだった。しかも、スペイン軍が取り囲むレイデンに近づくのは容易なことではなかった。ウィレムは伝書鳩に託して必

ず救援するとのメッセージを伝えてレイデンの人々を勇気づけた。

十月にはいつてようやく満潮と北西の風に連日の雨が重なって一気に水位が上がった。これで反乱軍が勢いを得るとスペイン軍は去った。極限まで追いつめられたレイデン市民はウィレムの言葉を信じて包囲に耐え抜いたのだった。ウィレムは人々の奮闘をたたえ、この地にレイデン大学を設立することにした。

これといった守備隊もなく民兵頼みだったにもかかわらず、飢餓と病の極限状況を耐え抜いたレイデン防衛の成功は、反乱がすでにホラント、ゼーラント両州では確固とした基盤を築き、組織的な抵抗ができる勢力となっていたことを示していた。スペインの脅威からの保護を求める各地の新教徒が流れ込み、ホラント、ゼーラントではカルヴァン派が政治・軍事的な主導権を握ってカトリック抑圧や司祭追放、教会破壊、教会財産没収を組織的に行なうようになっていく。人口では一割に満たなかったが、積極的に政治に関わる数では、カトリックも含め、カルヴァン派をしのご勢力はなかったのである。

一五七五年三月、執政レケセンスはオラニエ公の所領ブレダで反乱勢力と交渉の席についた。オラニエ公と州議会によって代表される反乱勢力は相変わらず国王への忠誠を主張したが、宗教や統治権をめぐつては互いに歩み寄ることはできなかった。

九月になるとレケセンスはゼーラント各地への攻勢に出た。

しかし、この九月、フェリペ二世は治世三度目の財政破綻に直面していた。ブリュッセルには年に一五〇万ダカットも送金している現状では新大陸からの銀の流入も追いつかず、債務の支払い停止に追い込まれたのである。

スペイン軍は一五七六年七月にはゼーラント州の要地ジークゼーを陥落させる。だが、その前の三月にレケセンスは急死しており、レケセンスの信用でかろうじてやりくりしていたネーデルラントの国王派の資金調達も破綻したのだった。

## オラニエ公対ドン ファン・ヘントの和平と恒久令（1576-77）

慢性的な給金遅配に対するスペイン兵の不満は執政不在を機に謀反となって爆発した。ブラバント、フランドルが無政府状態に陥るなか、一五七六年九月四日、首都ブリュッセルで政変が起こった。ブラバント州議会とブリュッセル市民の力を背景とする守備隊長が執政権を預かっていた国務評議会の議員たちを排除したのである。

このころには、北部の反乱勢力も新たな政治的な動きを見せるようになっていた。ネーデルラントの各州はそれぞれに異なる法、異なる特権、異なる州議会を持っていたが、そうした各州の間での連携を強化しようという動きが現われていたのである。

一五七六年四月、まずデルフトでの連合協定によってホラント、ゼーラントの二州が連合するとともに、オラニエ公に大権を与えた（カトリックの禁止も公式に宣言された）。この秋にミデルブルフで開かれた両州の議会は南部諸州にも連合を呼びかけた。

一方、南部諸州はブラバント州議会の主導で国王の召集によらない全国議会開催に踏み切った。まず集まったブラバント、フランドル、エノーの三州は南部諸州のみならず、反乱中のホラント、ゼーラント以外の北部各州にも召書を送った。この全国議会と今や形ばかりとなった国務評議会は、ホラント、ゼーラント両州との交渉を決め、ヘントで反乱終息に向けて南北交渉が行なわれることになった。

カルヴァン派市民が主導する北部と保守的なカトリック貴族階級を中心とする南部との間の交渉は難航したが、十一月になって反乱に加わってもいないアントワープがスペイン兵に襲われるという事件（スペイン兵の狂暴）が起こると、南部もオラニエ公の力が必要であることを痛感した。

こうして一五七六年十一月八日、ヘントの和平が結ばれた。南部も北部も、カトリックもカルヴァン派も含めてネーデルラント諸州は一体性を取り戻し、フェリペ二世の権威は確認しつつも、スペイン兵の退去を要求していくことになった。懸案の宗教問題についてはスペイン軍退去後に全州による全国議会を開

いて討議することとし、それまでは現状維持ということでホラント、ゼーラント両州でのカルヴァン派の自由が認められた（こののちホラント、ゼーラント両州もブリュッセルの全国議会に代表を派遣するようになったが、宗教問題を協議する全国議会は結局開かれなかった）。

これにより、ホラント州などで国王派に留まっていた地域もオラニエ公と足並みを揃えることになった。アムステルダム、ユトレヒト、ハールレムといった都市はいまだ国王任命のホラント、ゼーラント、ユトレヒトの総督であるジル・ド・ベルレモンが押さえていたが、ベルレモンはブリュッセルの全国議会を支持してオラニエ公と和解したのである。ベルレモンはユトレヒト州についてはオラニエ公に代わって総督位を確認され、翌年二月にはフレーデンブルフ城のスペイン兵を降伏させた（ただし、その後オラニエ派と対立したためユトレヒト州議会は結局十月にオラニエ公の総督位を認めることになる）。

レケセンスの後任となる新執政ドン・ファンが唯一残った反動の牙城ルクセンブルクに従者に身をやつして到着したのは、ヘントの和平が締結される直前、十一月三日のことだった。

# ☆

ドン・ファンは一五七一年のレパントの海戦でトルコに勝利した英雄であるが、カール五世の庶子であり、フェリペ二世にとっては異母弟である。反乱を鎮めるには国王が少なくとも王族の存在が必要との声の高まりを受けての人選だった。

フェリペ二世から宗教問題と国王への恭順以外はすべての点において譲歩することを認められていたドン・ファンは、諸州を懐柔し、一五七七年二月十二日、平和恒久令を成立させることに成功した（ホラント、ゼーラント以外の諸州が署名）。これは宗教問題こそ棚上げにしたが、諸州の悲願であったスペイン兵退去は認められ、スペイン兵はネーデルラントを去ってイタリアに向かった（四月）。

しかし、ヘントの和平を進めようとするオラニエ公と恒久令に基づき秩序を再建しようとするドン・ファンの間でもたれたヘールトライデンベルフでの交渉には進展はなかった。

反スペインの動きが収まらないのにしびれを切らしたドン・ファンは、七月、ブリュッセルを捨ててナミュールの要塞を占拠して国王に退去した兵を送り返すよう求めた。ドン・ファンは結局反乱は力で押さえるしかないという立場に戻ったのである。これを機にアントワープなど各地で支配層に代わって市民層が実権を握り、スペイン兵を放逐する動きが起こった。

首都ブリュッセルもオラニエ公を招聘するまでになり、それに応えてウイレムは九月にブリュッセル入りした。ウイレムがカール五世、執政マルガレーテの宮廷で過ごした思い出の地ブリュッセルに戻るのは、一五六七年にアルバ公の到来を前に亡命して以来十年ぶりのことだった。全国議会はオラニエ公をブラバント総督に選出し、南北両軍の指揮権を与えた。

一見オラニエ公のもとに南北の反乱勢力が統一されたように見えるが、これ以後も宗教や財政・軍事に関してホラント、ゼーラント両州はブラバント州を中心とする南部からは独立した路線を歩み続ける。その一方、南部では北部と違ってカトリックの力が根強く、また貴族も旧来の体制に忠実で、そうした勢力からの支持を得た全国議会は急進的な北部との対立を深めていく。オラニエ公はその溝を埋めることできないまま、カトリックの護持を約束してブラバント州に留まって南部の態勢づくりを続けることになる。この年十月、ヘントで政変が起こりカルヴァン派が実権を握るが、こうした急進的な動きは南北の溝を埋めるどころかむしろ南部を反乱から離反させることになるのだった。

オラニエ公の権勢を快く思わないアールスホット公やエフモント伯の子フィリプスといった保守派の画策により、全国議会は同じ十月、フェリペ二世に名のもとにネーデルラントを統治する執政として（ドン・ファンを否認して）神聖ローマ皇帝ルドルフの弟マティアスを選出した。しかし、弱冠十九歳のマティアスはオラニエ公に対抗する存在とはならなかった。

## オラニエ公対パルマ公子・ユトレヒト同盟とアラス同盟（1578-80）

北イタリアから南ドイツに出てフランシュコンテ、ロレーヌ、ルクセンブルクと連なるハブスブルク家の属領や友邦からなるスペイン街道を通って、パルマ公子率いる六〇〇〇のスペイン兵がネーデルラントに向かつて進みつつあった。パルマ公子はかつてネーデルラント執政職にあったパルマ公妃マルガレーテの息子である。パルマ公子は知略、武勇ともに真にすぐれた指導者に成長していた。パルマ公子は一五七七年十二月にルクセンブルクに到着した。

一五七八年一月三十一日、ドン・ファンはパルマ公子の協力を得てナミユール州のジャンブルーで議会の陣営を急襲してこれを破った。翌月にはルーヴァンが陥落した。首都ブリュッセルまでも進撃しかなかった国王軍の勢いに、ブリュッセルの全国議会と政府はアントワープに逃れた。

しかし、ドン・ファンは南のワロン語地方を固めるのを優先し、一気に反乱勢力の中心部を突こうとはしなかった。

スペイン軍は夏にはリンブルフを北上し、ヘルダーラント南のルールモント地区にまで侵入した。北部ネーデルラントがスペイン軍の北部への侵攻を懸念する一方、ますます權威の低下するアントワープの全国議会は南部での政情に目が向きがちで、もはや南北が利害を共有し得ないことは明らかだった。

南北の溝を決定的にしていたのは宗教問題である。もともと南部の保守派の間にはオラニエ公の権勢への反発、少なくともその宗教寛容政策への反感があった。ブリュッセル、ヘントといった都市におけるカルヴァン派の支配も全国議会に対する不信感を抱かせていた。さらに、この年初頭以来、各地でカルヴァン派政権の誕生とカトリック教会への襲撃が続いていた。オラニエ公は八月に宗教平和を布告したが、新旧両教徒の対立は激化するばかりだった。南部諸州については国王側（執政ドン・ファンは十月に没してパルマ公子が引き継ぐ）との妥協の道をさぐるようになる。

パルマ公子は一五七九年一月六日、南部のワロン語地方のアルトワ、ワロン・フランドル（フランドル

のうち南部のワロン語圏のリール、オルシー、ドゥエー）、エノーにアラス同盟を結ばせ、五月にはナミュール、ルクセンブルク、リンブルフも加えてスペイン支配下に復させることに成功した。南北の共同歩調を定めたヘントの和平は早くも崩壊したことになるが、カトリックの南部諸州にとって、ヘントの和平は最初から、無政府状態を收拾し、国王から一定の譲歩を引き出すための妥協でしかなかったのだった。アラス同盟に対抗するように一月二十三日、北部諸州はユトレヒト同盟を締結した。ヘルダーラント州を自らの安全保障のかなめと考えるホラント、ゼーラント両州がスペインの攻勢にさらされるヘルダーラント支援のために前年から求めていたものだった。ヘルダーラントにとって、スペイン軍の脅威を前に頼りにできるのは、歴史的にネーデルラントの中心であり続けてきたブラバントにある全国議会ではなく、ホラント州なのだった。

のちのオランダの母体となるユトレヒト同盟に当初加盟したのはホラント、ゼーラント、ユトレヒト、オメランデン（フロニンゲン市とともにのちにフロニンゲン州を構成）である。これにまもなくヘルダーラント、フリースラントが加わり、翌年になってフロニンゲン市（二月）、ドレンテ準州、オーヴァーエーセル（四月）が加わることになる。

こうした州のほか、ヘントを皮切りに、イーペル、アントワープ、ブルッヘ、ブレダ、スヘルトーヘンボス、ブルッヘといった南部の都市も加わった。ユトレヒト同盟はまだ北部だけの同盟ではなかったのである。この時点ではオラニエ公はブラバントを中心に穏健な形でネーデルラント全土を再統一することを目指していた。このため北部が先走った感のあるユトレヒト同盟は当初は歓迎していなかったのだが、アラス同盟がスペイン側につくことがはつきりすると、五月にはユトレヒト同盟に署名した。その後の南部都市のユトレヒト同盟への加盟には、同盟を汎ネーデルラントのものにしようとするオラニエ公の力も与っていたのだった。

ユトレヒト同盟とアラス同盟が成立して間もない一五七九年四月、神聖ローマ皇帝ルドルフの斡旋でケ

ルンで和平会議が開かれたが、十一月には物別れに終わった。

その後、南部の都市は次々とスペインの軍門に下り、結果的には汎ネーデルラントの連合を目指したユトレヒト同盟は南部から切り離されたオランダの母体となるのである。

☆

その間もパルマ公子の進撃は続いていた。一五七九年三月のアントワープ攻撃は退けられたものの、六月にはマーストリヒトを攻略した。マーストリヒト陥落後、一時オラニエ公の人氣は地に墜ちた。議会までもが非協力的になったが、七月末、オラニエ公は信任投票に賭け、議会の信任を勝ち取ることに成功した。

一五八〇年三月にはフリースラントやフロニンゲンの総督を務めるカトリックのレンネンベルフ伯が寝返って国王側につき、パルマ公子はただちにこの地方に増援を送った。ユトレヒト同盟は北部すら固まらないうちに早くもその一角が崩されたことになる。

しかし、こうした逆境は反カトリック運動を再燃させ、北部はホラント州を中心として南部から離れた独自の結束を固めていくことになるのだった。

### アンジュー公との同盟 (1580-81)

オラニエ公ウイレムが目指していたのは、国内でカルヴァン派の先走りを防ぐことと並んで外国との同盟だった。強大なスペインに対抗していくためには外国の軍事支援が不可欠というのがオラニエ公の持論だった。

一五七八年にはイングランドのエリザベス女王もようやく親ネーデルラント派のウォルシinghamを使者として送ってきたが、エリザベス女王の援助の態度ははっきりしなかった。

オラニエ公が目をつけていたのはフランス王の弟アンジュー公フランソワだった。だが、サンバルテル



ミーの虐殺の記憶は生々しく、カトリックでフランス人のアンジュー公の評判は悪かった。しかし、オラニエ公は宗教については割り切っており、ましてやエリザベス女王との結婚話も上がっているアンジュー公は同盟相手としてはかりしれない価値があると考えた。アンジュー公をネーデルラントの守護者として迎えるとの構想は、オラニエ公に反発してパルマ公子陣営に走っていた貴族たちを呼び戻す効果もあった。こうして一五八〇年九月、アンジュー公を条件付きでネーデルラントの君主とする同盟条約（プレシ・レ・トゥール条約）が成立した。これを受けてアンジュー公は一五八一年一月にアントワープで宣誓式を行ない、全国議会の任命によりフェリペ二世のもとでの執政ということになっていたマティアスは三月にネーデルラントを去った。

### オラニエ公の弁明書と統治権否認令（1580-81）

この一五八〇年六月、国王フェリペ二世はオラニエ公を断罪し、懸賞金二万五〇〇〇エキュをかけて暗殺も公認した。パルマ公子はこうしたやり方は好まなかったが、これはグランヴェルの差し金によるものだった。

これに応じてオラニエ公は、十二月、デルフトで開かれた全国議会に反論を提出した。この「オラニエ公の弁明書」においてオラニエ公はフェリペ二世が君主としての資格を失ったことを初めて述べた。これまでは実態はどうあれ、オラニエ公はフェリペ二世の忠実な家臣という建て前で通してきており、フェリペ二世によって任命された総督としてふるまってきた。文書なども国王の意に反して暴政を敷く大臣たちに対する反抗という立場で書かれていた。そうしたまやかしを取り払われることになったのである。

そしてアントワープの全国議会の発議により、諸州はさらなる一步を踏み出した。一五八一年七月二十六日、ハーグで統治権否認令を発したのである。これには北部諸州のみならず、南部のメヘレン、フランドル、ブラバントも加わっていたことが注目される。

これは、全国議會の名において、国王フェリペ二世が暴政によりネーデルラント統治の資格を失ったことを宣言したもので、ネーデルラントのフェリペ二世からの独立宣言と言える大きな一歩だった。ただし、ここでも注意すべきは、この段階ではまだ君主制の廃止を主張したわけではないということである。フェリペ二世自身は悪政により資格を失ったが、まだ共和国として独立するという発想はなく、適切な君主の保護下にはいることが当然のように考えられていた。

議會は祖国の防衛を託すつもりになっていた当のアンジュー公はイングランドでエリザベス女王に求愛中だった。エリザベス女王は結婚にあたつての難題を次から次へと持ち出し、一五八二年二月、確答を与えないままアンジュー公をネーデルラントに送り出した。アンジュー公は堂々とアントワープ入りしてブラバント公の称号を受けるが、結局のところ、アンジュー公の支援は兵力の面でも資金の面でも期待にはほど遠いものに終わることになる。

## 改暦（1582）

一五八二年、ローマ教皇グレゴリウス十三世（一五七八年七月にネーデルラントのカトリック教徒に対して、破門をちらつかせて反乱への協力を禁じる布告を出していた）は暦と季節の食い違いを正すためそれまでのユリウス暦からグレゴリオ暦に移行し、十月四日木曜日の翌日を十月五日でなく十月十五日金曜日とした。イタリア、スペイン、ポルトガルがただちに新暦を採用し、フランス、ロレーヌもすぐそれに続いた。ドイツのカトリック地域なども新暦を採用していくが、ドイツのプロテスタント地域やイングランドなどは旧暦を使い続けることになる。

ネーデルラントではカトリックのブラバントや南部諸州はすぐ新暦に移行したが、北部諸州のプロテスタントは新暦の採用を渋っていた。それでも、カトリックのフランスの王子アンジュー公との同盟を進めるオラニエ公の指導力あって、ホラント、ゼーラント両州はすみやかに新暦に移行した。フロニンゲンは

いったんは新暦を採用したのだが、スペイン側につき、それを新教徒側が奪還するという歴史の中で旧暦に戻ってしまう（一五九四）。ヘルダーラント、ユトレヒト、オーヴァーアイセル、フロニンゲン、フリースラント、ドレンテが新暦を採用するのは一七〇〇～一七〇一年にかけてのことになる。

オランダの主要州であるホラント、ゼーラントではスペインやフランスと同じ新暦が導入されたとはいえ、イングランドがからむ局面などでは以後、新暦・旧暦の間に十日の違いがあることに留意する必要がある。

### オラニエ公の最期（1582-84）

一五八二年三月、オラニエ公が刺客に撃たれるという事件が起こり、オラニエ公は一時は命が危ぶまれるほどの状態になった。フェリペ二世の断罪はオラニエ公の身边にこうした暗殺者を出没させるようになっていたのである。

オラニエ公は数か月後に回復したが、戦況は反乱軍にとってかんばしくなかった。反乱軍がアールストを奪取する一方、アウデナールデは七月にパルマ公子の前に陥落した。

☆

しかし、オラニエ公にとつての問題は敵のパルマ公子ばかりではなかった。一五八三年一月、味方のはずのアンジュー公がさまざまな制約に嫌気が差し、アントワープに軍を入れようとして拒まれ、市に乱入したのである（フランス兵の狂暴）。しかし、市民たちは大砲まで持ち出して反撃し、フランス軍は多くの死者を出して撤退することになった。

人々の反対を押してアンジュー公との同盟を進めてきたオラニエ公にとつても、このたびの狼藉は弁護のしようがなかった。オラニエ公の最も忠実な腹心であり続けてきたシント・アルデホンデまでアンジュー公との同盟更新に反対した。悪いことにこの七月、アンジュー公が部下に託していたダンケルクがパル

マ公子に降伏した。

政治的に窮地に追い込まれたオラニエ公は後事をシント・アルデホンデに託してひそかにアントワープを發ち、北部で態勢を固めるべくミデルブルフに向かった。

八月に北部のミデルブルフに移った全国議會はアンジュー公との同盟更新を渋っていたが、パルマ公子がアンジュー公に接近したことを知ると、ようやくアンジュー公を敵に回さないためには味方にしておくことが不可欠と悟るようになった。こうしてアンジュー公との同盟は更新された（一五八四年三月）。

なお、北部に移った全国議會はドルドレヒト、デルフトと開催地を転じ、一五八五年以後はハーグに固定される。また、北部に移ってからは討議も記録ももっぱらオランダ語が使われるようになる。

フランスに帰国していたアンジュー公はこの六月、病で急死した。オラニエ公にとって、外国との同盟を一から練り直さなければならぬことは打撃だったが、評判の悪いアンジュー公の死は同時に重荷を取り除いたことにもなった。

しかし、オラニエ公がこの新たな枠組みのうちで新たな方策を打ち出すことはできなかった。一五八四年七月十日の昼下がり、デルフトの館でオラニエ公は暗殺者バルタザル・ジェラール（フランシュコンテ出身）の凶弾に倒れたのである。

国王軍に対する求心力であったオラニエ公が舞台から去った一方、名将パルマ公子は順調に南部の制覇を進めていた。四月にはイーペル、五月にはブルッヘが陥落していた。そして今、パルマ公子はアントワープ、ブリュッセルといったネーデルラントの中心都市の攻略に向けて、着々と準備を進めていたのだった。

それではシラーの叙述に戻ることとしよう。

## パルマ公子によるアントワープの包囲（一五八四年～一五八五年）

### 行動開始

人間の創意工夫の才が強大な障害と戦い、常人には乗り越えられない困難を英知と決意と強靱な意志とによって克服していく過程は実に興味深いものである。だが、それほど魅力的ではないにしてもより多くのことを教えてくれるのは、そうした資質を欠いたために天才のあらゆる努力が無に帰し、あらゆる偶然の好機が無駄にされ、チャンスを生かすことができないばかりにすでに確実と思われた成功をふいに失ってしまう過程である。この両方の例が見られるのが世に名高いスペイン軍によるアントワープ包囲戦である。この結果、あれほど栄えた商業都市はその繁栄を永遠に奪われることになった。その一方、この難業に着手し、成し遂げた將軍は不滅の名声を勝ち得ることになった。

ベルギー北部の諸州に端を発した戦争はすでに十二年の長きにわたって続いていた。当初は単に宗教上の自由や諸身分の特権をスペイン人副王から護るための戦いだったが、「一五八一年に統治権否認令を発してから」スペインの王冠からの諸州の独立達成を志向するようになっていた。完全な勝利は上げないながら、うち負かされもせず、反乱軍は武勇で知られたスペイン軍を不利な地勢での長引く軍事行動により疲弊させた。自らは乞食党と呼ばれ、ある意味それは現実でもあったが、それが東西インドの支配者の富をも枯渇させた。全ネーデルラントがカトリック、プロテスタントを問わず団結したヘントの和平は続きさえすれば無敵とも思われたが、やはり解消された。しかし、この不確かで不自然な合同に代わって北部諸州が一五七九年に結成したより緊密なユトレヒト同盟は、政治上、宗教上の共通の利害に立脚しており、より長続きするものと思われた。こうしてカトリック諸州から分離したことは、この新たな共和国にとって、版図こそ縮小されたものの、緊密な連合、目的の共通性、遂行のエネルギーといった面でそれを補ってあまりあるものがあつた。努力によってはおそらく保持し得なかったものを時宜を得て手放したことは、

幸運だったと言うべきだろう。

ワロン語圏諸州の大部分は、一五八四年には自発的に、あるいは武力によってスペイン支配のもとに帰っていた。北部地方だけが抵抗を続けていた。ブラバントとフランドルのかなりの部分はいまだバルマ公子アレックスサンドロの軍勢に対して頑固に踏みとどまっていた。この時点で、バルマ公子は執政としてネーデルラント諸州の民政ならびに軍の最高指揮権を預かって武力と知略の限りを尽くしており、一連の勝利によってスペイン軍の勇名を復活させていた。

縦横に走る川や運河によって都市間、また都市と海との連絡が容易であるという特異な地勢のため、都市の攻略は困難だった。ある地点を保持しようと思えば、他の拠点も占領しなければならなかった。この連絡路が閉ざされない限り、ホラント、ゼーラント両州は同盟都市を支援するのに何の困難もなく、陸路、水路の両方を通じてあらゆる必需品を豊富に供給し続けることができた。このため武勇も用をなさず、スペイン国王の軍勢はただらとした包囲戦に消耗するばかりだった。

ブラバントの諸都市のなかで、その富、人口、軍勢力、そしてスヘルデ川の河口というその立地において最も重要なのがアントワープだった。この時期八万を超える人口を擁したこの大都市は、ネーデルラント諸州の同盟においても最も積極的な構成員だった。そしてこのたびの戦争を通じ、その不屈の自由の精神によってベルギーの都市のうちでも抜きん出た存在になっていた。その内部にはキリスト教の三大宗派をみな含んでおり、その繁栄はこの制約されない宗教上の自由に多くを負っていた。この寛容を廃止し、宗教裁判の恐怖によってプロテスタント商人をことごとくその市場から追いやってしまおうとしているスペイン支配を恐れる理由はそれだけ大きかった。その上、スペイン人守備隊の狼藉はいやというほど味わっていた。この耐えがたいくびきを今一度課されようものなら、戦争の続く間、二度と振り払うことはできないであろうと思われた。

だが、アントワープ市にとってスペイン軍を城壁内に入れてはならない動機が強力なものであったとし

ても、スペイン軍の将軍がいかなる代償を払つてでもこの地を攻略しなければならぬ理由にもそれに劣らぬ重みがあった。ブラバント州全体の保持が多分にこの町の確保にかかつていたのである。ゼーラント州からの穀物の補給は主としてこのルートを通じて行なわれている。この地を奪取すれば、勝者はスヘルデ川を押さえることができたのだった。その上、この市で会合を行なっているブラバント州議会からその主たる柱を奪い、同時にその先例、助言、資金による党派全体への危険な影響を断ち切ることができる。その一方では住民の富は国王軍にとつて豊かな資金源となる。アントワープが陥落すれば、遅かれ早かれ全ブラバントがそれに続くだろう。この地域での覇権を確立すれば、趨勢は決定的に国王側に有利に傾くことは間違いない。こうした強い動機に決意を固めたパルマ公子は、一五八四年七月、軍勢を集めると、アントワープ攻略を期してトゥルネーの陣地を出て進撃を開始したのであった。

しかし、アントワープはその地理的な位置から町防備からも攻撃を寄せつけないように思われた。ブラバント側は越えがたい工作物や水で満たされた堀で、フランドル側はスヘルデ川の広く、速い流れに守られており、突撃をかけて一気に攻略することはまず不可能だった。封鎖しようにもこの規模の都市となるとパルマ公子の三倍以上の陸兵に加えて艦隊が必要だったが、パルマ公子には艦隊は全くなかった。スヘルデ川は、ヘントからのあらゆる補給物資をあふれるほどにもたらすばかりでなく、隣のゼーラント州との行き来の助けにもなった。北海の潮汐はスヘルデ川のかなり上流まで及び、その流れの向きを定期的に変えるので、アントワープはその前の同じ水路が時間によつて二つの反対方向に流れるという独特な利点があったのである。その上、近隣のブリュッセル、メヘレン、ヘント、デンデルモンデなどといった都市はこの時点ではみな同盟の手にあり、陸側からもアントワープを支援することができた。

したがって、アントワープを陸側から封鎖し、フランドル、ブラバント各地との連絡を断つには、二つの軍勢を川の両岸に配置する必要がある。同様にスヘルデ川を封鎖し、ゼーラントから繰り出されるに違いない救援の試みを阻むためには艦隊も必要だった。しかし、他方面の戦線も維持しなければならず、

また各地の都市や防衛拠点に多くの守備兵を残さなければならなかったため、パルマ公子の軍勢は歩兵一万、騎兵一七〇〇にまで減っており、このような大規模な作戦には全くもって不十分だった。さらに、これらの兵はごく基本的な補給も滞っており、長く未払いの給金のため表に出ない不満が蓄積しており、いつ反乱騒ぎが起これないとも限らなかった。こうした困難にもかかわらず包囲を試みるとすれば、背後に残している敵の拠点からの攻撃も警戒しなければならなかった。そうした拠点からは、敢然と打って出て各地に分散している軍を悩ませたり、補給を断って困窮させたりするのはたやすいことだった。

パルマ公子が作戦計画を提出した軍議の場ではこうした議論がみな持ち出された。いくら自軍に、そして指揮官のすでに立証済みの力量に自信を抱いているようにとも、経験豊富な將軍ですら成功を絶望視していることを隠すことはできなかった。豪胆でどんな慎重論も相手にしないカピズキとモンドラゴーネの二人のみを例外として、一同はみなこのように厄介で無謀な企てを否定した。これまでの勝利のいっさいを無にし、すでに我がものとした栄光を傷つける危険があるというのである。

だがそうした反対論はパルマ公子がすでに想定して退けていたものであり、パルマ公子の決意を覆すことはできなかった。パルマ公子がこの大胆な決意をしたのは、付随する危険を認識していなかったからでも、安易に自軍を過大評価していたからでもなかった。卑小な者が完遂はおろか足を踏み入れることすらない道を歩もうとする偉大な人物を安全に導き通す天才的な本能により、冷静だが狭量な知性を持ち出す疑念を超越することができた。將軍たちを納得させることができなかったパルマ公子は、自分の読みの正しさを、漠然とはしていても決して不確かではない直感によって認識した。一連の成功がパルマ公子の自信を高めており、規律、経験、武勇の面でヨーロッパで並ぶ者なく、えり抜かれた優秀な士官によって率いられているスペイン軍を目の当たりにすると、一抹の不安も起こりようがないのだった。兵力の不足を指摘する者には、槍がいかにも長くとも殺傷力があるのは尖端だけである、軍事行動においては動かされる大軍よりもそれを動かす力が重要なのだと答えた。兵の間の不満についても認識していたが、その服従も



知っていた。それに、不満の声を消すにはどうするのがいちばんかについても考えがあった。重要な作戦に従事させ、その輝かしい目標によって兵の栄達を求める気持ちを刺激し、その食欲に対してはこれほど豊かな町の占領がもたらす豊富な戦利品を期待させるのだ。

包囲戦の進め方についての作戦立案において、パルマ公子はこうした困難のすべてに対処すべく努めた。アントワープを征服するには、飢餓が唯一の方策だった。この武器を有効に利用するためにはその水陸の連絡路をすべて遮断する必要がある。そのための第一歩は、ゼーラントからの補給の到着を止める、あるいは少なくとも妨害することだった。したがって、アントワープの住人が船舶を守るためにスヘルデ川の兩岸につくった砦をすべて攻略するのみならず、可能な限り川の全域にわたってにらみをきかせられるよう新たな砲台も建設する必要があった。そして水上輸送を妨害する努力と平行して陸側からの補給もさせないためには、ブラバント、フランドルの近隣諸都市も包囲計画に含め、そうしたすべての地点の攻略の上にアントワープ攻略を考えねばならなかった。大胆な――公のとぼしい軍勢を考えれば無謀とも言える計画だったが、立案者の才覚を考えれば正当化されてよいものであり、運にも恵まれてめざましい成果を上げることになる。

だがこれだけの規模の計画を遂行するには時間が必要だ。パルマ公子は当面のところ、アントワープとデンデルモンデ、ヘント、メヘレン、ブリュッセルなどといった地点とを結ぶ運河や川に沿っておびただしい数の砦を建設し、補給を妨害することでよしとした。同時に、スペイン兵はこうした都市の近く、その市門の眼前とも言えるところに宿営して、郊外を荒らし回った。その襲撃のため周辺地域は警戒をゆるめるいとまもなかった。ヘント周辺だけで三〇〇〇の兵が宿営し、他の都市にもその規模に応じた軍勢が張りついていた。このような戦略のほか、これらの市内のカトリック住民とひそかに通じることで、パルマ公子は自らの力を削ぐことなく、諸都市を徐々に疲弊させ、また休まない小規模な戦闘による妨害戦術を用いることで正式な包囲戦をするまでもなく降伏に追い込むことを期待していた。



## スヘルデ河口兩岸の砦（1584）

この間、スペイン軍主力はアントワープに向けられており、今やこれを完全に包囲していた。アントワープから西へ数マイル行ったフランドルのベーヴェレンに本陣を置き、強固な陣営に居を構えた。スヘルデ川のフランドル側の岸〔左岸〕は騎兵将校のレイスブルフ辺境伯に、ブラバント側の岸〔右岸〕はペーター・エルンスト・フォン・マンスフェルト伯に託され、マンスフェルトにはもう一人スペイン人将官モンドラゴーネが加わった。マンスフェルトとモンドラゴーネは、舟橋を使ってスヘルデ川を渡ることに成功し、妨害のために送られたアントワープの海将もなすべがなかった。両名はアントワープを迂回して背後に回り、ベルヘン地区のスタブルックに陣取った。分遣隊がブラバントじゅうに送り出された。堤防を占拠することと、郊外への通行を遮断することが目的である。

アントワープから数マイル下流でスヘルデ川の兩岸は強力な砦によって固められていた。フランドル側の砦はドウール島上のリフケンスフックにあり、ブラバント側はそのちょうど対岸のリロにあった。この後者は、アルバ公がまだアントワープを押さえていた時期にモンドラゴーネ自身が建設したものであり、そのためパルマ公子はその攻撃をその本人に託した。これら二つの砦を押さえることができるかどうか、に包囲戦の成否いかんがかかっていると云えた。なんといつてもゼーラントからアントワープへやってくる船は必ずその大砲のもとをくぐらなければならないのである。

両砦ともアントワープの住人によって少し前に増強されたが、リフケンスフック砦のほうはレイスブルフ辺境伯が攻撃に出たとき、まだ作業は完了していなかった。その素早さは敵の虚を突き、防備のいとまを与えず突撃をかけるとこの砦はスペイン軍の手に落ちた。同盟側がこの打撃を受けたのは、デルフトでオラニエ公が暗殺者の手にかかったまさにその運命の日のことだった。ドウール島に建設された他の砲台は、あるものは守備兵が放棄し、あるものは急襲により奪取され、こうしていくらしないうちにスヘルデ川のフランドル側からは反乱軍は一掃された。

しかし、ブラバント岸のリロの砦のほうは、アントワープの住人もその防備を強化する時間があり、強力な守備隊を置いていたため、その抵抗はより頑強だった。オデ・ド・テリニーの指揮のもと、砦の大砲の支援も受けて、籠城軍はたびたび打って出、スペイン軍の攻撃施設をことごとく破壊した。水門を開いて洪水を起こすことで、三週間の包囲の末、スペイン軍はついに二〇〇〇近い死者を出してこの地を追いやられることになった。

防備を固めたスタブルックの宿営地に退がったスペイン軍は、ベルヘンの低地帯を縦走し、東スヘルデ川に対する防波堤となつてゐる堤を占拠することで満足するしかなかった。

☆

リロ砦の奪取に失敗したことでパルマ公子は作戦変更を余儀なくされた。包囲全体の成否がかかったスヘルデ川封鎖が当初の計画通りにいかなかったため、パルマ公子は川幅いっぱい橋を渡すことで目的を達成しようと決意した。

これは実に大胆な考えで、向こう見ずだと思つる者も多かった。この部分では一二〇〇歩（八四〇メートル——独和辞典によると一歩は〇・七〇・九メートルとされるが、以後仮に〇・七メートルとした換算を付記する）を越える川幅からしても、隣接する海の潮流によつて増幅されるその力強い流れからしても、そのような試みは実現不可能だと思われた。その上、材木、船舶、作業員の不足にも悩まされるし、アントワープとゼーラントの艦隊にはさまれるという危険な位置も考えなければならなかった。地理的な困難の上に両艦隊が加われば、このような難事業を妨害するのは造作もないはずだ。

だが、パルマ公子は己の力を知つてゐた。その決意は完全な不可能でさえなければひるむことはなかった。川幅と水深を測量させ、配下で最も有能な技師バロッツ、プラートとも相談した上で、橋はフランドル側のカローとブラバント側のオルダムの上に建設されることになった。この地点が選ばれたのは、川幅が最小となることと、流れが少し右に曲がり、通過する船舶が向きを変えるために船足を落とさなければ

ならないからだ。橋を守るため、その両端には強力な砦がつくられた。フランドル側は聖マリア砦、ブラバント側は国王に敬意を表して聖フェリペ砦と名付けられた。

### デンデルモンデ（1584）

この計画遂行のためにスペイン軍陣営で精力的に準備が進められた。反乱軍の注意がそちらに向けられている間、パルマ公子はデンデルモンデに対する奇襲攻撃に出た。ヘントとアントワープの間、デンデル川とスヘルデル川の合流点にある強力な拠点都市である。この要地が反乱軍の手にある限りヘントとアントワープの町は相互に支援ができ、両者が容易に連絡を取ることができれば包囲軍のどんな試みもくじくことができる。その一方、デンデルモンデさえ奪取すれば、パルマ公子はアントワープ、ヘント両市に対して思うがままに行動できるようになる。デンデルモンデはパルマ公子の作戦の命運を握っているとも言えるのである。

パルマ公子の突然の攻撃に、籠城側は水門を開いて一帯を水没させる時間もなかった。ブリュッセル門の前の主稜堡に対してただちに猛烈な砲撃が加えられた。反撃する籠城側の砲火はスペイン軍を大混乱に追いやったが、スペイン兵はひるむどころか燃え立った。守備隊が包囲軍の眼前で聖像をばらばらにし、無礼きわまりない扱いをして胸壁から投げ捨てるという冒流行為に及ぶとすっかりいきり立った。兵たちは、砲撃によつて十分な突破口ができる前から口々に稜堡への突撃を求め、パルマ公子もこの最初の熱意を無にしないため許可を出した。二時間にわたる凄烈な戦いの末、包囲軍は胸壁に上った。スペイン兵の最初の猛攻の犠牲とならなかった者は市内に逃げ込んだ。

占拠された砦からも砲撃が加えられるようになり、デンデルモンデの町は今まで以上に敵の砲火にさらされた。だが町を取り巻く頑丈な城壁と広い堀を見れば、長期の抵抗も可能かと思われた。

だがパルマ公子の臨機応変の才はこの障害をも乗り越えた。日夜砲撃が続けられるのと並行して、兵が

絶え間なく行なっていた工事は、堀に水を供給しているデンデル川の流れを変えるものだった。最後の守りである堀の水位がどんどん下がっていくのを見た籠城軍は絶望にとらわれた。

一五八四年八月、籠城軍は慌てて降伏し、スペイン軍守備隊を受け入れた。こうしてパルマ公子は識者が七週間かかると言った作戦を七日のうちに成し遂げたのだった。

## ヘント (1584)

デンデルモンデ陥落によって今やアントワープや海との連絡を断たれたヘントに対し、近くに野営する国王軍は日に日に包囲網を狭めていった。手近な援軍のあてもなく、住民たちは救援に絶望した上、飢えとそれに続くあらゆる災厄とが恐ろしい足音を立てて近づいてくるのを感じた。そこでペーヴェレンのスペイン軍陣営に代表団を送り、少し前にパルマ公子が申し出たのと同じ条件で国王に降伏することを申し入れた。だが代表団が聞かされたのは、交渉の時はすでに去った、君主の怒りをなだめるには今や無条件降伏しかないということだった。それどころか、カール五世の治世にやはり反乱を起こした祖先が受けたのと同じ屈辱——半裸で、首に縄を巻いた状態で赦しを乞う——を味わせるとでも言わんばかりだった。代表団はすっかり絶望してヘントに戻った。しかし、三日後、新たな代表がスペイン軍陣営に送られたときには、ヘントで囚われの身だったパルマ公子の友人のとりなしでどうにか穏健な条件での和平にこぎつけることができた。

町は二十万グルデンの罰金を支払い、追放されたカトリック教徒を呼び戻し、プロテスタント住民を追放するものとされた。ただし、追放される者には諸事を片づけるため二年間の猶予が与えられる。すべての住民には、処罰対象として留保された（だがのちに赦免された）六名を除いて大赦が与えられ、二〇〇〇に及ぶ守備隊は名誉をもって退去することが認められた。

この協定はこの年の九月にペーヴェレンの司令部で結ばれ、ただちに三〇〇〇のスペイン兵が町の新た

な守備隊として入城した。

パルマ公子は、武力によるといふよりはその名の恐怖、そして飢餓の恐れによってヘントを屈服させることに成功した。三万七〇〇〇の家屋を数え、九十八の石橋で結ばれた二十の島にまたがっているヘントはネーデルラントで最大、最強であり、その市街の広がりではパリの都にもひけをとらないほどだった。数世紀にわたってこの都市が支配者から勝ち取ってきた輝かしい特権のため、ヘントの住民には独立精神が培われていた。だがそれが反抗と無礼に墮すことも少なくなく、いきおいオーストリア・スペイン政府とは衝突しがちだった。この町において宗教改革が急速に、しかも広汎な成功を得たのはこの大胆な自由の精神のおかげと言える。そして世俗の自由と宗教の自由という二つの動機が結び合わさることによって、ネーデルラントでの戦争の間、不幸にもこの町を有名にした暴力の場面を招いたのだった。科された罰金のほかに、パルマ公子は城壁内に大砲、砲架、船舶、あらゆる種類の建築用材や数知れない作業員、船乗りを見出し、これがアントワープ攻略作戦において物質的に助けとなった。

### アントワープの孤立 (1584)

ヘントが国王軍に降伏する前に、ヴィルヴォールデ、ヘーレンタルスがスペイン軍の手に落ちていた。さらうイレブルック村付近の防塞が占拠されたことで、アントワープはブリュッセル、メヘレンからの連絡が断たれたことになった。

短時日のうちに次々と拠点を失ったことでブラバント、フランドルからの救援の望みを奪われたアントワープにとって、支援が期待できるのはゼーラントからのみとなった。パルマ公子はこれをも封じるべく、精力的に準備にとりかかった。

☆

敵が攻囲に向けて動き出したのを見たときも、越えようのない川の存在に安心しきったアントワープの

市民は悠然と見やるばかりだった。この自信はオラニエ公の見解によって裏づけられていたとも言える。オラニエ公は敵の意図を知るや、スペイン軍はアントワープの城壁の前に破滅するであろうと言っていたのである。

ただし、打つべき手は打っておくため、オラニエ公は暗殺される少し前、親友でもあるアントワープ市長のシント・アルデホンデ領主フィリプス・ヴァン・マルニクスをデルフトに呼び出し、アントワープ防衛について協議した。二人が達した結論は、ただちにサンヴリートとリロの間のブラウハレンデイクと呼ばれる大堤防を崩し、必要とあらばすぐ東スヘルデ川の水をベルヘンの低地帯に氾濫させ、スヘルデ川が封鎖されてもゼーラントの船団が水没した地方を通じてこれをするということだった。

アントワープに戻ったシント・アルデホンデは実際、市当局と市民の大部分を説き伏せ、この提案に賛同させたのだが、食肉組合の反対にあった。水没させられる予定の平原は広大な牧草地であり、毎年一万二〇〇〇の牛が放牧されるのであり、その計画が実行されれば自分たちの破滅だというのだ。食肉業者の反対は効を奏し、この健全な作戦の実行は阻止された。だがその結果、堤防どころか牧草地までもが敵の手に落ちることになる。

市長シント・アルデホンデ（ブラバント州議会議員でもあり大きな影響力をもっていた）の提案により、スペイン軍がやってくる少し前にスヘルデ川兩岸の防備は修復されており、アントワープのまわりには多くの堡壘を築いていた。堤防はサフティングで崩され、西スヘルデ川の水がワース地方一帯をほとんど埋め尽くした。隣のベルヘン侯領ではホーエンローエ伯が兵を募り、モーガン大佐指揮下のスコットランド人連隊がすでに共和国に雇われていた。イングランド、フランスからも新たな資金援助が期待されていた。そして何よりも、ホラント、ゼーラントの州議会にはすみやかな支援が要請された。

しかし、敵は川の兩岸に強力な地歩を築き、その砲火によって航行が脅かされていた。ブラバントの拠点が一つまた一つと敵の手に落ち、敵の騎兵によって陸側からのいっさいの連絡が遮断されるに至ると、



アントワープの住民たちも先行きについて深刻な懸念を抱くようになった。

その時点でアントワープは八万五〇〇〇の人口を抱えており、試算によればその維持には年に七万五千トンの穀物が必要だった。包囲開始の時点においてはそのような蓄えをするのに必要な補給も資金も不足していなかった。というのも、敵の砲火にもかかわらず、ゼーラントの食料輸送船は上げ潮を利用してアントワープまでやってきていたからである。必要なのは、富裕市民がこうした補給物資を買い占めて品薄になってから値を釣り上げたりするのを防ぐことだけだった。

その目的のため、この地に逗留していたマントヴァ出身のジャンベツリという、この先重要な貢献をすることになる人物がある提案をした。財産に応じて一〇〇ペニーごとに一ペニーを拠出させ、信頼できる人物からなる委員会を発足させ、その委員会が拠出金で補給物資を購入して毎週配給するというのである。当面、富裕層がこの金を用立て、その代わりに購入した補給物資をいわば担保として自分たちの倉庫に保管し、収益にも与えるようにするというものだった。しかし、この計画は町の窮地を利用してもうけるつもりでいた富裕層には不評だった。富裕市民たちは、各個人に自分で二年分の食料を蓄えさせればいいと主張した。富裕層はこれでいいかもしれないが、貧しい住民にとってはひどい話だった。二年どころか二か月分の備えもおぼつかない者だっていたのである。富裕層の主張が通り、貧しい者は町を去るか、富める者の施しにすがるかなくなつた。しかし、その後、人々は非常時には財産権が尊重されないかもしれないと思ひ直し、買い急がないようにしたのだった。

市当局は、個人にのみしかかる害悪を防ぐとして、全体を危機に陥れる害悪を選んだ。ゼーラントの事業者たちは大船団に食糧を積み込み、敵の砲火を通り抜けることにも成功し、アントワープで荷下ろしをした。大きな儲けを見込んであえてこの危険な賭けに出たのだったが、商人たちのもくろみは裏切られた。アントワープ市当局はその到着直前にあらゆる食糧の価格を大幅に引き下げる布告を発していたのだった。同時に、個人が積み荷を買い占めて倉庫にしまい込み、あとになって高額で売りさばくことを防

ぐため、すべての船荷は船から直接自由に売却されるよう命じた。苦勞してやってきたのにこの予防措置によつて儲けのあてもなくなつた事業者たちは、そそくさと帆を掲げ、アントワープを去つていった。市民が数か月は食べつないでいけた積み荷の大半とともに。

### スヘルデ川の防柵 (1584)

最も切実で生存の根幹にかかわる救援物資をふいにするようなことをしたのは、住民がスヘルデ川の完全封鎖は絶対に不可能と考え、それゆえに極限にまで追いつめられる心配などしていなかったからとしか理解できない。

パルマ公子がスヘルデ川に橋を架けようとしているとの報がもたらされたときも、途方もないこととあざ笑うのが一般の反応だった。人は共和国を川になぞらえ、どちらもスペインのくびきを受けはしなないと胸を張つた。川幅が七〇〇メートルもあり、深さは川の水だけで十八メートル、満潮時にはさらに三メートルは上昇する。

人は言い合つた。そのような川がしみつたれた丸太細工ごときでどうにかなるものだろうか。川底に届いてなお水面上に出ているほどの柱をどこから持つてくるというのだ。この手の構造物がどうやって冬を乗り越えられるというのだろうか。石壁でさえも支えきれない浮氷や氷塊が群をなして弱々しい木造建築にうち寄せ、ガラスのように碎いてしまふに決まつてゐる。舟を使つて浮橋を造るつもりかもしれないが、ならばどこでその舟を調達し、どうやって陣地内に持ち込むつもりだろうか。どうしたつてアントワープの目前を通らなければならないはず。ならば艦隊を用意しておけば、捕らえるなり沈めるなりできるといふものだ。

だが、市内でこの計画の無謀さが論じられている間にも、パルマ公子はそれを成し遂げてしまった。聖マリア砦、聖フェリペ砦が建設され、その砲火によつて作業員や工作物を援護できるようになると、兩岸

から川の中央に向けて棧橋が造られた。そのためには最大級の船のマストが用いられた。木材を巧みに配することで、結果が示したように、氷塊の衝撃にも耐えられる強度を獲得した。こうした木材は川底にしっかりと固定され、水面上かなりの高さにも突き出し、板を載せて十分広い道をなした。人が八人横に並んで通れるくらいの幅で、両端の欄干によつて敵艦の銃火から守られた。この、いうところの「防柵」が兩岸から、川の深さと流れの強さが許す限りのところまで伸びていた。

これにより川幅は三〇〇メートル縮まった。しかし、川の中央の実際に船が通行する部分はそのような工事は不可能で、これでも二つの防柵の間には六〇〇歩〔四二〇メートル〕以上の間隔があり、輸送船団がそっくり悠々と通過できる広さだった。

### パルマ運河 (1584)

この間隙をパルマ公子は舟橋でふさごうとしたのだが、そのためにはダンケルクから舟を取り寄せる必要がある。だが、かの地でも十分な数がないという点を別としても、アントワープの眼前を通つてそれを運んでくるには多大な損害が予想された。そういう次第で、パルマ公子としても当面は流れを半分に狭め、反乱軍の船舶の通行をそれだけ困難にしたことでよしとしなければならなかった。川の中央で防柵が途切れるところでは、四角い広めのスペースがあり、重砲が備え付けられ、さながら水上砲台のような役割を果たした。そこからは狭い通路を通過しようとする船舶という船舶に猛烈な砲撃が加えられた。それでも、船団をなして、あるいは単艦でこの危険な狭隘部を通過しようとする試みはなされ、しばしば成功していたのだった。

前述したヘントの陥落はそんなころのことだった。この思いがけない成功により、パルマ公子の手詰まりは打開された。舟橋を完成するのに必要な資材はヘントで何もかも手に入った。唯一の問題はそれを安全に運んでくることだったが、それは皮肉にも反乱軍自身によつて解決された。反乱軍がサフティンゲン

で堤防を破ったことにより、ワース地方の大半は、遠くは「アントワープの少し上流の」ブルフトの村までも水没し、容易に平底船で渡れるようになっていたのである。

そこでパルマ公子は輸送船団にヘントを出てデンデルモンデ、ルーペルモンデを通過してブルフトまではスヘルデ川を下り、そこからスヘルデ川左岸の堤防を越えてアントワープを右に見ながら水没地帯を進むことを命じた。航行を援護するため、ブルフト村に砦が築かれ、反乱軍を牽制することになった。輸送船団迎撃に出撃してきた反乱軍の小艦隊との間で激しい戦闘はあったものの、ことはパルマ公子の思惑どおりに進んでいった。途上、もういくつか堤防を突破し、輸送船団はカローのスペイン軍陣地に至り、無事再びスヘルデ川に出ることができた。

スペイン軍の歓喜は、輸送船団がすんでのところで危機を免れたのだと知るとひとしおだった。船団が反乱軍艦隊をまいた直後、アントワープからはリロ防衛の英雄オデ・ド・テリニー率いる強力な増援艦隊が出撃したのである。テリニーは、時すでに遅く、敵を取り逃したことを見て取ると、輸送船団が通ったあとの堤防を占拠し、その場に砦を造って、ヘントから後続部隊が来ても阻止できるようにした。

☆

この措置のためパルマ公子は再び困難に直面した。いまだ船舶の数は橋の建設のためにも、その防衛のためにも十分でないのに、先の輸送船団が使った経路はテリニーの建設した砦によつて封鎖されてしまっているのである。船団のための新たな経路を求めて視察をしていたパルマ公子は一つの考えに思い至った。苦境を打開するのみならず、計画全体を加速することができるアイデアである。

ワース地方のステークネ村（水没地帯から五キロ程度以内にある）から遠くないところにムールという小さな川が流れており、これがヘント近くでスヘルデ川に注いでいた。この川から水没が始まる地点まで運河を掘らせたのである。水没地帯の水深は船団の通過のために十分でない箇所もあったので、運河はペーヴェレンとヴェレブルックの間を通じてカローまで延長された。この事業では、五〇〇の作業員が休み

なく従事し、兵たちの労苦を鼓舞すべく、パルマ公子は自ら作業に加わった。同じような工事によってライン川とザイデル海を結び、マース川とライン川を結んだ名高いローマの先達ドルーヌス、コルプロの例に倣ったのだった。

この運河のことを兵は立案者に敬意を称してパルマ運河と呼んだ。全長一万四〇〇〇歩（九・八キロ）、深さと幅は相当量の荷を積んだ船の航行にも十分だった。これによりヘントからの輸送船団は、スペイン軍陣地まで安全なばかりでなくずっと短い経路で行けることになった。なんといつてもスヘルデ川の数多くの曲折に沿って進む必要がなく、ヘントのすぐ近くでムール川にはいり、そこからは運河にはいつてステークネ近くを通り、水没地帯を渡ってカローに至ることができたのである。

フランドル全土の産物はヘントの町に集められるので、この運河によってスペイン軍陣地は州全体と連絡を確保できることになった。各地から豊富な物資が流れ込み、アントワープ包囲の間じゅう、スペイン軍が何であれ不足に悩まされることはなかった。だが、この事業によってパルマ公子が得た最大の利は、スヘルデ川にかける橋を完成させるのに十分な数の平底船の調達だった。

こうした準備を進めている間に冬になった。スヘルデ川は浮氷で覆われ、架橋工事に相当な遅れをきたすことになった。パルマ公子がこれまで心配していたのも冬の到来だった。これまでの成果が大打撃を受けるのではないか、反乱軍に攻撃をしかける好機を与えないかと。しかし、技師たちの技量が前者の危機を乗り越え、反乱軍の不思議なまでの不活動が後者の危機から救った。確かに、満潮時には巨大な氷塊が橋脚に当たってひどくゆるがすことはあった。しかし、防柵はこの自然の猛威に耐え、その頑丈さを立証するだけの結果となった。

## アントワープの築城（1584-85）

その間、アントワープでは不毛な議論に終始して貴重な時を無駄にしており、党派間の抗争のうちに全

体の福利がないがしろにされていた。市政府ではあまたの指導者が乱立し、そのうちでも荒々しい群衆の影響力が強すぎて冷静な討議、断固とした行動ができる状況ではなかった。市参事会でさえ市長は一票を有するのみだったが、それに加えて市には数多くの同業者組合があり、市内外の防衛、糧食補給、防備、艦隊、通商などを牛耳っていた。重要なことを決めるにはそのうちの誰彼かに相談しなければならなかった。こうした発言者の大群が市参事会にまでずかずかとはいり込み、騒ぎ立て、支持者の数で威圧することによって議論では通らないようなことを押し通す。こうして公の討議に民衆が危険な影響力をもつまでになり、その雑多な利害関係から当然生じる争いのため、健全な施策を実施しようとするたびに遅れをきたすのだった。

これほど無策で方向性も定まらない政府に、荒くれ者の船乗りや兵士たちが敬意を抱くはずもなかった。公式命令の実施も十分でなく、一度ならず決定的な瞬間が陸海軍の、あからさまな謀反とまでは言わないまでも怠慢によつて失われた。

それでも、せめて目的に関してのコンセンサスがあれば、敵を阻む手段の選択をめぐる紛糾もそれほど害にはならなかっただろう。だがまさにこの点において富裕層と貧困層との間に分断があったのである。失うもののある富裕層は追いつめられるまで断固抵抗を続けることを恐れ、パルマ公子との交渉に強く傾いていた。リフケンスフック砦が敵の手に落ち、スヘルデ川の航行に対する懸念が深刻となつてからはそうした意向を隠そうともしなかった。一部の者は実際に危険から完全に身を引くことにし、町を見捨てて逃げ出した。繁栄なら喜んで共にするが、逆境を担う一員となるのはごめんだつたのである。残つた者のうち六七十名は市参事会に国王との和解を求めるよう請願書を提出した。

しかし、民衆がこのことを知るとその怒りが爆発した。その騒動は、請願者を投獄し、罰金を科す程度ではなだめがたく、和平提案に公にしる私的にしる賛同する者に死刑を科すという布告を発することですうやく完全な平穏が回復された。

☆

パルマ公子は市のこの混乱に乗ずることを忘れなかった。アントワープ市内の内通者を通じて市内で起こっていることは逐一報告させていたのである。これはブラバント、フランドルの他の都市にしても同じだった。すでに町を大いに不安に陥れることに成功していたが、実際に征服を成し遂げるにはまだいくつもの段階を踏まねばならなかった。一時のちよつとした失敗で何か月も費やした事業が無に帰すことだつてあるのである。そのため、軍事面での準備は怠ることなく、今一度、平和的手段による占領を本気で試みた。

パルマ公子は十一月、アントワープの大評議會に手紙を遣わし、その中で巧みに市民たちに和解する気を起こさせる、あるいは少なくとも意見の相違をおおるようなことを余さず述べた。この手紙ではアントワープの人々のことを単に惑わされただけとして扱い、これまでの反乱や反抗的なふるまいについてはいつさいをオラニエ公の策謀によるものとし、天の公正な采配により遅まきながらも人々はそれから解放されたのだとした。

その文面は言う。今こそ長らくの夢から目を覚まし、君主への忠誠に立ち返ることができる。国王陛下は臣下との和解の用意があり、それを切に望んでおられる。この目的のために、パルマ公子は喜んで仲介の労をとることを申し出、自分が生まれ、最も幸せだった青春の日々を過ごした国を愛する気持ちを忘れたことはないとした。その上でパルマ公子は、和平の条件を調整するための全権を派遣することを求め、すみやかに恭順の意を示せば穩健な条件が得られるとの希望をちらつかせた。同時に、最後まで抵抗を続ければこの上なく過酷な処置をすると脅すのだった。

この手紙は十年前、似たような状況でアルバ公が記した手紙とはすっかりトーンを異にしているのが見て取れるのは喜ばしいことである。

このパルマ公子の手紙に、市民たちは敬意を込めて、同時に威厳をもって答えた。

バルマ公子の人品は十分承知しており、好意的な申し出についてもありがたく思うとしつつ、市民たちは冷酷な時代を嘆く。今の時代にあつては、バルマ公子といえども自分の性向に合つたやり方を通すことはできないというのだ。もしもバルマ公子が自分の行動について完全に決定権を有しているのであれば、喜んでその手に身をゆだねただろう。しかし、現実には公は別の人物の意思に従わなければならず、そのやり方は実直な公には是認しがたいものである。スペイン国王の断固とした決意も、教皇に対してなした誓いもよく知れわたっており、その方面にいささかでも温情を期待することができないのは明らかだ。同時に、今は亡きオラニエ公については、恩人であり守護者として気高くも熱を込めて擁護した。その一方、このたびの不幸な戦争をもたらし、諸州をスペインの王冠から離反せしめた真の事情を並べ立てた。同時に、より穩健な主君としてフランス王に期待をかけていることも隠さなかった。それだけでもスペイン国王との交渉にはいることはできず、そんなことをすれば移り気で恩知らずとのこの上ないそしりをまぬがれないとした。

実際、相次ぐ逆境に意気消沈した連合諸州は、ついにフランス王を主権者としてその保護下にはいり、独立を犠牲にすることで破滅を避け、古来の特権を守る決定をしていたのだ。それを目当てに少し前にパリに使節が派遣されていた。アントワープの人々の勇気を支えていたのは、フランス王の強力な支援に対する期待によるところが大きかった。フランス国王アンリ三世はこの申し出を受諾したいのはやまやまだだったが、スペインの奸計によつて国内で起こされていた騒乱のため心ならずもあきらめなければならなかった。

連合諸州は次にはイングランドのエリザベス女王の援助を求めた。エリザベス女王はいくらかの補給を送ってくれることになるが、アントワープ救援には間に合わなかった。

この地の人々がこうした交渉の結果を待ち、外国列強からの援助を期待している間、不幸なことに、最も根本的な、直接の防衛策を怠っていた。ひと冬がすっかり無駄になった。敵がそれを大いに活用してい



る間、市民たちの不決断と不活動はきわまっていた。

### ゼーラントとの連絡（1584-85）

実のところ、アントワープ市長シント・アルデホンデは敵の工作物に攻撃をかけるよう、ゼーラント艦隊に再三要請しており、アントワープからも反対側から援護するとしていた。しばしば荒れる長い夜はこの作戦には好都合だった。同時にリロの守備隊も打って出ることができれば、敵がこの三方面からの攻撃に耐えられるとは思えなかった。

しかし、あいにく艦隊司令ウィレム・ブロイス・ヴァン・トレスロングとゼーラントの海軍本部との間に行き違いが生じ、艦隊準備は無用な遅れをこうむることになった。急がせるため、ついにはテリニーが自らゼーラント州議会が開会中のミデルブルフに乗り込む決意をしたが、陸路がすべて敵の手中にあることを考えると、そのような試みはテリニー自身にとつては捕らわれる危険を、共和国にとつては最も勇猛果敢な防衛者を失う危険を意味していた。

しかし、危険を冒す気概のある船がなかったわけではなかった。敵の砲火にもかかわらず、夜闇と上げ潮に助けられた輸送船がまだつながない橋の間隙を通って町に食糧をもたらしては引き潮に乗って帰っていった。しかし、そうした船の多くが敵の手に落ちていることに鑑み、ゼーラントの市参事会は一定船数が集まるまでは敵陣通過を試みてはならないとする命令を出した。残念なことに、その結果は試みる船がいなくなっただけだった。必要とされる隻数を同時に集めることなどできなかったからである。アントワープの側からもスペイン船に対する攻撃が試みられ、若干を拿捕したり沈めたりしてそこそこの成果を上げていた。あとは同じような試みを大規模に行なえばいいのだった。しかし、シント・アルデホンデがいかに力説しても、そのような目的のための船を指揮しようと名乗り出る船長はいなかった。

## スヘルデ川の橋 (1585.3)

こうしてもたもたしているうちに冬は過ぎた。川から氷塊が少なくなるや、包囲側は精力的に舟橋建設を再開した。二つの棧橋の間はまだ六〇〇歩（四二〇メートル）以上のすきまを埋めなければならない。それは次のようにして行なわれた。

三十二隻の平底船（各長さ二十メートル、幅六メートル）が横に並べられ、丈夫なケーブルや鉄の鎖で前部と後部でつなぎ合わされた。ただし、通り抜けができるように約六メートルの間隔が開けられた。さらにそれぞれの舟は上流側と下流側の二箇所まで固定される。ただし、満ち潮で水位が上がると、引き潮で水位が下がるのに応じてゆるめたり締めたりができるようになっていく。舟の上には舟と舟との間に巨大な帆柱が渡され、板を敷いて普通の道路となった。棧橋上と同じく防護として欄干も設けられた。

この舟橋は、両岸の棧橋の延長になっており、棧橋も含めて七〇〇メートルの長さになった。この恐るべき建造物は実に巧妙に造られ、またありあまるほどの破壊兵器が備えられており、それ自体が生き物のように命令一下近づく者すべてを死に追いやり、自らの身を守ることができるかのようなだった。橋の両側は聖マリア、聖フェリペの二つの砦が固めており、橋の上にも二つの木造稜堡があつて兵士が詰め、全面に砲を向けていたが、それに加えて舟橋をつくっている三十二隻の平底船のそれぞれには三十名の兵士と四名の船乗りが配備されており、敵がゼーラントから遡上してこようとアントワープから川を下つてこようと迎え撃てるよう砲口がにらみをきかせていた。橋の下、上合わせて各所に配置された大砲の数はしめて九十七、砦や平底船に配備され、必要あれば敵に対してすさまじい銃火を浴びせることのできる人員は一五〇〇以上に及んだ。

☆

これでもまだパルマ公子にとっては十分安全とは言えなかった。敵は攻城装置のようなものを使って中央の最も弱い部分を突破すべく、ありとあらゆることを試みるはずだ。それに備えるべく、パルマ公子は

舟橋から少し離してそれと平行にもう一つ別の防備を設置した。橋に向けられるあらゆる攻撃の威力をそぐためのものである。

この構造物をなすのはかなりの大きさの三十三隻の舟で、流れを横切る向きに一列に並べられ、錨で固定され、三隻ずつ帆柱で束ねられて十一の別個の単位をなしていた。そのそれぞれは、長槍兵の隊列のように、鉄の槍先をつけた十四の長い柱を近づく敵に対して突き出していた。これらの舟は底荷を積んだだけで、それぞれ二重だがゆるめのケープルで錨を下ろしていた。やはり潮の干満に応じて上下できるようにするためである。これらは絶えず動いていたので、兵からは「泳走子」と呼ばれるようになった。舟橋全体と棧橋の一部までもが、橋の上流側、下流側に配置されたこれらの泳走子によって防護された。

これだけの防備に加えてさらに、戦艦四十隻の艦隊が両岸に配備され、全体の警備を担うのだった。

この驚くべき大事業は一五八五年の三月に完成した。包囲の開始以来七か月目のことであった。スペイン軍はその完成当日を記念日として用意していた。このめざましいできごととは盛大な祝典によって籠城軍に向けて宣言された。スペイン軍は、あたかも勝利を目に見える形で誇示することを樂しむかのように、橋の全長にわたって立ち並び、この誇り高い大河がしずしずと押しつけられたくびきの下を流れていくのに見入るのだった。この喜ばしい眺めにこれまでの労苦は忘れられた。作業に加わった者は、どんな下つ端だろうと、このような偉業をみごと完遂させたことがその輝かしい発案者に与えた榮譽の一部に与った気になっていた。

### ブリュッセル陥落とトゥール島奪還 (1585)

その一方、スヘルデ川が現実に封鎖され、ゼーラントからの通行が完全に遮断されたとの報せがもたらされたときのアントワープ市民の驚愕にはいわく言いがたいものがあった。

追い打ちをかけるようにブリュッセル陥落〔三月〕の報せがはいった。飢餓のためとうとう降伏を余儀

なくされたのだった。同じころ、ホーエンローエ伯がスヘルトーヘンボス奪還を試み、少なくとも敵の注意を引きつけようとしたのも失敗に終わっていた。こうして不幸な市は水上からも陸上からも支援の道を完全に断たれたのである。

こうした悪い報せはスペイン軍騎哨の通過に成功した逃亡者によってもたらされ、またたく間に市中に広がった。

市長が敵の作業の偵察に送っていた斥候からの報告も懸念を増すばかりだった。斥候は捕らえられてパルマ公子の前に引き出された。パルマ公子は橋をくまなく案内し、あらゆる防御機構を説明してやるように命じた。それがすむと斥候は再び將軍の前に連れてこられ、パルマ公子はこう言って追い返した。

「行け。そして見たことを主に報告するがよい。そして言うのだ。私はこの橋が壊されるようならその残骸の下に骨を埋める覚悟だ。この橋によりそのほうたちの町にはいつて見せる」

☆

だが危機を目前にして同盟側もようやく熱意に目覚めていた。パルマ公子の覚悟の前半が実現しなかったとしても、それは市民たちのせいとは言えない。

パルマ公子は以前からゼーラントで進められているアントワープ救援の準備が気にかかっていた。警戒すべき最も危険な一撃がこの方面からのものであることはよくわかつていた。そして、これだけのものを築き上げはしても、ゼーラントとアントワープの艦隊がしかるべき時を選んで同時に攻撃をかけてくれば太刀打ちできないこともわかっていた。しばらくの間はゼーラントの提督のもたつきに助けられたが、パルマ公子としては力の限りを尽くしてそれを長引かせようとしていた。

だが情勢が切迫した今、出撃が急がれ、ミデルブルフの州議會は提督を待たずにナッサウ伯ユステイヌス（オラニエ公ウィレムの庶子）に集められる限りの艦船を預けて包囲下にある町の救援に送り出した。この艦隊はスペイン占領下のリフケンスフック前に陣取り、これに砲撃を加えた。対岸のリロの砦からの若

干の艦船の支援も得て、いくらもしないうちに城壁は破壊され、突撃を敢行してリフケンスフック奪取に成功した。ワロン人の守備隊は、パルマ公子の兵士だったら發揮しただろう頑強さを示さず、無様にも砦を反乱側に明け渡した。反乱軍はたちまちにしてドゥール島全土を、そのすべての砦とともに支配下にしていた。

これらの地点を失ったことで（その後すぐ再奪還されたのだが）パルマ公子は激怒し、士官たちを軍法会議にかけ、最も罪の重い者の首をはねさせた。一方、この重要な制覇によつてゼーラント人は橋のところで自由に航行できることになった。そしてアントワープの人々と協議したのち、この構造物に対する合同攻撃の日時が決められた。作戦では、舟橋はすでにアントワープで用意されている攻城装置によつて爆破し、十分な糧食を積んだゼーラント艦隊が近くに待機し、突破口が出来次第町に來航する手はずになった。

#### 爆弾船攻撃 (1585.4)

パルマ公子がその橋の建設にいそしんでいるとき、市内ではすでにそれを破壊するための材料が用意されつつあった。フェデリコ・ジャニベツリこそが、運命がアントワープのアルキメデスとなるべく選んだ人物だった。古代シラクサのアルキメデスと同じように市の防衛に創意工夫の才を発揮したものの、同じように成功には恵まれなかった。マントヴァの生まれで、以前マドリードを訪れたこともあったが、それはネーデルラントでの戦争でフェリペ二世に奉公するためだったと言われている。だが待ちくたびれて気分を害したこの技師は、スペイン国王が認めようとしなかった自分の才能のほどを国王に思い知らせる決意で宮廷をあとにした。そこでスペインの公然たる敵であるイングランド女王エリザベスに仕えようとした。エリザベス女王はその技術のほどを目にすると、アントワープに派遣したのだった。ジャニベツリはこの町に居を構え、この追いつめられた状況下にあつて、その防衛のために知識、エネルギー、熱意のす

べてをそそぎ込むのである。

スヘルデ川に橋をかけることが真剣に意図され、工事が急速に完成に向かつて進んでいると知るやいなや、この技術者は市参事会に一五〇ないし五〇〇トンの船三隻を要請し、それに爆弾をしかけることを提案した。同時に、爆弾船の作戦を助けるため、六十隻の小舟も要求した。突き出た鉄鉤を備え、ケーブルや鎖でつなぎ合わせた上で、引き潮に乗じ、くさび形の隊形で橋に差し向けるというのである。だが、 ज्याニベツリが相手にしなければならなかったのは、通常から外れた考えというものを理解できず、祖国の救済がかかっているときでも計算高い交易商人の癖が抜けきれない連中だった。

ज्याニベツリの計画は犠牲が大きすぎるとして退けられた。苦勞してようやくのことで七〇〇八〇トンと小ぶりの船二隻と若干の平底船を手に入れることができた。この〈幸運〉、〈希望〉と名付けられた二隻でさつそく作業にとりかかった。二隻の船体にそれぞれ、幅一・五メートル、高さ一メートル、長さ十二メートルの空洞の石室がつくられた。ここに自ら考案した三トンの上質の爆薬を詰め、船に積める限りの大きな石板や臼石の重しで覆った。その上にはさらに同じような石の屋根が乗せられた。それは尖端が尖り、船縁から二メートル近くもの高さに突き出していた。甲板そのものにも鉄鎖、鉤、刃物、釘、その他吹き飛ばされて威力を発揮するようなものが詰め込まれていた。火薬庫にもなっておらずに空いた場所には同じようにして板が山積みになされた。石室には小さな開口がいくつか設けられ、爆弾に火をつける導火線を通せるようになっていた。用心のため、決められた時間が経過したら火花を出す装置が考案され、火縄がだめでも確実に点火できるようにした。

敵にこの攻城装置が単に橋に火をつけるためのものであると思ひ込ませるため、硫黄とピツチの混合物が上に積まれ、一時間は燃え続けるようにした。そしてさらに敵の注意を真の狙いからそらすため、三十二隻の平底船が用意された。これははなばなしく燃えるだけのもので、敵の攪乱だけが目的だった。これらの火船は四つの別々の船団に分けて三十分間隔で橋に向けて送り出され、二時間の間、敵に休む間を与

えないことをもくろんでいた。砲撃に疲れ、こけおどしにうんざりして敵がとうとう監視をゆるめたところに本命の爆弾船を送り込むのだ。

このすべてに加えて、ジャニベツリは火薬を隠した数隻の船を派遣した。橋の手前の浮き構造を爆破し、主力の爆弾船の前に障害物を取り除くためである。同時に、こうした予備的な攻撃によって敵の注意を呼び起こし、爆弾船が威力を発揮する前に敵をおびき出すこともあてこんでいた。

☆

四月四日から五日にかけての夜がこの壮大な作戦の決行日とされた。この作戦は、ことに多数のアントワープの潜水夫が舟橋のケーブルを切るうとしていたところを見つかった状況もあって、あいまいな噂の形ですでにスペイン軍陣営の間に広まっていた。このためスペイン軍も本格的な攻撃があることは見越していた。ただ、それがどんな性質のものかまではつかめておらず、当然大仕掛けではなく兵を相手に戦うものと思っていた。この見込みのもとに、バルマ公子は河岸の衛兵を倍にし、軍勢の主力を橋の近辺に配備し、自らもそこに陣取った。こうして危険を回避する努力はしつつも受けて立つ備えはしたのである。

暗くなるとただちに三隻の火船が市から橋に向けて川を下るのが見られた。次いでさらに三隻、それにまた同数が続く。スペイン軍陣営は戦闘配置につき、橋いっぱい兵士が詰めかけた。その間にも次々に繰り出される火船は、時に二隻、時に三隻が横に並んで規則正しく川を下っていった。最初のうちは乗り込んでいる水夫によって操船される。ところが、アントワープの提督ヤーコブ・ヤコブソンは（意図的であつたのか不注意であつたのかは明らかではないが）火船の四個分隊を十分間隔をおかずに送り出してしまふという失策を犯した。大型の爆弾船を送り出すのも早すぎた。こうして予定された攻撃手順が狂うことになった。

次から次へと火船の船団が近づいてくる。夜闇も手伝ってそれは目を見張るばかりの光景だった。見渡す限り、川の流れは火で埋め尽くされていた。火船は船全体が炎上しているかのようにこうこうと燃えて

いた。川全体が光り輝いていた。川岸の堤防や砲台、軍旗や武器、橋ばかりでなく川岸をも埋め尽くした兵の装備までもが火に照らされてくつきりと浮かび上がった。畏怖と感嘆の入り交じった気持ちで、兵はこの異様な光景に見入っていた。敵の作戦というよりは祝祭のようで、その奇妙な対照は兵の心に名状しがたいおのきを呼び起こすのだった。燃えさかる船団が橋から二〇〇歩（一四〇〇メートル）の距離まで近づくと、爆弾船の乗組員は爆薬への火縄に火をつけ、二隻の爆弾船を川のただ中に押しやり、他の火船ともども流れの導くままに任せて、急ぎ、用意してあった小舟に乗り込んで脱出した。

しかし、その進路は定まらず、舵を取る者もないため、個々ばらばらに浮き構造に突き当たり、そこに引つかかっているなり、岸に押しやられるなりした。浮き構造に火をつけるはずだった先駆けの火薬船はちやうどこのとき起こった突風によってフランドル側の岸に流されてしまった。二隻の爆弾船のうち、《幸運》は橋に届く前に座礁し、その爆発によって付近の砲台で作業していた若干のスペイン兵を巻き込んだ。

もう一つのより大きな爆弾船《希望》はきわどいところで同様な末路を避けることができた。流れによってフランドル河岸に近い浮き構造に突き当たり、そこに引つかかった。この瞬間に爆発していたとしたら、その効果の大半は無駄になっていたことだろう。爆弾船も他の火船と同じくピッチを燃やして炎を放っていたことから、スペイン軍はそれも舟橋に火をつけるための普通の火船だと思ひ込んだ。他の火船が一つまた一つと火が消えていき、何の効果も及ぼさないのを見ていたので、すっかり安心したスペイン兵は、あれほど派手に繰り出されながらあつけない終わりを遂げた敵の作戦をあざ笑うようになった。大胆な者の一部は、火船を近くで見え消し止めようと川に飛び込んだが、その時、爆弾船はその重みによって突如、引つかかっていた浮き構造を突破し、橋に猛烈な勢いでぶつかった。橋の上はてんやわんやになった。パルマ公子は水夫たちに棹で火船を押しつけ、木材に火が移る前に消し止めるよう命じた。

この決定的な瞬間、パルマ公子は左岸側の棧橋の先端の、水上砲台となつて舟橋につながる部分にいた。そのかたわらにはレイスブルフ辺境伯（アルトワ州総督の騎兵将校で、かつては議会のためにはたらいた



が、共和国の擁護者からその最悪の敵に転じていた）、ビリー男爵（フリースラント総督のドイツ人連隊の指揮官）、ガエターノ將軍、グアスト將軍、そして主だった士官も幾人かいた。みな身の危険も顧みず、破局を防ぐことに専念していた。

この時、スペイン人旗手がパルマ公子のところに行つて、こんな死と隣り合わせの危険に身をさらしては命がいくつあつても足りないとして退がるよう懇願した。その具申は相手にされなかったが、旗手はいっそう強く繰り返し、ついには公の足下にひれ伏してこのたびだけは下僕の助言を聞き入れてほしいと懇願した。こう言いながらパルマ公子の外套をつかみ、力づくでもその場から連れ去るつもりであるかのようにだった。パルマ公子は納得したというより、その男の大胆さにあきれて、ガエターノ、グアスト將軍を従えて岸に退いた。

パルマ公子が橋のたもとの聖マリア砦に着くか着かないかというとき、背後で爆発が起こった。大地が吹き飛んだ、あるいは天の底が抜けたかのような衝撃だった。パルマ公子も、全スペイン兵ともども、死人のように地面になぎ倒され、そのまま数分間が過ぎた。

意識を回復した人々が見た惨状！スヘルデ川の水は川底近くまで割れ、壁のようにそそり立つうねりとなつて堤防に押し寄せ、兩岸の砦はことごとく冠水した。大地は五キロ四方にわたつて揺れた。爆弾船がぶつかった左岸側の栈橋はほとんど完全に、そして舟橋の一部までもが破壊され、木っ端みじんになった。その上にあつたものは柱材も大砲も兵も吹き飛ばされた。火薬を覆っていた巨大な石材も爆発の力で近隣一帯に飛ばされ、のちになつて、橋から一〇〇〇歩（七〇〇メートル）離れた地点でも多くが掘り出された。船舶六隻が沈み、数隻が粉みじんになった。

だが、何よりも恐ろしかったのは、この恐るべき装置が築いた死体の山である。五〇〇名、報告によつては八〇〇名もがその猛威の犠牲となつた。手足を失い、あるいは負傷して一命をとりとめた者は入れずにこの数字である。この恐ろしい瞬間、ありとあらゆる種類の死が混在していた。爆発の火炎に焼かれた

者もいた。川の水が沸騰した熱湯で死んだ者もいた。硫黄の有毒蒸気でやられた者もいた。川で溺れた者、降りそそぐ岩の下敷きとなった者もあり、爆弾船のはらわたから吹き飛ばされて降りそそいだ刃物や鉤によって切り裂かれ、石塊によって押しつぶされた者も多かった。これといった外傷がなくときれている者もいた。おそらくは単に空氣の衝撃により死に至つたものと思われる。橋の柵にはさまれて動けなくなっている者もいた。どつしりした岩塊の下から這い出そうともがいている者、船の索具に引っかかっている者もいた。どこにいつても、そこから助けを求める悲痛この上ない叫び声が聞こえた。しかし、誰もが自分の安全を考えるのが精一杯で、こうした叫びに答えるのは絶望した嘆き声のみだった。

信じられないような形で助かつた者も多かった。トゥツチという名の士官は旋風によって羽のように宙に吹き上げられ、ほんの少しの間宙を漂つたのち、川に落下した。その後自力で泳いで助かつたのである。別の者は爆風によってフランドル側の岸からブラバント側まで吹き飛ばされたが、肩に軽い打撲傷を負つただけですんだ。のちに本人が語つたところによると、この一瞬の空中輸送の間、大砲から発射されたような気持ちだったという。

パルマ公子自身もこの時ほど死に近づいたことはなかった。わずか三十秒の差で命が助かつたのである。聖マリア砦に足を踏み入れるかどうかというときに竜巻にでも遭つたように足下から浮き上がり、柱が頭と肩に当たつて地面に倒れて氣を失つた。

實際、長い間司令官は死んだものと思われていた。運命の爆発が起こるほんの数分前に橋の上にいたのを多くの者が覚えていた。ようやくのことで付き添つていたガエターノ、グアストの間から劍に手をかけて立ち上がるのがみつかつた。司令官が生きていたという情報は全軍をふるい立たせた。しかし、何か月もかけた建造物が一瞬にして残骸と化したのを見た公の氣持ちは筆舌に尽くせるものではなかつただろう。公がすべての希望をかけていた橋は引き裂かれ、軍の大半は壊滅状態だった。残つた者も傷を負っており、何日もの間、麻痺状態にあつた。優秀な士官が大勢命を失つた。そしてこの惨状だけでは足りない

とてもいわんばかりに、将校のうちでも特に高く評価していたレイスブルフ辺境伯が行方不明とのつらい報告を受けた。

その上に、事態はより深刻な状況に進みかねなかった。反乱軍の艦隊が今にもアントワープ、リロから出撃してくるかもしれない。軍がこの状態では防衛もままならない。橋は大破し、ゼーラント艦隊が総帆を掲げて通過するのを妨げるものは何もなかった。その一方で爆発直後のスペイン軍の混乱はあまりに大きく、命令を出し、それに従うことができない状況ではなかった。部隊の多くは指揮官を失っており、指揮官の多くは部隊を失っていた。一面の廃墟にあつて、もとの持ち場を見分けることすらできなかった。これに加え、岸の砲台はすべて冠水していた。大砲のいくつかは完全に水没し、火縄は濡れ、弾薬もだめになっていた。反乱軍にとってはまたとないチャンスだった。それを利用するすべさえ知っていたならば！

## ☆

だが、信じがたいことに、予想以上のこの大戦果をアントワープは無にしてしまった。単にそれを知らなかったがためである。確かに、シント・アルデホンデは町で爆弾船の爆発が聞こえるとただちに数隻のガレー船を橋のほうに送り出し、通過できたらすぐにも火球と火箭を打ち上げるよう命じていた。合図をしたらそのままリロに向かい、協力命令を受けているゼーラント艦隊を遅滞なく連れてくるものとされた。同時に、アントワープの提督には合図が出たらただちに艦隊を率いて出港し、敵が最初の混乱から立ち直らないうちに攻撃をしかけるよう命じられた。

しかし、偵察に送られた船乗りは、かなりの報償金が約束されたにもかかわらず、敵陣地に近づく勇氣がなく、橋は無傷で爆弾船の効果はなかったと報告したのだった。翌日になっても橋の実状を調べるためのそれ以上の手だてはとられなかった。そしてリロの艦隊が順風にもかかわらず動こうとしないのが見て取れたため、爆弾船の戦果がなかったとする情報が信じられた。ゼーラント艦隊が動かないのを見てアン

トワープの人々が動かなかったように、リロでもまたアントワープが動かないために出撃しないのだとは誰も考えなかったようだ。だが、まさにそれが実状だった。これほど著しい怠慢は、政府が主体性を欠き、統治すべき群衆によって支配されていたことの証左にほかならない。

しかしながら、敵に対して弱腰だったぶん、人々はジャニベツリに対して怒りをたぎらせた。捕まりでもしようものなら、たけり狂った群衆に八つ裂きにされたことだろう。二日の間、この技師はこの上ない脅威にさらされていたが、三日目の朝になつてようやくリロからの急使が到着した。橋の下を泳いできた使者は、橋が破壊されたとの確かな情報をもたらした。だが、それと同時に、すでに修復されたことも伝えたのだった。

☆

これほど急速な橋の修復はまさにパルマ公子の奇跡的な奮闘のたまものだった。一瞬にしてすべての計画を台無しにしてしまった衝撃から回復するやいなや、見事なまでに沈着を保って、それが破局につながるのを防ごうと努めた。この決定的な瞬間に反乱軍の艦隊がやってきていないことは希望になった。橋が壊滅状態にあることはどうやら知られていないらしい。何か月もかけた建造物を数時間で修復することなどできることではなかったが、外見上直ったように見せられるだけでも大いに価値があるはずだった。部下たちはただちに残骸を片づけ、倒れた柱を立て、破壊された部分を取り替え、すき間は船で埋める作業にかかった。パルマ公子自身も率先して重労働に加わり、士官たちもみなその例に続いた。こうした気取らない行動に触発されて、一般兵士も精を出した。この作業は夜じゅう、太鼓とらっぱが軍楽を奏するもとで続けられた。工事の音を隠蔽するため、太鼓手、らっぱ手は橋全体に配置されていた。

夜が明けると、昨夜の混乱のあととはほとんど見られなかった。橋が修復されたのは見かけだけのことだったが、敵の密偵は欺けた。その結果、橋に対する攻撃はなかった。その間にパルマ公子は修復を完全なものにするよう努め、それどころか構造上本質的な変更を加えさせた。将来、同じような事態に備える

ため、舟橋の一部を可動とし、必要なときには取り外して火船を素通りさせられるようにしたのである。兵の損失は近隣都市の守備隊から、また実にいいタイミングでヘルダーラントから到着したドイツ人連隊によって補われた。士官の戦死によってできた空席も補充した。その際、パルマ公子は命の恩人であるスペイン人旗手のこと忘れなかった。

☆

爆弾船が成功だったと知ると、アントワープの人々はその発明者に対し、うって代わって少し前までの不信の強さにも劣らぬ大仰さで敬意を示すようになり、同じような試みをまたするよう促した。ジャンベッリは今度は、最初に要求して断わられた数の平底船を得ることができた。それを何も止められないような勢いで橋に突き当たるよう武装し、今一度橋を爆破し、分断した。しかし、このたびはゼーラント艦隊は逆風で出港できず、パルマ公子は今一度被害を修復する貴重な休息を得ることができた。

しかし、アントワープのアルキメデスはこのような障害には屈しなかった。改めて二隻の大型船を用意し、鉄鉤その他橋を引き裂くための装備を備えさせた。しかし、いざ出港しようというときになっても乗り組む人員がみつからなかった。このためジャンベッリはこれらの爆弾船に、操船者なしでも自動的に航路を川の中央に保ち、先のものののように風で岸にうち寄せられることがないような機構を考案する必要があった。

ストラーダの記述が信じられるとすれば、あるドイツ人職人が奇妙な仕掛けを思いついた。船底に帆を取りつけ、普通の帆が風から力を受けるように、水から力を受けるようにする。それによって、川の流れを有効に利用して推進するものである。結果がその計算の正しさを証明することになった。帆の位置を上から下に付け替えたこの船は、川の中央を保って進んだばかりでなく、橋に対してものすごい勢いで激突した。そのあまりの速さに敵も橋を開く間もなく、橋は見事に粉砕された。

しかし、これらの戦果がアントワープを利することはなかった。こうした試みは無秩序に、十分な軍勢

の支援なしに行なわれたからである。前回大戦果を上げたのと同様の装備をし、ジャニベツリが四〇〇ポンドの上質の火薬を詰め込んだ新たな爆弾船は出番すらなかった。それというのも、アントワープ市民は窮地を脱する別の方法を考えはじめていたのだった。

### 洪水戦術 (1585)

武力によって河川の航路を打ち開こうとする度重なる努力が無駄に終わったのに恐れをなした市民たちは、ついに全く川を使わずにすませる決意に立ち至った。その念頭にあったのはレイデン市の先例だった。十年前レイデンがスペイン軍に包囲されたときは、うまく周辺地域を水没させることに成功しており、この例をまねることになったのである。

リロとベルヘン地区のスタブルックとの間を抜けて、やや傾斜した幅広い平原がアントワープまで続いている。この地域は東スヘルデ川の氾濫に備えて多数の堤が縦横に張り巡らされている。こうした堤防を壊しさえすれば、平原一帯は海となり、平底船ならアントワープの市壁のすぐ近くまで航行できる。それさえできればパルマ公子は橋でスヘルデ川を好きだけ守っていればいいというのである。必要があれば本来の川と変わらぬ役割を果たせる新しい川を造るのである。これは本質的には包囲が始まった時点でオラニエ公が提案した計画にほかならなかった。シント・アルデホンデも精力的にこの策を推したが、市民の一部が自分たちの牧草地を犠牲にするのを認めなかったため、実現しなかったのだった。現在の危機にあつて市民たちはこの最後の手段に訴えることにしたのだが、このときまでに情勢は大きく変わっていた。問題の平原は幅広い高い堤防が横切っており、隣接するコーウエンステーン城の名を取って呼ばれていた。これはベルヘンのスタブルック村から五キロの長さに及んでスヘルデ川岸まで至っていた。スヘルデ河岸の大堤防ブラウハレンデイクとはオルダム付近でつながっていた。大潮であっても船はこの堤防を越えることはできず、このような堤防が途中に残っている限り、いくら野に海水を導き入れても無意味で、

ゼーラントからの船がアントワープの前の平原を進むことはできはしないのだった。したがって、アントワープの命運はこのコーウエンステーン堤防を崩せるかどうかにかかっていた。

しかし、それを見越していたバルマ公子は、スヘルデ川の封鎖に着手すると同時にこの堤防を占拠しており、最後まで持ちこたえられるようあらゆる手だてを尽くしていた。スタブルック村ではマンスフェルト伯が軍の主力を率いて駐留し、まさにこのコーウエンステーン堤防を通じて橋、本部、そしてカロールのスペイン軍兵器庫との連絡を保っていた。こうしてスペイン軍はブラバントのスタブルックからフランドルのベーヴェレンまで、途中にスヘルデ川をはさみながらも途切れない連絡線を維持していた。これを遮断するのはかなりの流血を覚悟する必要があった。

堤防そのものにも適当な間隔をあけて五つの砲台が建設されており、その指揮は軍のなかでも最も武勇すぐれた士官たちに託されていた。それのみならず、今後は戦闘の中心となるのはこの地点だと確信したバルマ公子は、橋の守りはマンスフェルト伯に任せて自らこの要地を防衛する決意だった。こうして戦争はこれまでとは異なる様相を呈し、その戦線もがらりと変わったのだった。

☆

リロの上流側でも下流側でも、ネーデルラント人はスヘルデ川のブラバント側の岸に沿った堤を何か所かで切った。少し前まで緑の牧草地だったところに、新たな要素が現われた。船舶がひしめき、帆柱がそびえるのが見られるようになったのである。ホーエンローエ伯指揮するゼーラント艦隊は水没地帯を航行し、繰り返しコーウエンステーン堤防に示威行動をしたが、本格的な攻撃を試みることはなかった。同時にスヘルデ川には別の艦隊が現われ、兩岸に代わる代わる上陸の構えを見せ、時には橋に攻撃をかけるかに見せかけた。数日間、敵に対してこうした行動が繰り返された。敵としてはどこに攻撃がくるかわからない。絶えず目を光らせているのに疲弊した敵が、毎度何ともないためしまいには警戒をゆるめることが狙いであった。

アントワープはホーエンローエ伯に、堤防への攻撃に際しては市からも小艦隊を出して支援すると約束していた。主塔の上の三回の合図の火がこの支援艦隊が向かっているという合図と決められた。こうしてある夜、待ちに待った合図の火がアントワープから立ち上るのを見て、ホーエンローエ伯はただちに敵の砦の二つの間の部分で兵五〇〇を堤防に上らせた。スペイン人守備兵の一部は寝込みを襲われ、防戦しようとした他の者は切り捨てられた。わずかの間に堤防の上に橋頭堡を築くことに成功した。しかし、残りの部隊二〇〇を上陸させようとしているところに、両隣の砦からスペイン兵が繰り出し、道が狭いのに助けられて雑踏状態のゼーラント兵に決死の攻撃をかけた。近くの砲台の大砲は接近する艦隊に向かって火を噴き、残りの部隊の上陸は不可能になった。アントワープからも協力の兆しはなく、ゼーラント兵は少しい間競り合ったのち圧倒され、堤防から追いやられた。余勢を駆ったスペイン軍は逃げるゼーラント兵を上陸艇まで追撃し、その多くを沈め、残って退却できた者にも甚大な損害を負わせた。

ホーエンローエ伯はこの敗北の責任を、偽りの合図を出したとしてアントワープの市民に押しつけた。確かに、この作戦の失敗の原因としては、両者の連絡のまずさに帰すべきところが多かった。

### コーウェンステーン堤防（1565）

しかし、同盟側もとうとう力を合わせて敵に系統だった攻撃をかけ、堤防ならびに橋への総攻撃によって包囲を破る決意をした。一五八五年五月十六日がこの計画の決行日とされた。アントワープ側もゼーラント側もこの日を決定打とするべく、その準備に精魂を傾けた。ホラント、ゼーラントの軍勢をアントワープのものと合わせれば、その勢力は艦船二〇〇を超える。その人員をまかなうため、都市や城塞の守備隊が引き抜かれた。この軍勢をもってコーウェンステーン堤防を両側から攻撃するのである。スヘルデ川の橋にもジャニベッリの発明になる新たな爆弾船による攻撃が加えられ、パルマ公子が堤防の防衛を支援するのを妨げる予定だった。



迫りつつある危険を知らされたパルマ公子は、それを断固迎え撃つべく労を惜しまなかった。堤防を確保した直後には、その上の五つの地点に砦を建設させており、その指揮は軍のなかでも最も経験豊富な士官にゆだねていた。その第一は十字砲台と呼ばれ、コーウエンステーン堤防がスヘルデ川の大堤防に交わって十字をなす地点につくられた。指揮官とされたのはスペイン人のモンドラゴネ。そこから一〇〇歩「セ〇〇メートル」のところ、コーウエンステーン城の近くには聖ヤコブ砦が位置し、その指揮権はカミロ・ディ・モンテに与えられた。ここからさらに同じ距離行つたところには聖ゲオルク砦、そこからさらに一〇〇〇歩のところには杭砲台（杭構造の上に建っていることからそう呼ばれる）がガンボアの指揮下におかれた。スタブルックに近い堤防の最遠端にある五番目の砦ではマンスフェルト伯がイタリア人カピズッキとともに守備についていた。パルマ公子はこのすべての砦の大砲や兵員を増強した。同時に、堤防の全長にわたってその両側に杭を打たせ、堤防を強化するとともに開削しようとする作業員の妨害となるようにした。

五月十六日の早朝、反乱軍が行動を開始した。空が白みはじめると、リロから四隻の火船が水没地帯を通ってやってきた。先の大爆発を思い起こした堤防の守備兵は恐れをなしてそくさと近くの砲台まで退却した。これはまさに反乱軍が望んでいたことだった。これらの船は火船に見せかけているだけで兵が乗り込んでいたのである。突如兵が陸に上がり、無防備となつた地点で堤防に上ることに成功した。聖ゲオルク砦、杭砦の間の地点である。その直後にゼーラントの全艦隊が姿を現わした。多数の軍艦、輸送船、おびただしい数の小艦艇からなり、必要なところに胸壁を築くための土嚢、羊毛、編み柴、土籠といった資材が大量に積み込まれていた。軍艦は強力な砲が備えられ、多数の勇猛な兵士が乗り込んでいた。それとともに、堤防を確保し次第、開削作業にとりかかるための工兵の一団も伴っていた。

ゼーラント人が堤防にとりつくのとほぼ時を同じくして、反対側にはオステルウェールから来航したアントワープの艦隊が攻撃を加えていた。直近の二つの敵砲台の守備隊を分断すると同時に工兵の防護とす

るため、両砦の間に、急ぎ高い胸壁がつくり上げられた。数百名の工兵は、堤防の両側でくわを手にいっせいに作業にとりかかった。その猛烈な働きぶりは、いくらもしないうちに二つの海がつながるだろうとの期待を抱かせた。

しかし、その間にもスペイン軍は直近の二つの砦から現地へと急行し、猛攻を加えた。聖ゲオルク砦の大砲は休みなく反乱軍の艦隊に砲撃を加えていた。工兵が堤防を切り、胸壁を築いている地点で猛烈な死闘が繰り広げられた。ゼーラント軍は工兵のまわりを部隊で強固に取り囲み、敵に作業を中断させまいとした。そしてこの戦闘の混乱のなか、弾丸飛雨のまっただ中であって、しばしば胸まで水につかりながら、死者や瀕死の重傷者に囲まれて、工兵たちはその作業に邁進した。そのかたわらでは商人たちが絶え間なくせき立てていた。一刻も早く堤防開削が完了し、自分たちの船を安全なところに引き戻したい一心なのだ。この作戦の重要さ——それはひとえに作業員たちのくわにかかっていると云えた——は、一般労働者にさえも英雄的な勇気をふるい起こさせた。自分の仕事に専心している作業員は迫りくる死の影も目にはいらず、その足音も聞かなかった。先頭の者が倒れると、すぐさま後の者が取って代わった。

敵が打ち込んだ杭も作業のじゃまになったが、それ以上に問題なのはスペイン軍の攻撃だった。スペイン兵は反乱軍のただ中に死にもぐるいで襲いかかり、開削作業をしている作業員に剣を突き立て、生きている者が掘った穴を死体で埋めた。しかし、ついにスペイン軍の士官はあらかた戦死ないし負傷してしまった。他方、反乱軍の数は増える一方で、スペイン兵に殺されるそばから新たな作業員が取って代わる。さしもの勇猛なスペイン軍も劣勢になってきて、砦まで退却せざるを得なくなった。

こうして今や同盟軍は、聖ゲオルク砦から杭砦までの全域にわたって堤防を完全に手中に収めることができた。しかし、堤防を完全に壊すのを待つのは長すぎると思われ、取り急ぎゼーラントの輸送船から荷を降ろすと、堤防の反対側まで運んでアントワープの船に積み込んだ。積み込んだ物資とともに、ホーエンローエ伯は勝ち誇ってアントワープに向かった。それを見ると、恐怖のどん底にあった住民は再び喜ば

しい希望にあふれ、まるですでに戦争に勝ったかのように狂喜乱舞した。鐘が鳴らされ、祝砲が放たれた。有頂天になった住民はいてもたってもいられずにオステルウェール門に駆けつけ、今にも着くはずの補給船を迎えようとした。

実際、運命の女神がこのときほど籠城側に好意的だったことはなかった。疲弊し、意気消沈した敵は皆に逃げ込み、占拠された地点の奪還を目指して奮闘するどころか、避難先で反乱軍に包囲されている状況だった。勇猛なバルフォア大佐率いるスコットランド人の数個中隊が聖ゲオルク砦を攻撃したが、聖ヤコブ砦から急遽駆けつけたカミロ・ディ・モンテが甚大な損害を受けつつも救援した。杭砦の状況はより深刻だった。猛烈な艦砲射撃を受け、今にも粉碎されそうだった。指揮官のガンボアは負傷して倒れ、悪いことに敵を近寄せないための大砲が不足していた。聖ゲオルク砦との間に反乱軍が胸壁を築いていたため、スヘルデ河岸からの来援も望めなかった。

このように、追いつめられ、なすすべもなくなった敵のこの状況を利用して断固として堤防の開削に突き進んでいけば、突破口が開かれていただろうことは間違いない。そうすればアントワープ包囲もそれまでだった。しかし、ここにおいて、包囲の間しばしばアントワープの人々に見られた欠点と言わざるを得ない、貫徹しようという意志の欠如が首をもたげてきた。工事に向ける熱意は、それが成功に近づくにつれて冷めていった。やがて堤防を開削するのは面倒だということになり、大型の輸送船から小型船に荷を移し替え、上げ潮に乗じてアントワープまで運んでくるほうがずっと簡単なことと思われるようになった。シント・アルデホンデとホーエンローエ伯は留まって作業員のはたらきを鼓舞するのをやめ、この決定的な瞬間に現場を離れ、穀物を積んだ船とともにアントワープへ向かった。その英知と勇氣に対して市民の称賛を浴びるために。

☆

堤防で両軍が死にものぐるいの戦いを繰り広げる間、スヘルデ川の橋に対してもアントワープから新た

な爆弾船による攻撃が行なわれた。パルマ公子をこの方面にくぎ付けにするためである。しかし、砲撃の音で堤防の様子を知ったパルマ公子は、橋への攻撃を撃退したのを見届けると堤防の防衛支援に駆けつけた。二〇〇のスペイン人長槍兵を引き連れたパルマ公子は攻撃されている地点に急行し、かろうじて守備隊の瓦解をくい止めることができた。持ってきた大砲を急遽直近の二つの砦に配備し、そこから反乱軍の艦船に猛烈な砲火を浴びせた。自らは剣を取り、盾を持って兵の先頭に立ち、反乱軍に突撃をかけた。

パルマ公子到着の報せはたちまちにして堤防の端から端まで広がり、だれかかっていた兵の士気を立ち直らせた。こうして戦闘には新たな激しさが加わり、戦場の地勢からもそれはいつそうすさまじいものとなった。堤防の上の狭いうねは幅九歩（六・三メートル）でしかない場所も多く、そこで五〇〇〇を超える兵士が戦っているのだ。これほど限定された地点に両軍の兵力が集中し、ここが包囲全体の帰趨を決することになるのだった。アントワープの人々にとつては市を守る最後の砦が、スペイン軍にとつては作戦全体の成功がかかっていた。

両軍の勇猛さはまさに必死なればこそのものであった。ゼーラント、アントワープの兵が全力を集中させて優位を保っている堤防の中央に向けて、堤防の両端から新たな戦闘の波が押し寄せた。スタブルックからはこの日の気高い死闘に触発されてイタリア人、スペイン人兵が、スヘルデ河岸からは將軍自らを先頭にワロン人、スペイン人兵が駆けつけた。前者が反乱軍の陸海の猛攻にさらされている杭砲台を救援すべく奮闘し、後者は反乱軍が聖ゲオルク砦と杭砦との間に築いた胸壁に向かって猛然と突進した。

胸壁ではネーデルラント軍の中心部隊が堅牢な塁壁に守られて奮闘しており、両側の艦隊もこの重要拠点を艦砲射撃で援護していた。パルマ公子がわずかばかりの手勢を率いてこの強固な拠点の攻撃に向かうとしていたところに、カピズッキとアクイラ率いるイタリア人、スペイン人兵が杭砦に突撃をかけてこれを奪取し、今反乱軍の胸壁に反対側から向かっているとの情報はいった。この最後の牙城の前に今や両陣営の全軍が集中した。寄せ手も、守り手も死力を尽くして戦った。艦隊に乗り込んでいた者も、拱手

傍観するのになたまたまなくなつて陸に飛び上がった。パルマ公子が胸壁を一方から攻撃すれば、マンスフェルト伯が反対側から攻撃する。五回も突撃が行なわれ、その都度撃退された。

この決定的な瞬間にあつて、ネーデルラント人にはいつになくめざましい意気込みがあつた。これほどの断固とした奮闘ぶりは、開戦以来、見せたことのないものだった。とりわけ著しかったのは、その勇猛な抵抗によつて敵の攻撃を退けたスコットランド人、イングランド人のほたらきである。スコットランド人兵が奮戦している箇所には誰も攻撃をかけようとしなくなつたので、パルマ公子は自ら兵を率いることにし、投げ槍を手に胸まで水につかりながら進んだ。

長時間にわたる攻防の末、ついにマンスフェルト伯の軍勢が鉾槍と長槍をもつて胸壁に突破口をつくり、互いの肩に乗つて壘壁によじ登ることに成功した。スペイン人大尉バルトロメオ・トラルバが登りつめた第一号だった。ほとんど同時にイタリア人カピズッキも胸壁の先に現われた。こうしてスペイン人、イタリア人は勲功争いでは等しく栄光に与つたのだった。この先陣争いの判定者となつたパルマ公子が兵たちのこの微妙な名誉心を扱つたやり方は触れておく価値がある。イタリア人のカピズッキに対しては並みいる兵の前で抱擁し、声高に、胸壁を奪取できたのはひとえにこの士官の武勇のたまものだと言ひした。一方、瀕死の重傷を負つたスペイン人大尉トラルバはスタブルックの自分の本陣に運ばせ、自分のベッドに寝かせ、戦いの前日に自分が着ていた外套をかけてやつたのだった。

☆

胸壁が陥落してからは勝敗はもはや疑う余地はなかつた。船から飛び降りて白兵戦に乱入していたホラント州、ゼーラント州の兵は、あたりを見渡して最後の逃げ場である船が沖合に遠ざかつているのを見るとたちまちにして戦意を失つた。

潮が引き潮に転じていたのだった。艦隊の指揮官たちは重い荷を積んだ輸送船が座礁したり、戦闘のなりゆきいかによつては敵の手に落ちたりすることを恐れ、堤防から後退して深水域に向かつていたのである。

これに気づいたパルマ公子は、ただちに兵に向かって逃げゆく艦隊を指し示し、すでにあきらめている敵に対し一氣に片をつけるよう鼓舞した。

最初に崩れたのはホラント州の補助兵で、ゼーラント兵もすぐその例に倣った。慌てて堤防から飛び降りると、水の中を歩いたり泳いだりして艦隊にたどり着こうとした。しかし、そのあまりに算を乱した逃走は互いの足を引っ張ることになり、大勢が追撃する勝利者の剣のえじきとなった。舟にたどり着いても墓場行きとなった者は多かった。我先に乗り込もうとして飛び乗った者の重みで沈んでしまった舟もあつた。自分たちの自由、生活、信条がかかっているアントワープの船が退却したのは最後だったが、それだけにより過酷な運命にまわれることになった。一部の船は干潮に取り残され、敵の大砲の眼前で座礁することになり、乗員もろとも粉碎された。先に沖合に退避していた他の船にたどり着こうと逃亡者の大群が泳いだ。だがたけり狂ったスペイン兵は向こう見ずにも剣を口にくわえてそのあとを追って泳ぎ出し、船からも大勢を引きずり下ろした。

国王軍の勝利は完璧なものとなったが、その代償もまた大きかった。スペイン軍では約八〇〇、ネーデルラント軍では数千（水死した者はいっていない）が戦場に残され、両軍とも多くの主だった貴族が戦死した。アントワープのための大量の補給物資を積んだ三十隻以上の船舶が、大砲一五〇その他の軍需物資ともども勝者の手に落ちた。激しい攻防の焦点となった堤防は十三箇所において破られており、それを開削した者の遺体が今やすき間をふさぐのに使われた。

### アントワープ陥落 (1585.8)

この翌日、とてつもなく巨大で特異な構造をした輸送船が国王軍の手に落ちた。浮かぶ要塞といった様相を呈するもので、コーウエンステーン堤防攻撃に用いられるはずのものであった。アントワープの人々は、ジャニベツリの有益な提案が費用がかかりすぎるとして却下されたまさにそのとき、巨費を投じてこのよ

うなしろものを建造していたのだった。この荒唐無稽な怪物は誇らしげに〈終戦〉と呼ばれたが、この名称はのちに〈無駄金〉というより適切なあだ名に取って代わられた。進水時に良識ある者が口をそろえて予見していたように、そのあまりの大きさのため事実上操船などできず、満潮時にやつと浮かぶというありさまだった。非常な労苦を払ってオルダムまでは引つ張ってはきたものの、潮が引くと座礁し、敵の戦利品となった。

コーウェンステーン堤防への攻撃がアントワープ救援の最後の試みとなった。これ以後、籠城側は戦意を喪失し、市当局は現在の苦境にあえぐ一般大衆をかすかな希望で鼓舞しようとしたが、一向に効果はなかった。

これまではパンは、その質は下がりながらも、価格はそこそこに保たれていた。しかし、じわじわと備蓄は減っていき、飢餓が近づいているのは明らかだった。それでも、町と最前線の砦との間ですでに実っている穀物を収穫するまでは持ちこたえられるとの希望はあった。しかし、収穫の前に最後の外堡が敵に奪取され、収穫はそっくり敵のものとなった。ついに近隣の同盟都市メヘレンが陥落したことで、最後に残ったブラバント地方から補給を得る道も断たれたことになった。

もはや糧食を補給するすべがなくなった上は、食いぶちを減らすしか道は残されていなかった。働けない者、外国人、それどころか女子供まで町から追い出すことが検討された。しかし、このあまりに人心にもとる案はどうてい実行できるものではなかった。カトリックの住民を追放するという別の案はカトリック系住民の怒りを呼び、すんでのところでは暴動になるところだった。シント・アルデホンデとしてもはや民衆の突き上げに抗うすべはなかった。

一五八五年八月十七日、パルマ公子に対して市街の明け渡しに関する申し入れが行なわれた。

## 訳者によるエピソード

### 北部ネーデルラントからオランダへ (1585)

こうして史上名高いパルマ公によるアントワープの包囲戦が終わった（パルマ公子アレックスサンドロ・フアルネーゼは一五八六年初頭、父オッタヴィオの死によってパルマ公位を相続するので以後「パルマ公」と記す）。

深夜にスペイン宮廷にもたらされたアントワープ陥落の報せにフェリペ二世は驚喜し、イサベル・クララ・エウヘニアの部屋に飛び込んで就寝中の娘を起こしまでした。このとき宮廷にいたグランヴェルによると、「サンカンタンの戦いも、レパントの海戦も、ポルトガルの征服も、テルセイラ島沖の海戦（一五八三年にスペイン支配に抵抗していた最後のポルトガル領アゾレス諸島を確保）も含め、過去のどの戦勝にもこのたびのアントワープでの勝利ほど国王陛下が満足を示されたことはなかった」とのことである。

一世紀以上ののち、スペイン継承戦争でネーデルラントを席巻したイギリスのマールバラ公にアントワープが市の鍵を差し出した際にも、市当局は「これは大パルマ公以来、何人にも引き渡されたことのないものです」と言ってこの包囲戦に言及している。

パルマ公による占領はアルバ公のような残酷なものではなかったが、それでもスペインの守備隊が導入され、住民にはカトリックへの改宗が求められた。この後四年間で八万の人口の半分近くが北部に移住することになる。

ブルッヘ、ヘント、ブリュッセル、メヘレンに続いてアントワープまで陥落したことで、オステンドなど若干の拠点を除けばパルマ公は南部ネーデルラントを完全に掌握することになった。これをもって反乱軍の勢力範囲は北部に限られるようになったと言える。

北のユトレヒト同盟、南のアラス同盟の結成によってネーデルラントがオランダとスペイン領ネーデル



ラントに分離する素地ができて、ユトレヒト同盟に加わっている南部都市もあつたし、全国議会にも南部諸州は代表を送り続けていた。しかし、パルマ公は一州また一州と南部諸州を離脱させていき、一五八五年のアントワープの陥落でそれまでブラバント州議会に議席を持っていた都市はことごとくスペインの手に帰したことになる。残った小都市（ベルヘン・オブ・ゾーム、フラージュ）には全国議会の議席は認められず、こうして全国議会は完全に北部諸州の議会となった。

この全国議会は一五八一年にすでにフェリペ二世の統治権を否認しており、独立した統治機関としての道を歩みはじめていた。一方、南部でもスペインのもと独自の全国議会が散発的に招集されるが、これは旧態依然とした国王の協賛機関的な存在でしかなかった。

こうしてアントワープの陥落した一五八五年には軍事的現実としても、全国議会に参集し、その歳入の割り当てを担う地域としても、南部から切り離されたオランダという単位が成立するのである。ただし、北部でも東の内陸部のドゥースブルフ、ネイメーヘンといった拠点がスペイン軍の手に落ち、スペイン軍はフロニンゲン、ドレンテ、オーヴァーエイセルの各州、それにヘルダーラント、フリースラントの一部といった東部までも勢力下においていた。オランダを構成するいわゆる北部七州がそろうのは一五九四年にフロニンゲンが確保されるのを待たねばならない。

地理的な広がりからすれば反乱勢力はホラント、ゼーラント、ユトレヒトを中心とする地域に追いつめられていたようにも見えるが、海と川の交通を押さえている反乱諸州はこの後の戦争中も海外貿易を発展させていく（一六〇〇年に日本に漂着したリーフデ号もホラント州ロッテルダム商船である）。

これまでネーデルラント随一の商業中心地であつたアントワープはパルマ公による封鎖によつてその地位を失い、降伏後も海乞食による河口の封鎖のためその地位を回復することはなかった。このため、北部、特にアムステルダムが新たな商業中心として台頭してくることになる。反乱諸州による貿易活動は、当のスペインでさえなしではやっていけないものとなっていたことはシラーも触れているとおりである。

## イングランドとの同盟 (1585-88)

オラニエ公ウイレムの暗殺（一五八四）後、あとには三人の息子が残されていた。

長男のフィリップス・ウイレムはいまだスペインで抑留中である。

オラニエ公が悪妻だった二度目の妻との間になした次男マウリッツはオラニエ公暗殺の時点では十七になるうとしている青年だった。マウリッツは当面、オラニエ公の役割を引き継ぐべく新たにハーグに発足した国務評議会（ブラバントの国務評議会は一五八三年十月に解散していた）の長とされた。翌一五八五年には全国議会からホラント、ゼーラントの総督をはじめとする地位を与えられ、その軍事的天分によって揺籃期の共和国の指導者の一人となる。

ウイレムがこよなく愛した三番目の妻との間の子はみな女子で、晩年に迎えた四番目の妻との間になしたフレデリック・ヘンドリックはウイレム暗殺の年に生まれたばかりだったが、これまた才能に恵まれ、マウリッツの次のオランダの指導者となる。

オラニエ公ウイレムがネーデルラントの自由のために不可欠と考えていた外国との同盟であるが、アンジュ公はウイレム暗殺の前月に亡くなっていた。そこで一五八五年一月、オランダはフランスのアンリ三世に主権を提供したが、その主権を引き受けるということはスペインとの決定的対立を意味しており、国内の宗教対立を抱えるアンリ三世は受けられる状況ではなかった。

次いで同年六月、オランダはイングランドに接近した。エリザベス女王とて同じような問題を抱えており、君主の地位は断わったものの、一五八五年八月二十日のノンサッチ条約で軍事支援は約束した。しかし、まさにこの月、包囲に耐え続けていたアントワープはついに降伏したのだった。さらに、イングランドの支援は反乱諸州の指導者としてイングランド人の全州総督を派遣すること、国務評議会にイングランド人を入れることなどを条件としていた。パルマ公の脅威にさらされている状況では、オランダとしては

承知せざるを得なかった。

一五八五年末、エリザベス女王は寵臣レスター伯を全州総督として数千の兵を預けてネーデルラントに派遣した。かつてのアンジュー公にも与えなかったほどの大権を与えられて悦に入つたレスターだったが、軍事面ではバルマ公の敵ではなかった。一五八六年にはみすみすフラーヴェを奪われ、イングランド軍の活躍でデーヴェンテルやズトフェン周辺の砦を奪取してかろうじて面目を保った。

しかし、軍事的な劣勢以上にレスター伯は不用意にオランダ国内の政争に関与して問題の種となった。厳格なカルヴァン派を支持して、新教でありながら寛容を旨とするホラント州支配層と対立し、ホラント州中心主義に逆らい、商人階級軽視も隠さなかった。一五八六年四月にスペイン支配下の地域との貿易を禁止したことも不評だった（だぶつきのため食料価格が下がったのは、アントワープ陥落後の南部からの大量の移民を含む民衆に歓迎されたが）。

レスター伯の一時帰国中（一五八六年十二月～一五八七年六月）にもオランダ人とイングランド人の対立が高じた。一月にデーヴェンテルやズトフェン近辺の砦のイングランド人守備兵がスペイン側に走り、同様の事件が相次いだ結果、オランダ東部はネイメーヘンから北はエムス河口域に至るまでスペインの支配下となつてしまった。八月にバルマ公がスヘルデ河口域のスライスを攻略したこともあってレスター伯の評判は地に墜ちた。

レスター伯は実力行使で地位を回復しようとする挙に出て（九月）失敗したあげく、十一月に召喚された。

その後もイングランド兵はフリシンゲン、オステンド、ベルヘン・オブ・ゾームをはじめとする各地の守備隊として残るが、イングランド人二名を含む（一六二七年まで続く）国務評議会は全国議会の付属機関と化し、反乱勢力の中心は全国議會、実質的にはオルデンバルネフェルト率いるホラント州議會となつていく。

レスター伯が全州総督を務めた間、イングランドのエリザベス女王にネーデルラントの主権を譲渡しようとする最後の試みがなされたが、レスター伯の帰国でそれも永遠に立ち消えとなった。

フェリペ二世の權威を否定してからも適当な君主のもとに収まるつもりでいた全国議会だったが、アンジュ公、レスター伯と相次ぐ外国人の横暴にこりた今、一度と外国の君主を戴かない方針を固めていく。ここに来て、オランダは独立共和国としての道を歩みはじめるのである。

## スペイン無敵艦隊（1588）

新生共和国にとって幸いなことに、フェリペ二世はその矛先をオランダからイングランドに転じ、知将パルマ公はイングランド上陸の準備を命じられた。イングランド征討の考えは一五七〇年代から出ていたが、イングランドの私掠船によるスペイン領襲撃は目に余るものがあり、一五八五年五月にフェリペ二世がイベリア半島にある外国船を徴発したことは逆にイングランドの怒りを買っていた。イングランドはその八月にノンサッチ条約でネーデルラントの支援を約束し、九月には公式にフランシス・ドレイクに艦隊を預けて送り出し、スペインの重要な財源である西インド植民地を脅かそうとしていた。スペインにとってはネーデルラントの反乱鎮圧のためにもイングランド侵攻が不可欠と感じられるようになっていたのである。スペイン本国からの艦隊によつてパルマ公の軍勢がイングランド東部への上陸を果たせば、イングランド制覇に困難はないものと思われた。

こうして一五八八年五月末、スペインの無敵艦隊がリスボンを出港した。ただし、逆風のためラコルーニヤで待たなければならず、その地を出港できたのは七月下旬になってのことだった。

無敵艦隊はイングランド艦隊と小競り合いを演じつつ東進を続け、八月六日、ほぼ無傷でカレー沖の停泊地に到着した。しかし、パルマ公の乗船準備はできていなかった。無敵艦隊出港の報せがブルッへのパルマ公に届けられたのは八月二日になってのことであり、制海権をもたないパルマ公としては艦隊到着の

確報があるまでただ待っているわけにはいかなかったのである。

その翌晩、イングランド艦隊が無敵艦隊に対して火船攻撃をかけてきた。スペイン軍にとってアントワープ包囲時の反乱軍による爆弾船攻撃はいまだ記憶に新しい。无敌艦隊はただちに錨を切って沖合に避難した。

そんな状態で八月八日、スペイン艦隊とイングランド艦隊はグラヴリーヌ沖で激戦を繰り広げた。海戦そのものでは決定的な勝敗はつかなかったが、无敌艦隊はその後嵐にみまわれ、パルマ公との合流をあきらめてスコットランドの北を回って帰国の途にいったのだった。

### スペインのフランス介入（1589-92）

イングランド侵攻をあきらめたスペインの目は今度はフランスに向けられる。一五八九年八月にフランス王アンリ三世が暗殺され、新教徒であるブルボン家のアンリ四世が即位したのである。隣国フランスでのプロテスタント王朝の出現はスペインにとっては悪夢以外の何物でもなかった。

こうしてパルマ公はフランスへの介入を指示された。一五九〇年の春、パリに進軍するアンリに抵抗するカトリック同盟にはパルマ公から送られた兵も加わった。アンリ四世がパリ包囲を進めると、パルマ公自身もフランス入りして包囲を中断させた（八月）。パルマ公は翌年にもフランスに送られて（八月）アンリのルーアン包囲を解かせた（翌年四月）が、戦役中に負傷したパルマ公はその十二月、三度目のフランス遠征の途中で世を去ることになる。

フランス王位の問題は現実主義のアンリ四世がカトリック改宗を公に宣言する（一五九三）ことで収拾に向かう。

## 共和国への道（1588-1609）

レスタール伯帰国後に共和国としての道を歩みはじめたオランダにとって、パルマ公の軍勢の矛先が一五八八年にはイングランド、一五八九年にはフランスへと転じられたことは願ってもない僥倖だった。

国内体制を整える貴重な時間を得ることができたオランダは、一五九〇年代にはヨーロッパ列強の一員としての地位を確かなものにする。一五九一―九三年にオランダ東部を席卷したマウリッツの軍事的名声はヨーロッパじゅうに轟いた。マウリッツの軍制改革によつてオランダ軍の質が飛躍的に向上したのみならず、常備軍の規模も拡大し、オランダ軍はヨーロッパでスペイン軍に次ぐ規模を誇るものとなっていく。そしてオランダの城塞建築、治水、港湾整備の技術は最も先進的との評判が確立した。マウリッツのもとには新しい軍事技術を学ぶ者が集まり、オランダの書物が各国語に翻訳され、各国からオランダの技術者が招聘されるようになる。

こうしたなか、一五九六年十月、オランダはフランス、イングランドとともに反スペイン同盟を結ぶことに成功した。フェリペ二世は一五九八年五月のヴェルヴァン条約でフランスとは講和にこぎつけることに成功したが、ネーデルラントについては三十年に及ぶ苦闘もむなしく、南部の「従順な諸州」以外を服従させる見込みもないままその年九月十三日に世を去った。

その後、フェリペ三世が派遣したスピノラ將軍は、一六〇一―〇四年にわたる包圍戦の末オステンドを陥落させ、一六〇五―〇六年にはオランダ東部に攻勢をかけて北部を恐慌に陥れた。オランダと同盟を結んでいたイングランドも、一六〇三年にジェームズ一世が即位すると和平に向かい、一六〇四年八月のロンドン条約でスペインと講和した。オランダは再び単独でスペインを相手にしなければならなくなった。その一方、海上ではオランダの優位が明らかとなりつつあった。一六〇五年にはオランダ東インド会社がアンボynaをはじめとするインドネシア各地を征服した。一六〇七年四月にはスペイン南岸沖でオランダ艦隊がスペイン艦隊に完勝した。

しかし、オランダ、スペイン双方とも増大する戦費の負担にあえいでおり、厭戦気分が広がっていた。オランダの独立承認と引き換えにオランダの海外進出を抑制する方向で交渉が始まり、一六〇七年四月には停戦が成立した。

オランダが東インド会社（一六〇二年設立）の解散やカトリックへの寛容を頑として拒んだため完全な講和条約締結には至らなかったが、一六〇九年四月九日、アントワープにおいて十二年の休戦条約が調印された。オランダは西インド会社設立や東インド会社の拡大をやめることになったが、「あたかも主権国家であるかのように」扱われるとされた。基本的には現状を維持するという内容であるが、このときをもつてオランダは事実上独立国の地位を得たと言える。

スペイン国王はネーデルラント十七州の封建的称号は保持し続け、北部に関する称号を放棄して正式にオランダの独立を認めるのは一六四八年のミュンスター条約でのことになるが、そのころにはすでにスペインの武名はすでに斜陽になっている。それに対し、共和国オランダは事実上の独立を確保してから一世紀もしないうちに、かつての暴君たるスペイン王位の継承さえも左右する「自由な国家の恐るべき威容」をまざまざと見せつけることになるのである。

友清理士（ともきよ さとし）

1967 年生まれ。1990 年東京大学理学部卒業、1992 年同大学院修士課程修了。同年株式会社研究社に入社して各種英語辞書・電子辞書の制作に携わる。

現在無所属。

著書に『アメリカ独立戦争』（学研M文庫）『イギリス革命史』（研究社）などがある。

## オランダ独立史

フリードリヒ・フォン・シラー作

友清理士訳

2005 年 4 月 22 日ウェブ公表

---